鳥取県教育文化財団調査報告書 93

一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ　第２分冊

鳥取県西伯郡名和町

茶畑遺跡群

押平尾無遺跡

２００４

財団法人　鳥取県教育文化財団
国土交通省　倉吉河川国道事務所

正誤表

頁	行・場所	誤	正
2-10	図10	（なし）	⑰褐色土（黄褐色土粒混）
2-16	16	（図18、図版４－６・５、表３）	（図18・19、図版４－６・５、44、45-１、表３）
2-23	図23 中央 ドより	竪穴住居14 竪穴住居19 竪穴住居13	竪穴住居19 竪穴住居13 竪穴住居15
2-31	27	周堤の西側は	周堤の東側は
2-39	2	規模を同じくし	規模をほぼ同じくし
2-42	15	（図38・39、	（図40～42、
2-44	図44 A-A′	竪穴住居13	竪穴住居12
2-49	6	（図49、	（図48、
2-60	図59 テラス5 Ａ－Ａ′	② ③	③ ②
2-62	2	(図60、図版50-5)	(図60)
2-63	1	(図60・64、図版26-6)	(図60・64、図版24-6、26-2)
2-64	7	(図61、図版25-6・25-7)	(図61、図版25-1・25-2・50-5)
2-66	5 12・16	(図63、図版51-1) 61-1	(図63、図版25-4・51-1) 51-1
2-82	2 23	(図80、図版32-１・２) (図82、図版32-４、表30)	(図80、図版32-１・32-２・52) (図82、図版32-４・50-１、表30)
2-94	16	、表35・45)	、表35～37・45)
2-110	5	(図107、図版41-６)	(図107、図版41-６・62-４)
2-112	5	図版41-５)	図版41-５・51-５・65-１・２)
2-125	No.71 No.73	竪穴３ 下層	竪穴２ 床直
2-126	No.105	高杯	器台
2-128	No.178	掘立柱建物８　Ｐ８	掘立柱建物８　Ｐ６
2-131	Ｓ13	テラス１　下層	テラス１　床直
図版18		５　竪穴住居14　完掘状況	５　竪穴住居14および竪穴２・３完掘状況
図版24		７　テラス10　完掘状況	７　テラス10　土層断面
図版64		３　テラス６・11、土坑９	３　テラス６、土坑９

鳥取県教育文化財団調査報告書 93

一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ　第２分冊

鳥取県西伯郡名和町

茶畑遺跡群

押平尾無遺跡

２００４

財団法人　鳥取県教育文化財団
国土交通省　倉吉河川国道事務所

例　言（第２分冊）

1．本書は、鳥取県教育文化財団が2002（平成14）年度、2003（平成15）年度に実施した「一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査」の調査報告書である。

2．発掘調査報告書は、調査した遺跡ごとに１～３分冊にわけて報告する。このうち、本書は第２分冊「押平尾無遺跡」の調査報告書である。

3．第２分冊に収録した押平尾無遺跡の所在地は次の通りである。

　西伯郡名和町大字押平字尾無834ほか

4．第２分冊の作成は、鳥取県教育文化財団職員　北　浩明、西川　徹、浜田真人、三木雅子、森本倫弘、湯川善一が行い、編集は第２分冊を通して湯川が行った。文責は各項目の文末に記載している。

5．調査時点における遺跡の略号はOONとし、遺構図面への記載および遺物の注記に使用した。なお、現場で採取した図面・写真などのデータはすべて調査時点での遺構番号を記載している。下記の遺構番号対照表を参照されたい。

遺構番号対照表

報告遺構名	調査時遺構名	報告遺構名	調査時遺構名	報告遺構名	調査時遺構名	報告遺構名	調査時遺構名
竪穴住居　1	ＳＩ７	掘立柱建物　10	ＳＢ３	土坑　9	ＳＫ28	土坑　44	ＳＫ75
竪穴住居　2	ＳＩ25	掘立柱建物　11	ＳＢ15	土坑　10	ＳＫ34	土坑　45	ＳＫ76
竪穴住居　3	ＳＩ24	掘立柱建物　12	ＳＢ７	土坑　11	ＳＫ39	土坑　46	ＳＫ80
竪穴住居　4	ＳＩ１	掘立柱建物　13	ＳＢ６	土坑　12	ＳＫ35	土坑　47	ＳＫ81
竪穴住居　5	ＳＩ23	掘立柱建物　14	ＳＢ12	土坑　13	ＳＫ46	土坑　48	ＳＫ31
竪穴住居　6	ＳＩ２	テラス　1	ＳＳ16	土坑　14	ＳＫ22	土坑　49	ＳＫ50
竪穴住居　7	ＳＩ８	テラス　2	ＳＳ21	土坑　15	ＳＫ13	土坑　50	ＳＫ30
竪穴住居　8	ＳＩ９	テラス　3	ＳＳ23	土坑　16	ＳＫ６	土坑　51	ＳＫ18
竪穴住居　9	ＳＩ13	テラス　4	ＳＳ12	土坑　17	ＳＫ８	土坑　52	ＳＫ54
竪穴住居　10	ＳＩ10	テラス　5	ＳＳ９	土坑　18	ＳＫ21	土坑　53	ＳＫ62
竪穴住居　11	ＳＩ12	テラス　6	ＳＳ24	土坑　19	ＳＫ52	土坑　54	ＳＫ51
竪穴住居　12	ＳＩ14	テラス　7	ＳＳ15	土坑　20	ＳＫ43	土坑　55	ＳＫ55
竪穴住居　13	ＳＩ15	テラス　8	ＳＳ18	土坑　21	ＳＫ69	土坑　56	ＳＫ40
竪穴住居　14	ＳＩ19	テラス　9	ＳＳ27	土坑　22	ＳＫ４	土坑　57	ＳＫ56
竪穴住居　15	ＳＩ27	テラス　10	ＳＳ22	土坑　23	ＳＫ11	土坑　58	ＳＫ41
竪穴住居　16	ＳＩ28	テラス　11	ＳＳ７	土坑　24	ＳＫ12	土坑　59	ＳＫ48
竪穴住居　17	ＳＩ30	テラス　12	ＳＳ11	土坑　25	ＳＫ47	土坑　60	ＳＫ58
竪穴住居　18	ＳＩ17	テラス　13	ＳＳ13	土坑　26	ＳＫ44	土坑　61	ＳＫ49
竪穴住居　19	ＳＩ６	テラス　14	ＳＳ10	土坑　27	ＳＫ15	土坑　62	ＳＫ１
竪穴住居　20	ＳＩ11	テラス　15	ＳＳ１	土坑　28	ＳＫ17	土坑　63	ＳＫ２
竪穴住居　21	ＳＩ５	テラス　16	ＳＳ２	土坑　29	ＳＫ26	土坑　64	ＳＫ３
竪穴住居　22	ＳＩ３	テラス　17	ＳＳ５	土坑　30	ＳＫ29	土坑　65	ＳＫ78
竪穴　1	ＳＩ22	テラス　18	ＳＳ４	土坑　31	ＳＫ32	土坑　66	ＳＫ82
竪穴　2	ＳＩ26	テラス　19	ＳＳ６	土坑　32	ＳＫ71	土坑　67	ＳＫ83
竪穴　3	ＳＩ20	テラス　20	ＳＳ８	土坑　33	ＳＫ45	土坑　68	ＳＫ79
竪穴　4	ＳＩ21	テラス　21	ＳＳ20	土坑　34	ＳＫ42	土坑　69	ＳＫ16
竪穴　5	ＳＩ18	テラス　22	ＳＳ25	土坑　35	ＳＫ53	土坑　70	ＳＫ19
掘立柱建物　1	ＳＢ10	テラス　23	ＳＳ26	土坑　36	ＳＫ59	土坑　71	ＳＫ25
掘立柱建物　2	ＳＢ１	土坑　1	ＳＫ24	土坑　37	ＳＫ61	土坑　72	ＳＫ72
掘立柱建物　3	ＳＢ２	土坑　2	ＳＫ23	土坑　38	ＳＫ13	溝　1	ＳＤ２
掘立柱建物　4	ＳＢ８	土坑　3	ＳＫ14	土坑　39	ＳＫ65	溝　2	ＳＤ７
掘立柱建物　5	ＳＢ11	土坑　4	ＳＫ77	土坑　40	ＳＫ16	溝　3	ＳＤ３
掘立柱建物　6	ＳＢ14	土坑　5	ＳＫ38	土坑　41	ＳＫ67	溝　4	ＳＤ４
掘立柱建物　7	ＳＢ４	土坑　6	ＳＫ37	土坑　42	ＳＫ70	溝　5	ＳＤ５
掘立柱建物　8	ＳＢ５	土坑　7	ＳＫ27	土坑　43	ＳＫ73	溝　6	ＳＤ１
掘立柱建物　9	ＳＢ９	土坑　8	ＳＫ10				

凡　例

1．第２分冊は、以下の縮尺を基本としておもな遺構、遺物の図面を掲載した。

遺構図：　竪穴住居、掘立柱建物、テラス　１／80　　竪穴、土坑　１／40

遺物実測図：　土器　１／４　　石器　１／１、２／３、１／３、１／６　　鉄製品　１／２

2．土器・石器にみえる記号は次のとおり。

→：ケズリ方向　　↔：磨り面範囲　　⟷：敲打範囲

3．遺構ならびに遺物の時期比定については下の編年対照表のうち、網掛けで表示したものを参考に行っている。その表記は、例えば後期前葉というように表中の時期区分にしたがっている。石器の分類については（９）を参考とした。

編年対照表

時代／時期			濵田2000	辻1999	濵田2003	清水1992	松井1997	牧本1994	牧本1999	岡野2004
弥生時代	前期		越敷山式／前期1式							
			前期2式			Ⅰ－1				
			前期3式			Ⅰ－2				
			前期4式			Ⅰ－3				
	中期	前葉				Ⅱ－1・2				
		中葉				Ⅲ－1				
				Ⅲ－1		Ⅲ－2	西伯耆Ⅰ期			
				Ⅲ－2		Ⅲ－3	西伯耆Ⅱ期			
		後葉		Ⅳ－1a		Ⅳ－1	西伯耆Ⅲ期			
				Ⅳ－1b		Ⅳ－2				
							西伯耆Ⅳ期			
				Ⅳ－3		Ⅳ－3				
	後期	前葉			Ⅴ－1期古相	Ⅴ－1	西伯耆Ⅴ期	大山Ⅰ期		
					Ⅴ－1期新相					
		中葉			Ⅴ－2期古相	Ⅴ－2	西伯耆Ⅵ期	空白期		
					Ⅴ－2期新相					
		後葉			Ⅴ－3期	Ⅴ－3	西伯耆Ⅶ期	大山Ⅱ期		
	終末期	前葉				Ⅵ－1	西伯耆Ⅷ・Ⅸ期			
							西伯耆Ⅹ期	大山Ⅲ期		
		後葉				Ⅵ－2		大山Ⅳ期		
							西伯耆ⅩⅠ期	大山Ⅴ期	天神川Ⅰ期	
古墳時代	前期	前葉					西伯耆ⅩⅡ期		天神川Ⅱ期	
							西伯耆ⅩⅢ期	大山Ⅵ期（古）		
		中葉					西伯耆ⅩⅣ期		天神川Ⅲ期	
								大山Ⅵ期（新）		
		後葉							天神川Ⅳ期	
	中期	前葉						大山Ⅶ期	天神川Ⅴ期	
		中葉						空白期	天神川Ⅵ期	
								大山Ⅷ期	天神川Ⅶ期	1期
		後葉							天神川Ⅷ期	
		末葉						大山Ⅸ期	天神川Ⅸ期	2期
	後期	前葉							天神川Ⅹ期	3期
		中葉								4期
		後葉								5期

註

（１）濵田竜彦 2000「山陰地方における弥生文化成立期の様相」『弥生文化の成立』
第47回埋蔵文化財研究集会発表要旨埋蔵文化財研究会

（２）辻　信広 1999「弥生中期中～後葉の土器について」『茶畑山道遺跡』名和町教育委員会

（３）濵田竜彦 2003「大山北麓地域における弥生時代後期土器の編年」『史跡妻木晩田遺跡第４次発掘調査報告書』

（４）清水真一 1992「因幡・伯耆地域」『弥生土器の様式と編年（山陽・山陰編）』

（５）松井　潔 1997「東の土器,南の土器－山陰東部における弥生時代中期後葉～古墳時代初頭の非在地系土器の動態」
『古代吉備』第19集

（６）牧本哲雄 1994「第１節　土器編年について」『南谷大山遺跡Ⅱ，南谷29号墳』（財）鳥取県教育文化財団

（７）牧本哲雄 1999「古墳時代の土器について」『長瀬高浜遺跡Ⅷ，園第６遺跡』（財）鳥取県教育文化財団

（８）岡野雅則 2004「古墳時代中期から後期の土器について」本書3－196ｐ～3－202ｐ

（９）平井　勝 1991『弥生時代の石器』考古学ライブラリー64　ニューサイエンス社

茶畑遺跡群　第2分冊
押平尾無遺跡　目次

例言・凡例
目次

第3章　押平尾無遺跡の調査

第1節　調査の概要　（西川・湯川）　2－1
　1．遺構の概要
　2．調査の経過と方法
　3．調査地の地形と層序
第2節　弥生時代中期後葉から後期前葉の調査　（湯川）　2－13
　1．概要
　2．竪穴住居
　3．掘立柱建物
　4．土坑
第3節　弥生時代後期後葉から古墳時代前期の調査　（西川・森本・三木・湯川）　2－23
　1．概要
　2．竪穴住居
　3．竪穴
　4．掘立柱建物
　5．テラス
　6．土坑
　7．溝
第4節　古墳時代中期の調査　（西川・三木・湯川）　2－69
　1．概要
　2．竪穴住居
　3．竪穴
　4．掘立柱建物
　5．テラス
　6．土坑
　7．溝
第5節　その他の時期の遺構と遺物　（北・浜田・湯川）　2－93
　1．概要
　2．古墳時代前期以前の遺構
　3．古墳時代中期以降の遺構
　4．ピット
　5．遺構外出土遺物

主要遺構観察表　2－123
出土遺物観察表　2－124
図版

第1分冊　目次

第1章　茶畑遺跡群の概要

第1節　調査の概要　（浜田・湯川）　1－1

第2節　調査の経緯　（西川）　1－5

第3節　調査の経過　（西川・岡野）　1－6

第2章　茶畑第1遺跡の調査

第1節　調査の概要　（西川・日置）　1－9

第2節　弥生時代中期の調査　（西川・日置）　1－15

第3節　弥生時代後期の調査　（西川）　1－54

第4節　弥生時代終末期から古墳時代前期の調査　（西川・湯川・日置）　1－56

第5節　古墳時代中期から後期の調査　（西川・日置）　1－88

第6節　その他の遺構と遺物　（西川・日置）　1－94

出土遺物観察表　1－174

第3分冊　目次

第4章　古御堂笹尾山遺跡の調査

第1節　調査の概要　（岡野）　1－1

第2節　弥生時代後期から古墳時代前期の調査　（森本・小林・岡野）　3－6

第3節　古墳時代中期から後期の調査　（森本・小林・岡野）　3－44

第4節　その他の時期の遺構と遺物　（森本・小林）　3－109

第5節　まとめ　古御堂笹尾山遺跡の変遷　（岡野）　3－117

出土遺物観察表　3－120

第5章　古御堂新林遺跡の調査

第1節　調査の概要　（岡野）　3－135

第2節　弥生時代後期の調査　（岡野）　3－140

第3節　その他の時期の遺構と遺物　（岡野）　3－147

出土遺物観察表　3－155

第6章　特論

第1節　茶畑第1遺跡掘立柱建物3の復原　浅川滋男　3－158

第2節　茶畑遺跡群出土土器の胎土分析　白石　純　3－162

第3節　茶畑第1遺跡出土の鉄製品の分析　佐々木 稔　3－172

第4節　古御堂笹尾山遺跡の焼失住居出土炭化材の樹種　古川郁夫　3－177

第5節　押平尾無遺跡、古御堂笹尾山遺跡、古御堂新林遺跡の焼失住居炭化材の樹種　ﾊﾟﾘﾉｻｰｳﾞｪｲ　3－183

第6節　竪穴住居床面にみられる斜坑状のピットについて　森本倫弘　3－188

第7節　弥生時代の桃核についての一考察　小林桃子　3－191

第8節　古墳時代中期から後期の土器について　岡野雅則　3－194

第7章　まとめ

茶畑遺跡群の集落変遷について　岡野雅則・中森祥　3－203

図版

挿図目次

図１　押平尾無遺跡の位置 …… 2－1
図２　グリッドおよび全遺構配置図 …… 2－2
図３　調査前地形測量図 …… 2－3
図４　調査後地形測量図 …… 2－4
図５　基本層序模式図 …… 2－5
図６　調査区内土層断面図（１）…… 2－6
図７　調査区内土層断面図（２）…… 2－7
図８　調査区内土層断面図（３）…… 2－8
図９　調査区内土層断面図（４）…… 2－9
図10　調査区内土層断面図（５）…… 2－10
図11　調査区内土層断面図（６）…… 2－11
図12　調査区内土層断面図（７）…… 2－12
図13　弥生時代中期遺構配置図 …… 2－13
図14　竪穴住居１ …… 2－14
図15　竪穴住居１遺物出土状況
および出土遺物 …… 2－15
図16　竪穴住居２ …… 2－16
図17　竪穴住居３および出土遺物 …… 2－17
図18　竪穴住居４ …… 2－18
図19　竪穴住居４拡大図
および出土遺物 …… 2－19
図20　掘立柱建物１および出土遺物 …… 2－20
図21　土坑１・２および出土遺物 …… 2－21
図22　土坑３・４・５および出土遺物 … 2－22
図23　弥生時代後期～古墳時代初頭
遺構配置図 …… 2－23
図24　竪穴住居５ …… 2－24
図25　竪穴住居５貼床除去後
および出土遺物… …… 2－25
図26　竪穴住居６および出土遺物 …… 2－26
図27　竪穴住居７および出土遺物 …… 2－27
図28　竪穴住居８および出土遺物 …… 2－28
図29　竪穴住居８焼土・炭化材検出状況　2－29
図30　竪穴住居９ …… 2－30
図31　竪穴住居９出土遺物 …… 2－31
図32　竪穴住居９焼土・炭化材
検出状況（上面）…… 2－32
図33　竪穴住居９焼土・炭化材
検出状況（下面）…… 2－33
図34　竪穴住居10および
床面直上出土遺物 …… 2－34
図35　竪穴住居10出土遺物①層 …… 2－35
図36　竪穴住居11 …… 2－36
図37　竪穴住居11出土遺物 …… 2－37
図38　竪穴住居12 …… 2－38
図39　竪穴住居12出土遺物 …… 2－39
図40　竪穴住居13 …… 2－40
図41　竪穴住居13拡大図および
床面直上出土遺物 …… 2－41
図42　竪穴住居13出土遺物 …… 2－42
図43　竪穴住居14および出土遺物 …… 2－43
図44　竪穴住居15および出土遺物 …… 2－44
図45　竪穴住居16および拡大図 …… 2－45
図46　竪穴住居16出土遺物 …… 2－46
図47　竪穴住居17 …… 2－47
図48　竪穴住居18および出土遺物 …… 2－48
図49　竪穴住居19 …… 2－50
図50　竪穴住居19出土遺物（１）…… 2－51
図51　竪穴住居19出土遺物（２）…… 2－52
図52　竪穴１および出土遺物 …… 2－53
図53　竪穴２・３および出土遺物 …… 2－54
図54　掘立柱建物２・３
および出土遺物 …… 2－55
図55　掘立柱建物４・５ …… 2－56
図56　掘立柱建物６ …… 2－57
図57　テラス１および下層出土遺物 …… 2－58
図58　テラス２・３および出土遺物 …… 2－59
図59　テラス４～６および出土遺物 …… 2－60
図60　テラス７～10および出土遺物 …… 2－61
図61　土坑６～８および出土遺物 …… 2－62

図62　土坑９および出土遺物 …… 2－63
図63　土坑10～12および出土遺物 …… 2－64
図64　土坑13～18および出土遺物 …… 2－65
図65　土坑19および出土遺物 …… 2－66
図66　土坑20・21および出土遺物 …… 2－67
図67　溝１・２および出土遺物 …… 2－68
図68　古墳時代中期遺構配置図 …… 2－69
図69　竪穴住居20 …… 2－71
図70　竪穴住居20遺物出土状況
　　および出土遺物(1)床面直上・Ｐ５ … 2－72
図71　竪穴住居20遺物出土状況
　　および出土遺物（２）…… 2－73
図72　竪穴住居20遺物出土状況
　　および出土遺物（３）…… 2－74
図73　竪穴住居20出土鉄製品 …… 2－75
図74　竪穴住居21 …… 2－76
図75　竪穴住居21出土遺物（１）…… 2－77
図76　竪穴住居21出土遺物（２）⑥層 … 2－78
図77　竪穴住居21出土遺物（３）…… 2－79
図78　竪穴住居22 …… 2－80
図79　竪穴住居22遺物出土状況
　　および出土遺物 …… 2－81
図80　竪穴４および出土遺物 …… 2－83
図81　掘立柱建物７ …… 2－84
図82　掘立柱建物８・９
　　および出土遺物 …… 2－85
図83　テラス11および出土遺物 …… 2－86
図84　テラス12・13および出土遺物 …… 2－87
図85　テラス14 …… 2－88
図86　テラス14出土遺物 …… 2－89
図87　土坑22および出土遺物 …… 2－90
図88　土坑23～26および出土遺物 …… 2－91
図89　溝３～５ …… 2－92
図90　その他の時期遺構配置図（１）
　　古墳時代前期以前 …… 2－93
図91　竪穴５ …… 2－96
図92　掘立柱建物10・11 …… 2－95
図93　掘立柱建物12～14 …… 2－96
図94　テラス15～18 …… 2－97
図95　テラス19～23 …… 2－98
図96　土坑27～33および出土遺物 …… 2－99
図97　土坑34～39 …… 2－100
図98　土坑40～47 …… 2－101
図99　土坑48～61（落し穴状遺構）
　　配置図 …… 2－102
図100　土坑48～52 …… 2－103
図101　土坑53・54 …… 2－104
図102　土坑55～59 …… 2－105
図103　土坑60・61および出土遺物 …… 2－106
図104　その他の時期遺構配置図（２）
　　古墳時代中期以降 …… 2－107
図105　土坑62～67 …… 2－108
図106　土坑68～72 …… 2－109
図107　溝６および出土遺物 …… 2－110
図108　ピット配置図 …… 2－111
図109　ピット群・ピット127・72・140
　　および出土遺物 …… 2－112
図110　東斜面Ｂ層出土遺物 …… 2－117
図111　西斜面Ｂ層出土遺物 …… 2－117
図112　Ⅱ層出土遺物 …… 2－118
図113　東斜面Ａ層出土遺物 …… 2－119
図114　西斜面Ａ層出土遺物（１）…… 2－120
図115　西斜面Ａ層出土遺物（２）…… 2－121
図116　西斜面Ａ層出土遺物（３）…… 2－122
図117　Ⅰ層および表土出土遺物 …… 2－122

第３章　押平尾無遺跡の調査

第１節　調査の概要

１．遺跡の概要

押平尾無遺跡は、中国地方の最高峰大山の北麓に位置し、現在の行政区分では鳥取県西伯郡名和町大字押平にあたる。本遺跡周辺は、大山から延びる丘陵に大小の河川が幾筋もの谷を刻んでいる。調査地は、二つの谷が合流する地点に近く、丘陵は東西を谷に挟まれ痩せ尾根状を呈する。丘陵上の平坦部と東西斜面部で、調査地が構成されている。

本遺跡から谷を挟んで西隣には茶畑第１遺跡が位置する。この遺跡では、弥生時代中期後葉、弥生時代終末期から古墳時代前期前葉の大型掘立柱建物が検出されており、拠点集落中心域と考えられている。さらに西側には蛇の川を挟み、弥生時代中期中葉の拠点集落中心域と考えられている茶畑山道遺跡が位置する。谷を挟んだ東隣には古御堂笹尾山遺跡、同じ台地上の南には茶畑第２遺跡と茶畑古墳群、北には原古墳群が位置する。これらの遺跡と周辺のいくつかの遺跡を合わせ、茶畑遺跡群を構成しており、本遺跡もこの遺跡群を構成する遺跡のひとつである。

今回の調査では、計３面の遺構面を確認している。Ⅰ面は近世、Ⅱ面は古墳時代中期、Ⅲ面は弥生時代中期後葉以前と弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉の遺構面である。

調査地内で最古の遺物は後期旧石器で、最古の遺構は縄文時代と考えられる落し穴状遺構である。

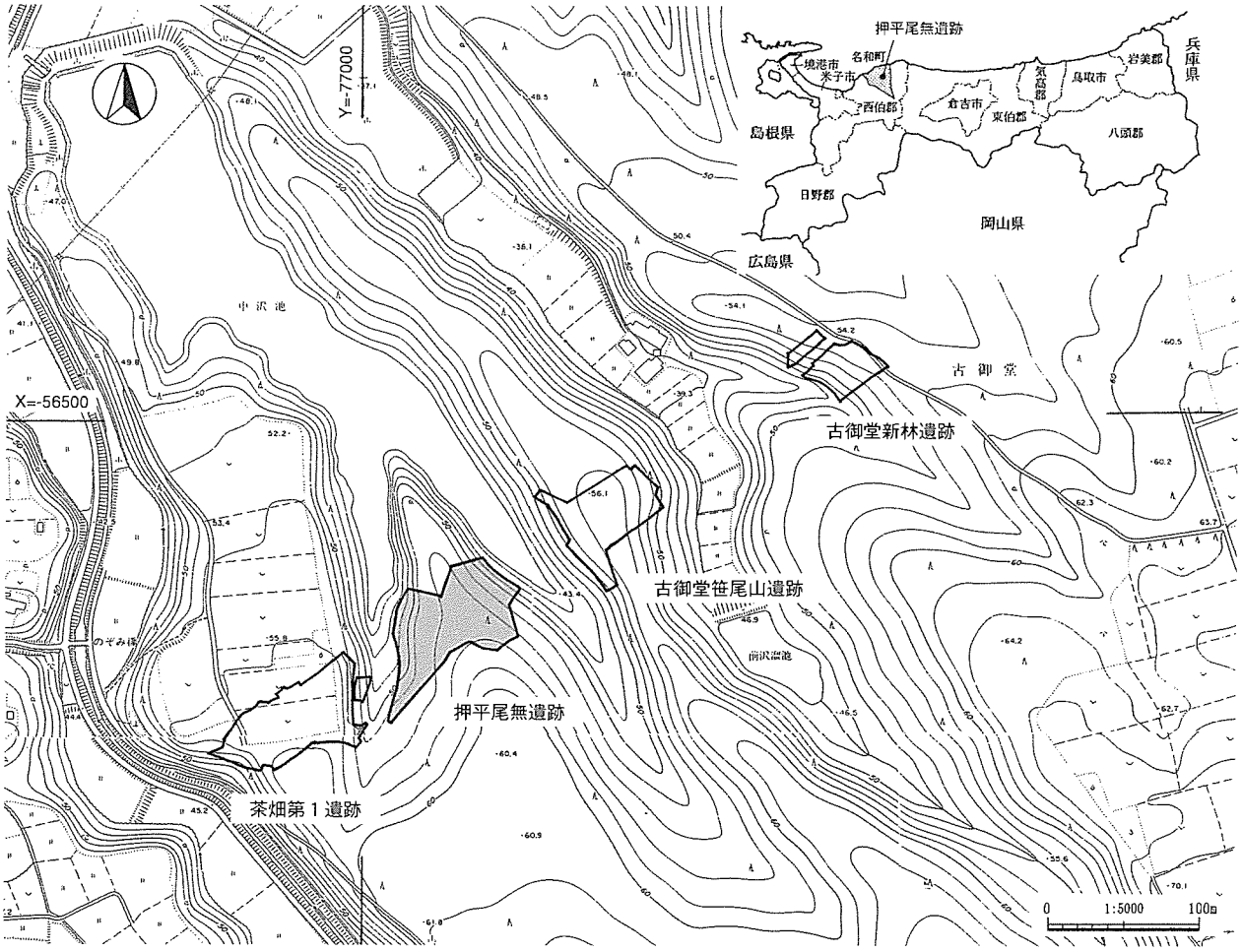


図１　押平尾無遺跡の位置

集落として調査地が利用され始めるのは弥生時代中期後葉からで、多くの遺物とともに竪穴住居や掘立柱建物・土坑を検出した。これに続く、弥生時代後期中葉では、遺構・遺物ともに検出していない。再び調査地が集落として利用されるのは、弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉にかけてとなる。焼失住居２棟を含む竪穴住居を始め、非常に多くの遺構を検出している。特に弥生時代終末期から古墳時代前期前葉にかけては遺構が密集しており、狭い痩せ尾根上という立地条件を考慮した場合、特筆すべき事象と言えよう。おそらくは、同時期の茶畑第１遺跡が拠点集落の中心として機能していたことと関連すると考えている。遺構・遺物ともに検出していない古墳時代前期中葉・後葉をはさみ、古墳中期にもう一度集落が形成される。この時期は竪穴住居をはじめ、遺構内から多くの遺物が出土し、土器の変遷や、住居内での利用方法などに多くの示唆を与えてくれる。これ以降は古代の遺物が少量出土しているのみで、近世まで遺構・遺物ともに確認していない。近世は、炭窯と考えられる土坑を検出した。村山、里山として利用されていたことが推定できる。　（湯川）

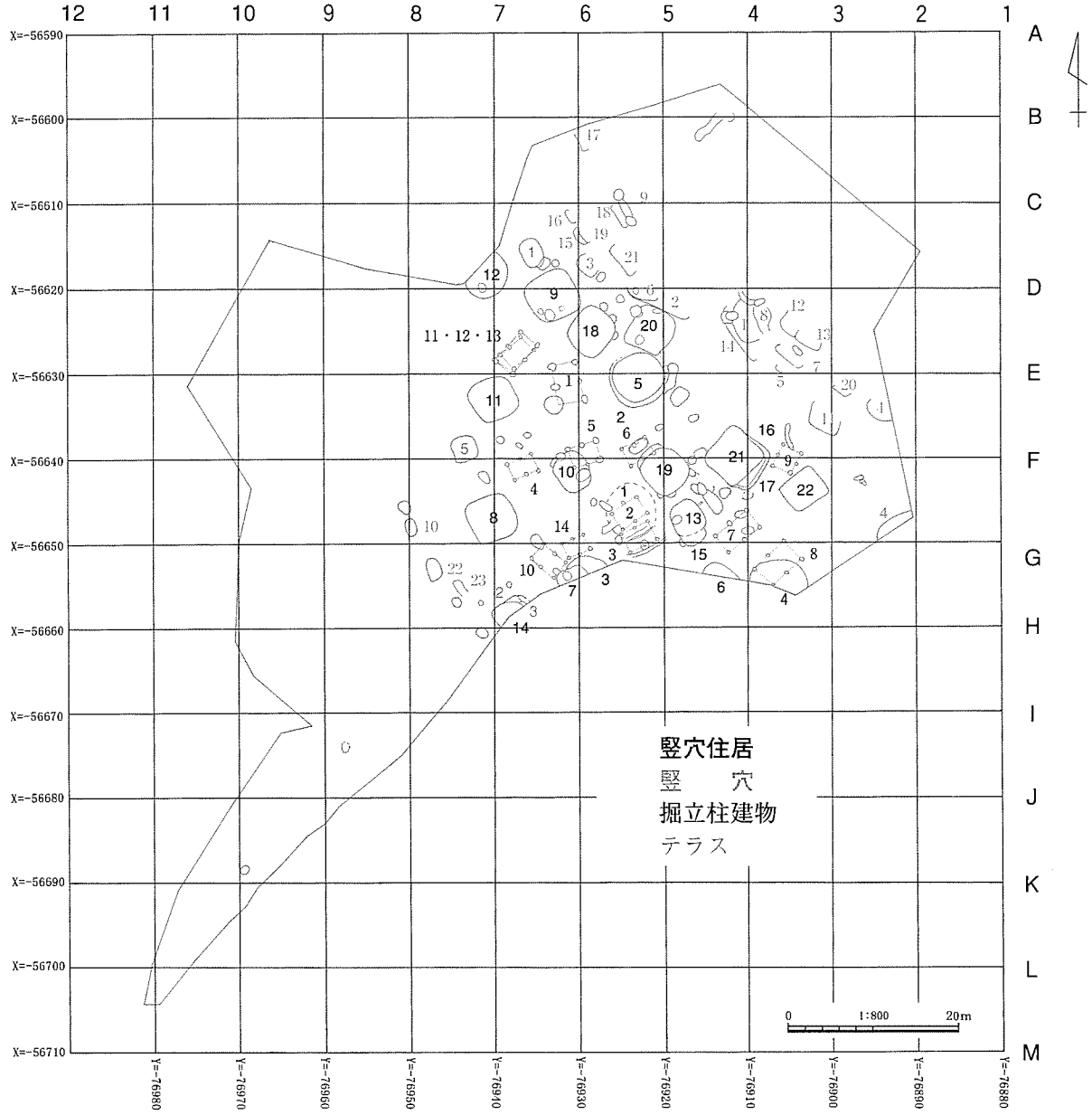


図２　グリッドおよび全遺構配置図

２．調査の経過と方法

発掘調査は平成14年10月22日に開始し、重機による表土剥ぎや作業員による検出などの作業を終えた11月28日に平成14年度の調査を終了した。年度の変わった平成15年４月21日から再度調査に着手し、作業員による本格的な掘り下げを開始した。

平成14年度のサブトレンチ調査の結果から東側斜面部に厚く遺物包含層が存在することが明らかであったため、平成15年度の調査は東側斜面部から調査に着手し、終了次第尾根上平坦部、西側斜面部へと調査範囲を移していく計画を立て、調査を開始した。５月22日から、西側斜面部における遺構及び遺物包含層の有無を確認するためにサブトレンチを設定し掘り下げを開始した。その結果、斜面上部には遺構や遺物包含層が存在するが、下部では一部の限られた範囲を除き遺構が認められず遺物も少なかったことから、埋蔵文化財センター企画調整班と協議のうえで、下部については重機で地山面まで堆積土を除去し、地山面上で再度遺構を確認することにした。

６月２日以降は、東側斜面部調査と並行して尾根上平坦部にサブトレンチを設定し掘り下げを行った。その結果、遺構面が複数面あり多くの遺構が存在することが確認されたが、埋土は識別が困難で

図３　調査前地形測量図

あることや残された調査期間を考慮して、埋蔵文化財センター企画調整班と協議のうえで最終遺構面まで掘り下げ、各遺構面の面調査は実施しないこととした。

調査は９月18日で作業員の全体稼働を終了したが、その後も補足測量を実施した。９月26日には調査後航空撮影を行い、10月３日をもって現場における調査を終了した。10月18日には古御堂笹尾山遺跡・古御堂新林遺跡と合同で現地説明会を開催したところ、天候にも恵まれ多くの見学者があった。

出土遺物の整理・報告書の作成は、現場調査開始と同時に着手し、平成16年３月末まで実施した。それらの屋内作業は、基本的には名和調査事務所に於いて実施したが、遺物実測の一部は埋蔵文化財センターにおいて行った。

調査地には平成14年11月25・26日に国土座標第Ｖ系に基づく10ｍ方眼の杭を業者委託により設置していたが、調査に於いては北東に位置する杭番号をグリッド名とし、遺構実測・遺物取り上げ等に使用した。また、遺構実測においては、トータルステーションによって得られた座標データから平面図を作図する方法を主に採用した。　（西川）

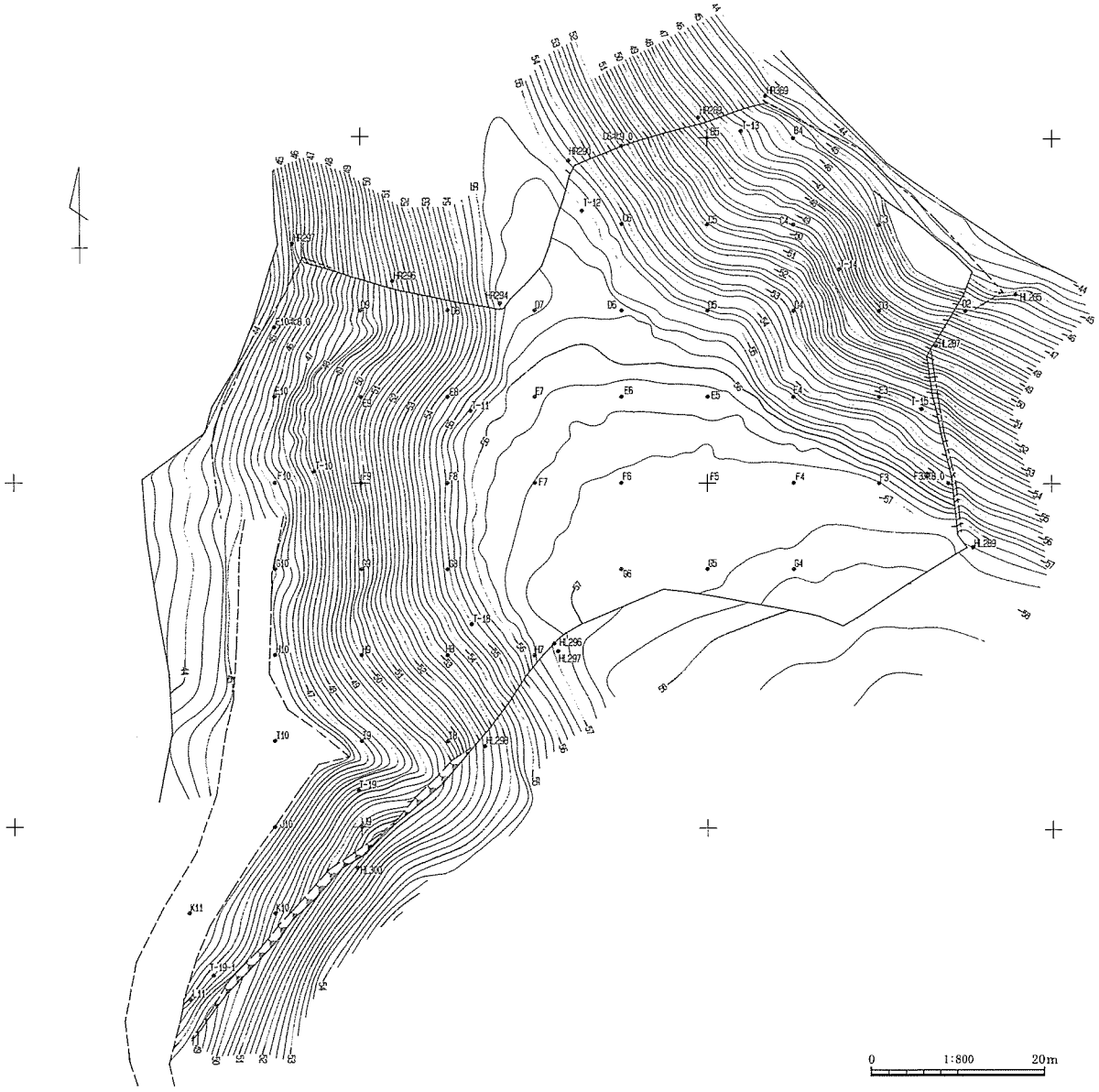


図４　調査後地形測量図

３．調査地内の堆積

地形と基本層序

本遺跡は、大山北麓の丘陵上に位置する。この丘陵は、主として大山からの噴出物により形成されたもので、海岸部にかけてゆるやかに傾斜している。本遺跡周辺は、中小の河川による開析が進み、谷に挟まれた細長い台地が放射状に広がる景観を呈している。今回の調査地も、二つの谷が合流する地点に近く、丘陵は東西を谷に挟まれ痩せ尾根状を呈する。丘陵上の平坦部と東西斜面部で、調査地が構成されている。各部の堆積は、基盤層を除き大きく異なっている。基盤層を含めた平坦部の堆積を上位からⅠ～Ⅺ層とし、斜面部は基盤層を除く流土を上位からＡ～Ｃ層とした。各層位の土色・土質は以下の通りである。あわせて、尾根筋と直交方向の断面模式図を下に示した（図５）。

	Ⅰ層　にぶい黄褐色土（土器混。上面がⅠ面）	10YR4/3
	Ⅱ層　暗褐色土（土器混。上面がⅡ面）	10YR3/3
	Ⅲ′層　褐色土（やや淡い。上面がⅢ面）	7.5YR4/4
	Ⅲ層　褐色土　（上面がⅢ面）	7.5YR4/6
	Ⅳ層　黄褐色砂質土（ＡＴ層）	10YR5/6～8
	Ⅴ層　にぶい褐色粘質土	8.75YR6/3
	Ⅵ層　赤褐色粘質土	8.75YR5/6
	Ⅶ層　明褐色土	7.5YR5/6～8
	Ⅷ′層　明褐色土（小礫混）	7.5YR5/6～8
	Ⅷ層　明褐色土（風化安山岩礫混）	7.5YR5/6～8
	Ⅸ層　赤褐色粘質土	8.75YR5/6
	Ⅹ層　黄褐色土（安山岩礫混）	10YR5/8
	Ⅺ層　明黄褐色砂礫	2.5Y7/6
	Ａ層　暗褐色流土（土器混）	
	Ｂ層　褐色流土（土器混）	
	Ｃ層　暗褐色流土（しまりあり、粗砂混）	

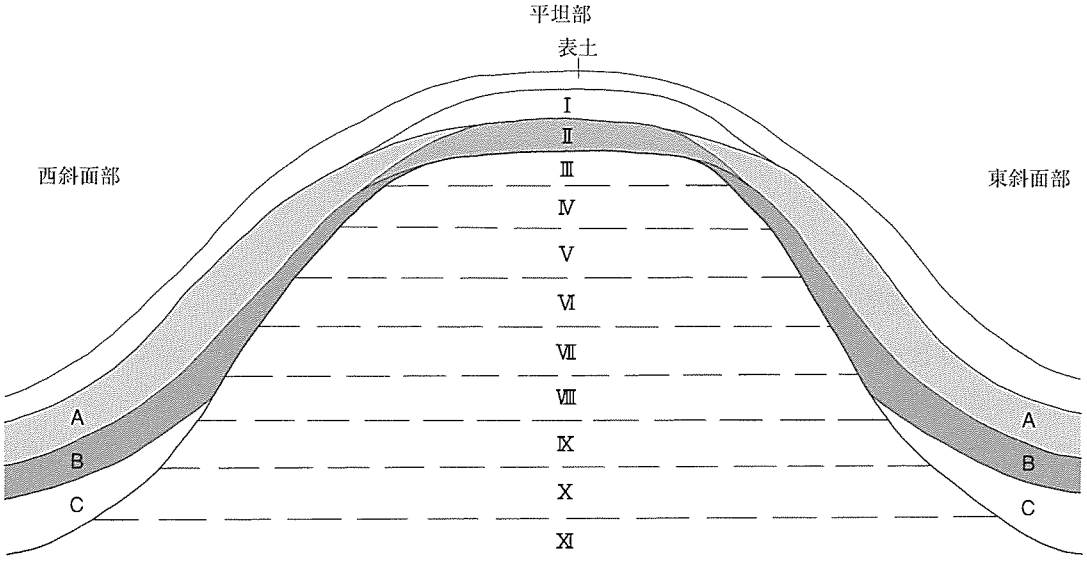


図５　基本層序模式図

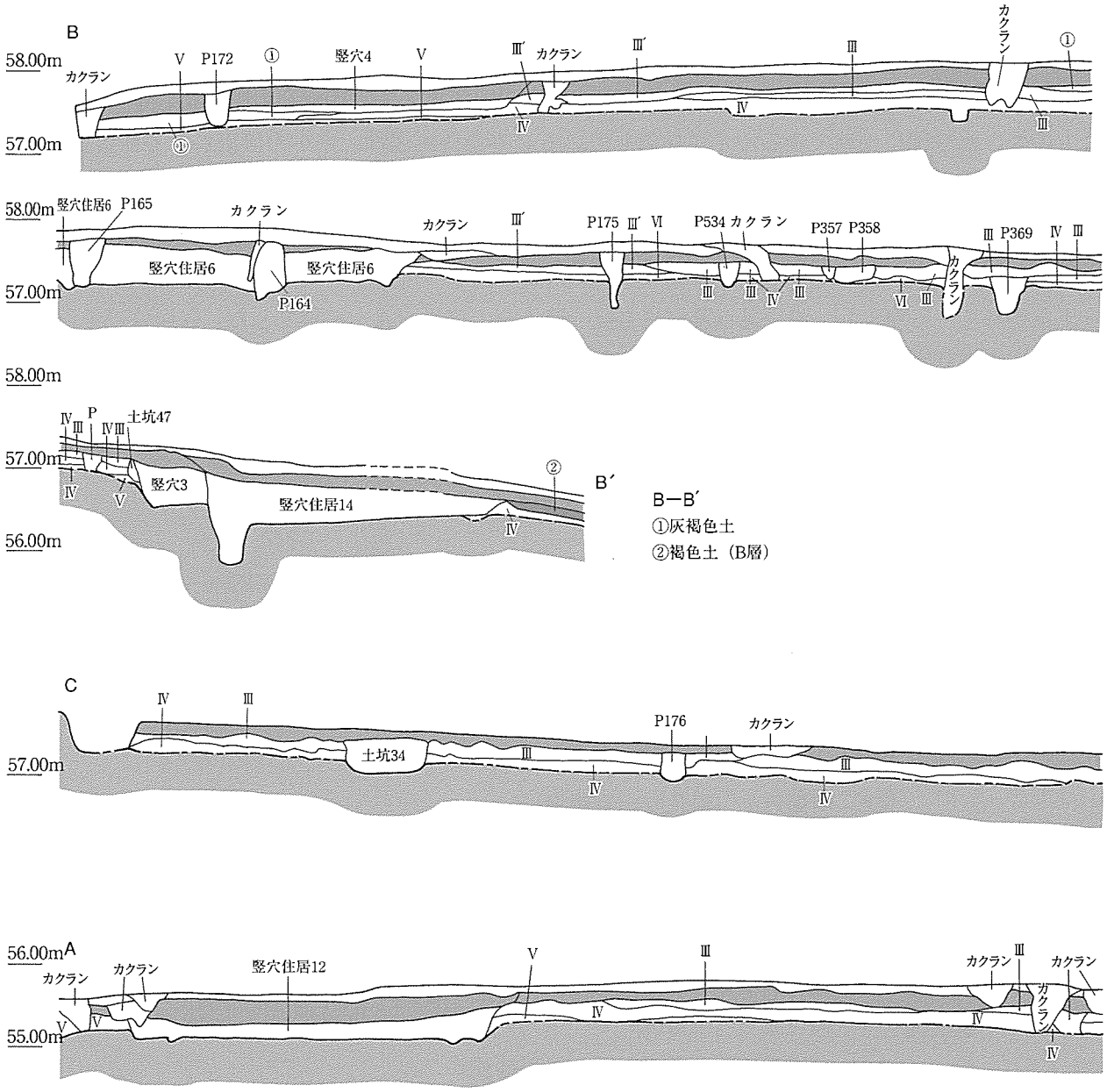


図６　調査区内土層断面図（1）

平坦部の堆積と遺構面（図６・７　Ａ－Ａ′ Ｂ－Ｂ′ Ｃ－Ｃ′　図８・９　Ｄ－Ｄ′）

平坦部では、２枚の遺物包含層（Ⅰ・Ⅱ層）と、計３面の遺構面を確認した。

表土直下には、近世後半を最新とする遺物包含層のⅠ層があり、Ⅰ層上面がⅠ面である。この面において、近世と考えられる遺構を検出した。

Ⅰ層及び表土直下には、古墳時代前期前葉を最新とする遺物包含層のⅡ層があり、Ⅱ層上面がⅡ面である。この面において、古墳時代中期の遺構を検出した。この時期の遺構にはⅡ層に類似した土色土質の土が主要な堆積をなしており、古墳時代中期にはⅡ層が旧地表面を覆っていたと考えている。また、古墳時代前期前葉までの遺構の最上層にⅡ層と類似した土が堆積している場合がある。Ⅱ層は、

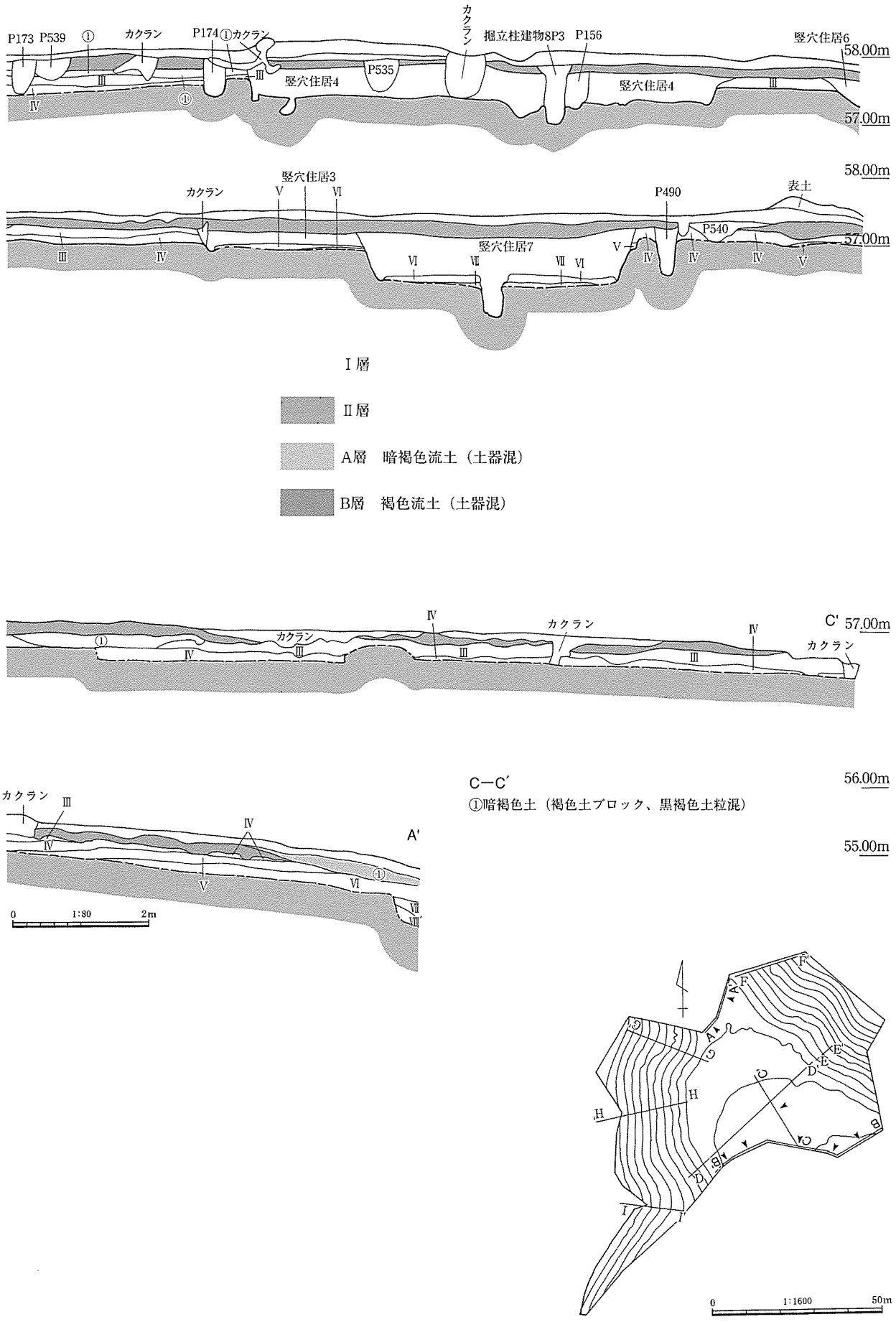


図７　調査区内土層断面図（2）

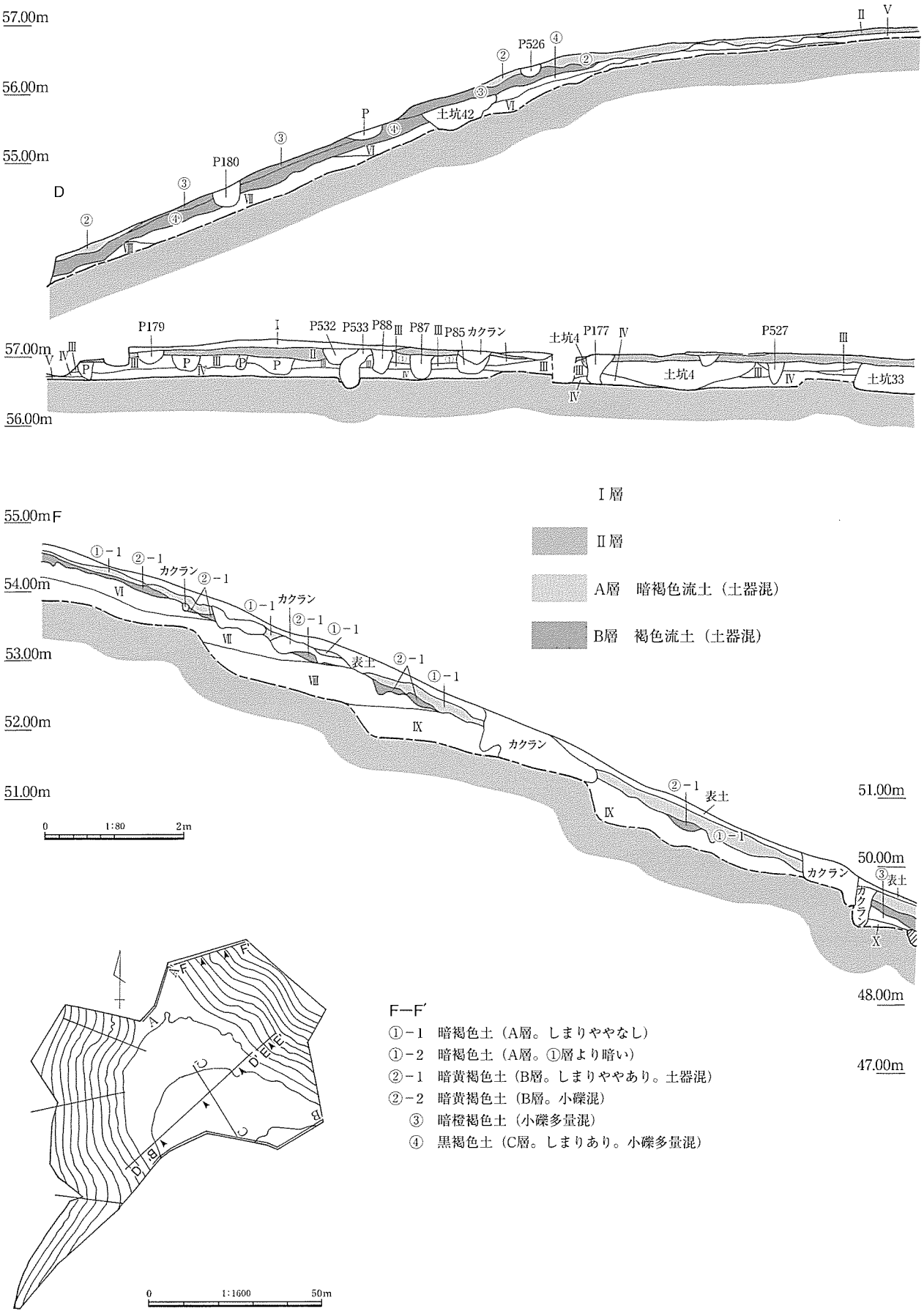
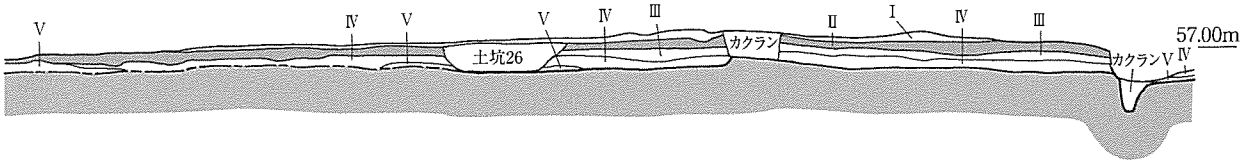
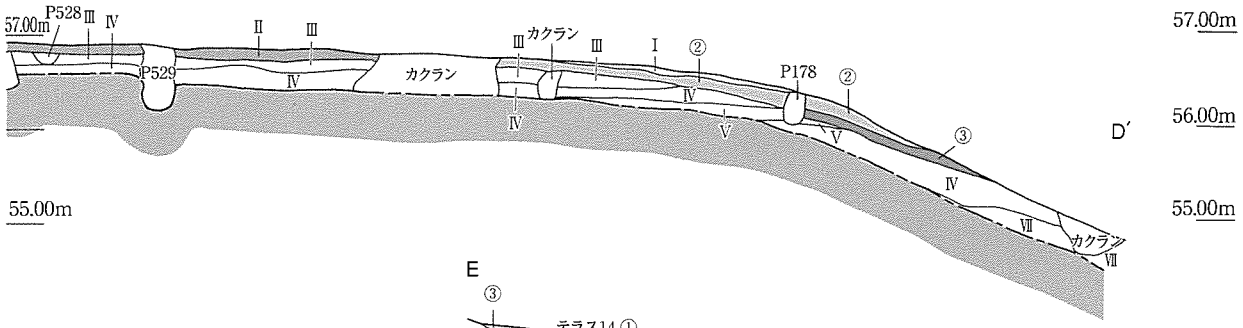
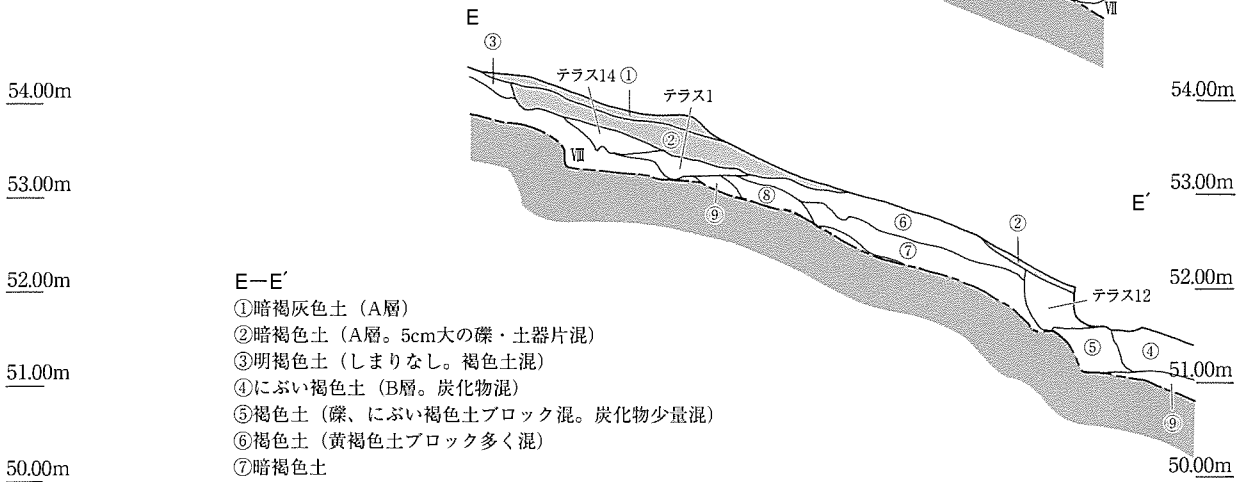


図８　調査区内土層断面図（3）



D－D′
①褐色土（やや灰色。炭化物、暗褐色土粒混）
②暗褐色土（A層、褐色土ブロック、黒褐色土小ブロック混）
③褐色土（B層、やや灰色。炭化物、暗褐色土粒混）
④にぶい褐色土（B層、炭化物混）





E－E′
①暗褐灰色土（A層）
②暗褐色土（A層。5cm大の礫・土器片混）
③明褐色土（しまりなし。褐色土混）
④にぶい褐色土（B層。炭化物混）
⑤褐色土（礫、にぶい褐色土ブロック混。炭化物少量混）
⑥褐色土（黄褐色土ブロック多く混）
⑦暗褐色土
⑧にぶい褐色土（小礫、黄褐色土粒混）
⑨黄褐色土と暗褐色土の混土層

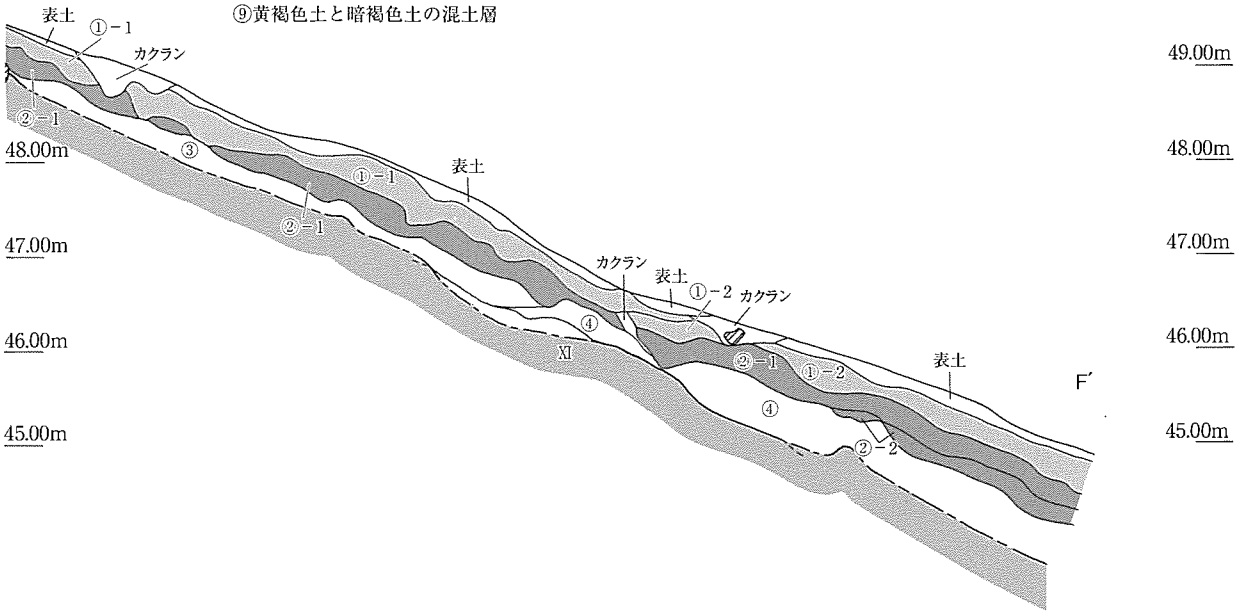


図９　調査区内土層断面図（4）

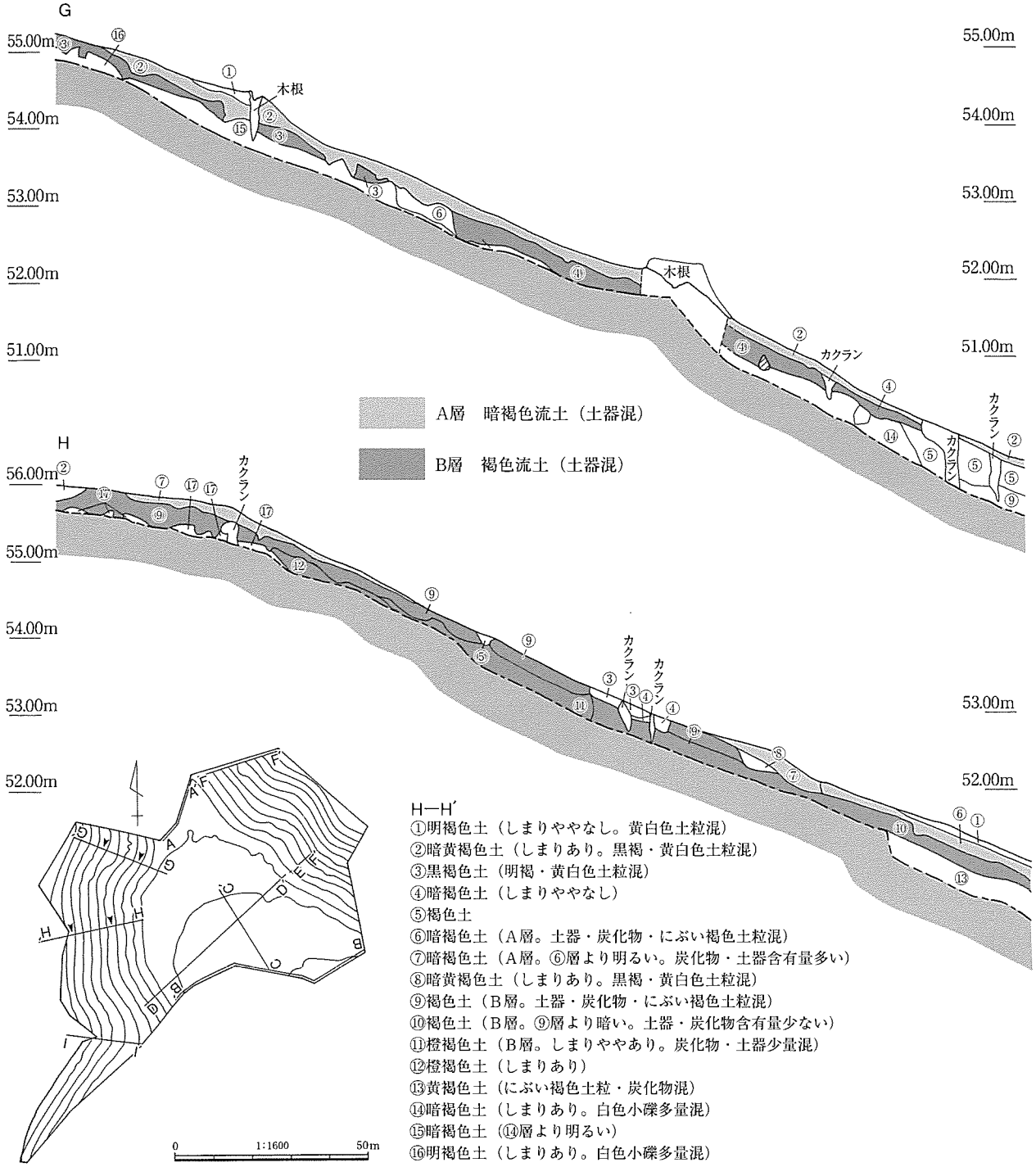


図10　調査区内土層断面図（5）

古墳時代前期前葉から、古墳時代中期にかけて形成したと推測した。

Ⅱ層直下は基盤層のⅢ層で、Ⅲ層上面がⅢ面である。この面において、古墳時代前期前葉以前の遺構を検出した。Ⅲ面では弥生時代中期後葉の遺構も検出したが、他の時期の遺構と比べ浅い。よって、弥生時代中期後葉の旧地表面は、流失あるいは、土壌化が進行した可能性がある。

基盤層（図８・９　Ｄ－Ｄ′　Ｅ－Ｅ′　Ｆ－Ｆ′）

調査地内においてⅢ～Ⅺ層までを確認している。

Ⅲ層には、やや淡い色調を呈するⅢ′層が上位に堆積する場合がある（Ｂ－Ｂ′）。Ⅳ層は、姶良丹

沢火山灰（ＡＴ層）。Ⅴ・Ⅵ層間はクラックが多く、Ⅵ層上面が一定期間地表面であったことを示している。Ⅶ層は安山岩礫を含んでおり、名和火砕流と考えている。Ⅺ層中にはラミナが形成されており、御来屋礫層と推定した。

斜面部の堆積（図８～12）

東西斜面部には、流土が堆積していた。土色土質から、Ａ・Ｂ・Ｃ層に大別して報告する。

表土直下、斜面部全体でＡ層（暗褐色流土）を確認した。Ⅱ層と土色土質が類似し、Ⅱ層の上位に位置することから（Ｄ－Ｄ′）、Ⅱ層が流土化したものと判断した。古代を最新とする遺物を含み、古墳時代中期の遺構を覆っていた。東側斜面部Ｃ２グリッド及び、西斜面部Ｈ８グリッドを中心とす

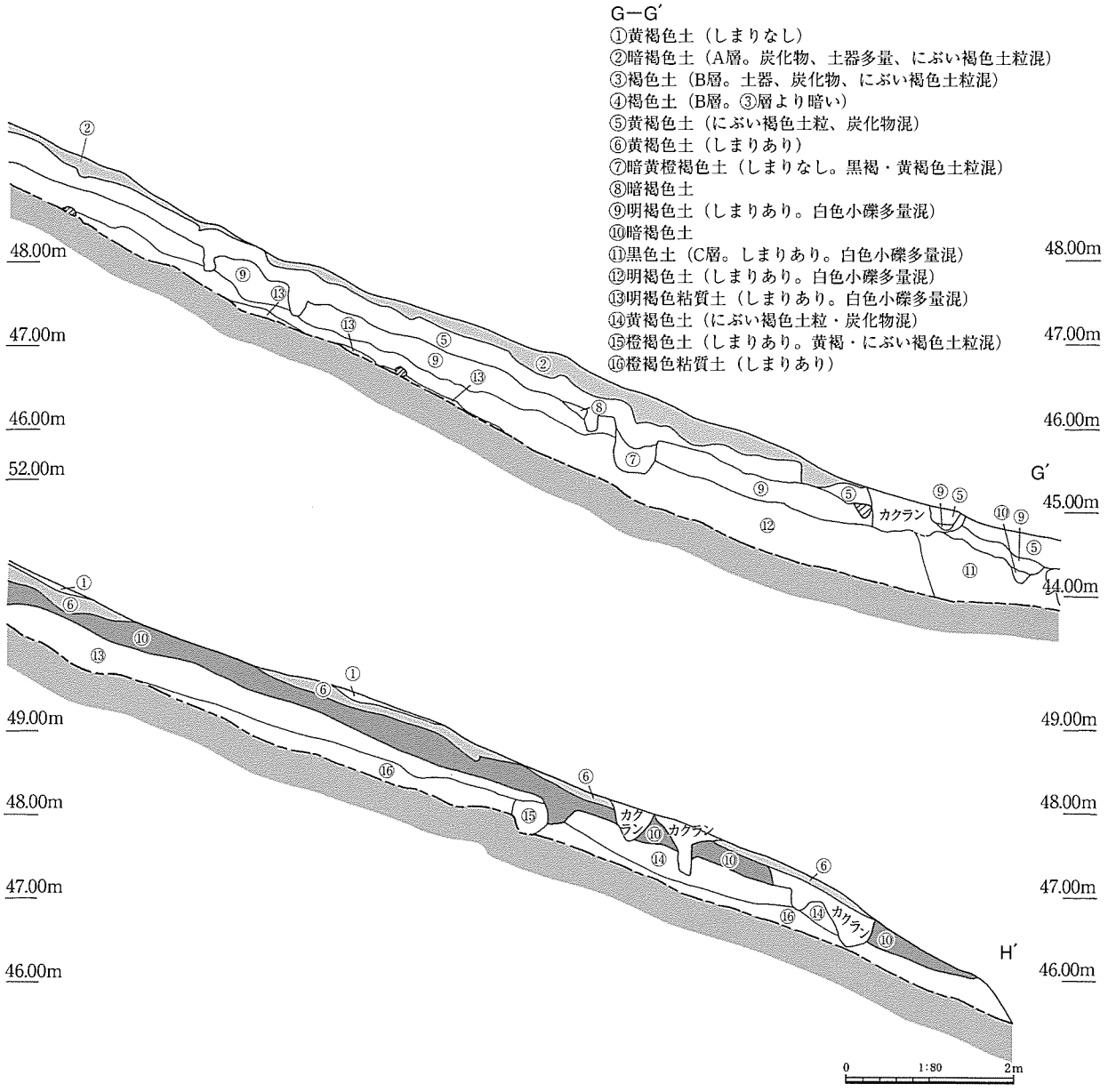
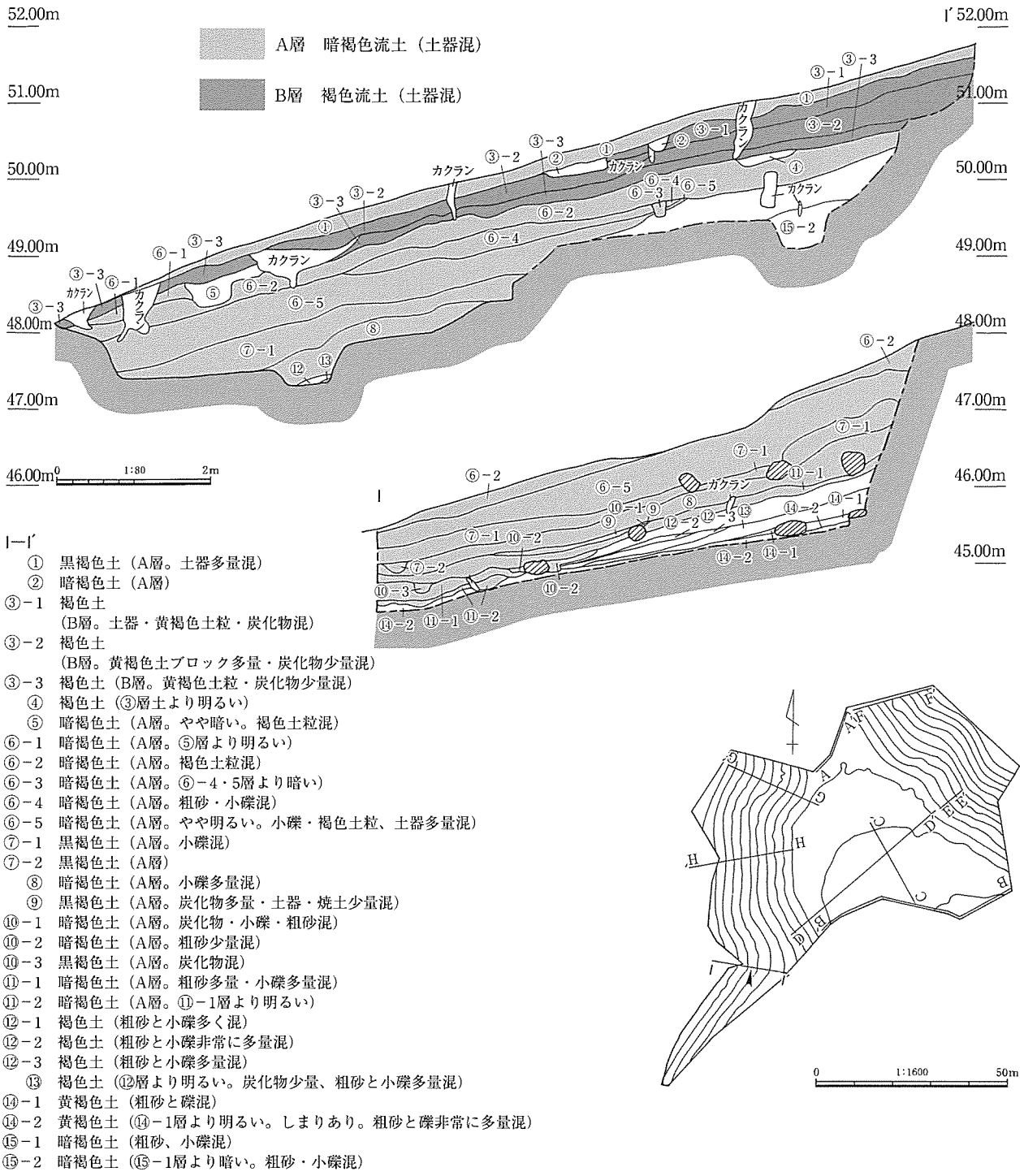


図11　調査区内土層断面図（6）



I—I′
① 黒褐色土（A層。土器多量混）
② 暗褐色土（A層）
③－1 褐色土
（B層。土器・黄褐色土粒・炭化物混）
③－2 褐色土
（B層。黄褐色土ブロック多量・炭化物少量混）
③－3 褐色土（B層。黄褐色土粒・炭化物少量混）
④ 褐色土（③層土より明るい）
⑤ 暗褐色土（A層。やや暗い。褐色土粒混）
⑥－1 暗褐色土（A層。⑤層より明るい）
⑥－2 暗褐色土（A層。褐色土粒混）
⑥－3 暗褐色土（A層。⑥－4・5層より暗い）
⑥－4 暗褐色土（A層。粗砂・小礫混）
⑥－5 暗褐色土（A層。やや明るい。小礫・褐色土粒、土器多量混）
⑦－1 黒褐色土（A層。小礫混）
⑦－2 黒褐色土（A層）
⑧ 暗褐色土（A層。小礫多量混）
⑨ 黒褐色土（A層。炭化物多量・土器・焼土少量混）
⑩－1 暗褐色土（A層。炭化物・小礫・粗砂混）
⑩－2 暗褐色土（A層。粗砂少量混）
⑩－3 黒褐色土（A層。炭化物混）
⑪－1 暗褐色土（A層。粗砂多量・小礫多量混）
⑪－2 暗褐色土（A層。⑪－1層より明るい）
⑫－1 褐色土（粗砂と小礫多く混）
⑫－2 褐色土（粗砂と小礫非常に多量混）
⑫－3 褐色土（粗砂と小礫多量混）
⑬ 褐色土（⑫層より明るい。炭化物少量、粗砂と小礫多量混）
⑭－1 黄褐色土（粗砂と礫混）
⑭－2 黄褐色土（⑭－1層より明るい。しまりあり。粗砂と礫非常に多量混）
⑮－1 暗褐色土（粗砂、小礫混）
⑮－2 暗褐色土（⑮－1層より暗い。粗砂・小礫混）

図12　調査区内土層断面図（7）

る谷地形（Ｉ－Ｉ′）では厚く堆積し、多くの遺物が出土している。Ａ層直下で、Ｂ層（褐色流土）を確認した。Ⅲ層と土色土質が類似し、Ⅱ層の下位、Ⅲ層の上位に位置することから（Ｄ－Ｄ′）、Ⅲ層が流土化したものの可能性がある。部分的に存在しなかった箇所があり、一部流失した可能性がある。古墳時代前期前葉を最新とする遺物を含んでいた。Ｃ層は、斜面部下半で確認した。調査区内には類似した土色土質の基本層位がなく、より遠い上流部から流れてきたか、台地上に形成されたが流失した土層に由来すると考えられる。東西斜面部とも、遺物を含むＡ・Ｂ層は工事影響範囲内の調査地外へと延びており、今後の調査が望まれる。（湯川）

第２節　弥生時代中期後葉から後期前葉の調査

１．概要

当該期の遺構は、Ⅱ層直下のⅢ面で検出した。台地上の平坦部にのみ存在しており、東西斜面部では遺物が出土するものの、遺構は確認できなかった。他時期のものと比較して、遺構の深さが浅く、やや淡い褐色系の埋土を持つのが特徴である。掘立柱建物も、規模に比べ柱穴は浅い。他の時期の遺構と比べ浅い遺構が多い事象は、周辺地域の遺跡でも同様である。当該期の遺構が当初から浅かったのではなく、旧地表面の土壌化や集落利用とその後の流失の結果、浅くなった可能性がある。

検出した遺構数は、竪穴住居４棟、掘立柱建物１棟、土坑５基である。この内、中期後葉に属するのが、竪穴住居１～３、土坑１、後期前葉に属するのは、竪穴住居４である。当該期以前の明確な遺構は確認しておらず、遺物も縄文時代中期以降のものは出土していない。また、当該期以降は、後期

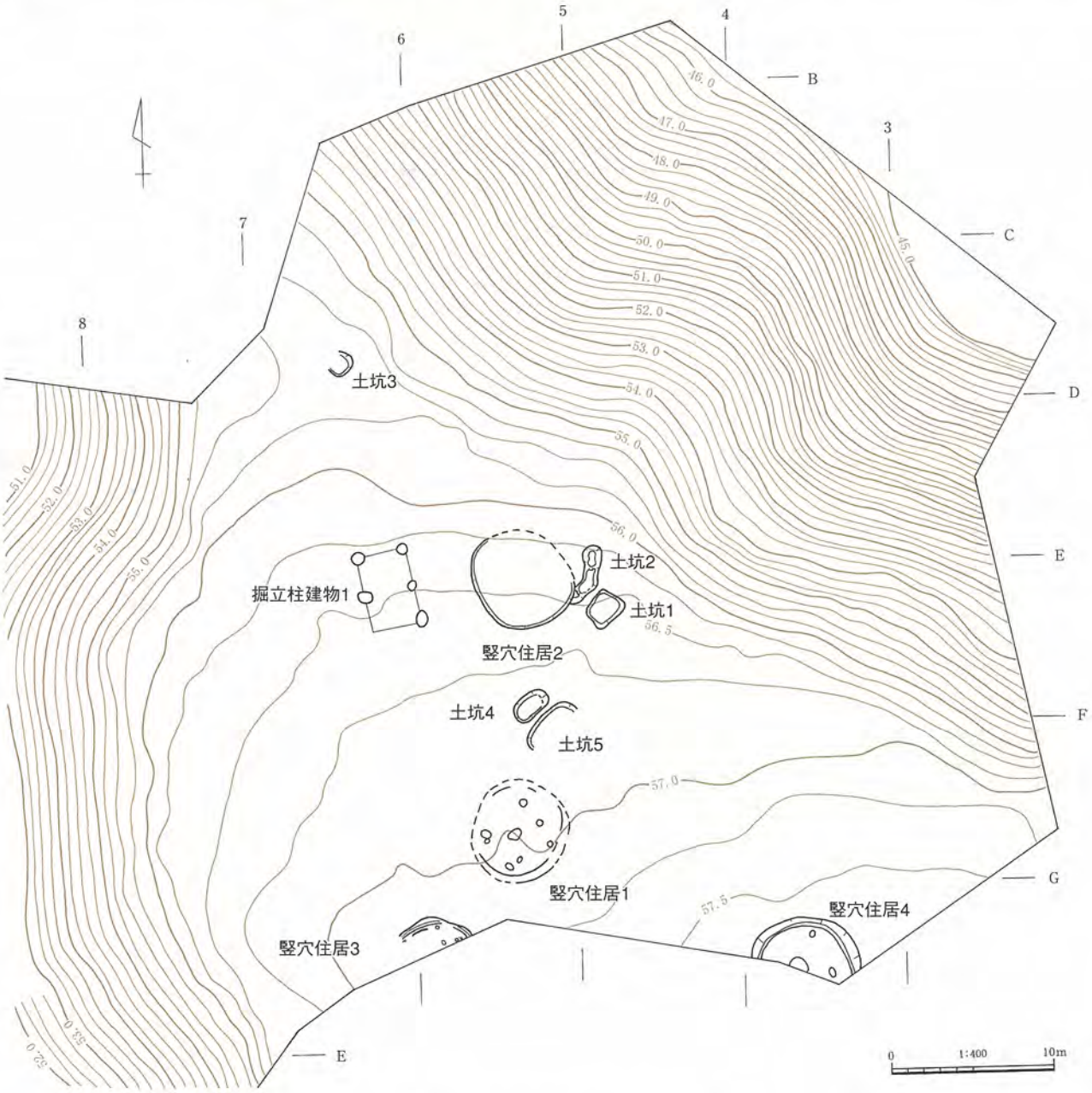


図13　弥生時代中期遺構配置図

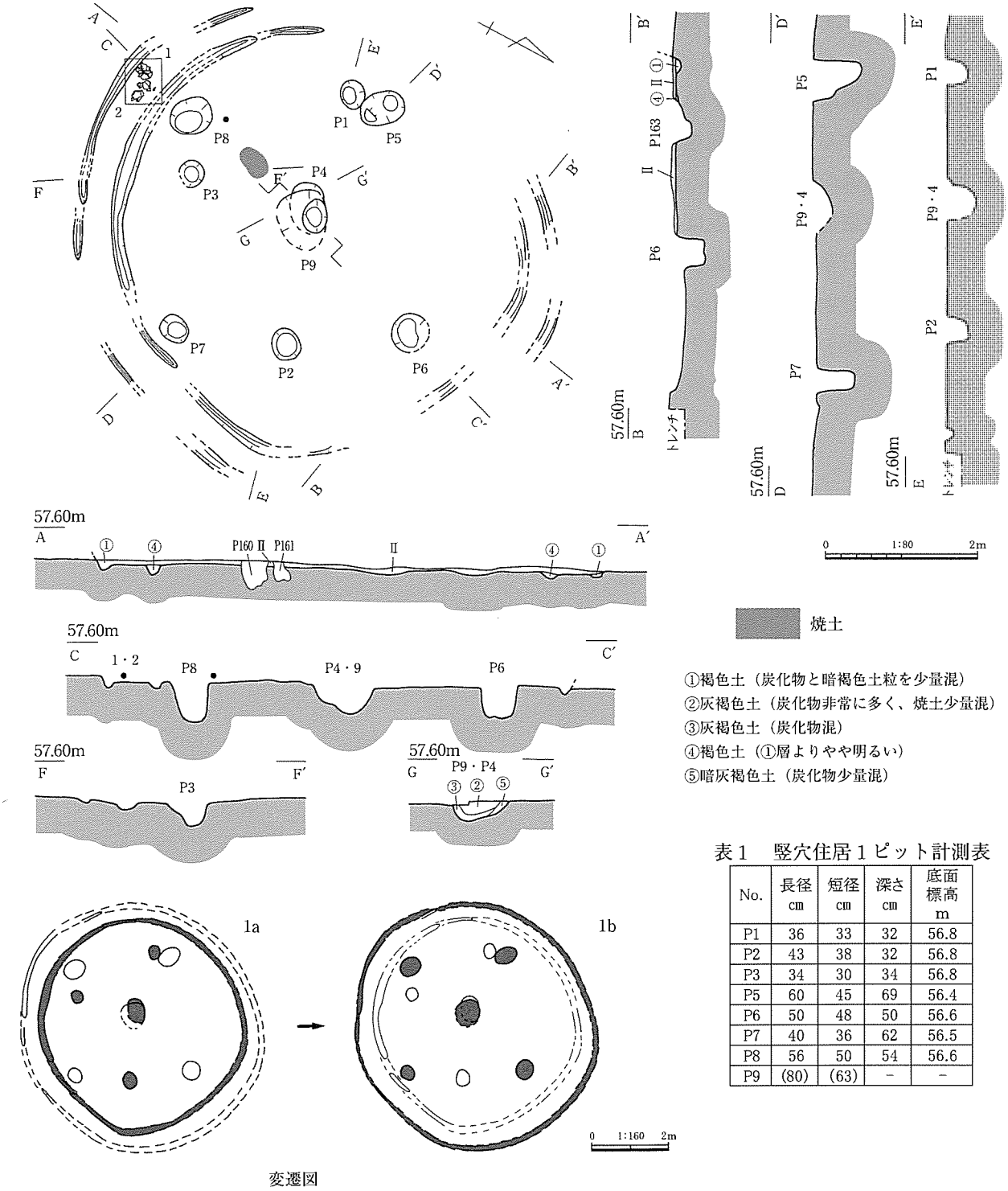


図14　竪穴住居１

表１　竪穴住居１ピット計測表

No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm	底面標高 m
P1	36	33	32	56.8
P2	43	38	32	56.8
P3	34	30	34	56.8
P5	60	45	69	56.4
P6	50	48	50	56.6
P7	40	36	62	56.5
P8	56	50	54	56.6
P9	(80)	(63)	－	－

中葉まで遺構・遺物ともに確認していない。したがって、調査区内の集落としての利用は、この時期からであり、短い期間で一旦終息するものと考えられる。以上のことから、集落の時間的な連続性を重視し、本節では弥生時代中期後葉から後期前葉にかけてをまとめて報告する。　（湯川）

２．竪穴住居

竪穴住居１（図14、図版４－３・44、表１）

平坦部中央、Ｆ５グリッドで検出した。平面形は円形を呈する。Ⅱ層に切られ、調査時の攪乱もあり遺存状況は悪い。柱穴や周壁溝等の床面施設は確認したが、床面の大半は失われていた。周壁溝は

第２節　弥生時代中期後葉から後期前葉の調査

１．概要

当該期の遺構は、Ⅱ層直下のⅢ面で検出した。台地上の平坦部にのみ存在しており、東西斜面部では遺物が出土するものの、遺構は確認できなかった。他時期のものと比較して、遺構の深さが浅く、やや淡い褐色系の埋土を持つのが特徴である。掘立柱建物も、規模に比べ柱穴は浅い。他の時期の遺構と比べ浅い遺構が多い事象は、周辺地域の遺跡でも同様である。当該期の遺構が当初から浅かったのではなく、旧地表面の土壌化や集落利用とその後の流失の結果、浅くなった可能性がある。

検出した遺構数は、竪穴住居４棟、掘立柱建物１棟、土坑５基である。この内、中期後葉に属するのが、竪穴住居１～３、土坑１、後期前葉に属するのは、竪穴住居４である。当該期以前の明確な遺構は確認しておらず、遺物も縄文時代中期以降のものは出土していない。また、当該期以降は、後期

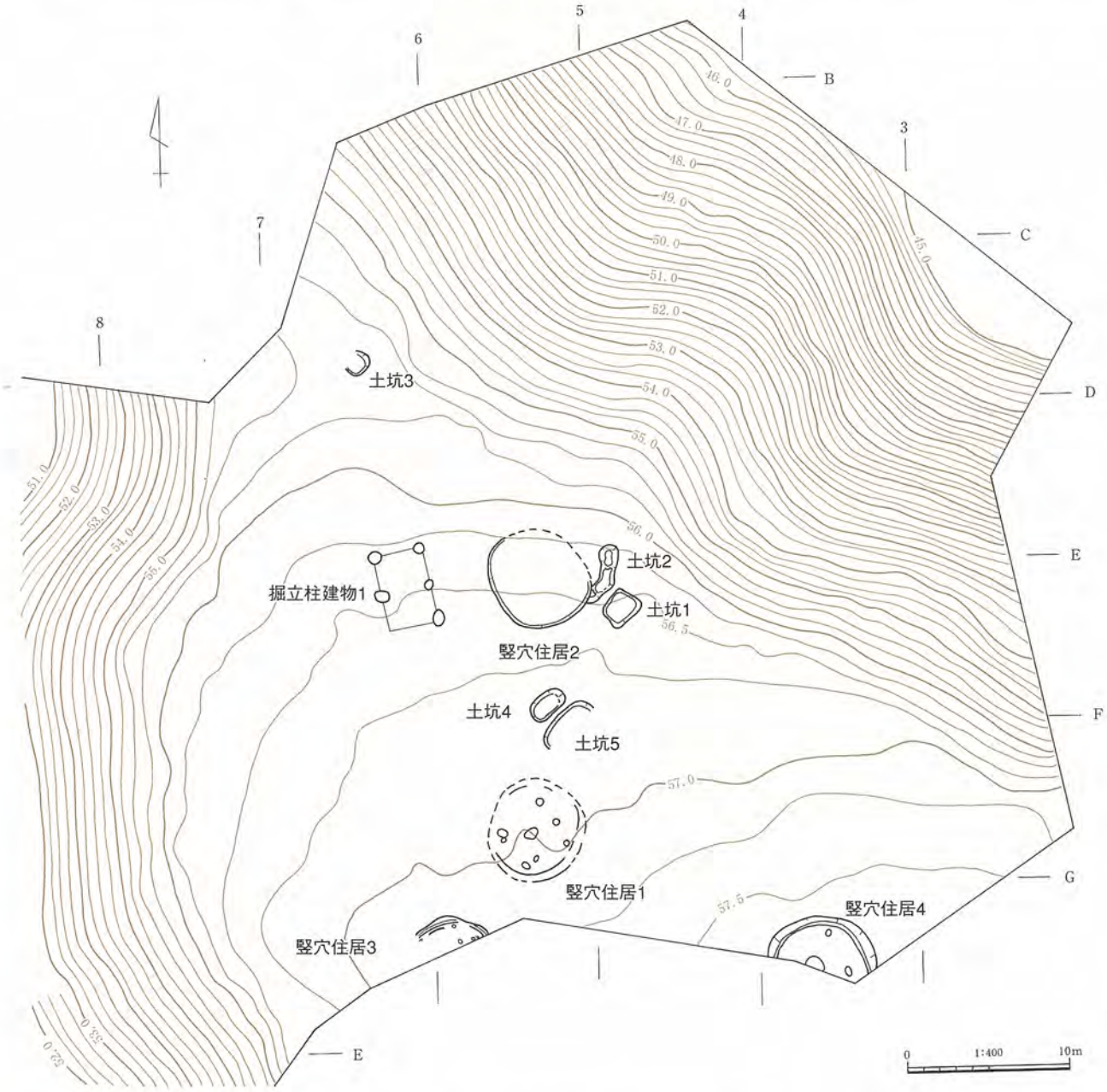


図13　弥生時代中期遺構配置図

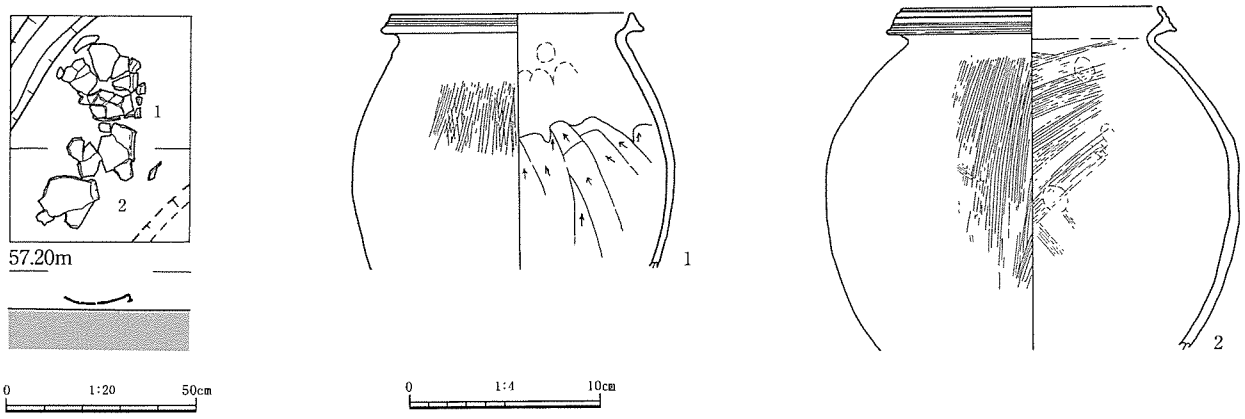


図15　竪穴住居１遺物出土状況および出土遺物

同心円状に２本検出しており、内側周壁溝に堆積した④層の上に外側周壁溝と一連の①層が堆積していた。このことから、拡張されたものととらえ、拡張前を竪穴住居１ａ、拡張後を１ｂとした。

竪穴住居１ａは、長軸5.6m・短軸5.5m、床面積23.4㎡を測る。１ｂに切られているため、竪穴部の堆積土は残存しておらず、床面施設のみを検出した。ピットは４基検出しており、ピット１～３が主柱穴、ピット４がいわゆる中央ピットである。主柱穴の配置から、ピット６の西側にもう１基、主柱穴の存在を想定できるが、伐根にともなう攪乱により検出できなかった。主柱穴は径38～42cm、深さ28～31cmを測る。主柱穴・周壁溝ともに褐色系の土が堆積していた。遺物は出土していない。

竪穴住居１ｂは、１ａを切って構築している。長軸6.7m・短軸6.0m、床面積35.2㎡を測る。深さは、遺存状況の良い南東側で約５cmを測る。確認したピットは５基で、ピット５～８が主柱穴、ピット９が中央ピットである。主柱穴の規模は、１ａよりも大きく、径40～60cm、深さ50～60cmを測る。地床炉と考えられる焼土面を検出している。南側の一部でのみ、竪穴部の堆積を確認した。周壁溝・主柱穴と同様、褐色土である。南端部、周壁溝付近の床面直上から、甕２個体が出土している。

１・２は、弥生土器の甕で、床面直上から横倒しになった状態で出土した。１は底部を除き、ほとんどが残存している。外面には煤が付着している。２は、１のすぐ東で床面直上から出土した。口縁・体部の３分の１程度が残存している。口縁部には凹線文が施され、体部は内外面ともハケ調整される。出土遺物から本遺構は、弥生時代中期後葉に属する竪穴住居と考えられる。　（湯川）

竪穴住居２（図16、図版６－４・６－５・７－１・44）

平坦部東側の傾斜変換点付近、Ｄ・Ｅ，４・５グリッドで検出した。竪穴住居５に、大半を切られており、北側を除く壁面付近しか残存していない。平面形態は、隅丸方形に近い円形を呈する。規模は、長軸6.6m・短軸6.3m、深さ56cm、床面積は推定で約30.3㎡を測る。壁は直線的に立ち上がるが、周壁溝は存在しない。その他、主柱穴などの床面施設は確認できなかった。このため、竪穴住居以外の遺構である可能性もある。ここでは、規模と形態が当該期の竪穴住居と類似すること、床面が平坦であることを重視し、竪穴住居として報告する。褐色系の土が堆積しており、２層に分層した。①・②層ともに、少量の遺物が出土している。３は、②層出土の弥生土器の甕である。口縁下端部が突出する。本遺構は、出土遺物から、弥生時代中期後葉に属すると考えられる。　（湯川）

竪穴住居３（図17、図版４－４・４－５・44・64－１）

平坦部の調査区南端、Ｇ５・６グリッドで検出した。南半分は調査区外へと延びており、検出した北半分も、竪穴住居７に床面積の半分近くを切られている。平面形は、円形を呈すると推定できる。

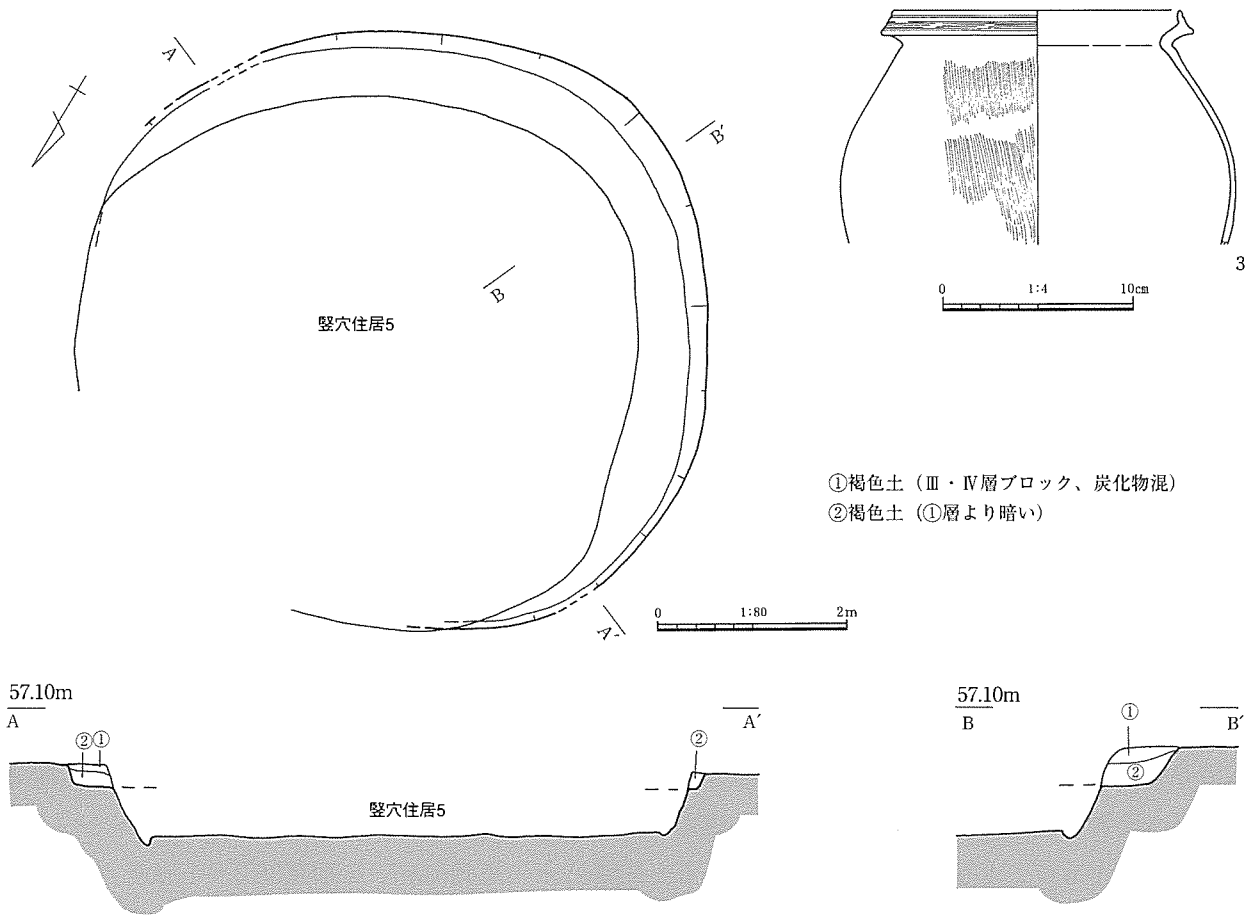


図16　竪穴住居２

周壁溝を同心円状に２本検出しており、内側の周壁溝は貼り床を除去した後に検出した。このことから、拡張されたものととらえ、拡張前を竪穴住居３ａ、拡張後を３ｂとして報告する。

竪穴住居３ａは、直径が推定で約4.8mを測る。床面施設は、周壁溝と２基のピットを検出した。周壁溝は部分的にしか残存しておらず、３ｂへ拡張する際、削られた可能性もある。ピット1は、配置・規模から主柱穴の可能性がある。その他の主柱穴を確認していないため、本遺構の主柱穴は、４本以下であったと推定できる。いずれも、にぶい褐色土が堆積していた。

竪穴住居３ｂは、３ａを切って構築している。約60°の角度で、直線的に立ち上がる壁を持つ。直径が推定で約6.3mを測る。遺存状態の良好な東側で深さ29cm、床面の南側には、貼り床（③層）が施されており、周壁溝を検出した。本遺構に伴うピットは、ピット３の１基のみであり、配置と規模から主柱穴と判断した。竪穴部には、単層の褐色土が堆積しており、やや淡い色調を呈する。遺物は全て、この層からの出土である。

４・５は、弥生土器の高杯である。４は、口縁部外面に凹線が施され、内外面ともミガキ調整される。５は、器台の可能性もある。両方とも、外面に赤色塗彩が施される。Ｆ１は板状鉄製品で、袋状鉄斧の可能性がある。出土地点が明確ではなく、混じり込みの可能性もある。

出土遺物等から、本遺構は、弥生時代中期後葉の所産と考えられる。　（湯川）

竪穴住居４（図18、図版４－６・５、表３）

平坦部の調査区南端、Ｇ３グリッドで検出した。南側は調査区外に延びており、検出したのは北半部のみ。残存部の形状から、平面形は長軸約5.5mの円形あるいは、円形に近い隅丸方形を呈すると推

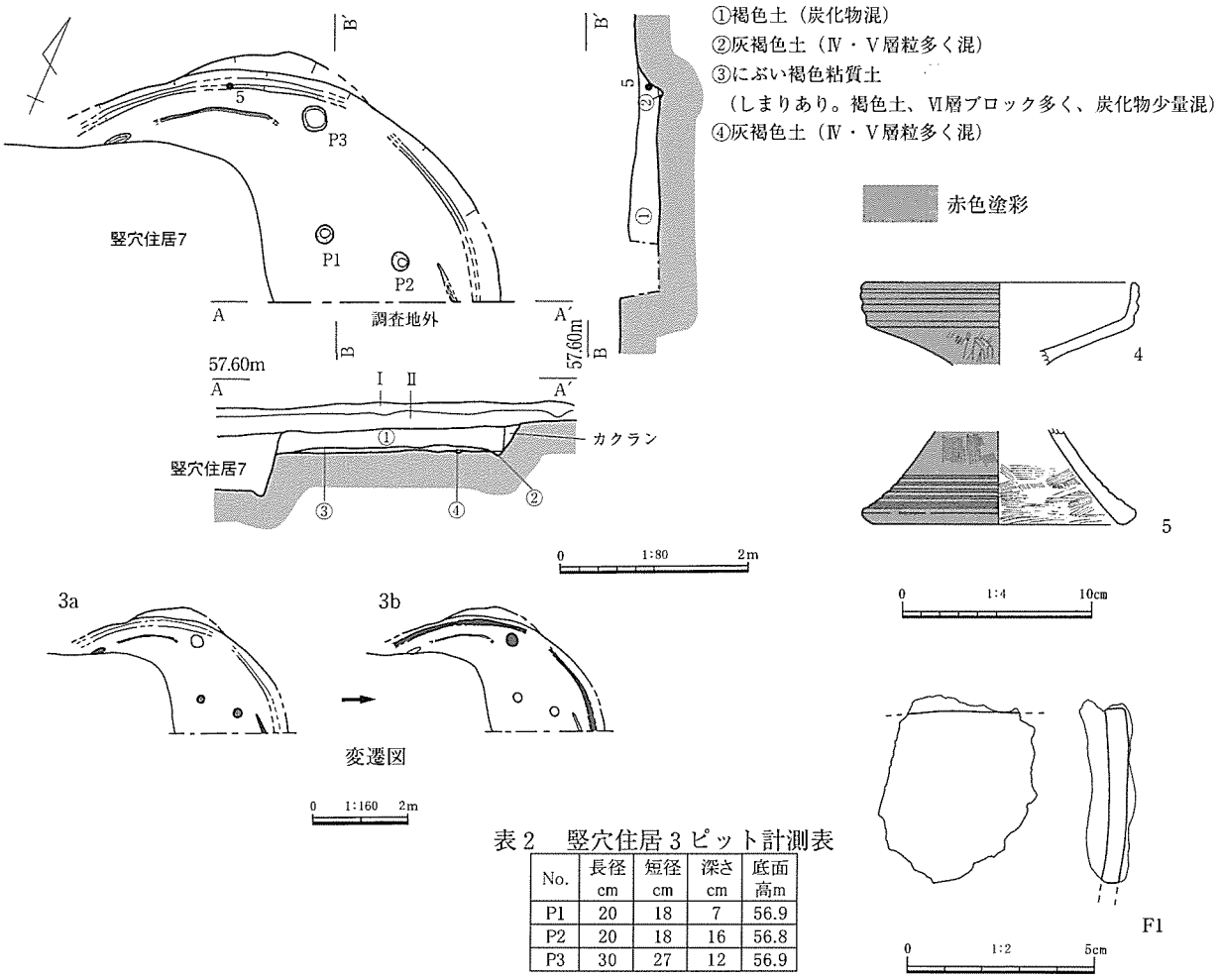


表２　竪穴住居３ピット計測表

No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm	底面 高m
P1	20	18	7	56.9
P2	20	18	16	56.8
P3	30	27	12	56.9

図17　竪穴住居３および出土遺物

定できる。壁は、垂直に近い角度で立ち上がり、床面より10cmほどのところで外へ折れ曲がる。検出面よりの深さは42cm、床面の標高は57.4mを測る。壁近くの床面上には、壁面を構成する地山土が多く含まれており、壁面の崩落に伴う可能性がある。床面からは、ピット５基を検出している。配置・規模から、ピット１～３が主柱穴、ピット４がいわゆる中央ピットに相当する。主柱穴の配置から、調査区外にもう１基、主柱穴の存在を想定でき、4本主柱穴の可能性が高い。ピット５は深さ24cmで、底面には径20cm、厚さ８cmの扁平な川原石が置かれていた。壁際には、周壁溝がめぐる。ピット４周辺を除く床面に、貼り床（⑭層）を確認した。ピット２の西には、床面が約1cmくぼみ、底面が焼土化した箇所がある。底面は凹凸が激しく、炭化物が堆積しており、地床炉と考えられる。貼り床除去後、床面を精査したところ、掘削痕跡と考えられる工具痕跡を検出した。平面形は底辺の広い二等辺三角形から三日月状を呈するものが多く、深さは2～7cmを測る。竪穴部には、やや淡い褐色土を主体とする堆積を確認している。①・②層からの出土遺物もあるが、遺物の多くは床面直上からの出土である。掲載した遺物は、下層出土の８を除き、残りは全て床面直上からの出土である。

６・７は、口縁部に平行沈線文が施される甕である。６の肩部には、斜行する連続刺突がめぐる。８・９は、口縁部に平行沈線文が施される壺である。８は小型で、頸部には斜行する連続刺突がめぐる。９の頸部には斜行する平行沈線がめぐる。10はミニチュア土器の壺である。体部の内外面には指頭圧痕が残り、外面には赤色塗彩が施されている。Ｓ１は安山岩製の大型蛤刃石斧で、刃部の右側が

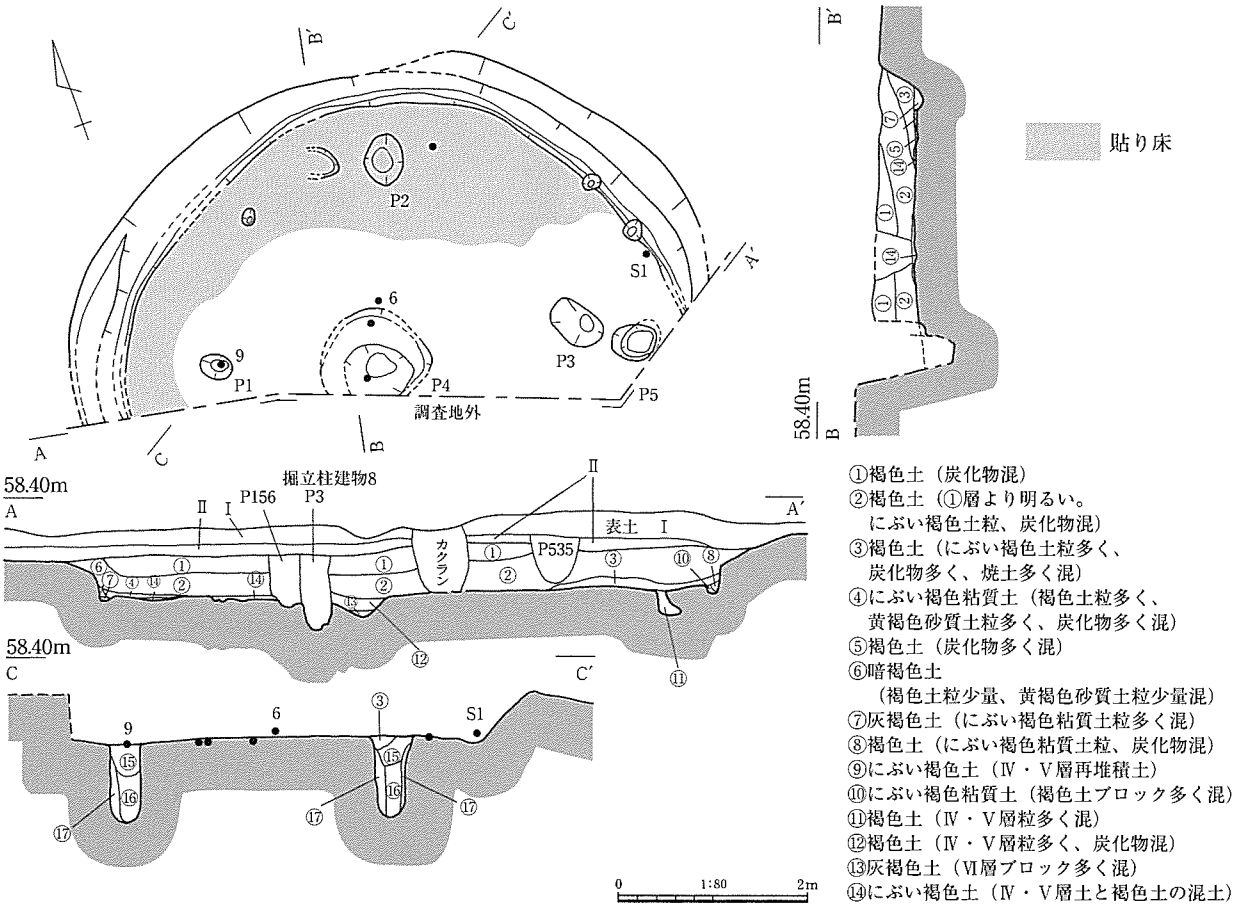


図18　竪穴住居４

やや短い。

出土した遺物から、弥生時代後期前葉に属する遺構と考えられる。　（湯川）

３．掘立柱建物

掘立柱建物１（図20、図版45－２、表４）

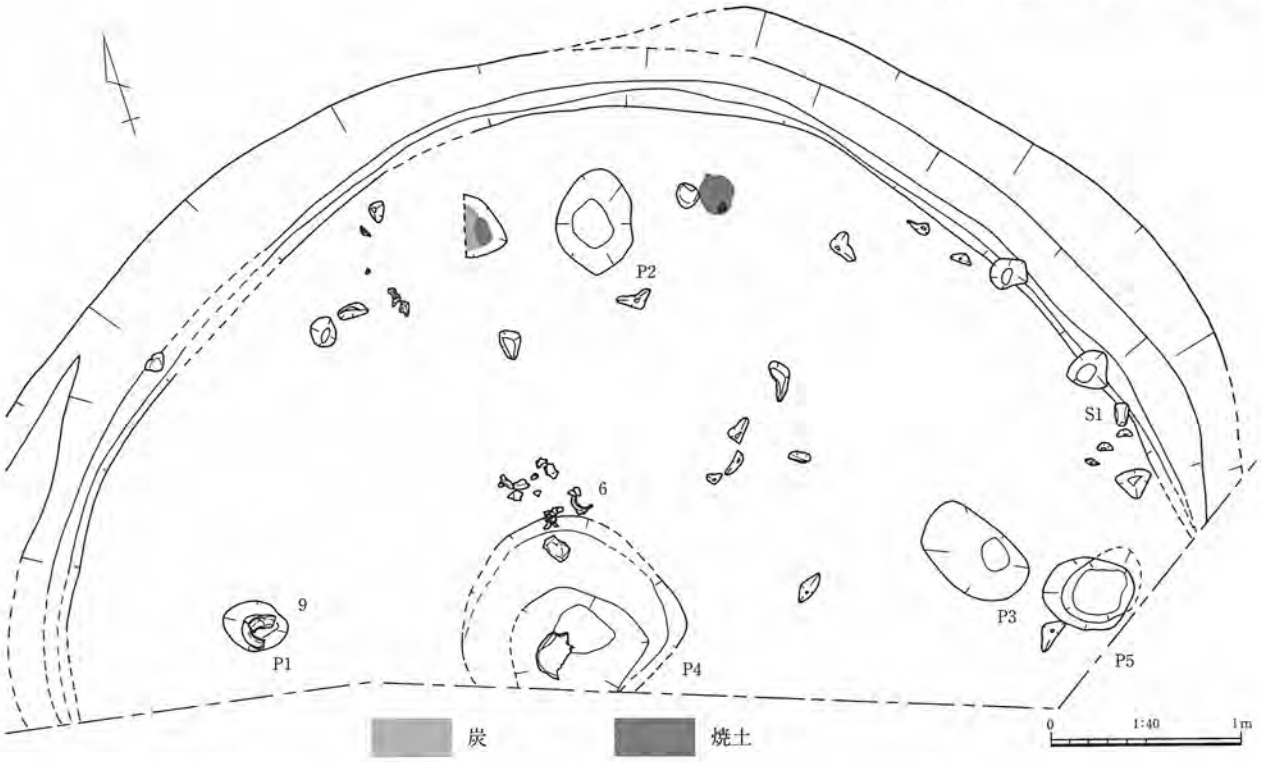
平坦部中央やや北よりのＤ５・６、Ｅ５・６グリッドで検出した。南東隅を土坑９に切られているため、５本しか柱穴を検出していないが、桁行２間、梁行１間の掘立柱建物と推定できる。桁行（長軸）約4.9m、梁行（短軸）約2.9mを測る。主軸は尾根筋とほぼ並行しており、真北から西へ約13°傾く。柱間寸法は桁行が約2.4～2.3m、梁行が約2.8mである。柱穴掘り方は円もしくは楕円形で、直径約64～97cm、深さは平均で26cmを測る。柱穴が浅く、簡易な建物である可能性もある。しかし、簡易な建物と考えるには、柱穴の平面規模と柱間寸法が大きい。したがって、旧地表面が流出している可能性が高い。柱穴の堆積は、掘り方部分を除き、やや淡い褐色土が主体である。柱痕跡を確認できた柱穴はなく、全ての柱は抜き取られたものと判断した。遺物はピット２・３・５から出土している。11はピット５から出土した弥生時代中期の甕底部である。

出土遺物と堆積する土の色から、当該期の遺構と判断した。　（湯川）

４．土坑

土坑１（図21、図版６－１・45－２）

平坦部東の傾斜変換点に近い、Ｅ４グリッドで検出した。平面形態は長方形、底面中央は方形に一段低くなる。断面形は逆台形に近い。３層の堆積を確認した。遺物の大半は、②層からの出土である。



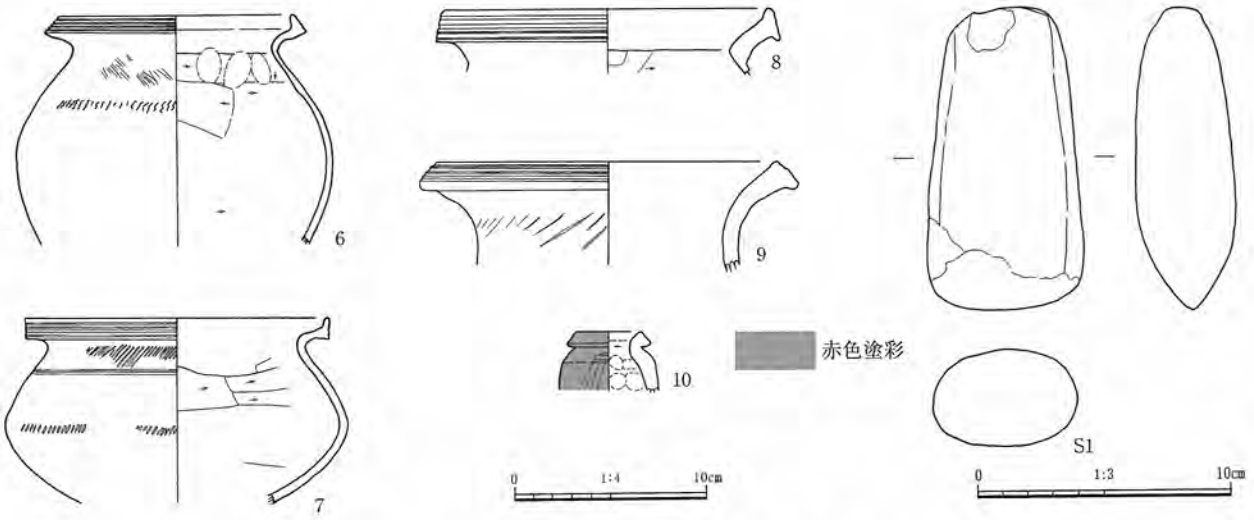


図19　竪穴住居４拡大図および出土遺物

竪穴住居４　掘削痕跡検出状況（北西から）

表３　竪穴住居４ピット計測表

No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm	底面標高 m
P1	35	26	92	56.5
P2	56	40	83	56.6
P3	60	38	79	56.6
P4	120	(110)	31	57.1
P5	55	38	24	57.2

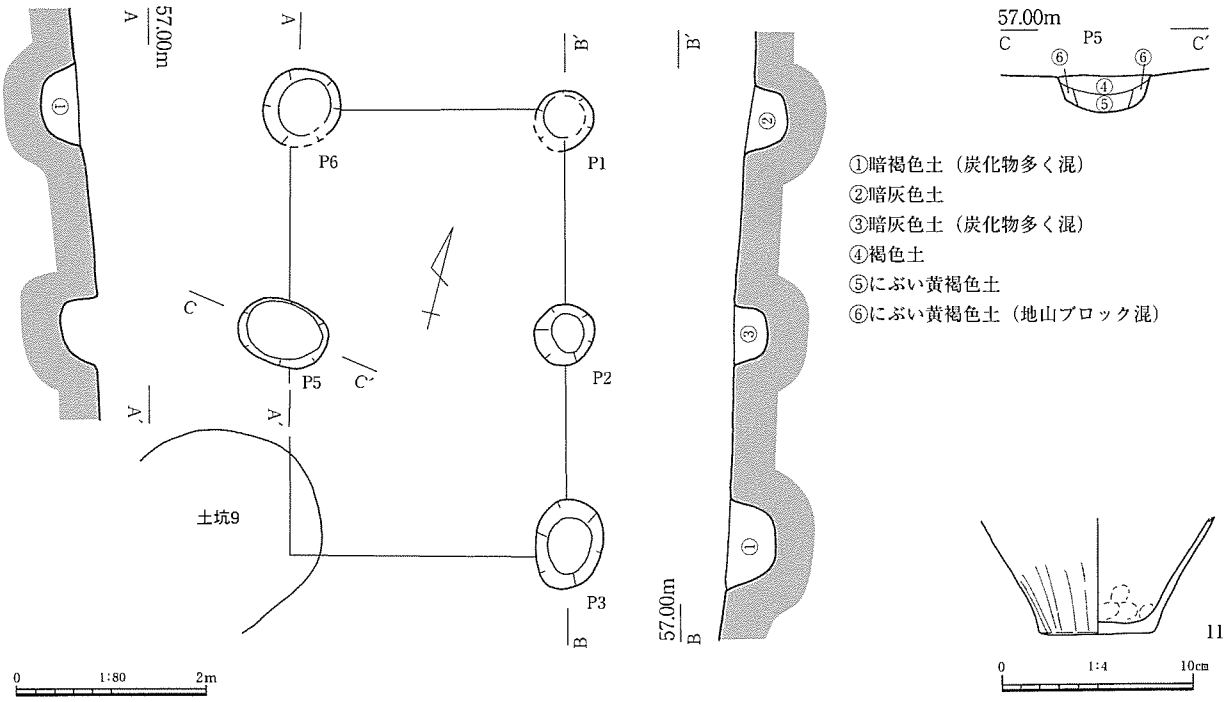


表４　掘立柱建物１ピット計測表

No.	長径cm	短径cm	深さcm	底面標高m	No.	長径cm	短径cm	深さcm	底面標高m
P1	65	61	48	55.9	P4	－	－	－	－
P2	64	62	36	56.1	P5	97	70	42	56.1
P3	97	70	57	56.0	P6	90	80	42	55.9

図20　掘立柱建物１および出土遺物

12～15は、②層からの出土である。12・13は甕で、同一個体の可能性がある。14は壺で、口縁部に凹線をめぐらした後、直交する沈線が施される。頸部には、キザミ目を有する貼付突帯がめぐる。15は、無頸壺で、外面に赤色塗彩が施される。16の土玉とＳ２の砥石は、Ⅱ層相当の可能性がある①層からの出土である。

出土遺物から、弥生時代中期後葉の遺構と考えられる。　（湯川）

土坑２（図21、図版６－２・６－３・45－２・62）

土坑１の北側で検出した。西側は竪穴住居２に切られている。平面形は不整形で、壁は緩やかに立ち上がる。底面は３段に分かれ、北にいくにしたがい深くなる。長楕円の土坑が、３基連結したような形態をとる。褐色土が堆積しており、主に①層から少量の土器が出土している。17は小型の壺で、外面は赤色塗彩され、頸部と胴部には連続刺突がめぐる。混入の可能性がある。

弥生時代中期後葉の竪穴住居２に切られることと、土色から、当該期の遺構と判断した。　（湯川）

土坑３（図22）

平坦部北端、Ｃ６グリッドで検出した。北東辺を、土坑15に切られている。平面形態は方形、断面形態は箱掘りと推定できる。やや淡い色調の褐色土を主体に４層が堆積していた。②層を中心に土器が少量出土しているが、細片のため図化しなかった。

弥生時代終末期に属する竪穴１に切られる土坑15に切られていることと、土色から当該期の遺構と判断した。　（湯川）

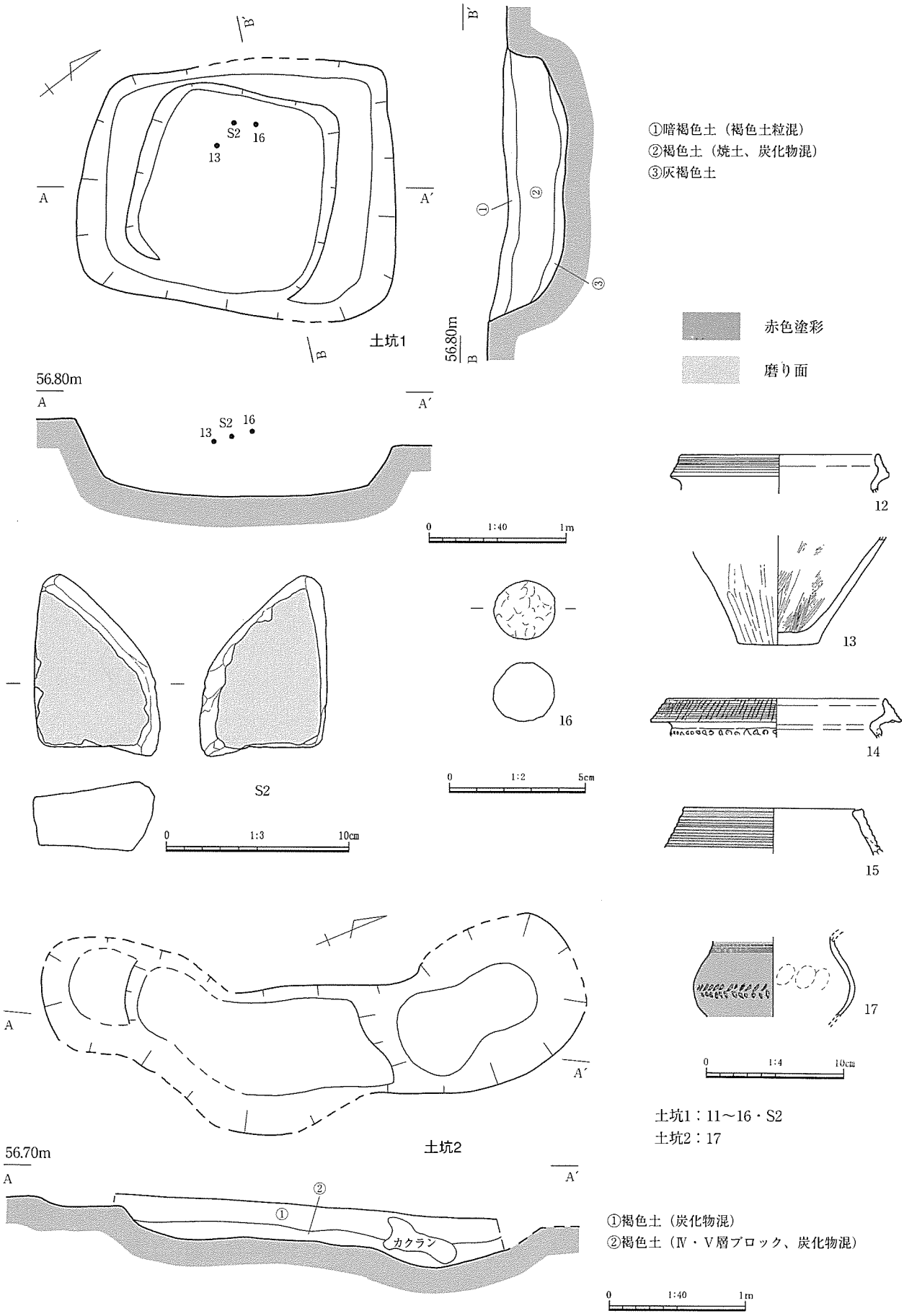


図21　土坑１・２および出土遺物

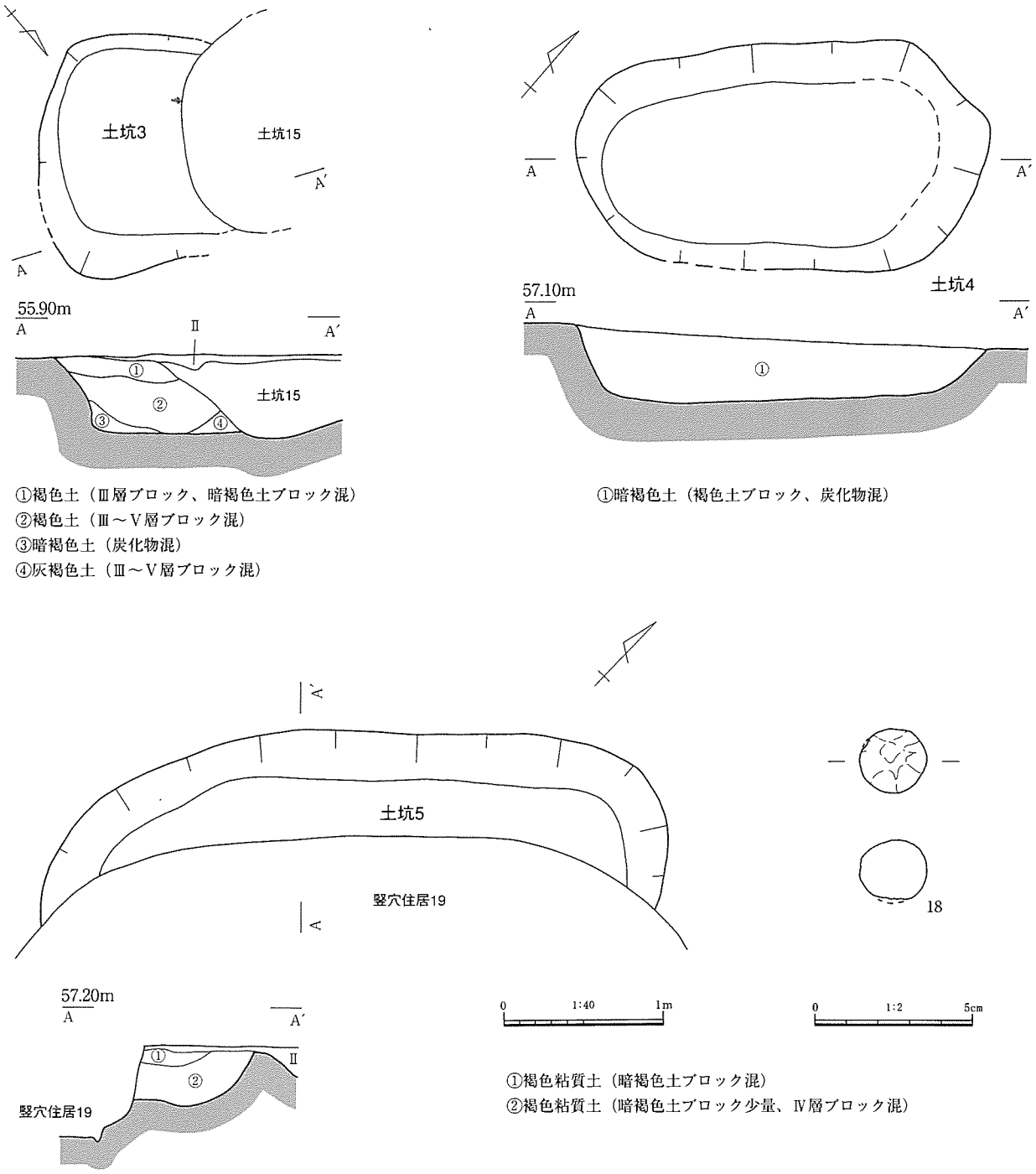


図22　土坑３・４・５および出土遺物

土坑４・５（図22、図版62）

平坦部中央、Ｅ４グリッドで検出した。両土坑は、近接しており、長軸方向は尾根筋と直交方向である。土坑５は、竪穴住居19に南半を切られているため、形態等は残存部からの推定である。平面形は長楕円形で、壁は緩やかに立ち上がる。褐色土が堆積しており、土坑４は１層、土坑５は２層に分層した。遺物は、両土坑とも土器が少量出土している。18は土玉で、土坑５からの出土である。

両遺構とも、当該期に特徴的な色調の土が堆積していることから、当該期の遺構と判断した。

（湯川）

第３節　弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉の調査

１．概要

当該期の遺構は、Ⅱ層直下のⅢ面と、東西斜面部の暗褐色流土直下で検出した。台地上の平坦部では、調査区の全面に、多くの遺構を確認している。斜面部では、東側の上半部に多く分布しており、西側の斜面上端にも少数分布している。この時期の特徴として、遺構量の多さと、遺構内に堆積する土がやや暗い褐色を呈するものが多いことがあげられる。

検出した遺構数は、竪穴住居13棟（焼失住居２棟含む）、竪穴３基、掘立柱建物５棟、テラス10基、土坑16基、溝２条である。弥生時代後期後葉に属するのは、溝１。弥生時代終末期に属するのが、竪穴住居５・６・８・９・12・15、竪穴１、テラス１・４・10、土坑19・20である。古墳時代前期前葉に属するのは、竪穴住居10・13・14、テラス７、土坑19・20である。その他の遺構は、詳細な時期比

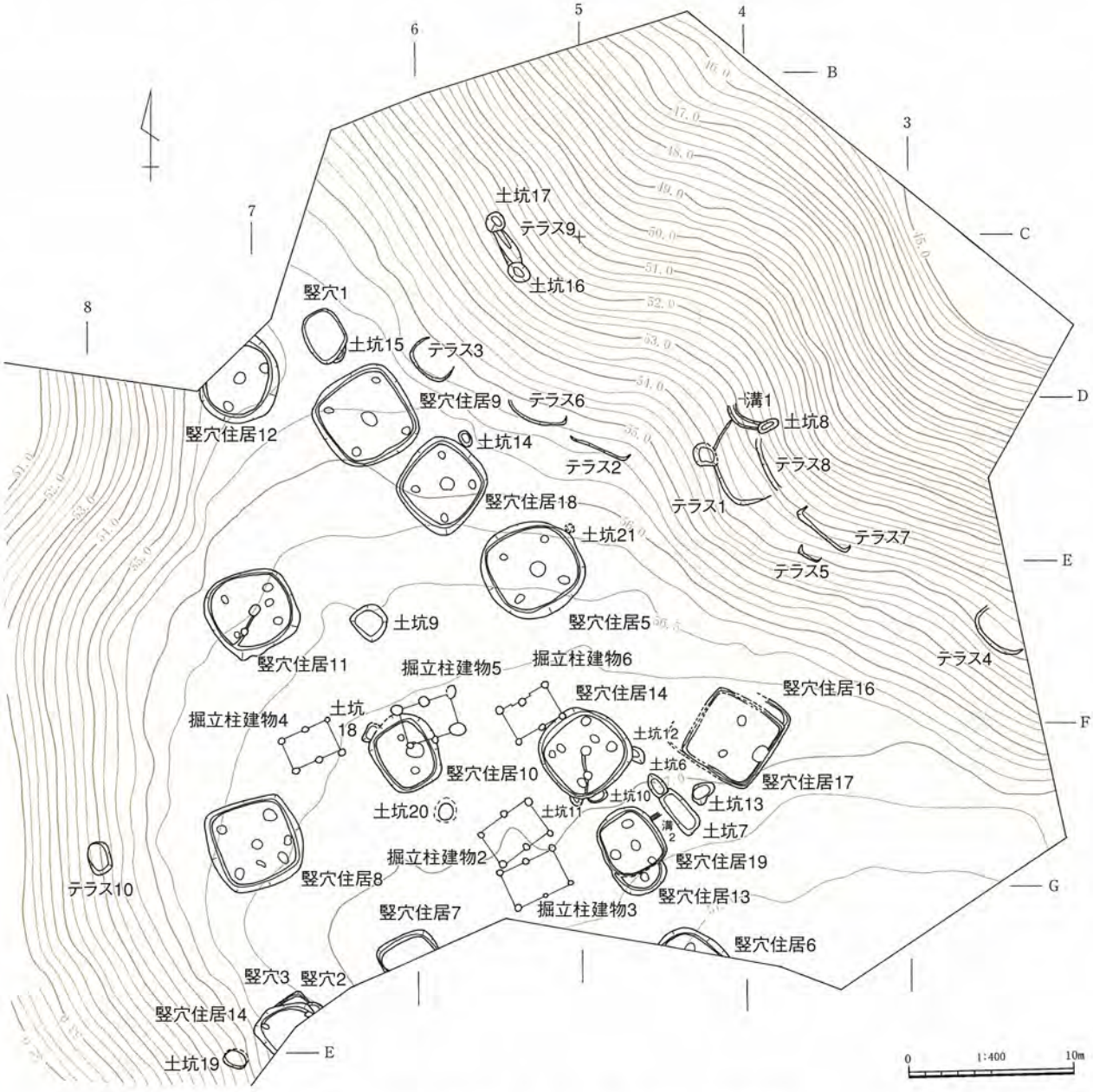
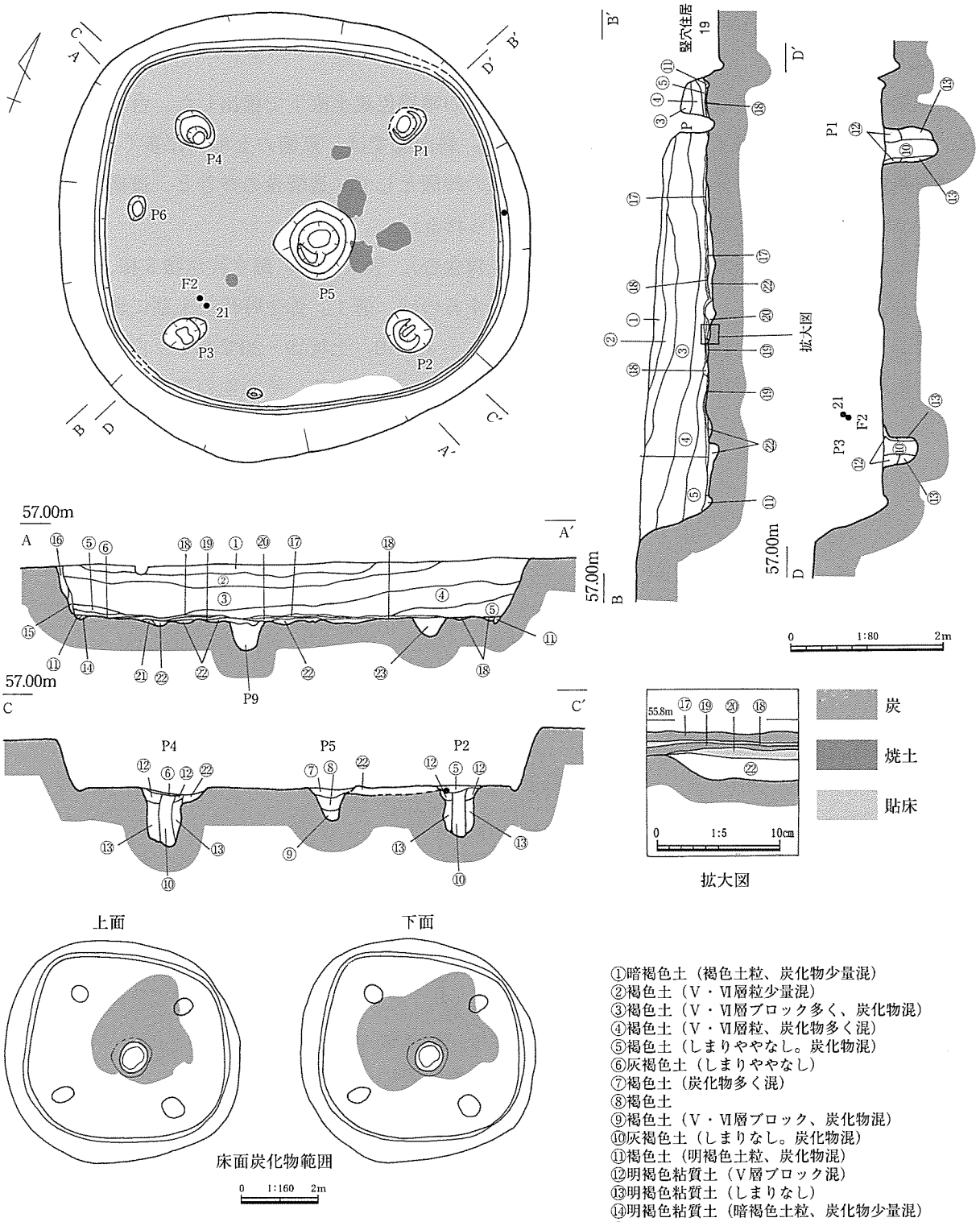


図23　弥生時代後期～古墳時代前期遺構配置図



①暗褐色土（褐色土粒、炭化物少量混）
②褐色土（Ⅴ・Ⅵ層粒少量混）
③褐色土（Ⅴ・Ⅵ層ブロック多く、炭化物混）
④褐色土（Ⅴ・Ⅵ層粒、炭化物多く混）
⑤褐色土（しまりややなし。炭化物混）
⑥灰褐色土（しまりややなし）
⑦褐色土（炭化物多く混）
⑧褐色土
⑨褐色土（Ⅴ・Ⅵ層ブロック、炭化物混）
⑩灰褐色土（しまりなし。炭化物混）
⑪褐色土（明褐色土粒、炭化物混）
⑫明褐色粘質土（Ⅴ層ブロック混）
⑬明褐色粘質土（しまりなし）
⑭明褐色粘質土（暗褐色土粒、炭化物少量混）
⑮暗褐色土
⑯褐色土（明褐色土ブロック混）
⑰炭化物層
⑱明褐色土（しまりあり。Ⅳ～Ⅵ層粒主体。貼床）
⑲炭化物層
⑳明褐色土（しまりあり。Ⅳ～Ⅵ層粒主体。貼床）
㉑褐色土（しまりなし。Ⅴ・Ⅵ層ブロック混）
㉒明褐色土（Ⅴ層ブロック多く混）
㉓明褐色土（暗褐色土粒少量混）
㉔灰褐色土（しまりなし。Ⅳ・Ⅴ層ブロック多く混）
㉕明褐色土（Ⅴ層ブロック混）
㉖明褐色土（しまりややなし）

表５　竪穴住居５ピット計測表（１）

No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm	底面標高 m
P1	50	30	72	55.0
P2	60	48	68	55.1
P3	61	37	47	55.3
P4	56	45	75	55.0
P5	58	49	45	55.3
P6	33	25	11	55.6

図24　竪穴住居５

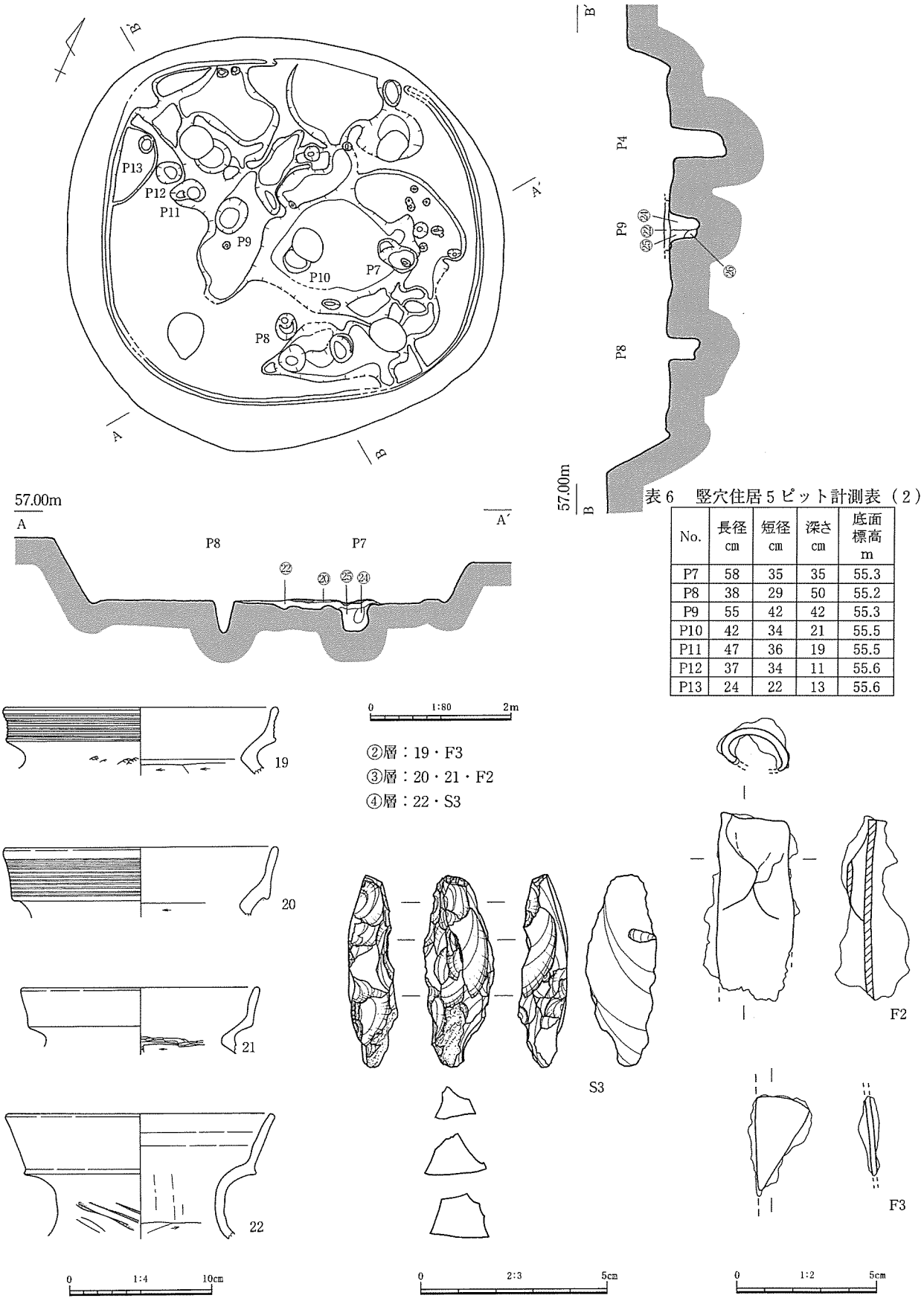


表６　竪穴住居５ピット計測表（２）

No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm	底面標高 m
P7	58	35	35	55.3
P8	38	29	50	55.2
P9	55	42	42	55.3
P10	42	34	21	55.5
P11	47	36	19	55.5
P12	37	34	11	55.6
P13	24	22	13	55.6

図25　竪穴住居５貼床除去後および出土遺物

定を行えないが、弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉の時期幅に収まるものと判断した。

この時期の遺構量は、他時期のそれと比較して多い。特に、弥生時代終末期前葉～古墳時代前期前葉においては、尾根の突端部という立地条件を考えた場合、遺構量の多さが際立つ。また、竪穴住居をはじめとする遺構は、弥生時代終末期前葉～古墳時代前期前葉にかけての各小期で連続して営まれている。したがって、調査地内の集落としての利用は、この時期最も活発であり、連続したものと捉えることができる。集落の時間的な連続性を重視し、本節では弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉にかけてをまとめて報告する。　（湯川）

２．竪穴住居

竪穴住居５（図24・25、図版６－４～７・７－１・45－３・62－２・64－１、表５・６）

平坦部東側、傾斜変換点付近のＤ・Ｅ５グリッドで検出した。竪穴住居２を切り、竪穴住居20に北東辺を切られている。平面形は円に近い隅丸方形を呈する。長軸5.5m、短軸4.9m、床面積22.5㎡、床面の標高は55.8mを測る。床面は、ほぼ全面に貼り床が施されており、ピット６基と周壁溝を検出した。ピット１～４では、径約20cmの柱痕跡を確認しており、配置と合わせ主柱穴と判断した。ピット５はいわゆる中央ピットで、高さ約２cmの周堤がめぐる。床面には、被熱により焼土化した部分を５箇所確認した。特に、ピット５東側の３ヵ所は焼土化部分の厚さが３～５cmと厚く、高熱を受けた地床炉と考えられる。床面直上の中央部には、薄い２枚の炭化物層が、⑱層をはさんで広がっていた。前述の焼土面はいずれも、この層の下からの検出である。⑱層は地山質であることから、貼り床や床面の補修痕跡の可能性を指摘しておく。貼り床（⑳層）除去後、掘り方と考えられる不整形の落ち込みを検出した。底面には、長径10～20cm前後の長楕円形を呈する落ち込みがあり、掘削痕跡と考えている。

掘り方堆積土と考えられる㉒層の除去後、前述の主柱穴とは別に７基のピットを検出した。ピット７・８・９は柱痕跡を有し、配置から主柱穴の可能性がある。ピット10は、ピット７～９のほぼ中心に位置し、中央ピットの可能性がある。新しい段階の住居を構築するに際し削平されたためか、ピット７～10に伴う周壁溝は検出できなかった。これらピットの存在から、建て替えもしくは２つの竪穴

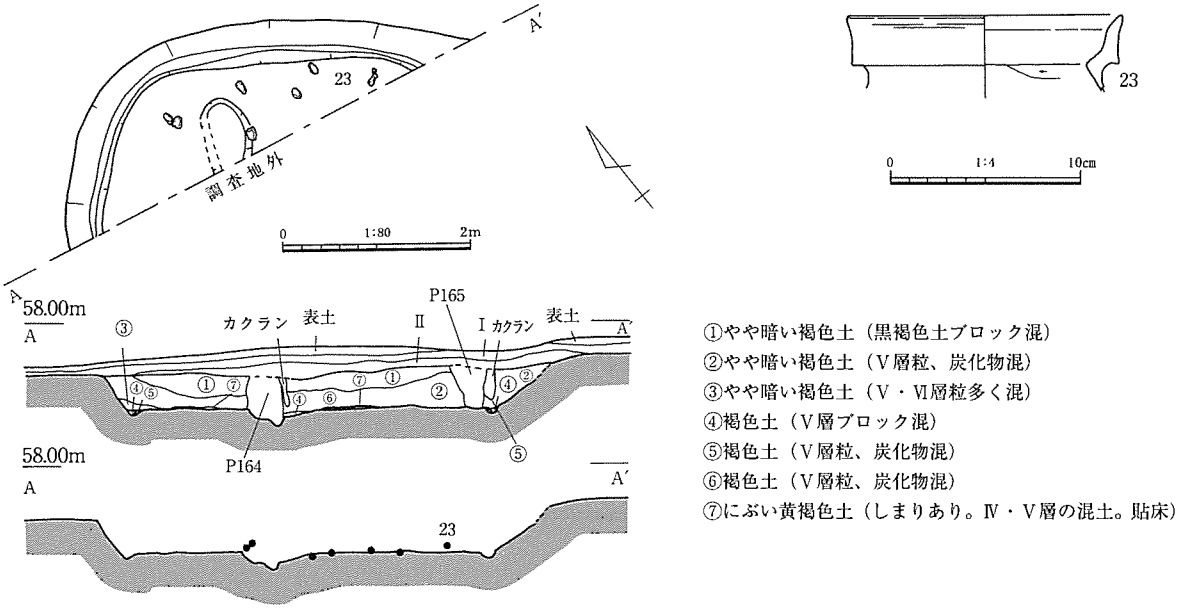


図26　竪穴住居６および出土遺物

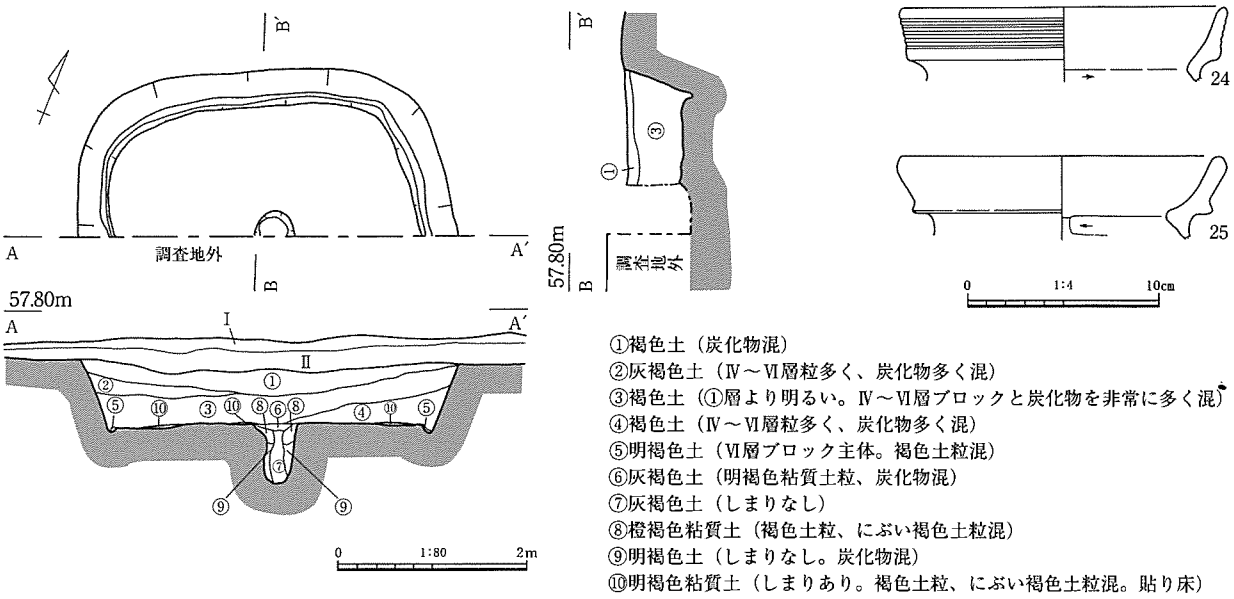


図27　竪穴住居７および出土遺物

住居が重なって構築されていると考えている。

竪穴部には、Ⅱ層相当と想定した①層を除き、褐色系の土が堆積していた。③・④層は、地山質土をブロック・粒状に多く含んでおり南東側が高い。南東側からの人為的な堆積と考えている。⑮・⑯層は、壁板裏込め土の可能性がある。周壁溝内から敲打痕を有する礫石器が出土しているものの、床面直上出土遺物はない。出土遺物は少量で、ほとんどは②・③・④層からの出土である。

19～21は弥生時代後期後葉～終末期前葉の甕、22は弥生時代終末期後葉の壺である。Ｓ３は、黒曜石で漆黒を呈し、不純物を少量含む。風化が著しく、一部には後世の剥離面（リングを図化していない部分）もある。一部に原礫面が残る横長の剥片を素材としている。稜線上に調整があり、先端にも細かい調整が施される。後期旧石器後半の角錐状石器と考えられる。Ｆ２は小型の袋状鉄斧である。

出土遺物と形態から、弥生時代終末期の竪穴住居と考えている。（湯川）

竪穴住居６（図26、図版７－２・８－１・45－４）

調査地平坦部南端、Ｇ４グリッドで検出した。大半が調査地外へと延びており、正確な平面形態は不明である。調査部分から、隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈すると推測している。検出面からの深さは43cm、床面の標高は57.0ｍを測る。床面には部分的に貼り床が施されており、周壁溝と性格不明の落ち込みを検出した。周溝には、壁板の抜き取り痕跡（④層）と裏込め土（⑤層）と考えられる堆積を確認している。竪穴部には、やや暗い褐色を呈する土が堆積しており、３層に分層した。少量の遺物が出土している。床面直上からは、円礫６個と弥生時代終末期後葉の甕（23）が出土した。

床面直上出土遺物から、弥生時代終末期の竪穴住居と考えている。（湯川）

竪穴住居７（図27、図版８－２・45－４）

調査地平坦部南端、Ｇ６グリッドで検出した。竪穴住居３を切って構築されている。大半が調査地外へと延びており、正確な平面形態は不明である。調査部分から、隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈すると推測している。壁は直線的に立ち上がる。東西方向の軸長は3.4ｍ、検出面からの深さは76cm、床面の標高は56.6ｍを測る。床面には部分的に貼り床が施されており、周壁溝とピット１基を検出した。このピットは、想定される竪穴部の中心軸上に位置し、径約15cmの柱痕跡を有していた。このこ

①暗褐色粘質土（黒褐色土ブロック少量混）
②褐色粘質土（黄褐色土ブロック少量混）
③褐色粘質土（暗褐色土ブロック混）
④褐色粘質土（Ⅳ・Ⅵ層ブロック混）
⑤褐色粘質土（Ⅳ・Ⅵ層ブロック多量混）
⑥褐色粘質土（Ⅳ・Ⅵ層粒多量混）
⑦赤橙色粘質土（Ⅳ層粒少量混）
⑧暗褐色粘質土（Ⅳ層ブロック、炭混）
⑨褐灰色粘質土（赤橙色土粒混）
⑩にぶい黄褐色粘質土
⑪にぶい黄褐色粘質土（灰褐色土粒混）
⑫暗褐色土（Ⅴ層ブロック混）
⑬明褐色土（Ⅴ層ブロック多量混）
⑭褐色土（Ⅴ・Ⅵ層ブロック、炭化物混）
⑮明褐色土（炭化物混）
⑯明褐色土（Ⅴ・Ⅵ層再堆積土,貼り床）
⑰暗褐色土（しまりなし。炭化物混）
⑱暗褐色土
（しまりなし。やや粘質。炭化物混）
⑲褐色土
（しまりなし。Ⅴ～Ⅶ層粒、炭化物混）
⑳灰褐色土（Ⅴ・Ⅵ層ブロックを多く混）
㉑暗褐色土（炭化物、焼土、明褐色土粒混）
㉒明褐色土（Ⅵ・Ⅶ層再堆積土）
㉓褐色土（暗褐色土ブロック混）
㉔褐色土（明褐色土粒、炭化物混）
㉕暗褐色土（しまりなし。明褐色土粒混）
㉖褐色土（しまりなし。明褐色土粒多量混）
㉗明褐色土（Ⅴ・Ⅵ層再堆積土）

表７　竪穴住居８ピット計測表

No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm	底面標高 m
P1	80	67	79	55.2
P2	72	61	74	55.7
P3	56	47	69	55.4
P4	52	51	51	55.5
P5	65	56	49	55.6
P6	60	42	16	55.9
P7	25	－	8	56.0
P8	20	－	25	55.8

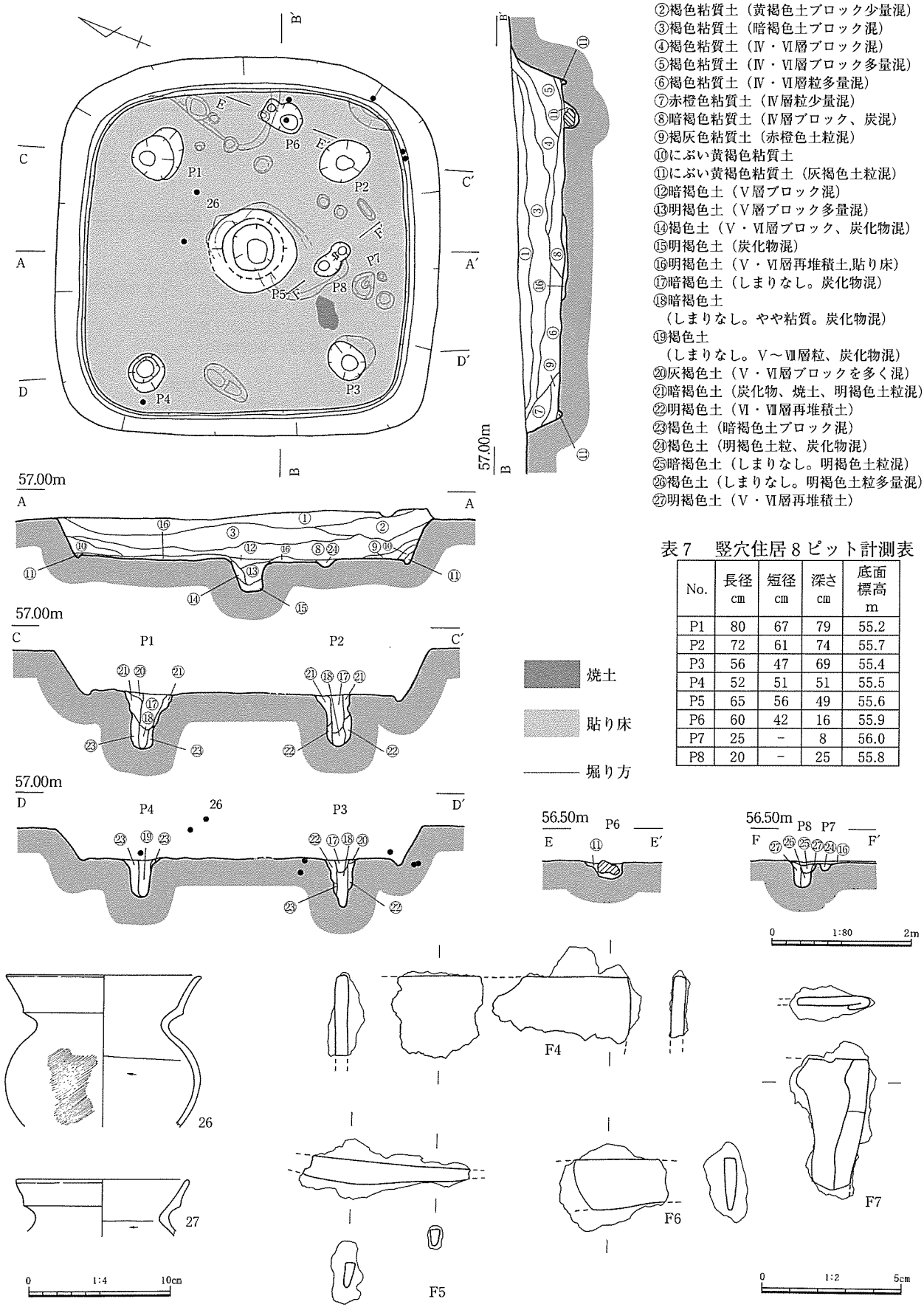


図28　竪穴住居８および出土遺物

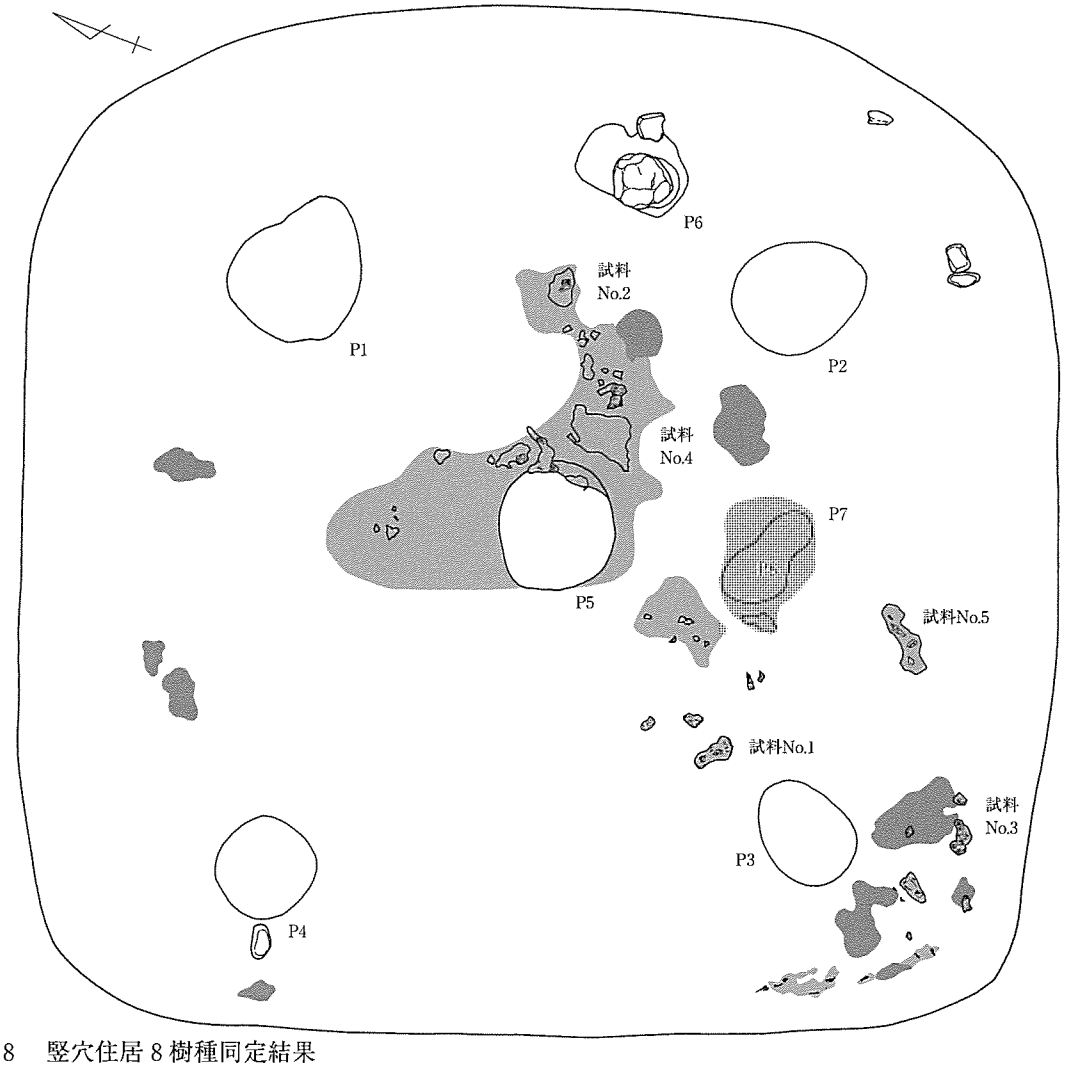


表８　竪穴住居８樹種同定結果

番号	層位	材の種類	樹種
1	床直	カヤ材	イネ科
2	床直	カヤ以外の構造材	スダジイ
3	床直	カヤ材	イネ科
4	床直	カヤ以外の構造材	不明
5	床直	カヤ以外の構造材	ヤマグワ

図29　竪穴住居８焼土・炭化材検出状況

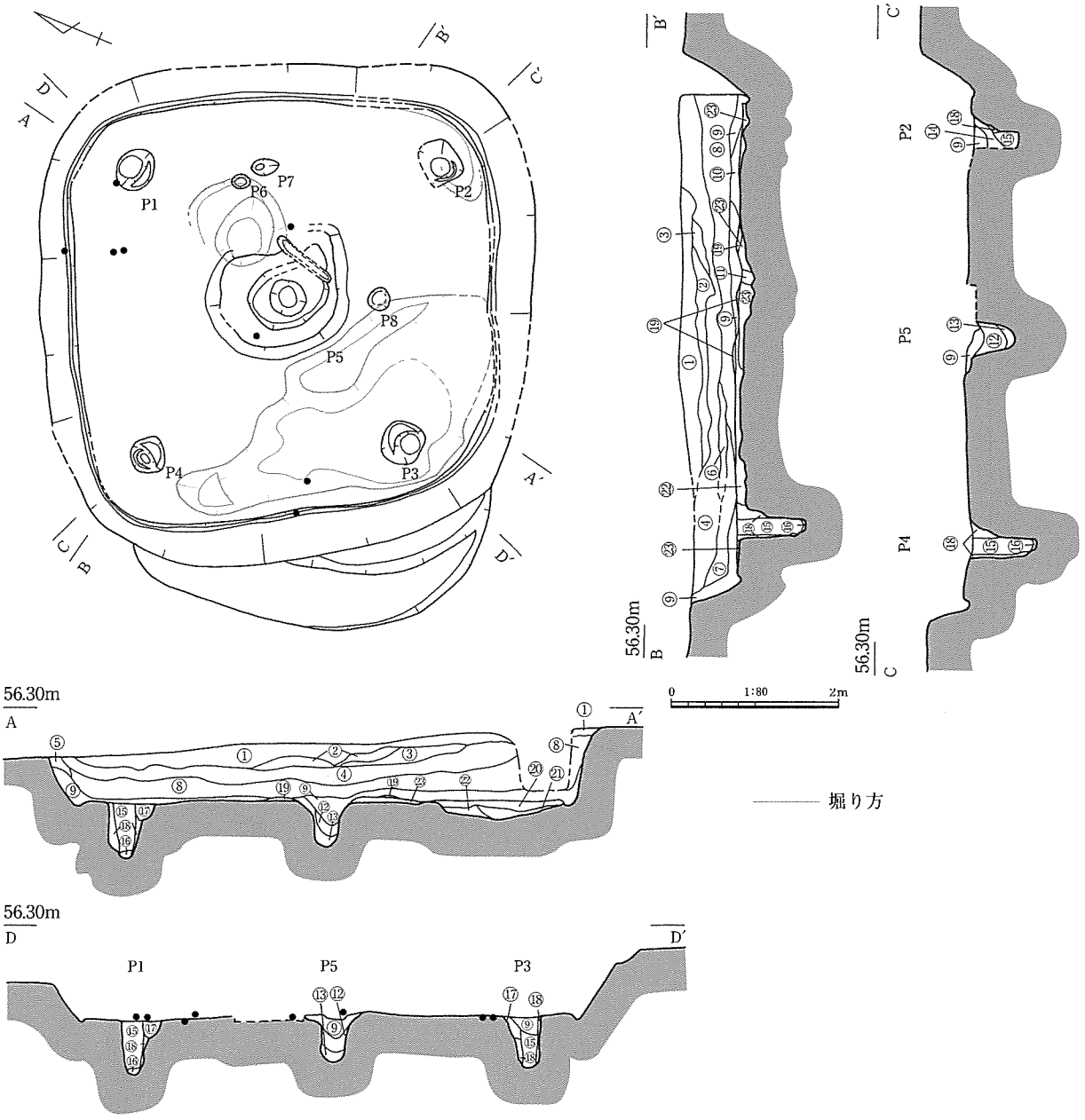
とから、主柱穴の可能性が高い。竪穴部には、褐色系の土が堆積していた。②～④層には地山質土がブロック状に多く含まれており、東側から人為的に埋められたものと判断した。

床面直上で出土した遺物はなく、竪穴部埋土中から少量の遺物が出土している。24・25は、弥生時代終末期前葉の甕である。遺物の出土量は少ないものの、時期の推定できる遺物は弥生時代終末期の物に限られており、弥生時代終末期の竪穴住居と考えている。（湯川）

竪穴住居８（図28・29、図版８－４・８－５・９・45－４・45－５・63、表７・８）

平坦部西側、Ｆ６・７グリッドで検出した。平面形は隅丸方形を呈し、長軸4.9m、短軸4.8m、床面積21.3㎡、床面の標高56.1mを測る。最下層及び床面直上から、多くの炭化材と焼土を検出しており、焼失住居と判断した。

床面にはほぼ全面にわたって貼り床が施されており、周壁溝とピット８基を検出した。ピット１～４は、径約20cmの柱痕跡を持ち、配置から主柱穴と判断した。ピット５は、いわゆる中央ピットで、



①黒褐色土（しまりなし、粘性なし。Ⅳ～Ⅵ層粒、炭化物混）
②黄褐色土（しまりなし、粘性なし。Ⅳ～Ⅵ層粒、炭化物混）
③橙褐色土（しまりややあり、粘性ややあり）
④黄褐色土（しまりなし、粘性なし。Ⅳ～Ⅵ層粒、炭化物混）
⑤暗黄橙褐色（しまりなし、粘性なし。黒褐色土混）
⑥暗黄褐色土（しまりややあり、粘性なし）
⑦黄橙色粘質土（しまりややあり、粘性ややあり。Ⅵ層粒、炭化物混）
⑧黄褐色粘質土（しまりややあり、粘性ややあり。Ⅳ～Ⅵ層粒混）
⑨褐色土（Ⅳ・Ⅴ層粒混）
⑩橙褐色土（しまりややあり、粘性ややあり）
⑪黄褐色土（Ⅳ～Ⅵ層ブロック主体。炭化物混）
⑫褐色土（Ⅳ～Ⅵ層粒、焼土、炭化物多く混）
⑬炭化物層（褐色土ブロック多く混）
⑭炭化物層（褐色土粒、焼土多く混）
⑮黄褐色土（褐色土粒、炭化物少量混）
⑯炭化物層（褐色土粒、焼土多く混）
⑰黄褐色土（Ⅳ～Ⅵ層粒、炭化物多く混）
⑱褐色土
⑲明褐色粘質土
⑳明褐色粘質土（Ⅴ層ブロック多く混。貼り床）
㉑明褐色粘質土（しまりなし。Ⅴ層ブロック多く混。貼り床）
㉒明褐色粘質土（硬化。炭化物混。貼り床）
㉓明褐色粘質土（炭化物少量混。貼り床）

表９　竪穴住居９ピット計測表

No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm	底面標高 m
P1	50	42	64	54.5
P2	52	43	53	54.6
P3	52	48	62	54.6
P4	48	44	80	54.4
P5	42	41	55	54.6
P6	23	19	11	55.1
P7	31	18	12	55.1
P8	26	24	5	55.2

図30　竪穴住居９

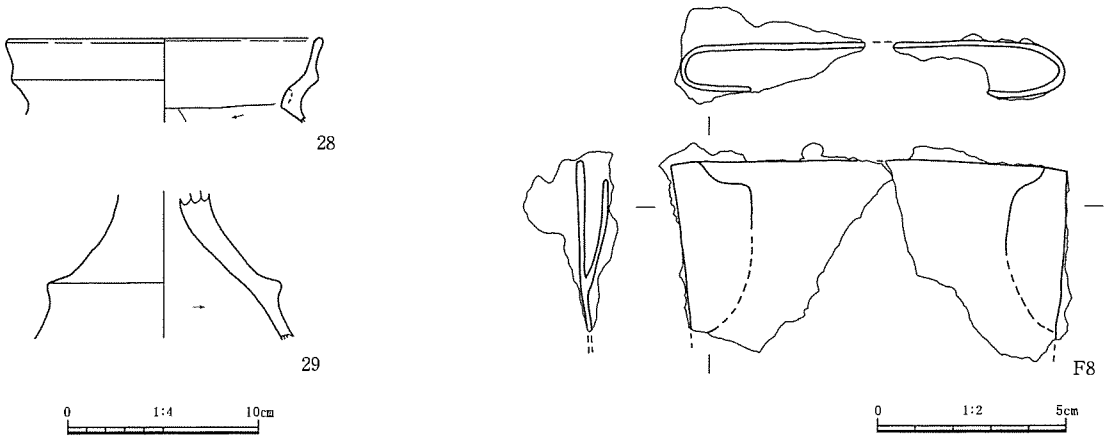


図31　竪穴住居９出土遺物

高さ約３cmの周提がめぐっている。ピット６からは、径約25cmの安山岩礫が出土しており、地山質の土が充填されていた。ピット８は、柱痕跡を持つ。ピット３・５間には床面が２～３cmの厚さで焼土化する範囲があり、地床炉と推定している。貼り床（⑯層）除去後、不整形な落ち込みを検出した。底面に凹凸があり、掘り方の可能性がある。

調査工程上精度の高い検出はできず、図化できなかった情報もあるが、最下層及び床面直上から、多くの炭化材と焼土を検出した。最下層中の焼土・炭化材のあり方の詳細は不明であるが、⑧・⑨層に多く含まれていた。炭化材はカヤ材が多く、焼土は粒･小ブロック状に含まれていた。特に壁面際では、屋根材となるカヤ材と焼土が多く出土した。床面直上で検出した炭化材は、原形を想定しうるものは少なく、炭化物の薄い広がりとして認識した場合が多い。焼土は、ピット３・４・５の外側を取り巻くように検出した。

竪穴部の堆積は、上層の①層、下層の②～⑥層、最下層の⑦～⑩層に大別できる。下層にはブロック土が多く含まれ、人為的な埋め戻しによる堆積と考えられる。最下層は、焼土・炭化物を多く含み土屋根の可能性がある。最下層を土屋根とするならば、ピット３・４・５に囲まれた最下層が存在しない部分は、土を葺かない屋根中央部分と推定でき、焼失に際し南西側に傾いて倒壊した可能性があろう。⑦・⑩層の堆積が南東側で厚いのも、南西側へ倒壊した傍証になろう。前述した床面直上の焼土の広がりも、これに対応する可能性がある。

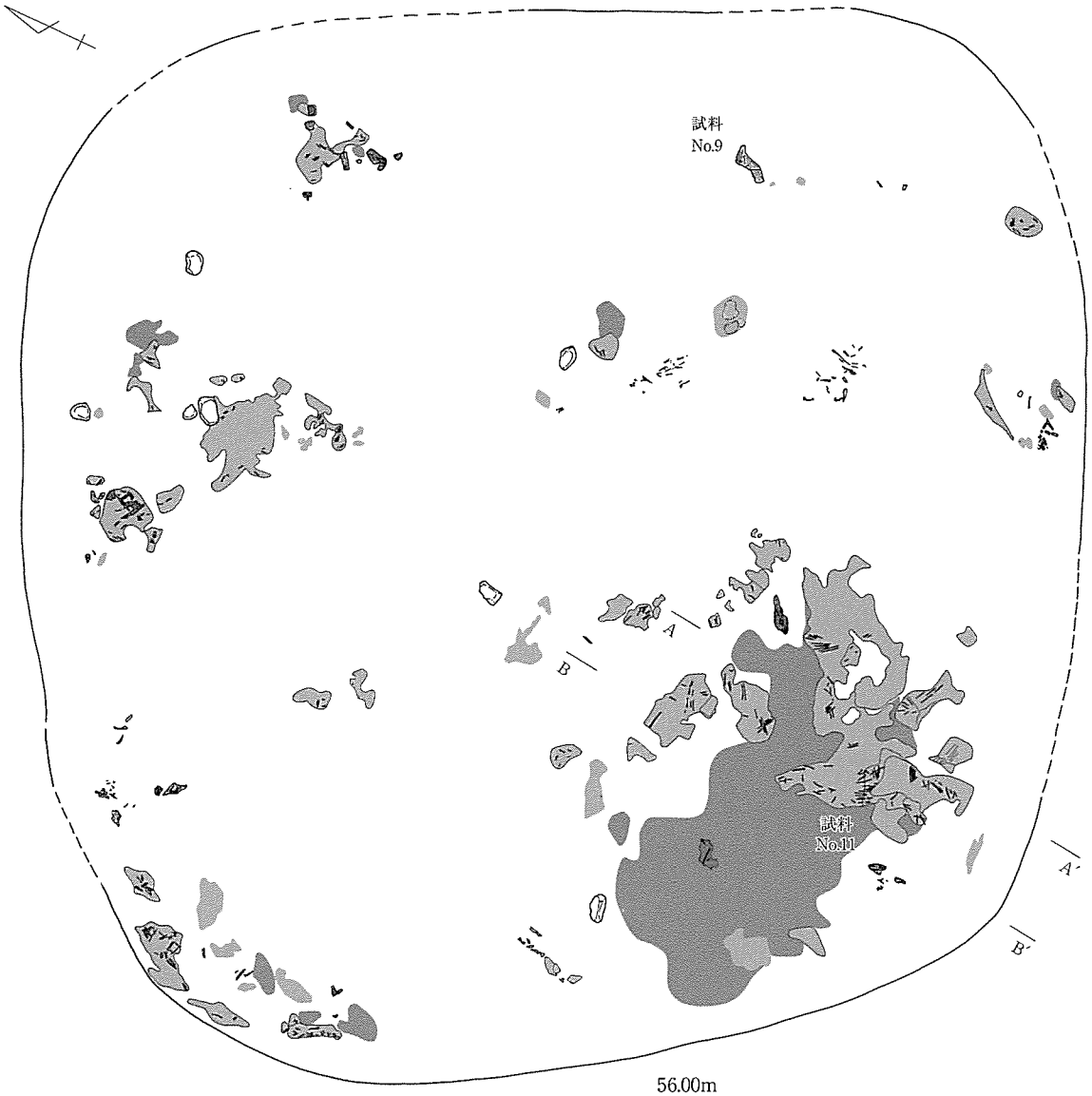
出土遺物は少量で、床面直上からは少量の礫石器が出土したのみである。そのほかは、大半が上・下層からの出土である。26は古墳時代前期前葉の小型の甕。27は弥生時代終末期の甕である。Ｆ４は鋤の可能性がある。Ｆ５は刀子。Ｆ６は鎌、Ｆ７は鋤の可能性がある。

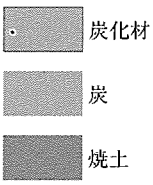
出土遺物と形態から、本住居は弥生時代終末期と考えている。　（湯川）

竪穴住居９（図30～33、図版10～13・46－１・46－２・63、表９・10）

調査区平坦部北東端、Ｃ・Ｄ６グリッドで検出した。南東には、竪穴住居18が隣接する。平面形態は隅丸方形を呈し、長軸・短軸ともに約5.1m、床面積24.1㎡、床面の標高55.2mを測る。最下層及び床面直上から、多くの炭化材と焼土を検出しており、焼失住居と判断した。

床面にはほぼ全面にわたって貼り床が施されており、周壁溝とピット８基を検出した。ピット１～４は、径約21～24cmの柱痕跡を持ち、配置から主柱穴と判断した。ピット５は、いわゆる中央ピットで、高さ１～３cmの周提がめぐっている。周堤の西側は高さ約１cmと低く、この部分を切って幅約６





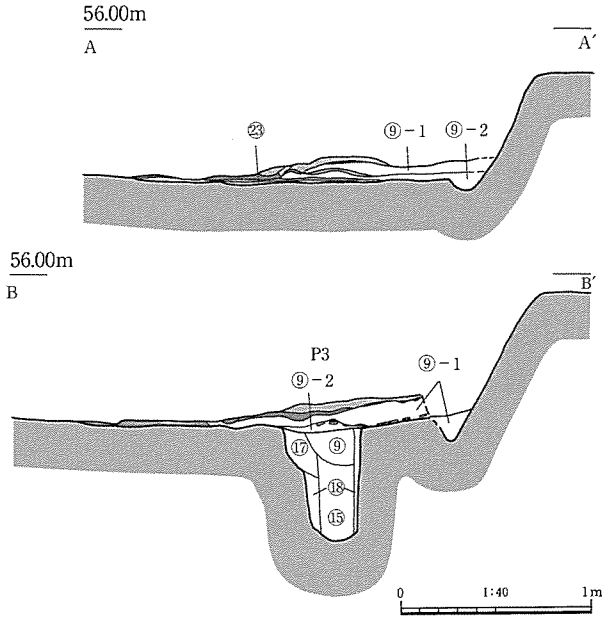


表10　竪穴住居９樹種同定結果

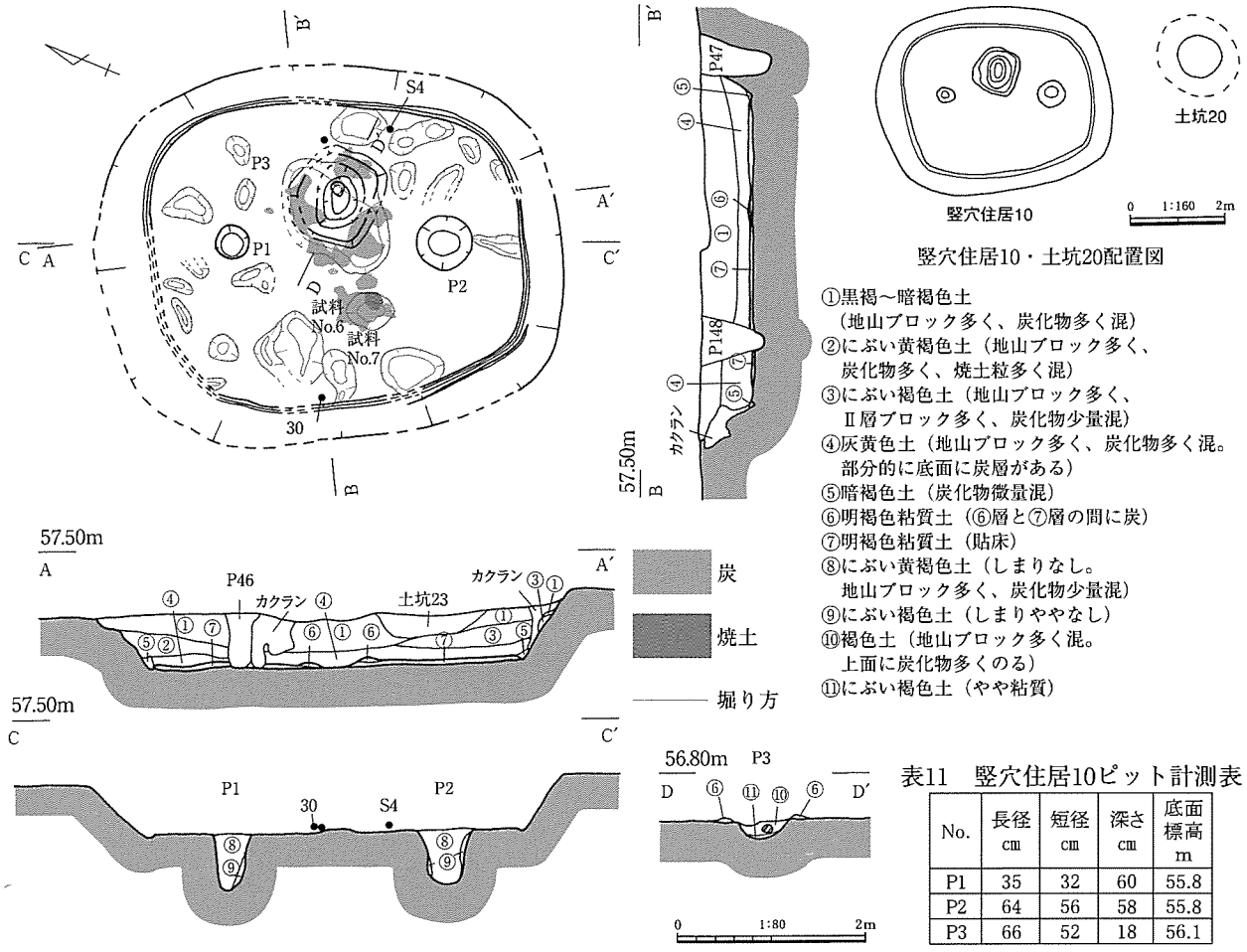
番号	層位	材の種類	樹種
9	下層	カヤ材	イネ科
10	床直	カヤ材	イネ科
11	下層	カヤ材	イネ科
12	床直	カヤ以外の構造材	クスノキ科
13	床直	垂木	コナラ属アカガシ亜属
14	床直	カヤ以外の構造材	イネ科

図32　竪穴住居９焼土・炭化材検出状況（上面）

図33　竪穴住居９焼土・炭化材検出状況（下面）

試料No.10炭化材検出状況（北から）

試料No.13炭化材検出状況（西から）



①黒褐～暗褐色土
（地山ブロック多く、炭化物多く混）
②にぶい黄褐色土（地山ブロック多く、
炭化物多く、焼土粒多く混）
③にぶい褐色土（地山ブロック多く、
Ⅱ層ブロック多く、炭化物少量混）
④灰黄色土（地山ブロック多く、炭化物多く混。
部分的に底面に炭層がある）
⑤暗褐色土（炭化物微量混）
⑥明褐色粘質土（⑥層と⑦層の間に炭）
⑦明褐色粘質土（貼床）
⑧にぶい黄褐色土（しまりなし。
地山ブロック多く、炭化物少量混）
⑨にぶい褐色土（しまりややなし）
⑩褐色土（地山ブロック多く混。
上面に炭化物多くのる）
⑪にぶい褐色土（やや粘質）

表11　竪穴住居10ピット計測表

No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm	底面標高 m
P1	35	32	60	55.8
P2	64	56	58	55.8
P3	66	52	18	56.1

表12　竪穴住居10樹種同定結果

番号	層位	材の種類	樹種
6	床直	柱材？梁材？	クリ
7	床直	柱材？梁材？	クリ

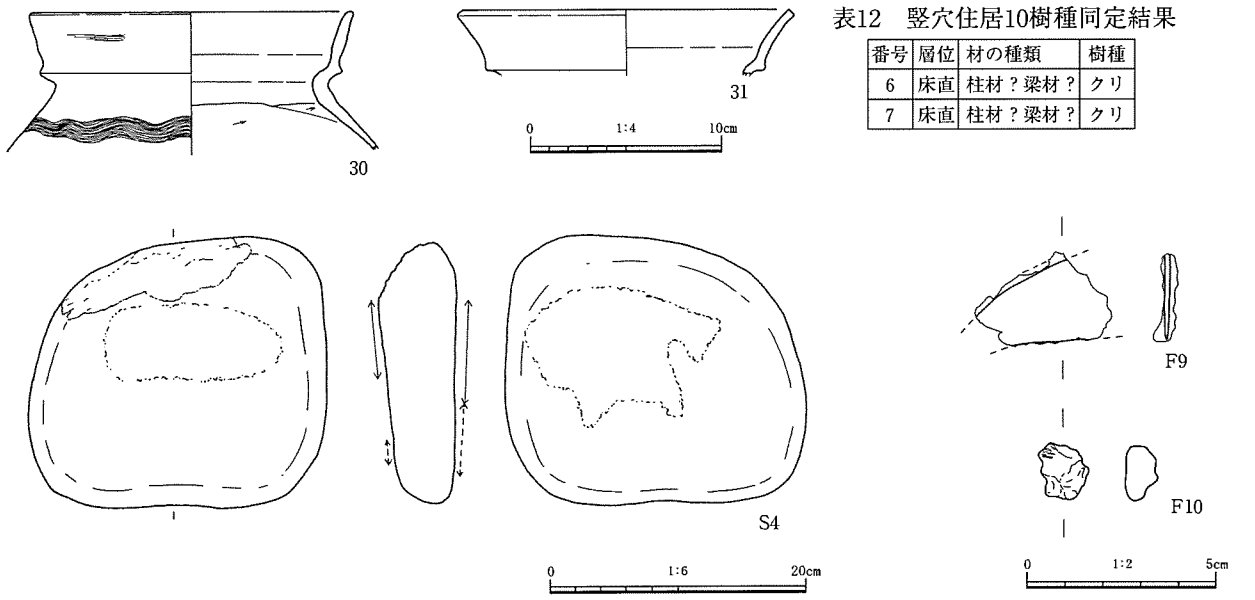


図34　竪穴住居10および床面直上出土遺物

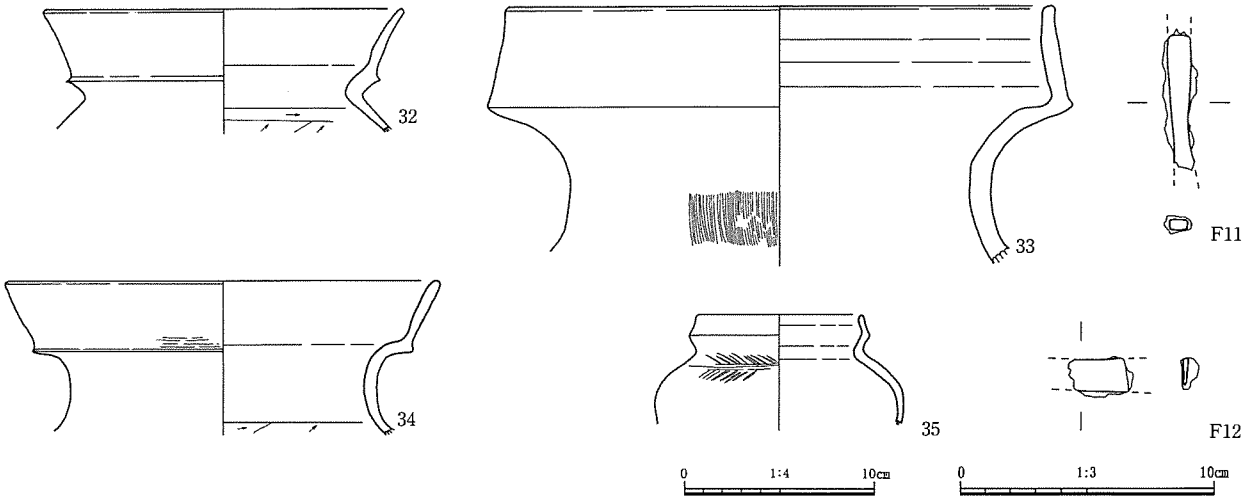


図35　竪穴住居10出土遺物①層

cm、深さ13cm、長さ82cmの溝を検出した。ピット５との距離は、約20cmである。貼り床（⑳・23層）除去後、明褐色を呈する地山質土が堆積する不整形な落ち込みを検出した。竪穴部南西のものは、23cmと最も深く、長軸も約4.3mを測る。住居壁面に沿っており、本遺構に伴うものと判断した。規模が大きく、いわゆる湿気抜き土坑など、掘り方以外の可能性を想定しておきたい。

竪穴部の堆積は、黒褐色を呈する上層（①層）と、褐色から黄褐色を呈する中層（②～⑧層）、褐色・橙褐色を呈し炭化物と焼土を多く含む下層（⑨・⑩層）に大別した。上層は、土色からⅡ層相当と考えられる。中層は、地山質土を粒状に含む層が多い。特に⑧層は、地山質土粒が多く、南東側が厚い。本住居の南東1.2mには、弥生時代終末期と考えられ、形態も類似する竪穴住居18が位置する。この掘削土が、堆積した可能性があろう。下層には、焼土と炭化物が多く含まれていた。特に上面と下面では、炭化物と焼土が層状に検出された。下層は、ピット５より西と、壁面より60～80cmまでの間に途切れる部分がある（Ｂ－Ｂ′）。壁面部分では、壁面の傾斜に沿って堆積しており、単純な自然堆積、流入とは考えにくい。上・下面の層状を呈する炭化物中の炭化材は、樹種同定の結果イネ科と判定され、屋根に葺かれたカヤ材と判断した。したがって、下層は屋根に葺かれていた土が堆積したものである可能性が高い。本住居は、カヤ材の上に土を葺き、さらにその上にカヤ材を葺いた屋根構造を有していたと推定している。

下層の上面炭化材は、ほとんどがカヤ材である。方向にはばらつきがあり、規則性を見出すことはできなかった。カヤ以外の構造材は極少量検出したが、遺存状況が悪く繊維の方向がわかる程度の小片であった。下層上面の焼土は、平面の分布に大きな粗密があり、竪穴部南隅に集中していた。この部分では、炭化物と焼土の層を３層確認しており（図32　Ａ－Ａ′）、他の部分より下層の厚さが２倍ある。崩落した土屋根の上に、別の部分の屋根が崩落した可能性があろう。崩落した屋根土の上に葺かれていたカヤ材と、後から崩落した土屋根下に葺かれていたカヤ材が燃料となり、後から崩落した土屋根に覆われ、蒸し焼き状態となったため、土屋根の焼土化が顕著であった可能性がある。その他の焼土は、ピット５西側の下層が途切れる部分を囲むように分布していた。この部分は、屋根中央が崩落した部分の可能性がある。下層下面の炭化物には、カヤ材とそれ以外の構造材がある。カヤ材の大半は方向に規則性を見出せなかった。ただし試料№10の部分は、竪穴部南壁と平行方向のカヤ材

の上に直行方向のカヤ材が乗っており、この繰り返しを少なくとも３単位確認している。下層下面の焼土は、上面ほど顕著なものはない。炭化材直上に、粒状に広がる場合が多かった。

出土遺物は少ない。床面直上からは、敲打痕を持つ礫石器を含む円礫が９個出土しているのみである。その他の遺物は、いずれも中層からの出土である。28は甕、29は高杯で、弥生時代後期後葉から終末期前葉に属する。Ｆ８は袋状鋤先である。

本住居は、出土遺物と形態から、弥生時代後期後葉から終末期の竪穴住居と考えられる。　　（湯川）

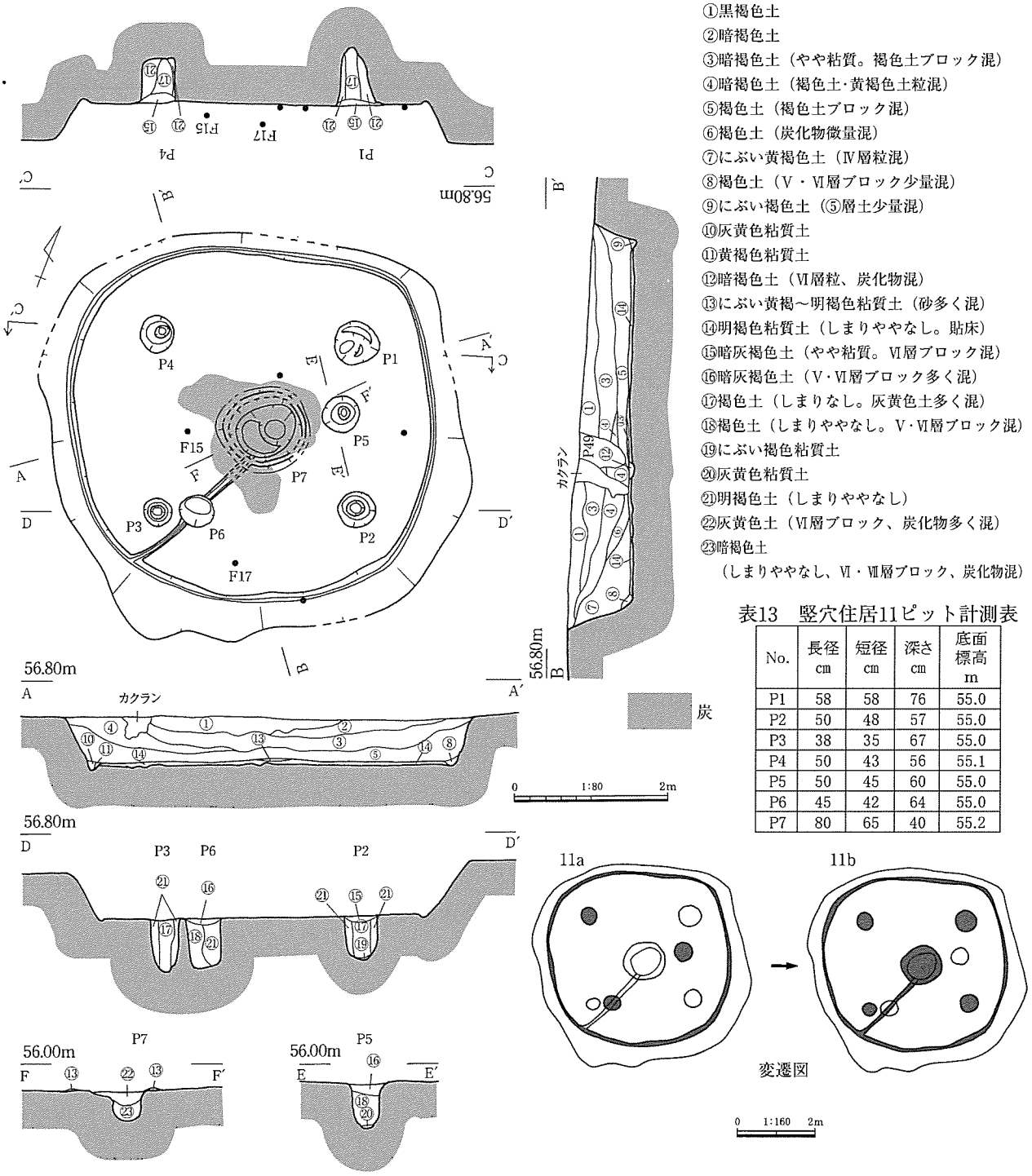


表13　竪穴住居11ピット計測表

No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm	底面標高 m
P1	58	58	76	55.0
P2	50	48	57	55.0
P3	38	35	67	55.0
P4	50	43	56	55.1
P5	50	45	60	55.0
P6	45	42	64	55.0
P7	80	65	40	55.2

図36　竪穴住居11

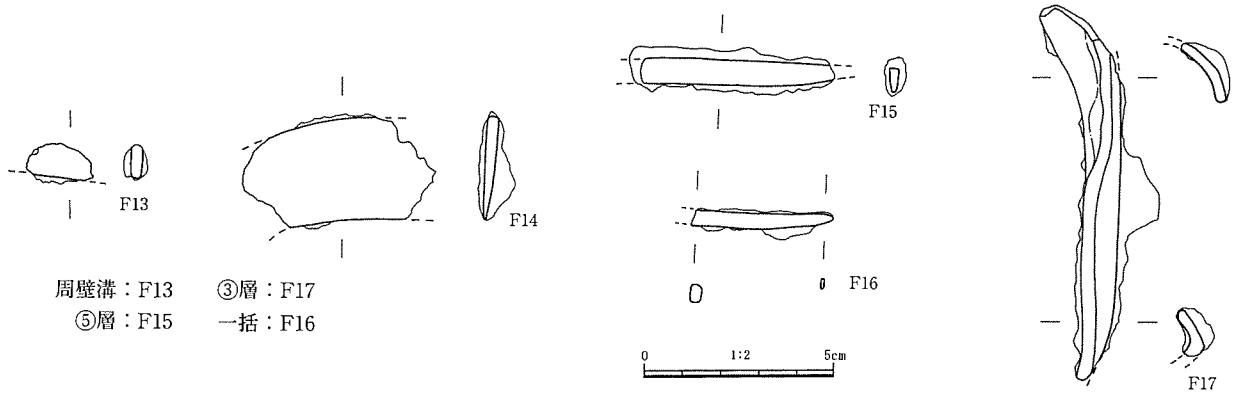


図37　竪穴住居11出土遺物

竪穴住居10（図34・35、図版14・46－３・46－４・63、表11・12）

平坦部中央、Ｅ５・６、Ｆ５・６グリッドに位置する。長軸4.0m、短軸3.2mで平面形は隅丸長方形を呈する竪穴住居である。深さは検出面より約60cmを測り、床面積は11.5㎡である。埋土除去後、主柱穴２基（ピット１・２）、中央よりやや東側に寄る周堤を持つ中央ピット（ピット３）と周壁溝を検出した。床面は全面に貼り床が施されている。主柱穴は径30～60cmの平面円形を呈し、深さは53～65cmを測る。中央ピットは長径45cm、短径38cmの平面楕円形を呈し、深さは24cmを測る。

中央ピット周辺では炭化物が床面及び周堤直上、中央ピット埋土の⑩層上面にかけて検出された。周堤下面と⑩層下面にも炭化物が確認されている。南西部の床面直上では炭化したクリ材が検出された。炭化材除去後、下から焼土が検出されたが、炭化材の範囲と一致しない事から、材が焼けたときに伴うものではなく、地床炉と判断した。炭化材は住居の焼失に伴い炭化した構造材の可能性もあるが、竪穴部埋土中に焼土や、他の炭化材が検出されていないことから、焼失住居ではないと考える。貼り床除去後、部分的に掘り方が存在することを確認した。形状等から、竪穴部構築の際の掘削痕の可能性がある。竪穴部埋土②～④層には地山ブロックが多く含まれていることから、人為的に埋め戻されたと考えられる。①～③層中からは遺物が多く出土している。図化できなかった遺物の中に、土坑20から出土している、いわゆるブランデーグラス状の杯部を持つ高杯（116）と同一個体の破片がある事から、土坑20は竪穴住居10に付属するものか、ごく近い時期に廃絶した可能性がある。

30・31・Ｓ４・Ｆ９・Ｆ10は床面直上出土である。30は甕で、西側壁面近くの床面直上に口縁部を下むけて据えられた状態で出土した。口縁部は平行線がナデ消され、下端部はやや突出している。器壁は肉薄である。外面には肩上部に波状文が施されている。外面口縁部から胴部にかけて煤が付着している。31は甕口縁で、端部は平坦面を持っている。ともに古墳時代前期前葉のものである。Ｓ４は台石である。中央ピットの南側床面直上から出土している。敲打痕と、擦痕が見られる。周縁部端がやや赤化しており、周辺から炭化物も多く出土しているため、被熱している可能性がある。Ｆ９は板状鉄製品で、断面の一辺が薄くなっており、もう一辺の縁は弧を描いている事から、鎌の可能性がある。Ｆ10は含鉄鉄滓である。32～35・Ｆ11・Ｆ12は①層出土遺物である。32は甕口縁である。器壁は肉薄で、下端部の突出が非常にシャープである。33は壺で、やや内傾し、立ち上がりの高い口縁を持つ大型のものである。口縁下端部の稜は鈍い。34も壺で口縁の立ち上がりが高い。35は小型の壺である。口縁部は内傾し、外面肩上部にはキザミがみられる。32･34･35は古墳時代前期前葉もので、33は古墳時代前期中葉から後葉のものである。Ｆ11は棒状の不明鉄製品である。Ｆ12は板状の鉄製品であ

るが、断面の一辺が薄くなっている事から刀子の可能性がある。

この遺構は、床面直上の遺物から、古墳時代前期前葉のものと考えられる。　（三木）

竪穴住居11（図36・37、図版15・63、表13）

平坦部北西、Ｅ６・７グリッドに位置する竪穴住居である。埋土除去後、主柱穴になりうるピット６基（ピット１～６）と周堤をもつ中央ピット１基（ピット7）、周壁溝と周壁溝から中央ピットにかけての床溝を検出した。周壁溝が１条しか検出されず、床溝がピット６を切る事から、建て替えが行われている事を確認した。建て替え前を11ａ、建て替え後を11ｂとする。

11ａは長軸4.7m、短軸4.6mで平面形は隅丸方形を呈し、深さは11ｂに切られるため不明、床面積は17.7㎡である。ピット４～6の３本を主柱穴とする。この時期の竪穴住居には中央ピットを伴う場合が多いが、中央ピットは１基（ピット７）しか検出されておらず、11ｂで検出された中央ピットと同一地点で存在していたか、11ａから11ｂで継続して使用していたと考えられる。ピット４も同様に考

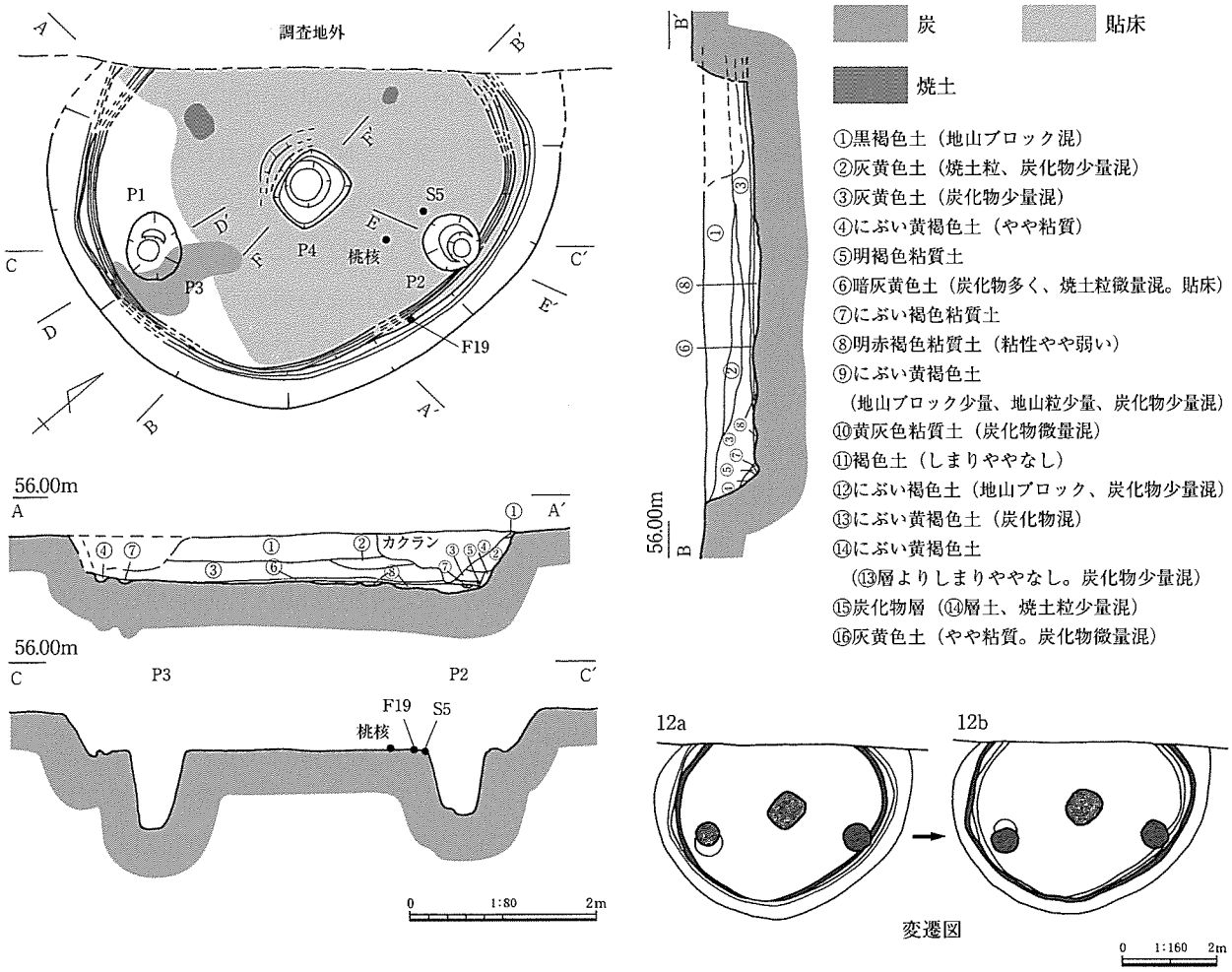


表14　竪穴住居12ピット計測表

No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm	底面標高 m
P1	(51)	(51)	71	54.3
P2	60	59	71	54.4
P3	60	－	86	54.2
P4	77	70	50	54.6

図38　竪穴住居12

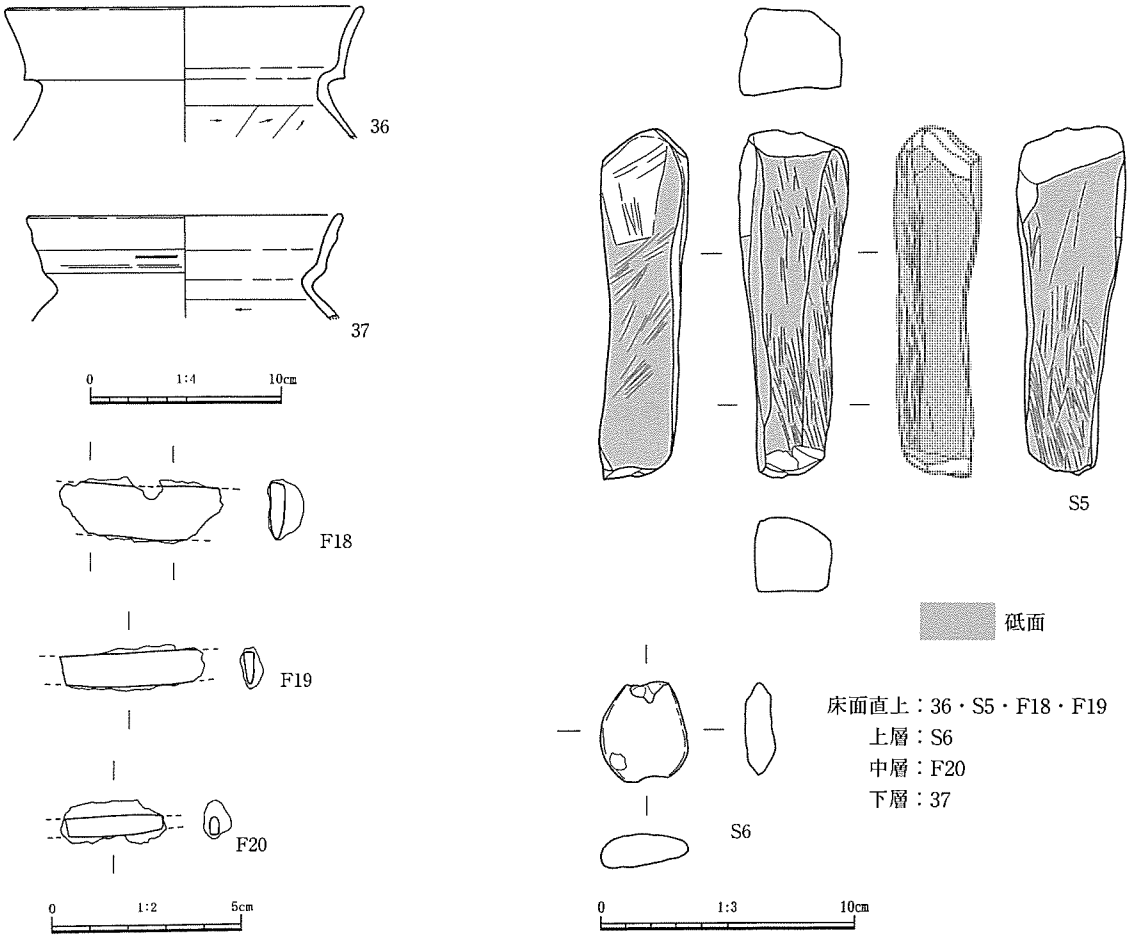


図39　竪穴住居12出土遺物

えられる。

11ｂは11ａと規模を同じくし、深さは検出面より約60cmを測る。ピット１～４の４本柱を主柱穴とし、床溝を持つ。中央ピット（ピット７）は平面形が卵形で、南西側にテラスを持つ。ピット１～６が同じ面で検出された事から、11ａの床面は11ｂでは貼り直されず、継続して使用されたと考えられる。床面南東部の一部で貼り床の補修痕と思われる、砂利を含む面を確認した。中央ピット付近では、床面に炭化物が広がっている事を確認した。竪穴部の③・④層を中層、⑤～⑦層を下層とした。下層に地山土ブロックを多く含むこと、明確な三角堆積が見られないこと、南東からの堆積が著しいことから、この方向から人為的に埋め戻された可能性がある。

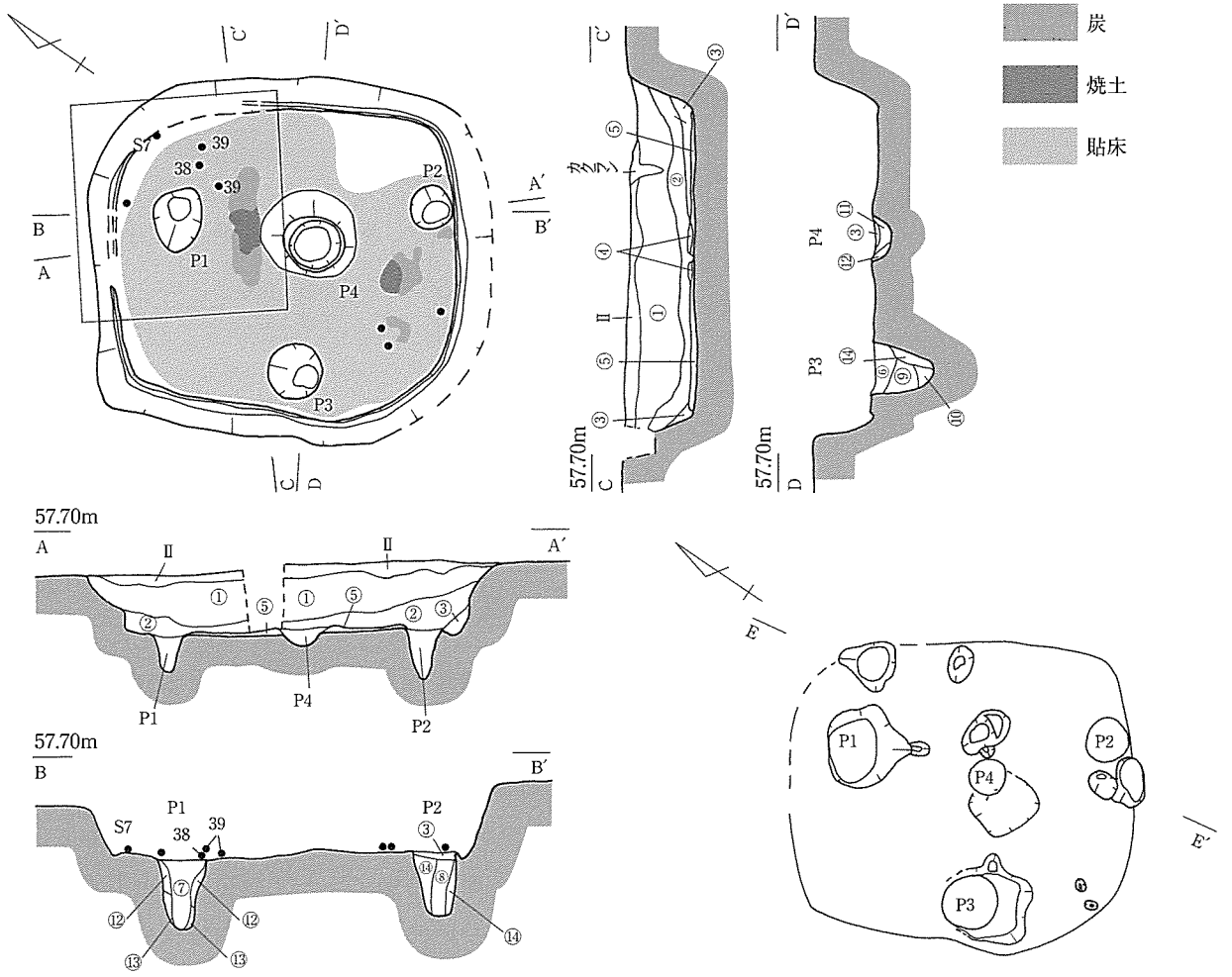
Ｆ13は周壁溝内出土で、不明鉄製品である。Ｆ15は下層出土である。棒状の鉄製品で、断面の一辺がやや薄くなっているので刀子の可能性がある。Ｆ17は中層出土である。断面Ｌ字状を呈する不明鉄製品である。Ｆ14・F16は一括出土である。Ｆ14は板状の鉄製品で、一辺の断面は薄くなっており、もう一辺の平面形は、緩やかに弧を描いている事から、鎌の可能性がある。Ｆ16は刀子である。その他、床面直上から川原石が３個出土している。土器は埋土中から細片が少量出土しているが、時期を確定できるものはない。

この遺構はⅢ面での検出であり、やや暗い褐色の覆土であること、竪穴住居19と類似した形態を持つことから、弥生時代終末期後葉から古墳時代前期前葉のものであると考えられる。　（三木）

竪穴住居12（図38・39、図版16・46－２・46－６・63）

平坦部北端、Ｃ６・７、Ｄ６・７グリッドに位置する。舌状にのびる丘陵上平坦部のほぼ先端にあり、調査区内で一番北端に位置する竪穴住居である。北半は調査地外に広がる。貼り床を除去後、新たに周壁溝が検出できたため、12ａから12ｂへ拡張が行われている事を確認した。

12ａは、長軸4.2m程度で平面形が隅丸方形もしくは隅丸長方形と推定できる。12ｂに切られているため、深さは不明である。主柱穴はピット１・２を検出した。柱間と、検出された２本の主柱穴の配置から調査区外にのびる３本柱の可能性がある。中央ピットは12ｂで検出された１基（ピット４）のみであるが、この時期の竪穴住居には中央ピットを伴う場合が多いことから、12ａ・12ｂの同一地点で存在したか、12ａから12ｂへ継続して使用されていた可能性がある。ピット２も中央ピットと同様



①褐色土（やや暗い。地山ブロック、炭化物、焼土ブロック微量混）
②褐色土（地山ブロック、炭化物、焼土ブロック微量混）
③褐色土（②層よりやや明るい。地山ブロック、炭化物混）
④焼土層
⑤明褐色粘質土（貼床）
⑥褐色土（やや暗い。地山ブロック、炭化物混）
⑦暗褐色土（ややしまりなし。地山ブロック、炭化物混）
⑧褐色土（地山ブロック、炭化物混）
⑨灰褐色土（地山ブロック、炭化物混）
⑩灰褐色土（⑨層よりやや明るい。炭化物混）
⑪褐色土（しまりややなし。地山ブロック、炭化物混）
⑫にぶい黄褐色土（炭化物混）
⑬にぶい黄褐色土（地山ブロック、炭化物混）
⑭にぶい黄褐色土（炭化物混）

表15　竪穴住居13ピット計測表

No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm	底面標高 m
P1	60	48	80	55.7
P2	49	48	64	56.0
P3	60	57	67	60.2
P4	60	56	21	56.5

貼床除去後

図40　竪穴住居13

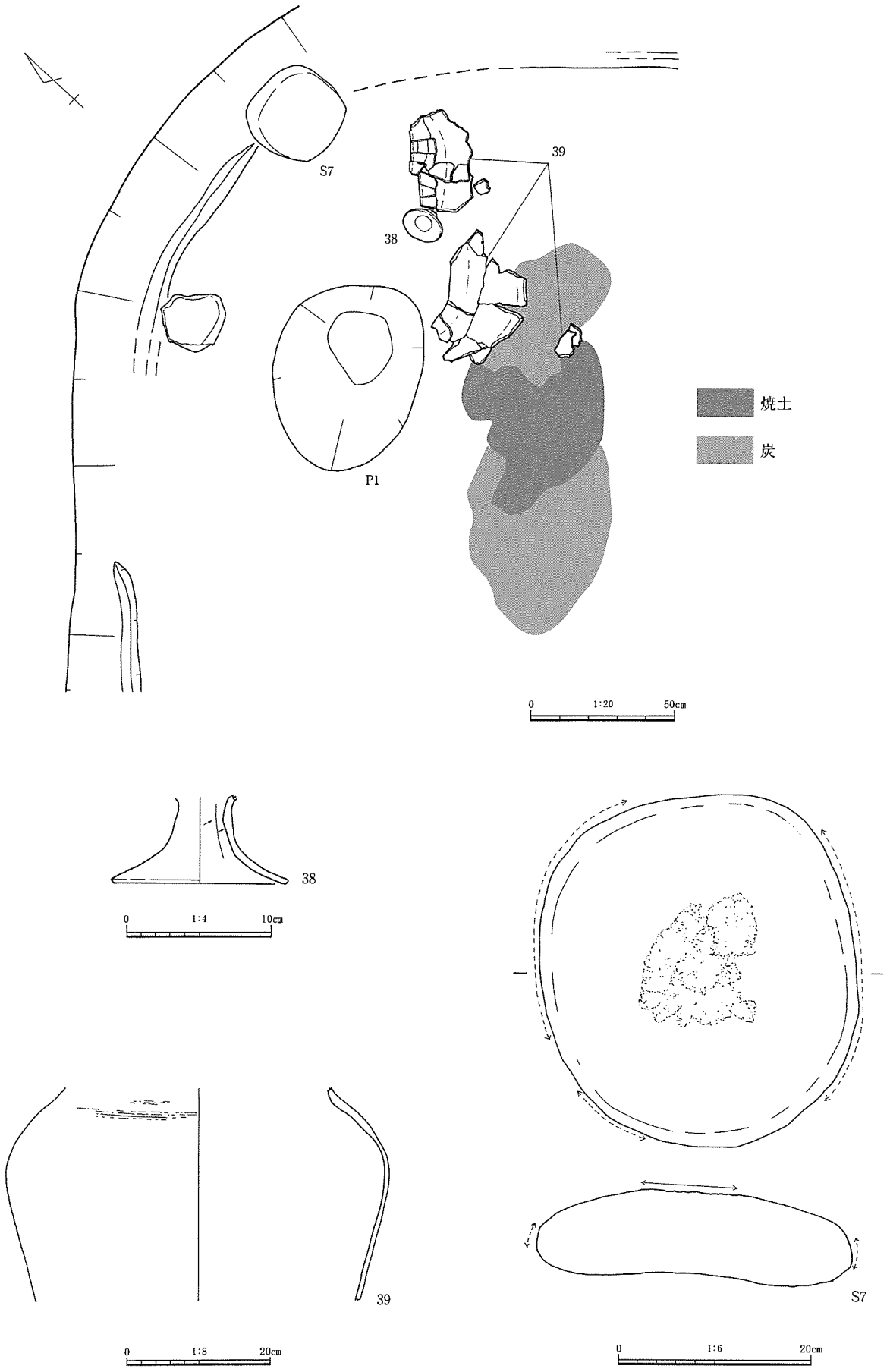


図41　竪穴住居13拡大図および床面直上出土遺物

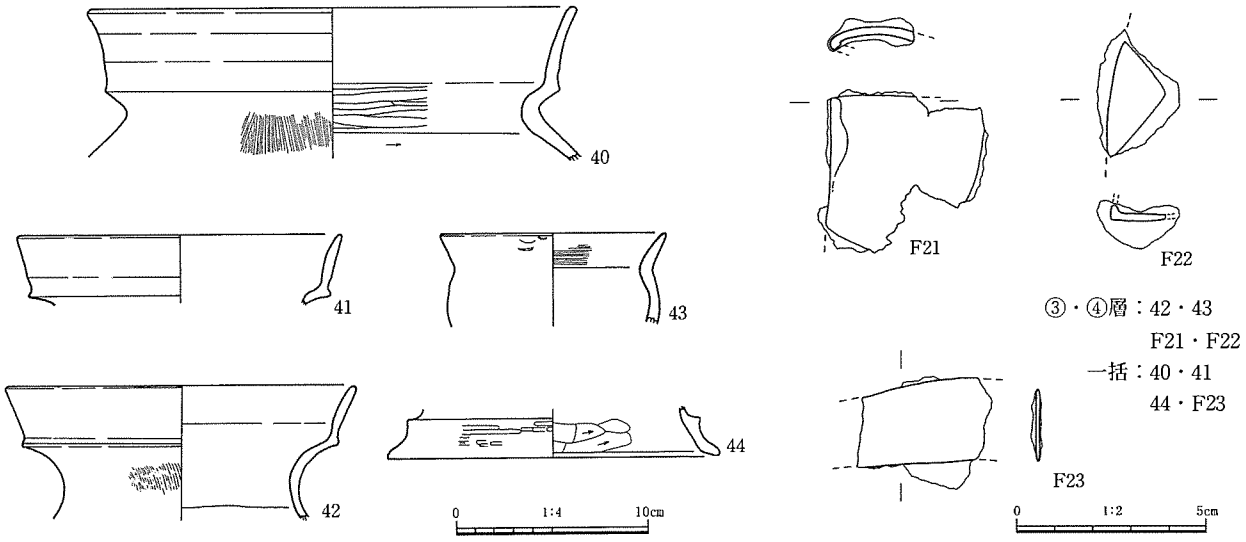


図42　竪穴住居13出土遺物

の可能性がある。

12ｂは、長軸4.5m程度と推定できる。深さは検出面より約60cmを測る。主柱穴はピット２・３で、12ａと同様、３本柱の可能性がある。中央ピット（ピット４）は、平面長方形の二段掘りになっている。中央ピット北西側の一部に低い高まりを検出したことから、周堤を持っていると思われる。中央ピット埋土中層（⑮層）には約25cmの厚さの炭化物層が確認できた。貼り床は南端の一部を除くほぼ全面で確認でき、北西部の床面の一部には、焼土面が検出された。竪穴部の②・③層には地山土をほとんど含んでおらず、レンズ状の堆積であることから、自然堆積と考えられる。

36・Ｓ５・Ｆ18・Ｆ19は床面直上出土である。36は甕口縁である。器壁は肉薄で、口縁部の立ち上がりが高い。口縁下端部の突出がシャープである。弥生時代終末期のものである。Ｓ５は砥石で、36の近辺から出土している。全面が砥がれ、よく使われている事が観察できる。その他、36・Ｓ５付近からは炭化桃核が２点出土している。Ｆ18・19は共に刀子である。Ｓ６は①層出土遺物で、小型の打欠石錘である。Ｆ20は②層出土で不明鉄製品である。刀子の可能性がある。37は③層出土遺物で甕口縁部である。口縁の平行線がナデ消されている。弥生時代終末期のものである。

この遺構は床面直上の遺物から、弥生時代終末期後葉のものと考えられる。　（三木）

竪穴住居13（図38・39、図版17・18・47・63、表15）

調査地南側、台地平坦面上に位置する。遺構の南側は竪穴住居15を切る。平面形は隅丸方形を呈し、貼り床を施し床面としている。床面での長軸は3.84m、短軸は3.24m、床面積は約11.0㎡である。検出面から床面までの深さは最も残存する北東側で66cmである。床面に幅12cm、深さ８cmの周壁溝を検出した。一部とぎれるものの本来は全周していたものと想定している。主柱穴と考えられるのはピット１～３で、主柱穴間距離は2.70m（ピット１－２）、2.20m（ピット２－３）、2.26m（ピット３－１）である。ピット２には径約17cmの柱痕跡が残り、ピット１・３からは柱抜き取り痕跡を観察している。住居中央部にはピット４を検出した。平面は円形を呈し、周提が全周している。いわゆる中央ピットに相当しよう。ピット１・４間と、ピット４と南壁の間には被熱して硬化した床面と、床面直上に薄く広がる炭化物を検出した。地床炉の可能性がある。

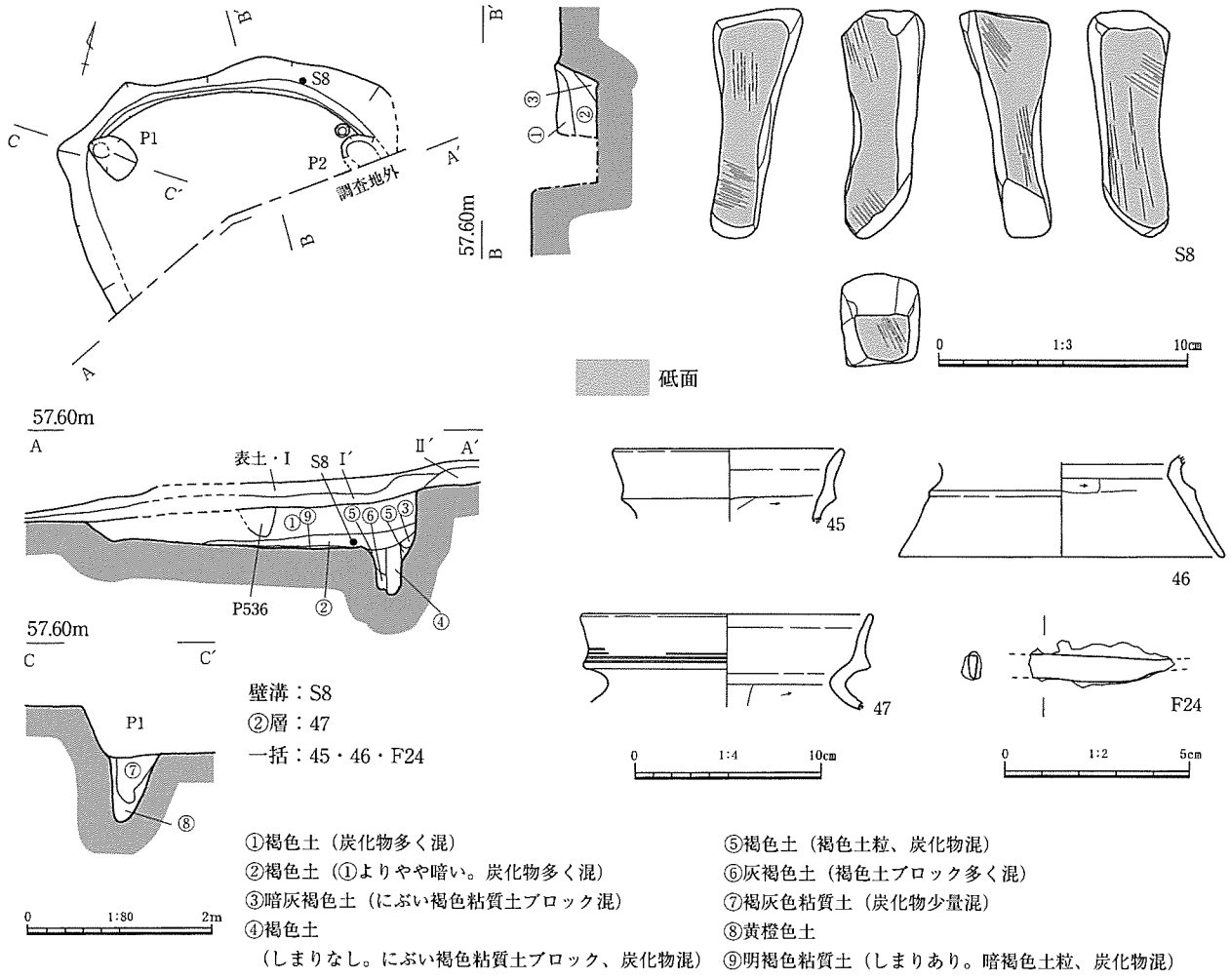


図43　竪穴住居14および出土遺物

住居覆土の最上層（①層）は暗い色調を呈し、自然堆積とみられる。②層から下層は淡い色調を呈し、地山ブロックが混じる。

遺物は床面の薄い炭化物の直上またはその周辺の床面直上より甕の胴部片と思われる39、高坏脚部38、台石もしくは石皿と思われるＳ７が出土した。また、③・④層から42・43・Ｆ21・Ｆ22が、竪穴部堆積の一括として40・41・44・Ｆ23が出土している。40・41は甕、42は壺、43は小型丸底壺で、古墳時代前期前葉の所産である。44は、弥生時代終末期前葉の高杯脚部と考えられる。Ｆ21は袋状鉄斧もしくは鎌。Ｆ23は鎌と考えられる。

竪穴住居13は、出土遺物と形態から古墳時代前期前葉の竪穴住居と考えられる。　（森本）

竪穴住居14（図43、図版18－５・48－１・48－２・63）

調査地平坦部南西端、Ｇ６グリッドで検出した。竪穴２・３を切って構築される。南側は、調査地外へと延びており、正確な平面形態は不明。北壁と南西壁が約60°の角度差を持つことから、隅丸三角形の平面形態を想定している。床面の一部には、貼り床が施されていた。東西コーナー部分にピット１・２があり、その配置と規模から主柱穴と判断した。ピット１からは柱抜き取り痕跡が、ピット２からは径約16cmの柱痕跡が観察できた。平面形態が想定どおりなら、隅に主柱穴を有する３本柱と

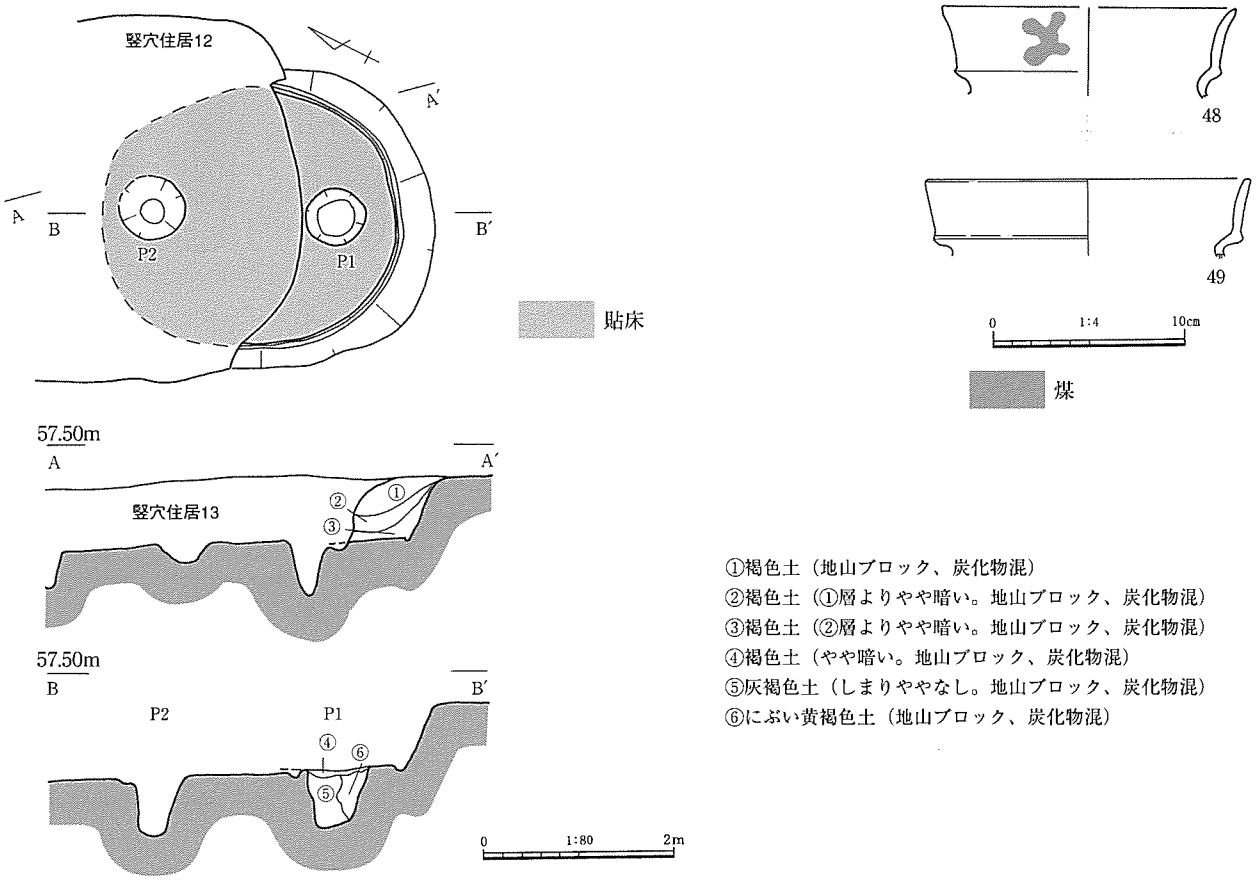


図44　竪穴住居15および出土遺物

推定できる。ピット１・２間の距離は、2.9mを測る。周壁溝は、北壁に沿って検出した。ピット２部分では、掘り方部分を切って構築されている。ピット１より西では、検出していない。

竪穴部には、ブロックを含まない褐色土が堆積しており、北西側の平坦部より流入したと推定している。出土遺物は少量で、Ｓ８は周壁溝、47は②層からの出土である。45は甕、46は鼓形器台で、弥生時代終末期後葉から古墳時代前期前葉の遺物である。47は弥生時代終末期前葉の甕で、口縁部の平行沈線をナデ消している。Ｓ８は砥石である。

出土遺物および、弥生時代終末期と考えられる竪穴２とそれを切る竪穴３を切り、竪穴３に人為的な堆積が認められないことから、古墳時代前期前葉の竪穴住居と考えている。　（湯川）

竪穴住居15（図44、図版17・48－１）

調査地南側、台地平坦面上に位置する。遺構の北西側は竪穴住居13に切られ、消失している。かろうじて、貼り床が残り、平面形は楕円形を呈すと思われる。床面での短軸は約2.78mを測り、検出面から床面までの深さは最も残存する北東側で62cmを測る。床面には幅９cm、深さ２cmの周壁溝を検出した。主柱穴と考えられるのはピット１・２で、ピット２は竪穴住居13の貼り床除去後に検出した。主柱穴間の距離は、3.90mを測る。

住居覆土は褐色土で、Ⅳ層ブロックが多く混入する。住居の壁側から中央付近に向かい、流れ込むような堆積の様相を示す。地山質土ブロックの多さから、人為的な堆積と推定している。

遺物は覆土の下層（③層）より甕49、中層（②層）より甕48が出土している。

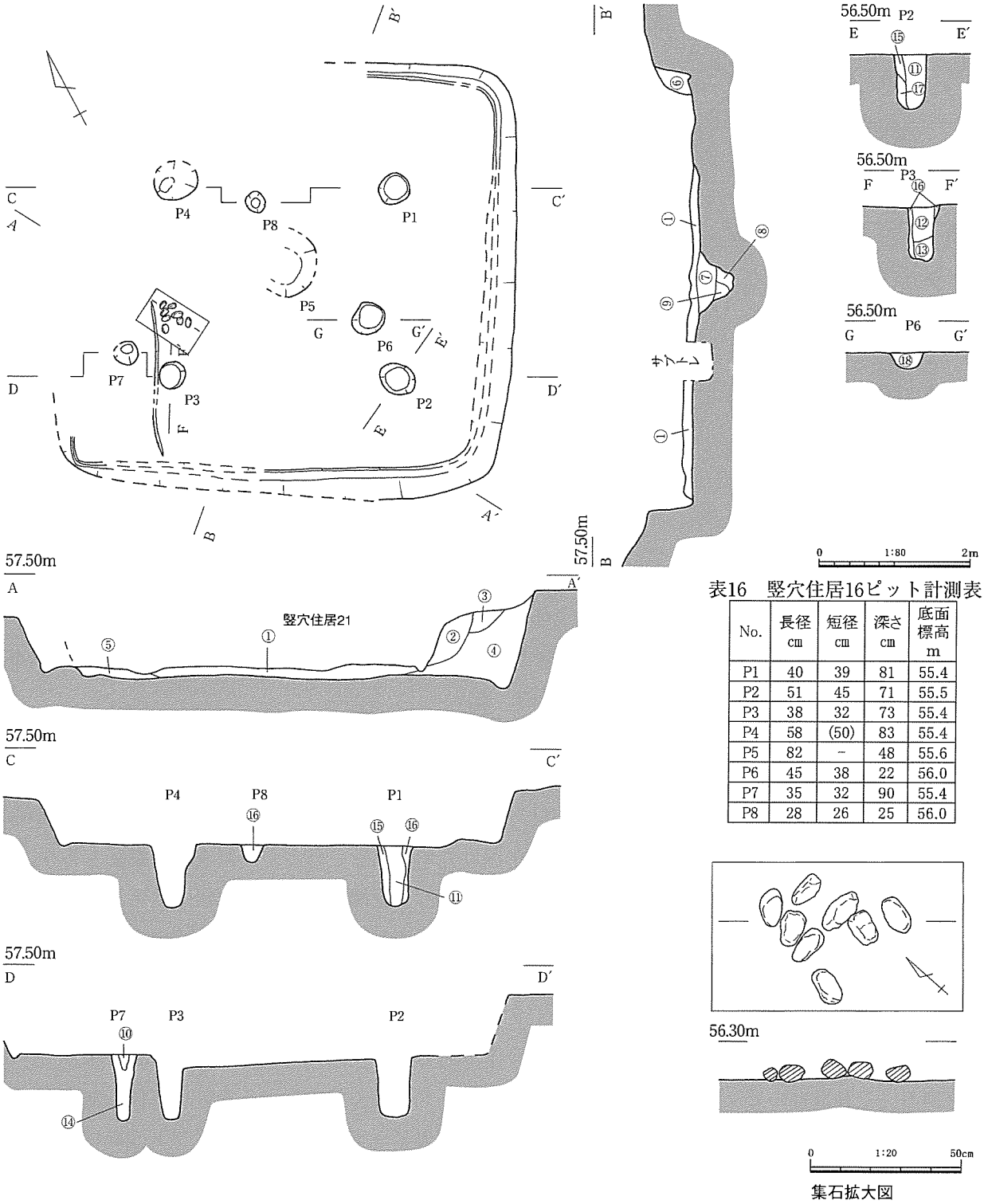


表16　竪穴住居16ピット計測表

No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm	底面標高 m
P1	40	39	81	55.4
P2	51	45	71	55.5
P3	38	32	73	55.4
P4	58	(50)	83	55.4
P5	82	–	48	55.6
P6	45	38	22	56.0
P7	35	32	90	55.4
P8	28	26	25	56.0

集石拡大図

①暗褐色粘質土（黄褐色土大粒、炭化物微量混）
②暗褐色粘質土（褐色土大粒、炭化物微量混）
③暗褐色粘質土
④暗褐色粘質土（にぶい黄褐色土小ブロック、炭化物少量混）
⑤地山質土（灰褐色土大粒混）
⑥暗褐色粘質土（地山土大粒少量混）
⑦にぶい黄褐色土（地山ブロック、炭化物混）
⑧暗褐色粘質土（焼土大粒少量混）
⑨暗褐色粘質土
⑩黒褐色粘質土（礫多量混）
⑪暗褐色粘質土（にぶい黄褐色土粒少量混）
⑫褐灰色粘質土（にぶい黄褐色土大粒混）
⑬褐灰色粘質土（しまりなし。暗褐色土小粒少量混）
⑭黄褐色粘質土（礫少量混）
⑮暗褐色粘質土（にぶい黄褐色土、暗褐色土小ブロック、炭化物少量混）
⑯褐色粘質土（にぶい黄褐色土小ブロック混）
⑰にぶい黄褐色粘質土
⑱黒褐色粘質土（礫混、炭化物多量混）

図45　竪穴住居16および拡大図

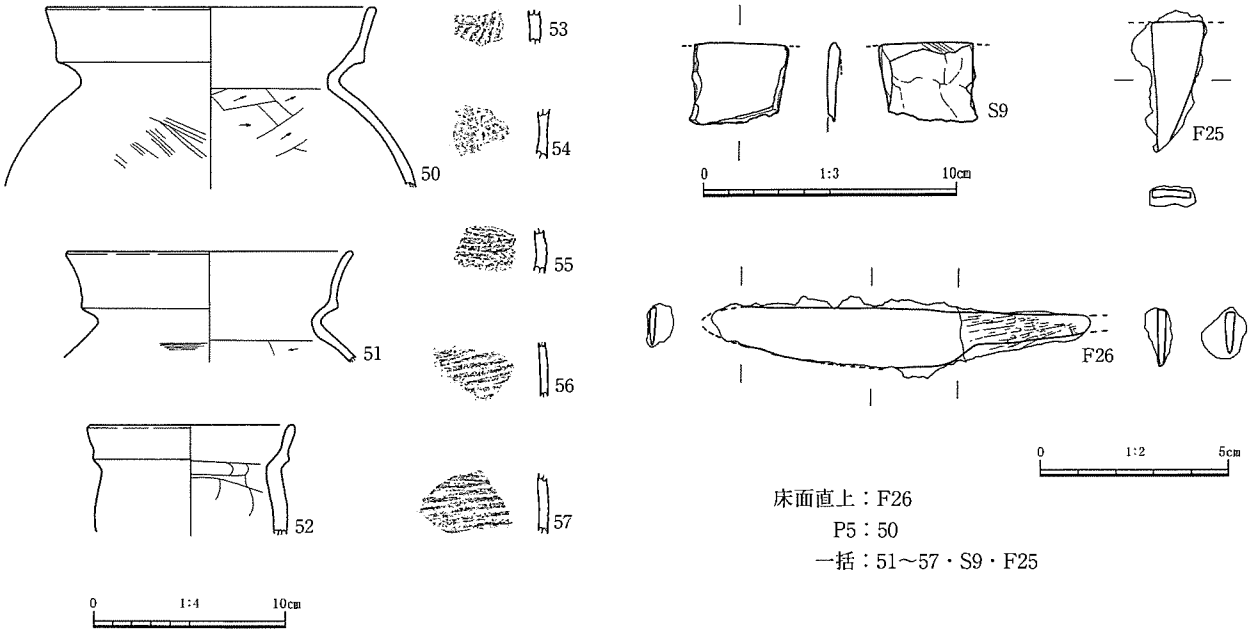


図46　竪穴住居16出土遺物

竪穴住居15は床面直上には時期を特定できる遺物は出土していないが、竪穴住居13に切られることや、出土遺物から判断して、弥生時代終末期後葉に廃絶した住居と考えられる。　（森本）

竪穴住居16（図45・46、図版19・20－１・48・63、表16）

平坦部東側の傾斜変換点付近、Ｅ・Ｆ，３・４グリッドで検出した。後述する竪穴住居17の上部にほぼ重なるように位置し、主軸もほぼ同じと考えられる。竪穴住居17より１回り大きいもので、南東壁及び南西壁は竪穴住居17の壁を一部再利用している可能性が高い。規模や構造が異なることから、建て替えではなく新たな住居と判断した。平面形態は方形と判断されるが、調査時の攪乱もあり、住居北側を中心に遺存状態があまり良好ではない。壁際には周壁溝が巡るが、北側では確認できなかった。想定される規模は、長軸６ｍ以上・短軸5.7ｍ程度、深さ1.2ｍで、床面積は28.7㎡を測る。竪穴部埋土（①～⑤層）は住居の主軸を異にしているが、上部に重なるように位置する竪穴住居21によってほとんどが掘削されているため、あまり残存していない。ピットを８基検出したが、そのうち、ピット１～４が主柱穴、ピット５がいわゆる中央ピットである。主柱穴の規模は、径38～58、深さ71～83㎝を測る。それ以外のピット６～８のうち、ピット６・８は浅く柱穴とならない可能性もあるが、ピット７については主柱穴と同程度の深さが存在する。中央ピットと推測されるピット５には竪穴部埋土の①層とピット埋土の⑧・⑨層に挟まれて、にぶい黄褐色土が主体である⑦層が存在している。⑦層には地山土のブロックが含まれており自然流入とは考えにくく、人為的に埋められた可能性が高い埋土である。

ピット３の脇には北西壁と平行するように高さ10㎝程度の段が存在した。後述する竪穴住居17の埋土を掘り残して整形したもので、全体形を確認することは出来なかったがベッド状遺構の痕跡と推測される。

本遺構に伴う遺物は少ない。50はピット５から、Ｆ26は床面直上からの出土で、その他は本遺構一括で取り上げた。50～57は弥生時代終末期の甕である。53～57は外面にタタキが施され、内面はケズリもしくはナデ調整される。いわゆる庄内甕もしくは、庄内甕の影響を受けた北近畿など非在地系土

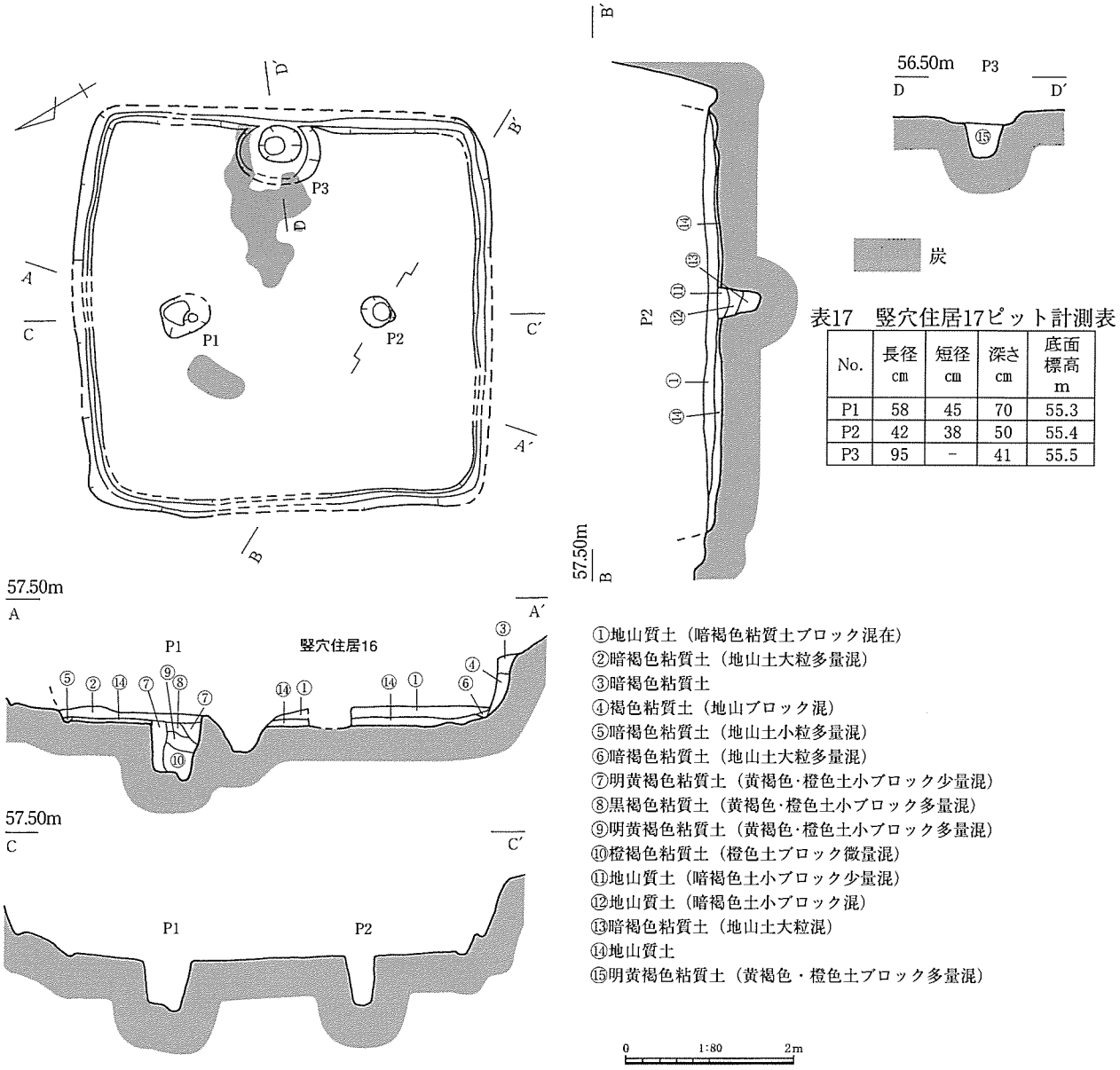


表17　竪穴住居17ピット計測表

No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm	底面標高 m
P1	58	45	70	55.3
P2	42	38	50	55.4
P3	95	－	41	55.5

図47　竪穴住居17

器の可能性も想定したが、胎土分析により在地産と判定された（第６章第２節参照）。Ｓ９は磨製石製品で、側面が緩やかな曲線を描くことから、石包丁の可能性がある。Ｆ26は刀子で、柄部に木質が残存している。また、床面直上に長さ20cm・幅10cm程度にほぼ大きさが揃った河原石からなる集石が存在した。８点の出土状況を図化したが、それら８点以外にも周囲の掘り下げ時に図化できなかったものが数点存在した。

ピット５から出土した50から、弥生時代終末期の時期幅に収まる竪穴住居と考える。　（西川）

竪穴住居17（図47、図版19－１・20－２、表17）

平坦部東側の傾斜変換点付近、Ｅ・Ｆ，３・４グリッドで検出した。前述した竪穴住居16の下部にほぼ重なるように位置する。平面形態は方形と判断される。床面での規模は、長軸4.7ｍ・短軸4.6ｍ程度、深さ1.3ｍで、床面積は20.9㎡を測る。

壁際には周壁溝が巡る。竪穴部埋土は上部に重なるように位置する竪穴住居16によって掘削されているためあまり残存していないが、西側の一部でのみ竪穴部の埋土（①～④層）を検出した。地山質

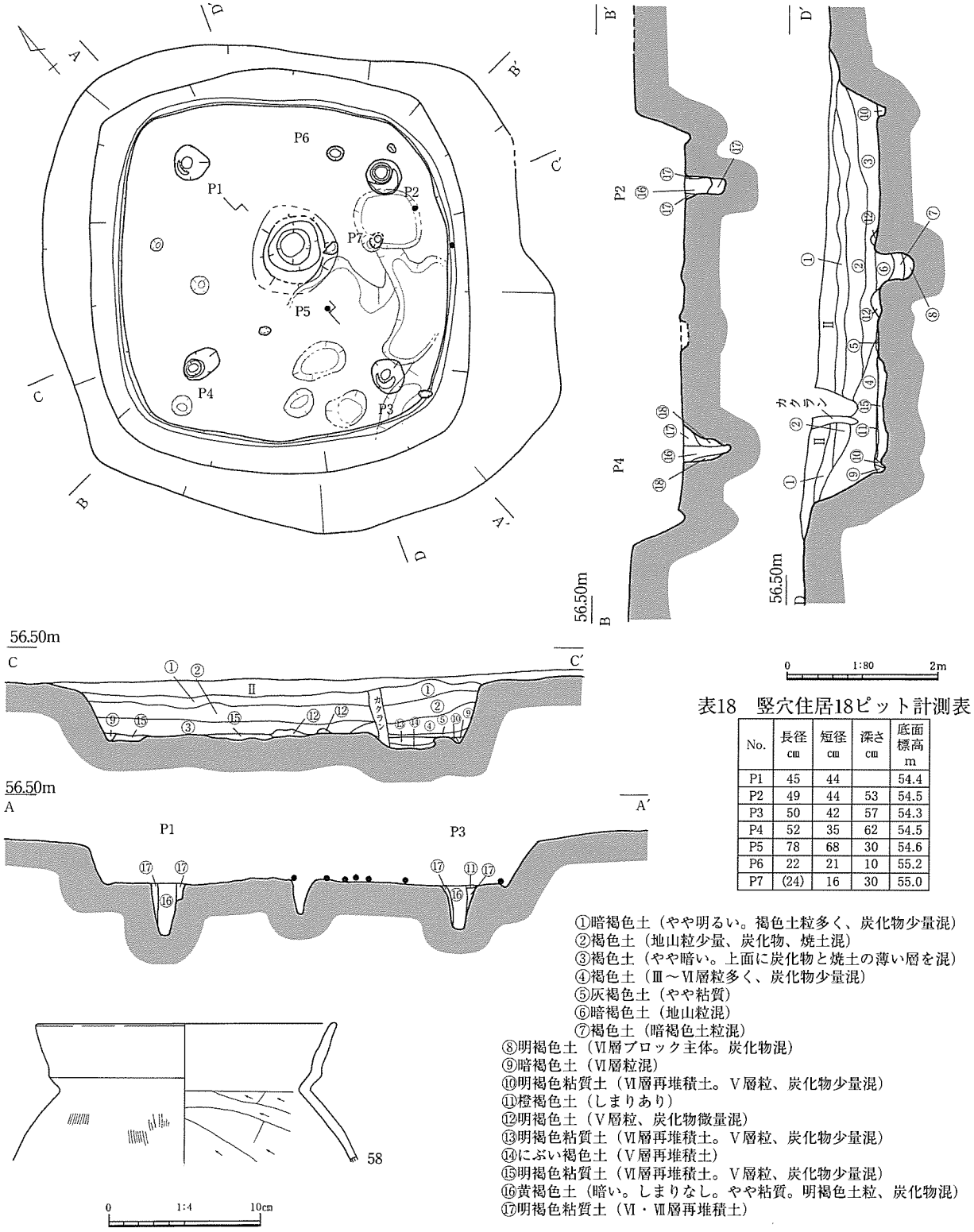


表18　竪穴住居18ピット計測表

No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm	底面標高 m
P1	45	44		54.4
P2	49	44	53	54.5
P3	50	42	57	54.3
P4	52	35	62	54.5
P5	78	68	30	54.6
P6	22	21	10	55.2
P7	(24)	16	30	55.0

①暗褐色土（やや明るい。褐色土粒多く、炭化物少量混）
②褐色土（地山粒少量、炭化物、焼土混）
③褐色土（やや暗い。上面に炭化物と焼土の薄い層を混）
④褐色土（Ⅲ～Ⅵ層粒多く、炭化物少量混）
⑤灰褐色土（やや粘質）
⑥暗褐色土（地山粒混）
⑦褐色土（暗褐色土粒混）
⑧明褐色土（Ⅵ層ブロック主体。炭化物混）
⑨暗褐色土（Ⅵ層粒混）
⑩明褐色粘質土（Ⅵ層再堆積土。Ⅴ層粒、炭化物少量混）
⑪橙褐色土（しまりあり）
⑫明褐色土（Ⅴ層粒、炭化物微量混）
⑬明褐色粘質土（Ⅵ層再堆積土。Ⅴ層粒、炭化物少量混）
⑭にぶい褐色土（Ⅴ層再堆積土）
⑮明褐色粘質土（Ⅵ層再堆積土。Ⅴ層粒、炭化物少量混）
⑯黄褐色土（暗い。しまりなし。やや粘質。明褐色土粒、炭化物混）
⑰明褐色粘質土（Ⅵ・Ⅶ層再堆積土）

図48　竪穴住居18および出土遺物

土のブロックを含み、人為的な堆積の可能性がある。

また、⑤・⑥層は周壁溝の埋土であり、⑭層（貼り床）を掘り込んでいるが、⑭層は地山土との識別が困難な埋土である。なお、①層中にはピット３の周辺に炭化物を多く含む部分が存在する。ピットを３基検出したが、そのうち、ピット１・２が主柱穴、ピット３がいわゆる特殊ピットである。主柱穴の規模は、径42～58cm、深さ50～70cmを測る。特殊ピットと想定されるピット３は、段を持ち逆

凸状の断面形を呈するものである。上部の段は長径95cm・短径74cm、深さ10～16cmの楕円形を呈し、住居壁に寄った位置に径約50cmのピットが掘り込まれている。本遺構から図化できる遺物は出土しなかった。出土した遺物が無いため詳細な時期比定を行うことは出来ないが、竪穴住居16に先行する遺構であることと、平面方形で２本主柱穴という住居の形態から、弥生時代終末期に収まる可能性が高い竪穴住居と考える。（西川）

竪穴住居18（図49、図版20・48－４、表18）

平坦部北東傾斜変換点付近、Ｄ５・６グリッドで検出した。土坑27・32を切って構築される。平面形態は隅丸方形を呈し、壁面は上端部で大きく外に広がる。長軸、短軸とも4.6m、床面積18.3㎡、床面の標高55.4mを測る。

床面には、竪穴部南隅掘り方部分の一部に貼り床が施されており、周壁溝とピット７基を検出した。ピット１～４は、径約18～21cmの柱痕跡を有し、配置と規模から主柱穴と判断した。ピット５は、いわゆる中央ピットで、高さ約３～５cmの周提がめぐる。周壁溝は、壁に沿って１条めぐっていた。貼り床（⑪層）除去後、地山質土（⑬～⑮層）の堆積する不整形な落ち込みを検出した。底面に凹凸があり、掘り方の可能性がある。

竪穴部に堆積する土は、①～⑤層に分層した。①・②層は、レンズ上に堆積しており、自然堆積と考えられる。③層上面は、平坦で炭化物と焼土の薄い層がある。④層は、竪穴部南側にのみ存在し、壁面側が厚く堆積していた。地山質土を粒状に多く含む。③・④層とも自然堆積とは考えにくい。

出土遺物は少量で、床面直上からは少量の礫石器が出土したのみである。そのほかは、大半が③層からの出土である。58は古墳時代前期前葉の甕で、③層から出土した。

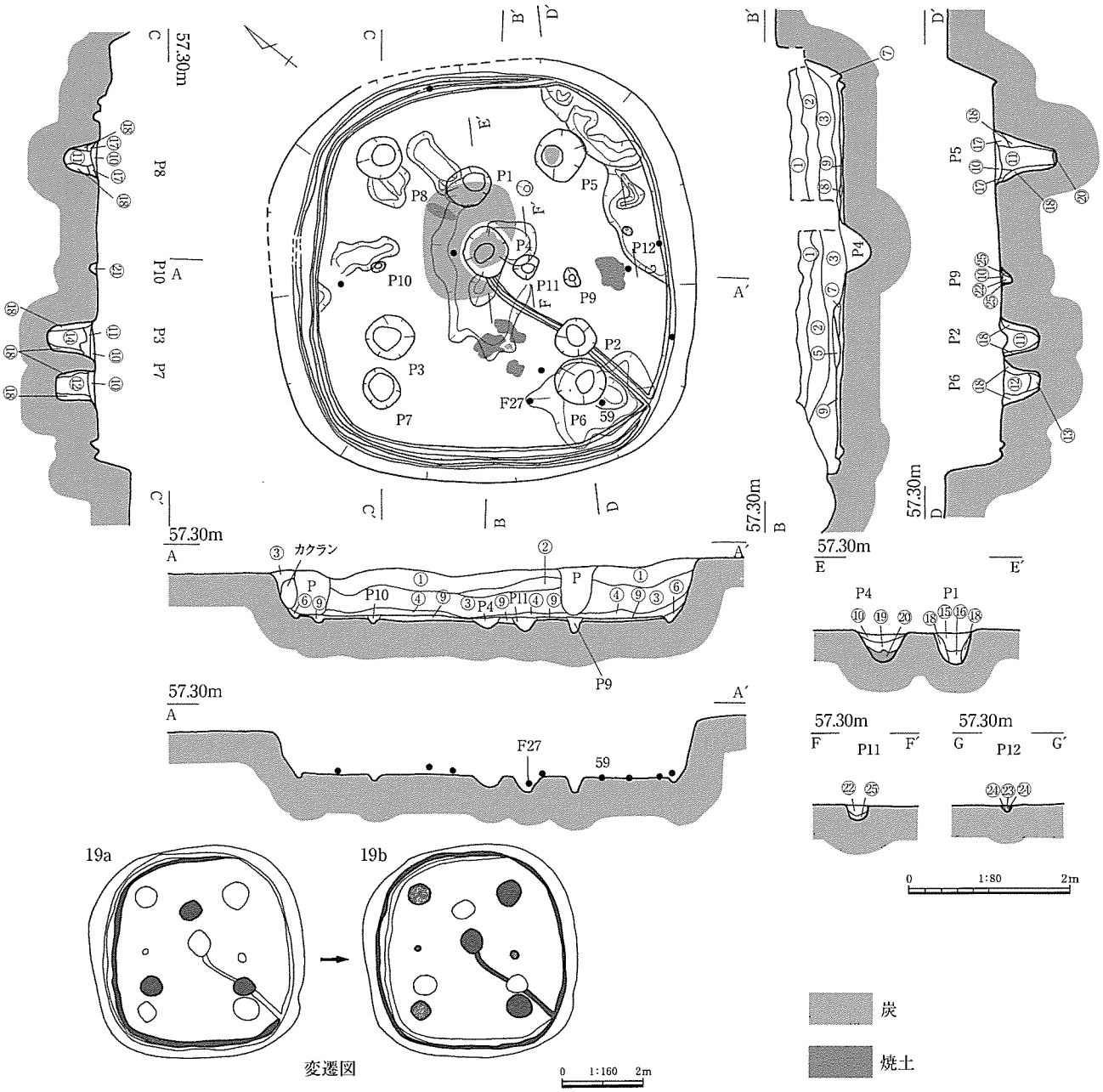
前述したように、本住居掘削時の廃土と想定される堆積が、北隣りの竪穴住居９焼失時の堆積直上で観察された。竪穴住居９の廃絶から時期を置かずに、本住居が構築された可能性がある。出土遺物と形態とを併せ、本住居は弥生時代終末期の竪穴住居と考えている。（湯川）

竪穴住居19（図49～51、図版21・48－４・49・63．表19）

調査地南側、台地平坦面上に位置する。土坑５・10～12を切って構築される。建替えを確認した。北西側への部分的な拡張である。建替え前を竪穴住居19a、建替え後を竪穴住居19ｂとする。

竪穴住居19aは、19ｂの貼り床を除去した後に検出した。平面径は隅丸方形を呈し、床面での長軸は約4.36m、短軸は約4.68m、床面積は約17.6㎡である。床面に幅10cm、深さ７cmの周壁溝を検出した。主柱穴と考えられるのはピット１～３で、主柱穴間距離は2.30m（ピット１－２）、2.32m（ピット２－３）、2.24m（ピット３－１）である。住居形態から中央ピットが存在した可能性があるが、検出できなかった。竪穴住居19ｂにおいても、19ａの中央ピットを再使用したためとも考えられる。壁周溝は、南東辺を除き検出した。本来は全周していたと推定でき、19ｂ壁周溝に切られている可能性がある。床面には、深さ１～３cmの不整形な落ち込みが複数あり、掘り方と推定している。

竪穴住居19ｂの平面形は隅丸方形を呈し、床面での長軸は4.9m短軸は4.7m、床面積は約19.7㎡である。検出面から床面までの深さは最も残存する南東側で76cmである。床面には、ほぼ全面に貼り床が施され、幅10cm、深さ６cmの周壁溝が全周している。主柱穴と考えられるのはピット５～８で、主柱穴間距離は3.1m（ピット５－６）、2.7m（ピット６－７）、2.8m（ピット７－８）、2.7m（ピット８－５）である。ピット５底面中央には炭化物を検出した。平面形は径約18cmの円形を呈し、炭化物の厚さは約５cmである。柱痕跡の一部と思われる。ピット５－６間にピット９、ピット７－８



①褐色土（暗い。地山ブロック、炭化物混）
②褐色土（地山ブロック、炭化物混）
③褐色土（やや暗い。地山ブロック、炭化物混）
④灰褐色土（しまりややあり。暗い。地山ブロック、炭化物混）
⑤褐色土（やや明るい。地山ブロック、炭化物混）
⑥褐色土（暗い。地山ブロック混）
⑦灰褐色土
⑧焼土層
⑨にぶい赤褐色土
⑩褐色土（やや暗い。地山ブロック、炭化物混）
⑪灰褐色土（地山ブロック、炭化物混）
⑫灰褐色土（しまりややなし。やや暗い。地山ブロック、炭化物混）
⑬にぶい黄褐色土（しまりややなし。やや暗い。炭化物混）
⑭灰褐色土（ややしまりあり。地山ブロック、炭化物混）
⑮黄褐色土（やや暗い。地山ブロック混）
⑯黄褐色土（暗い。地山ブロック混）
⑰にぶい黄褐色土（しまりあり）
⑱にぶい黄褐色土（しまりあり。やや明るい）
⑲灰褐色土（地山ブロック多く、炭化物多く混）
⑳炭化物層
㉑暗褐色土（炭化物混）
㉒灰褐色土（炭化物混）
㉓灰褐色土（炭化物、焼土ブロック混）
㉔にぶい黄褐色土（炭化物混）

表19　竪穴住居19ピット計測表

No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm	底面標高 m
P1	56	44	40	55.9
P2	50	49	45	55.9
P3	60	51	60	55.8
P4	60	56	37	56.0
P5	60	58	80	55.7
P6	64	54	46	55.9
P7	45	42	50	55.9
P8	57	57	42	56.2
P9	27	20	20	56.2
P10	15	12	10	56.3
P11	35	27	20	56.2
P12	10	10	8	56.3

図49　竪穴住居19

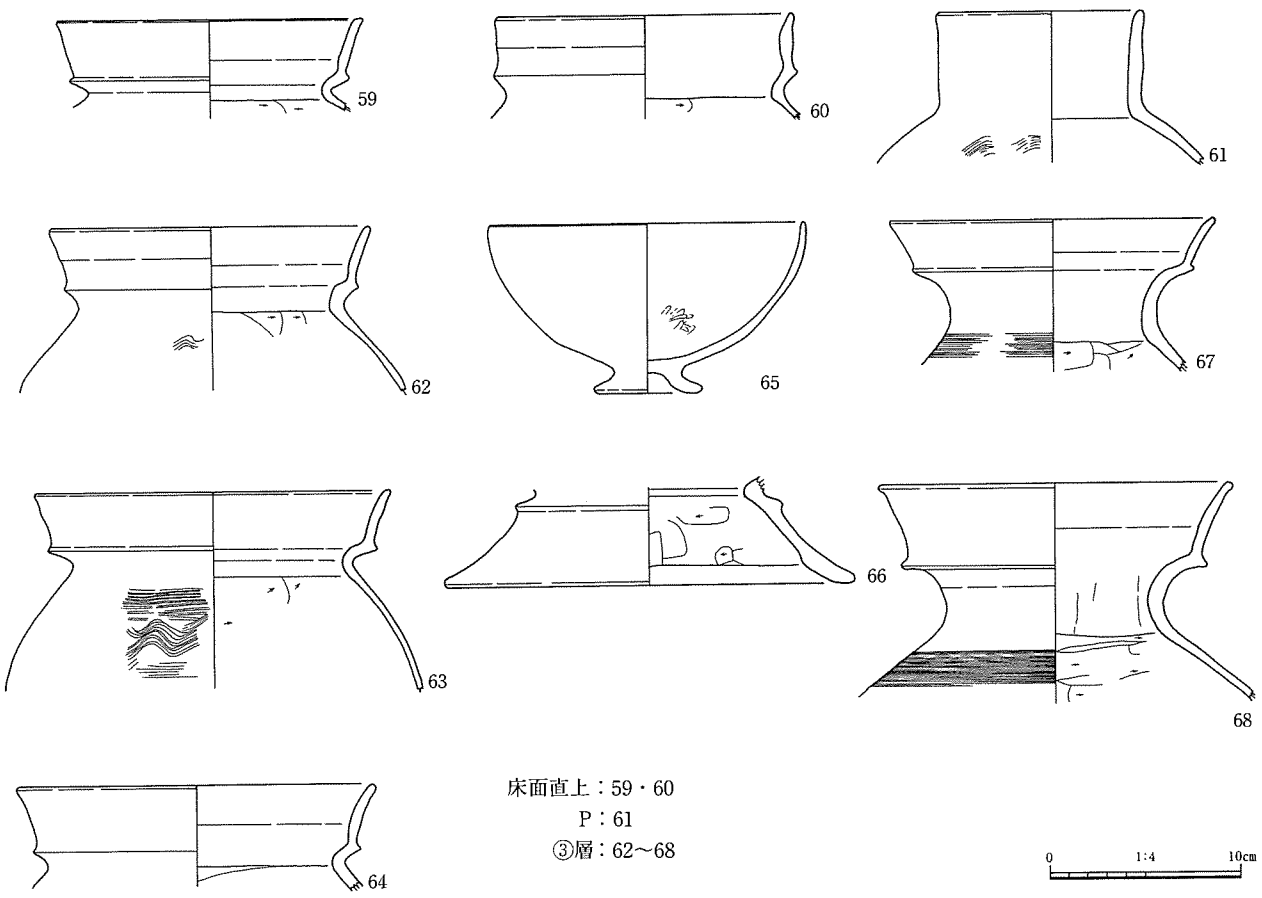


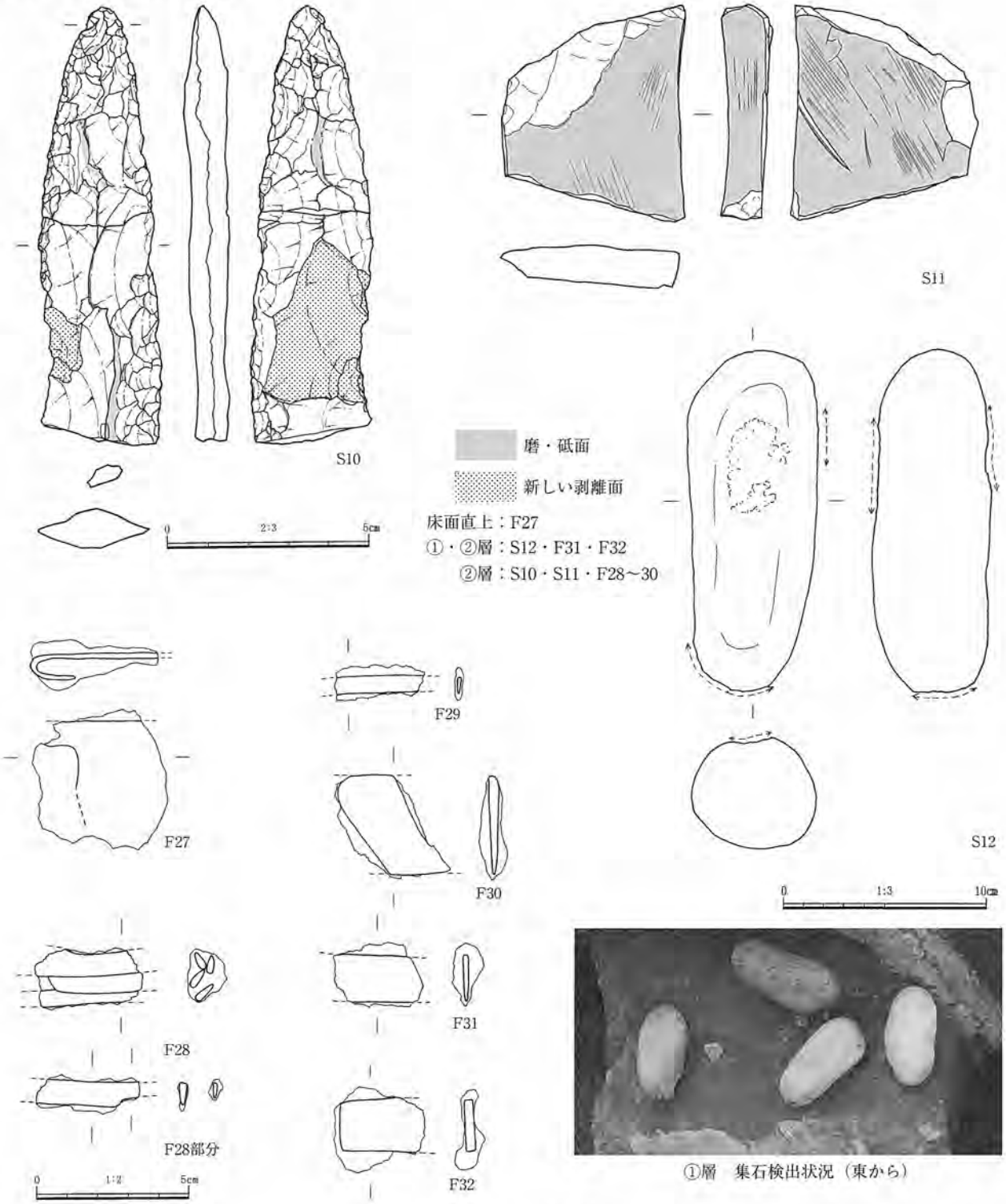
図50　竪穴住居19出土遺物（１）

間にピット10を検出した。主柱間のほぼ中央に位置するピット９・10は桁や梁の支柱と思われる。住居中央部にはピット４を検出し、平面円形を呈す。ピット４周辺には被熱して硬化した床面と、床面直上に薄く広がる炭化物を検出した。ピット４の埋土は３層に分層でき、その内⑳層は炭化物を多く含む。ピット４の南側から南側のコーナー部分の周壁溝までの間には溝が掘削されている。溝の底面の標高はピット４側が約６cm低い。溝はピット２埋没後掘削されていることから、竪穴住居19ｂの段階に築かれたと推察する。

住居覆土の最上層（①層）は暗い色調を呈し、自然堆積とみられる。②層から下層は淡い色調を呈し、地山ブロックが混じる。

堆積土中からは、多くの遺物が出土した。特に③層中からは、古墳時代前期前葉から中葉にかけての遺物（62～68）が多量に含まれており、住居廃絶後は土坑として機能していた可能性がある。

59・60は床面直上出土遺物。59は古墳時代前期前葉の甕である。60は複合口縁の甕で、口縁が直立する。61はピット出土の壺で、口縁部は直立する。62～64は甕で、65は深い杯部を有する低脚杯、66は鼓形器台、67・68は壺である。いずれも、古墳時代前期前葉に属する。Ｓ10～12・Ｆ28～Ｆ32は①・②層から出土した。Ｓ10は、打製の槍先状石製品である。安山岩製で、鎬は部分磨製される。一部に新しい剥離面があり、２つに折れた状態で出土した。Ｓ11は細粒花崗岩製の砥石である。Ｆ27は袋状の鋤先、Ｆ28は刀子で４本が錆着していた。①層からは、長楕円形の安山岩円礫が12個、１箇所にかたまって出土した。叩き石（Ｓ12）なども含まれる。また、図化しなかったが、①・②層から２cm角の水晶片が２個出土した。



①層　集石検出状況（東から）

図51　竪穴住居19出土遺物（２）

竪穴住居19ｂは床面出土遺物と形態から、古墳時代前期前葉と考える。

本住居から北西に約16m離れて、竪穴住居11が位置する。両住居は、形態・規模・堆積土が類似する。さらに、３本主柱穴から４本主柱穴への建て替え方法、床溝の切り方まで類似している。両住居の関連性は高く、同じ設計の元で構築された可能性がある。（森本・湯川）

３．竪穴

今回調査した遺構中、形態的に平坦な床面があり周壁溝や焼土面を持つなど竪穴住居に類するが、

柱穴など上屋構造を推定できる施設を持たないか、不明確なものが５基存在した。平面形態は方形を呈するものと楕円形を呈するものがあり、時期も弥生時代終末期や古墳時代中期と様々である。以下では、これらを一括して「竪穴」と呼称し報告する。

竪穴１（図52、図版22－１）

調査地平坦部北端、Ｃ６グリッドで検出した。土坑15を切って構築される。平面形態は長楕円形を呈し、床面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。床面の規模は、長軸3.0m、短軸2.3mを測る。

床面では、被熱して赤色硬化した部分を２箇所検出している。この２箇所を中心に、薄い炭化物の広がりを確認した。褐色・灰褐色土がレンズ状に堆積していた。

①・③層から、少量の土器が出土している。69は、③層からの出土した弥生時代終末期前葉の甕で、口縁部に波状文が施される。70は器台もしくは高杯で、赤色塗彩される。

床面が平坦で焼土面を有するものの、柱穴などを検出できなかったことから竪穴と判断し、出土遺物と堆積土の色調から弥生時代終末期に廃絶したと考えている。（湯川）

竪穴２（図53、図版18－５）

調査地平坦部南端、Ｇ６グリッドで検出した。竪穴住居14と竪穴３に切られており、北コーナー部分を検出したのみである。平面形態は、残存部分から方形を呈すると推定できるが、詳細は不明。検出面からの深さは、約８cmを測る。床面は平坦で、周壁溝が検出された。柱穴の検出には至らなかっ

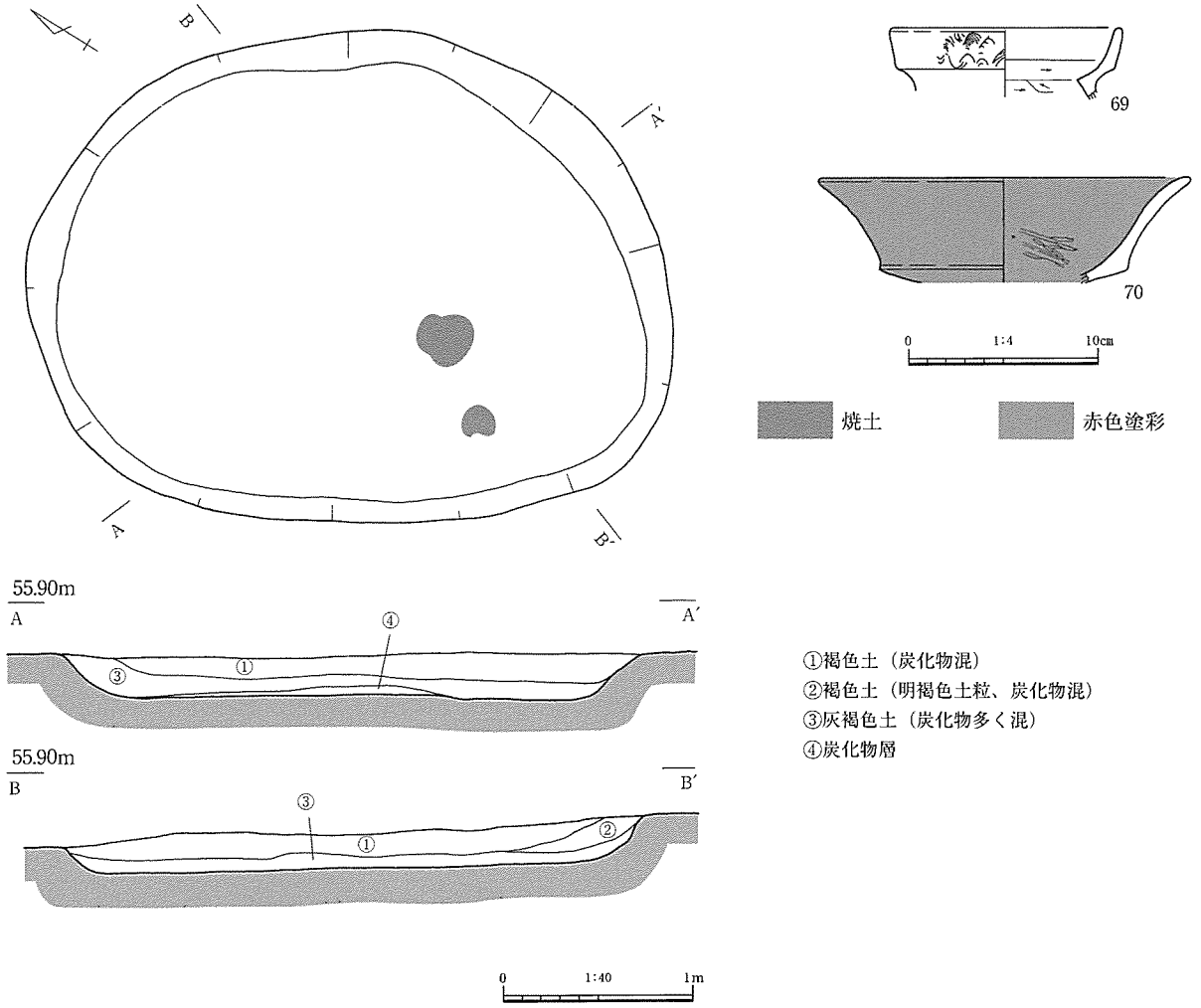
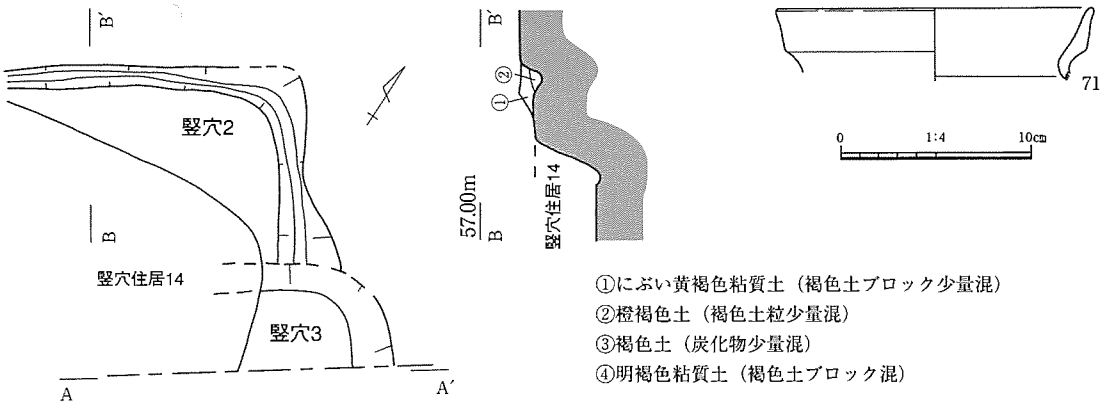


図52 竪穴１および出土遺物



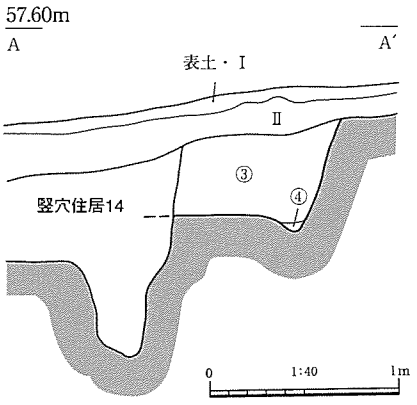


図53 竪穴２・３および出土遺物

たため、竪穴として報告する。

褐色系の土が堆積しており、少量の遺物が出土している。71は弥生時代終末期の甕で、①層から出土した。出土遺物から、弥生時代終末期の竪穴と考えている。

（湯川）

竪穴３（図53、図版18－５）

調査地平坦部南端、Ｇ６グリッドで検出した。竪穴住居14に切られ、竪穴２を切って構築されている。南側は調査地外へと延びており、平面形態の詳細は不明。検出面からの深さは、約50cmを測る。床面は平坦で、南端には周壁溝が検出された。柱穴の検出には至らず、竪穴として報告する。褐色系の土が堆積しており、少量の遺物が出土しているが、時期を判断し得るものはなかった。

弥生時代と考えられる竪穴２を切り、古墳時代前期前葉の竪穴住居14に切られることから、弥生時代終末期から古墳時代前期前葉の竪穴と考えている。（湯川）

４．掘立柱建物

掘立柱建物２（図54、図版22－２・50－２、表20）

調査地平坦部南側、Ｆ５グリッドで検出した。弥生時代中期後葉の竪穴住居１を切って構築される。桁行２間、梁行１間の掘立柱建物である。桁行（長軸）約3.6m、梁行（短軸）約2.3mを測る。主軸は尾根筋と直交しており、真北から東へ56°傾く。柱間寸法は、桁行約1.8m、梁行約2.3mを測る。ピットの底面標高は56.5～56.6mを測る。ピット内には、褐色系の土が堆積していた。

ピット1では径18cmの柱痕跡を、ピット６では柱抜き取り痕跡を確認している。少量の土器片が出土している。72は弥生時代後期前葉～中葉の甕で、ピット５から出土した。ピット３・５からは、20cm大の安山岩礫が底面から出土している。

堆積土の色調と形態から、弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉の遺構と判断した。（湯川）

掘立柱建物３（図54、表21）

調査地平坦部南側、Ｆ５グリッドで検出した。掘立柱建物２の南側に隣接し、竪穴住居１を切って構築される。桁行２間、梁行１間の掘立柱建物である。桁行（長軸）約3.6m、梁行（短軸）約2.5mを測る。主軸は尾根筋と直交しており、真北から東へ62°傾く。柱間寸法は、桁行方向の平均で約1.8m、梁行約2.3m、ピットの底面標高は56.5～56.6mを測る。ピット内には、褐色系の土が堆積し、極

少量の土器片が出土している。ピット３で、柱抜き取り痕跡を確認している。

堆積土の色調と形態から、弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉の遺構と判断した。　（湯川）

掘立柱建物４（図55、図版22－３、表22）

平坦部南西、Ｅ・Ｆ６グリッドに、尾根筋とほぼ直交する、桁行２間（3.1m）、梁行１間（2.2m）の掘立柱建物である。主軸は北から66度東にふる。面積は6.8㎡で、柱間隔は、ピット１－ピット２が1.4m、ピット２－ピット３が1.7m、ピット４－ピット５が1.6m、ピット５－ピット６が1.5mである。平面形は円形から楕円形を呈する。ピット２・３がやや深いが、底面レベルは56.00m付近でほぼ揃っている。④～⑥層は形態から柱痕と考えられ、柱径は15cm程度と推測できる。遺物はピット３・４から細片が少量出土しているが、時期を確定できるものはない。

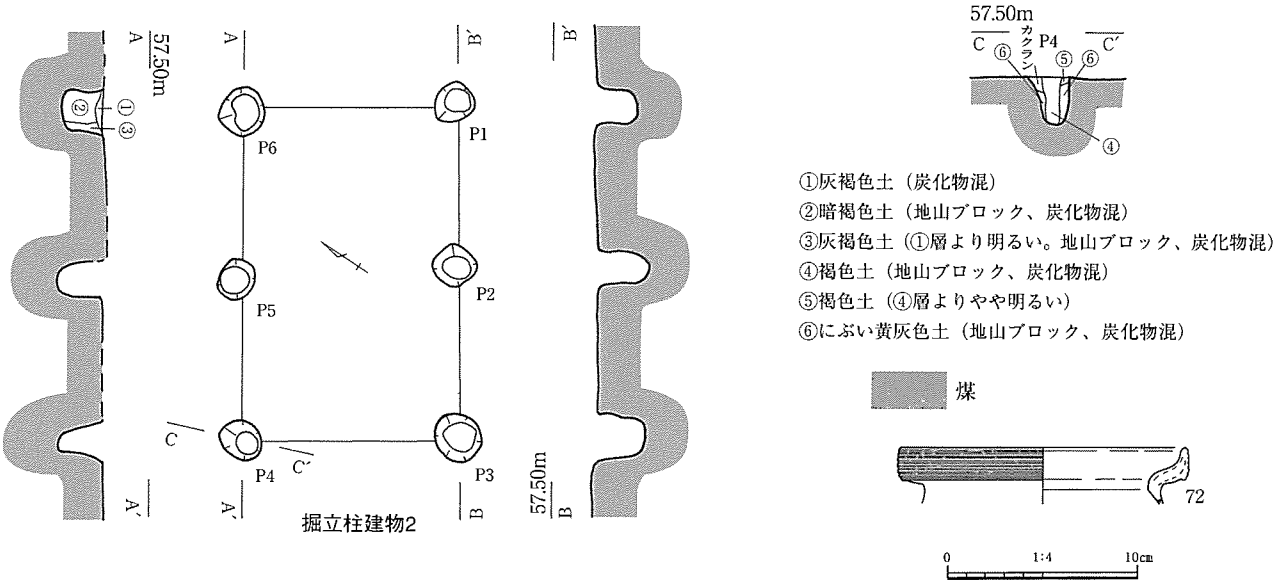


表20　掘立柱建物２ピット計測表

No.	長径cm	短径cm	深さcm	底面標高m	No.	長径cm	短径cm	深さcm	底面標高m
P1	45	41	44	56.6	P4	47	40	52	56.5
P2	47	42	53	56.5	P5	40	36	46	56.6
P3	52	47	63	56.5	P6	52	48	44	56.6

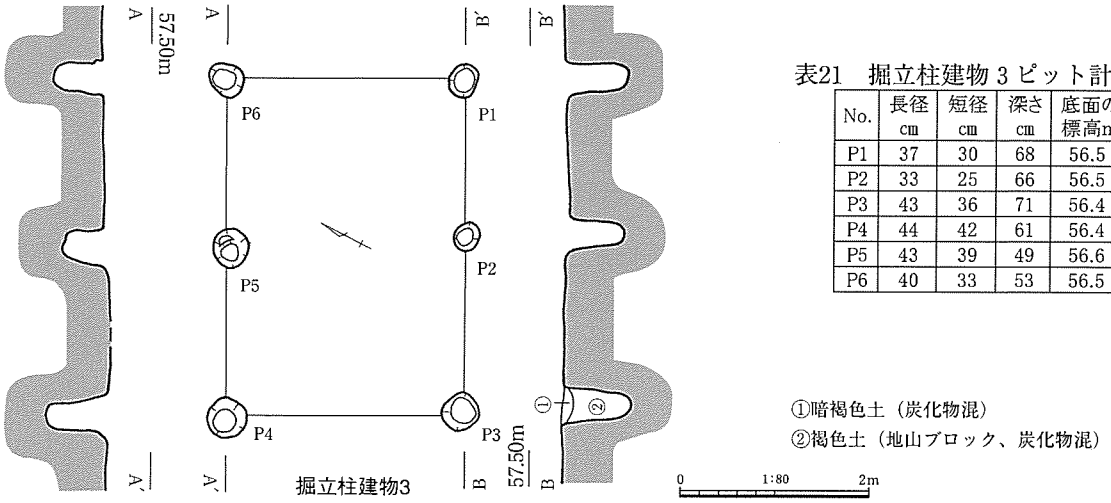
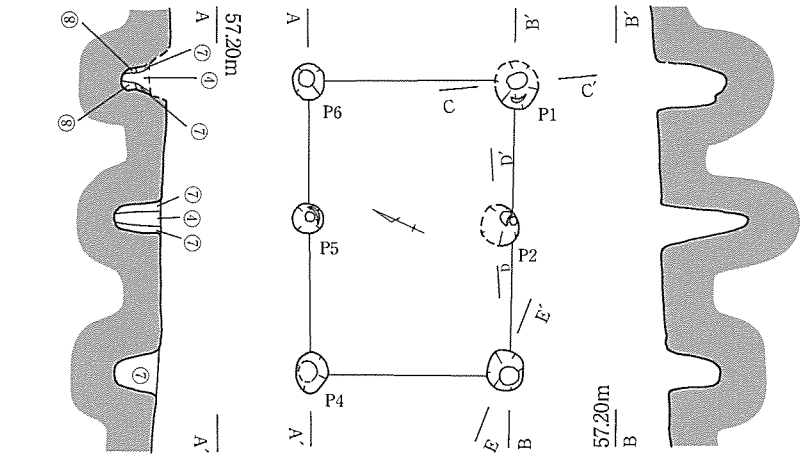


表21　掘立柱建物３ピット計測表

No.	長径cm	短径cm	深さcm	底面の標高m
P1	37	30	68	56.5
P2	33	25	66	56.5
P3	43	36	71	56.4
P4	44	42	61	56.4
P5	43	39	49	56.6
P6	40	33	53	56.5

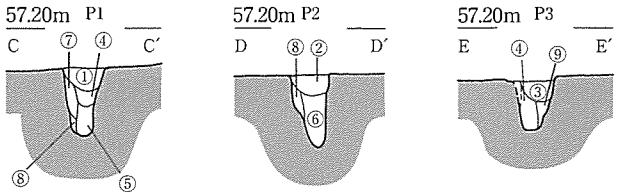
図54　掘立柱建物２・３および出土遺物



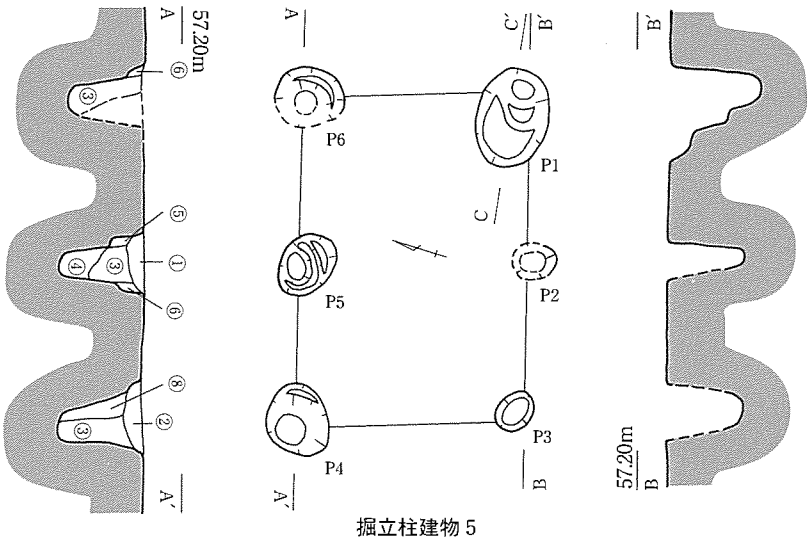
掘立柱建物４

表22　掘立柱建物４ピット計測表

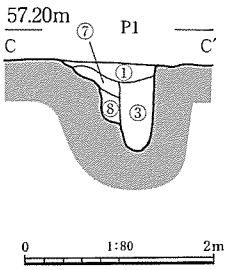
No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm	底面の標高m
P1	(50)	47	73	56.1
P2	45	(42)	93	55.8
P3	46	41	98	55.7
P4	45	35	48	56.1
P5	34	32	50	56.1
P6	41	34	30	56.2



①褐色土（地山ブロック多く、炭化物少量混）
②暗褐色土（地山ブロック、炭化物少量混）
③にぶい黄褐色土（地山ブロック、炭化物少量混）
④暗褐色土（地山ブロック、炭化物少量混）
⑤にぶい黄褐色土（地山ブロック混）
⑥褐色土（地山ブロック多く混）
⑦暗褐色土（地山粒少量混）
⑧にぶい褐色土（地山ブロック混）
⑨Ⅴ・Ⅵ層の混土



掘立柱建物５



①にぶい黄褐色土（地山ブロック少量混）
②暗褐色土（地山ブロック、炭化物微量混）
③暗褐色土（地山ブロック多く混）
④暗褐色土
⑤褐色土（地山ブロック少量混）
⑥にぶい褐色土
⑦黒褐色土と暗褐色土の混土（地山ブロック少量混）
⑧暗褐色土（地山ブロック多く混）

表23　掘立柱建物５ピット計測表

No.	長径cm	短径cm	深さcm	底面標高m	No.	長径cm	短径cm	深さcm	底面標高m
P1	105	76	98	55.9	P4	78	70	88	55.9
P2	(48)	(40)	68	56.2	P5	72	57	91	55.9
P3	46	36	21	56.1	P6	76	(66)	80	56.0

図55　掘立柱建物４・５

主軸の方向や、規模から掘立柱建物５と同様の時期と考えられ、褐色系の覆土を持つことから弥生時代後期後葉から古墳時代前期前葉の遺構と考えている。（三木）

掘立柱建物５（図55、図版22－４・22－５、表23）

平坦部中央、Ｅ５・６、Ｆ５・６グリッドに、尾根筋とほぼ直交する、桁行２間（3.5m）、梁行1間（2.4m）の掘立柱建物である。主軸は北から73度東にふる。面積は8.4㎡で、柱間隔は、ピット１－２が1.9m、ピット２－３が1.6m、ピット４－５が1.8m、ピット５－６が1.7mである。平面形は楕円形を呈し、断面形態は片側がスロープ状を呈する浅い掘り方を持つ。ピット１が一番大きく、長径104

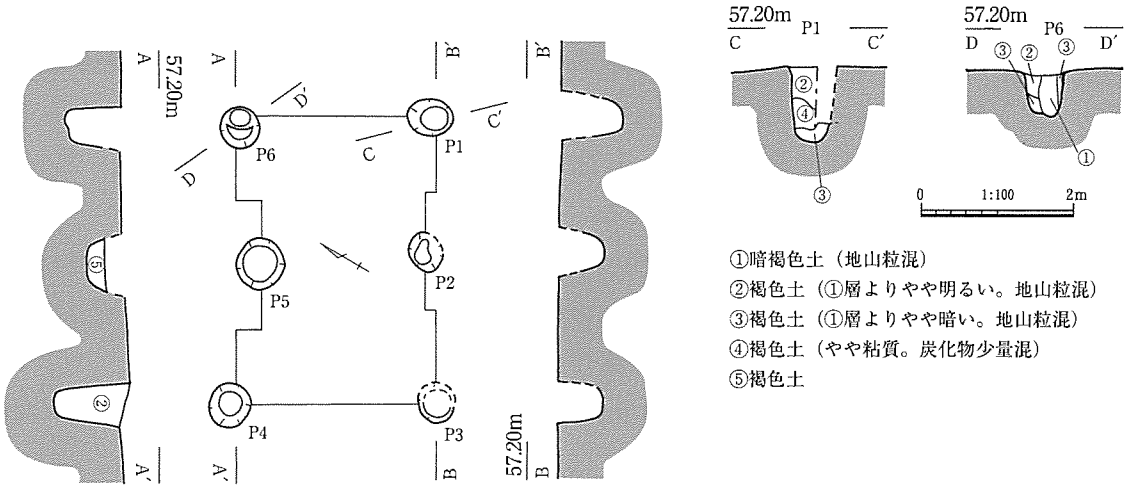


表24　掘立柱建物６ピット計測表

No.	長径cm	短径cm	深さcm	底面標高m	No.	長径cm	短径cm	深さcm	底面標高m
P1	50	40	64	56.2	P4	49	44	82	56.1
P2	43	(38)	46	56.4	P5	56	51	36	56.4
P3	(44)	42	46	56.4	P6	45	42	59	56.2

図56　掘立柱建物６

cm、短径76cmを測る。③・④層は形態から柱痕跡と考えられ、柱径は約30cm程度と推測できる。検出面からの深さはややまばらであるが、底面レベルは56.00m付近でほぼ揃っている。太い柱痕跡とスロープを有することから、掘立柱建物２・３など他の建物と比べて高い建物であった可能性がある。遺物はピット４・５から細片が少量出土しているが、時期を確定できるものはない。

主軸の方向や、規模から掘立柱建物４と同様の時期と考えられ、Ⅲ面での検出で、人為的に埋め戻したと考えられる古墳時代前期前葉の竪穴住居10を切って構築されている事から、古墳時代前期前葉の遺構と考えている。（三木）

掘立柱建物６（図56、表24）

調査地平坦部中央Ｅ・Ｆ５グリッドで検出した。桁行（長軸）約3.0m、梁行（短軸）約2.1m、桁行方向の柱間寸法は平均で1.5mを測る。主軸は尾根筋と直交しており、真北から東へ61°傾く。ピット２・５は、やや内側に位置し他のピットと比べて浅く、この建物に伴わない可能性もある。しかし、堆積する土の色が他のピットと同じく土色を呈することを重視し、一連の柱穴として報告する。遺物は、少量の土器が出土しているが、時期を特定できるものはなかった。

堆積土の色調と、弥生時代中期後葉の土坑５を切り、古墳時代前期前葉の竪穴住居19に切られることから、弥生時代後期後葉～古墳時代前期前葉期の遺構と判断した。（湯川）

５．テラス

テラス１（図57、図版23、表25）

東斜面部南側の上半部、Ｄ３・４グリッドで検出した。テラス14に切られ、テラス８と溝１を切って構築される。床面の北東側は、流失している。残存部分の平面形態は、南東コーナーが直角に近い角度で屈曲するのに対し、北西コーナーは湾曲している。床面は平坦で、ピット９基を検出した。床面中央部には、褐色土が堆積するピット２～７が集中している。ピット３・７のように深いものもあり、これらのいくつかは上屋を支える柱穴であった可能性がある。ピット９は、テラス外側の袋状土

坑部分と、テラス内側の一段浅い部分が、テラス北西コーナー部分で接合している。また、袋状土坑部分の壁はオーバーハングするが、接合部分の壁面のみ垂直に近い角度で立ち上がることから、テラスと一体のものと判断した。袋状土坑部分は、底径約1.9mを測る。崩落土と流入土と考えられる土が互層状に堆積しており、自然堆積と考えられる。形態から貯蔵穴と考えられ、内側の一段低い部分は、貯蔵穴への階段の役割も果たしていた可能性がある。

テラス部には、地山質土を多く含んだ①～⑤層の上層と、やや暗い褐色土を呈する⑥・⑦層の下層に大別できる。上層は、このテラスを切るテラス14の盛土の可能性がある。床面下には、地山質土ブロックを主体とする⑩層が堆積しており、盛土や掘り方内の堆積と考えられる。

堆積土中から多くの遺物が出土した。73・Ｓ13は床面直上、74は下層からの出土である。73・74は弥生時代終末期前葉の甕である。Ｓ13は石鎌もしくは大型の石包丁で、実測図下側の刃部には光沢のある部分があり、使用痕と考えられる。

出土遺物と、他の遺構との切り合いから、弥生時代終末期前葉の遺構と考えている。　　（湯川）

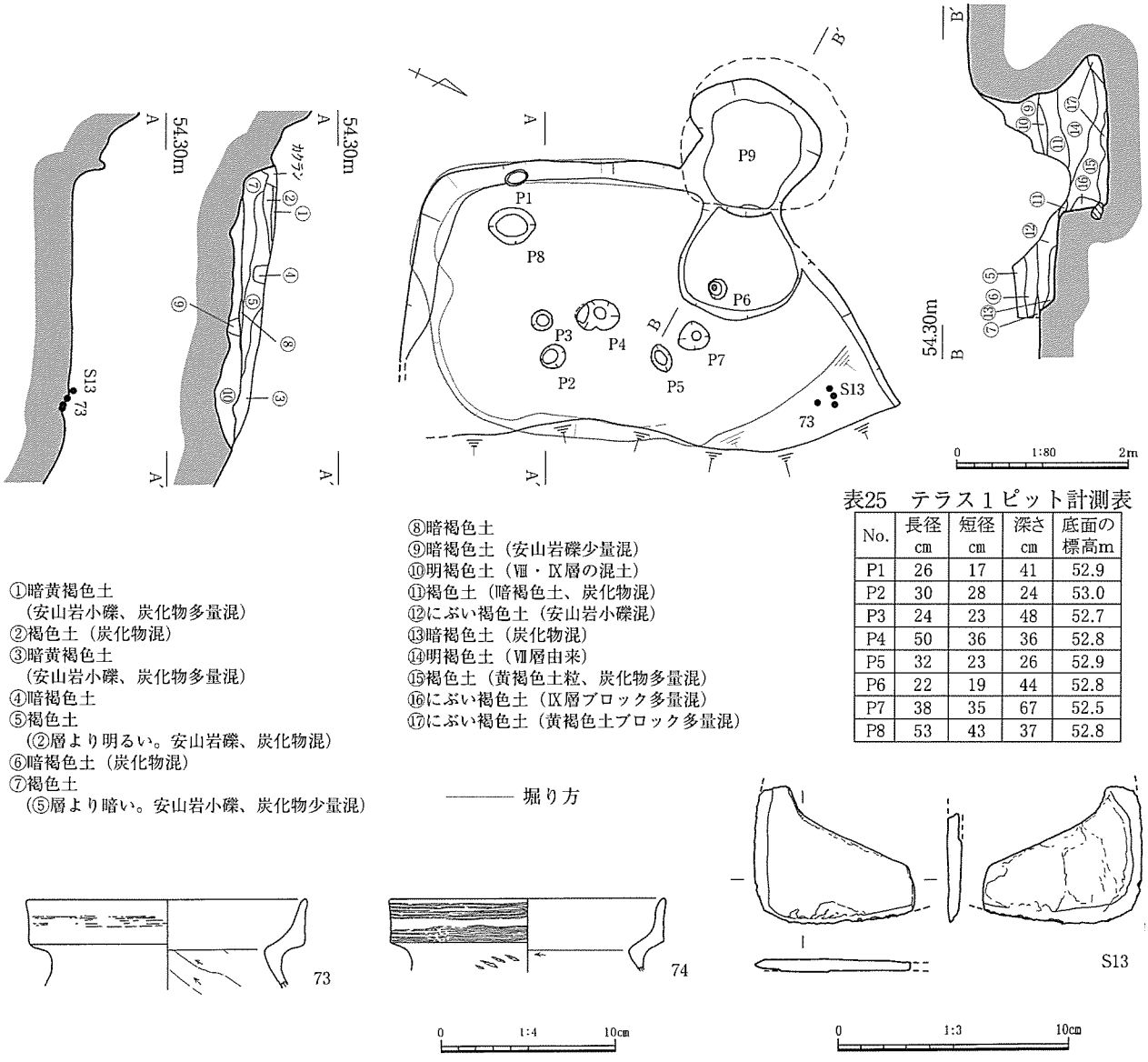


表25　テラス１ピット計測表

No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm	底面の標高m
P1	26	17	41	52.9
P2	30	28	24	53.0
P3	24	23	48	52.7
P4	50	36	36	52.8
P5	32	23	26	52.9
P6	22	19	44	52.8
P7	38	35	67	52.5
P8	53	43	37	52.8

図57　テラス１および下層出土遺物

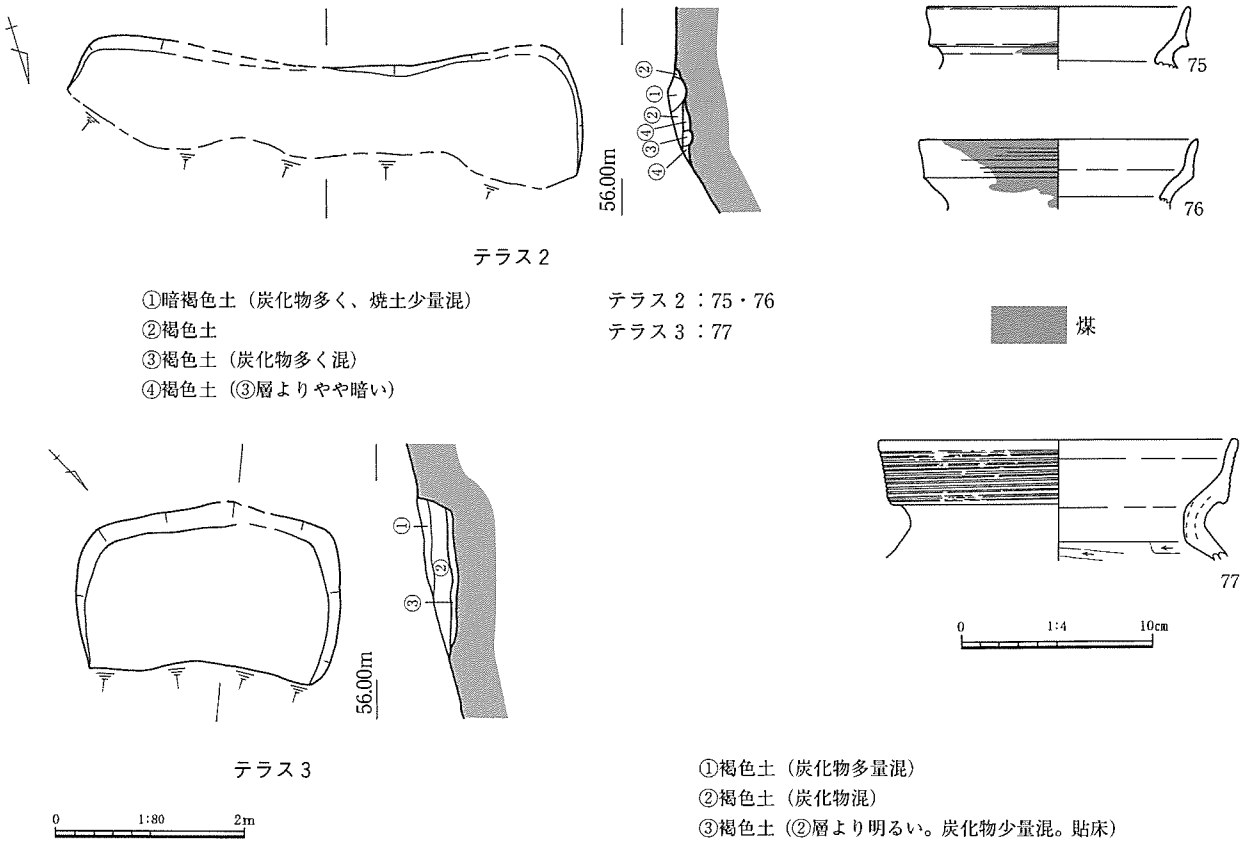


図58　テラス２・３および出土遺物

テラス２・６（図58・59、図版23－５・50－３・24－５・50－４・64－３）

東斜面部中央、平坦部からの傾斜変換点付近で東西に並んで検出した。両遺構とも、北東側が流失し、平面形態の詳細は不明。②層下面が床面にあたる。Ｂ層と同じ褐色土が堆積しており（テラス２②層・テラス６①層）、少量の遺物が出土している。75・76は弥生時代終末期前葉の甕で、テラス２の②層から出土した。83～86・Ｆ33は、テラス６から出土した。83は弥生時代終末期後葉の甕、85は弥生時代後期後葉の甕である。86は弥生時代後期前葉から中葉の甕で、口縁部には3条の平行沈線と竹管文が施され、２箇所に穿孔があり、焼成は非常に良好である。Ｆ33は刀子である。

出土遺物と堆積土の色調から、弥生時代後期後葉から終末期の遺構と判断した。　（湯川）

テラス３（図58、図版24－１・50－３）

東斜面部西側、平坦部からの傾斜変換点付近で検出した。北東側は流失し、平面形態の詳細は不明。残存部分から、隅丸方形を呈していた可能性がある。床面は平坦で、残存する南西辺は、2.2mを測る。

炭化物を多く含んだ褐色土が堆積しており、床面下では、貼りの可能性がある③層を検出した。①・②層から少量の土器が出土している。77は、弥生時代後期後葉の甕で、②層から出土した。

出土遺物とＢ層除去後に検出したことから、弥生時代後期後葉～終末期の遺構と判断した。（湯川）

テラス４（図59、図版24・50－3）

東斜面部東端、Ｅ２グリッドで検出した。北東側が流失し、西側は調査地外へと延びるため、平面形態の詳細は不明。床面は平坦で、周壁溝を検出した。褐色系の土が堆積しており、③層は貼り床の可能性がある。①層から、弥生時代終末期後葉を最新とする少量の土器が出土している。

出土遺物と堆積土から、弥生時代終末期の遺構と判断した。　（湯川）

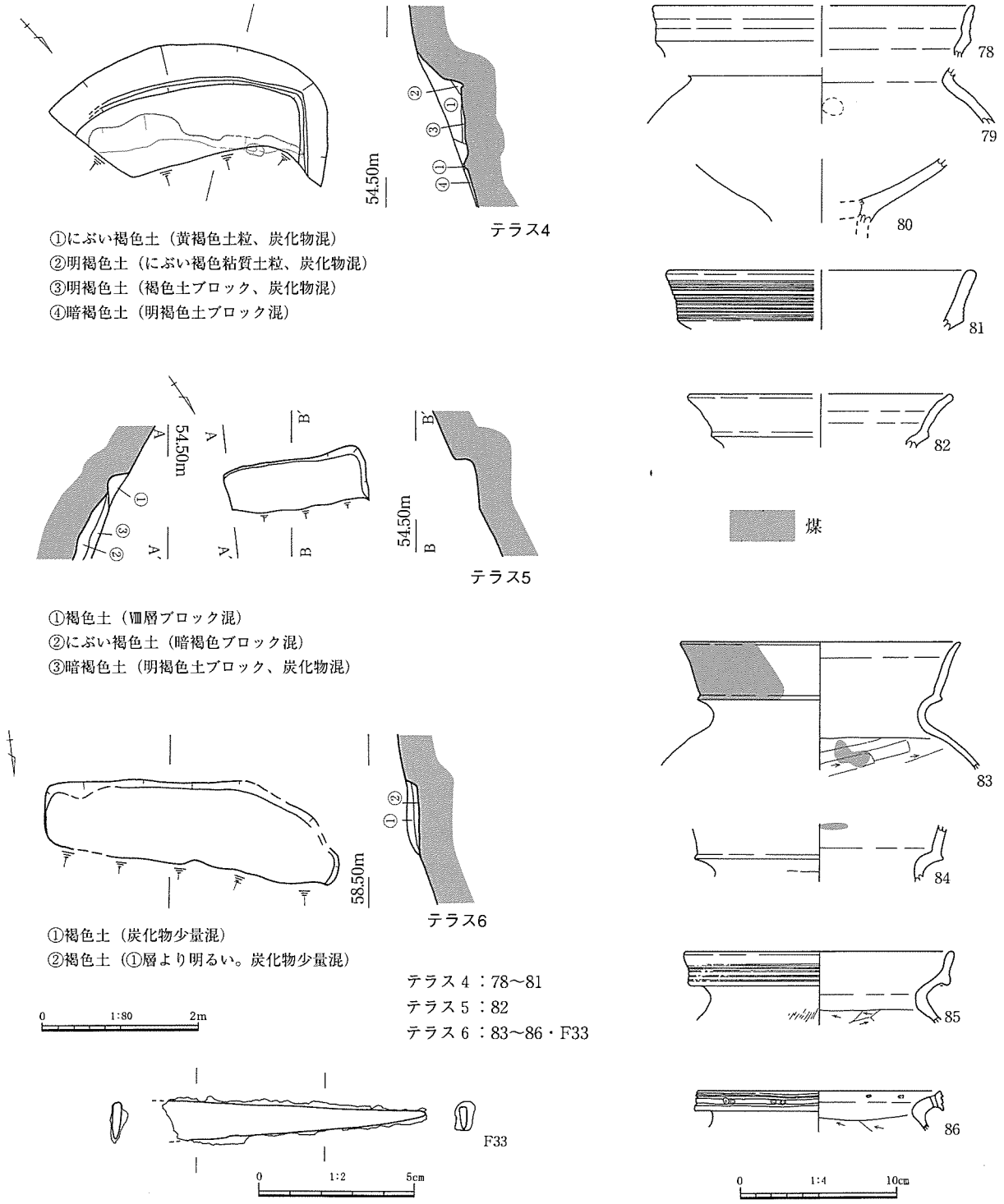
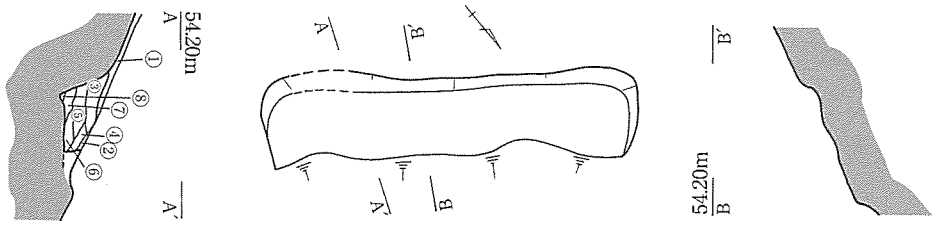


図59　テラス４～６および出土遺物

テラス５・７（図59・60、図版24－４・50－４・50－５）

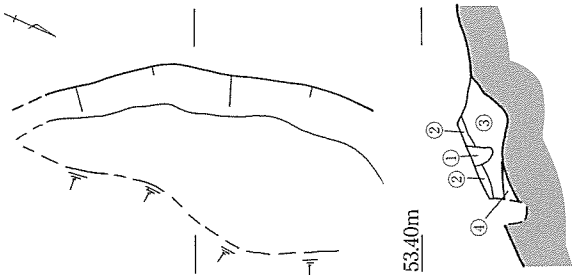
東斜面部東側、Ｄ３グリッドで南北に並んで検出した。両テラスとも北東側が流失し、平面形態の詳細は不明。残存部分から、方形を呈していたと推定している。テラス５の床面は流土もしくは盛土と考えられる②・③層上に構築されていた。テラス５の②層は、テラス７を覆っている。

テラス５の①層中から古墳時代前期前葉の甕（82）が出土している。テラス７からは弥生時代終末期後葉を最新とする遺物が出土している。両遺構とも、出土遺物から弥生時代終末期後葉～古墳時代



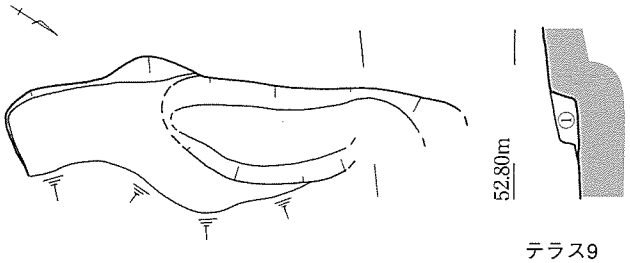
テラス7

①にぶい褐色土（暗褐色土粒混）
②暗褐色土（炭化物混）
③にぶい黄褐色土（暗褐色土粒混）
④褐色土（暗褐色土粒混）
⑤褐色土
⑥暗褐色土
⑦にぶい褐色土（暗褐色土粒混）
⑧にぶい褐色土



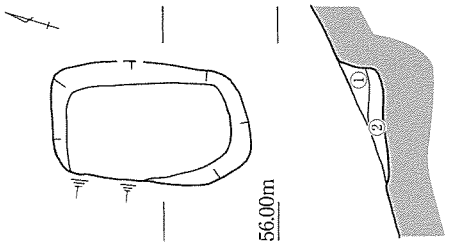
テラス8

①暗褐色土（炭化物混）
②にぶい褐色土
③にぶい褐色土（炭化物少量混）
④にぶい褐色土（しまりあり）



テラス9

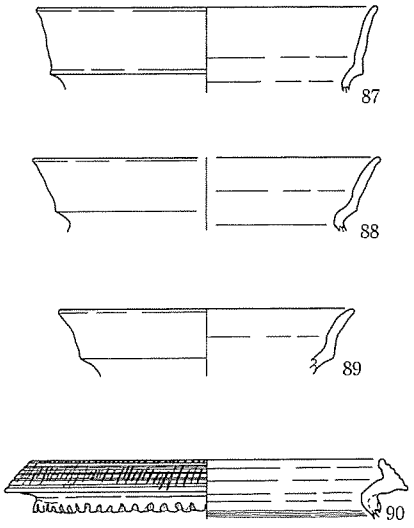
①にぶい褐色土（炭化物混）



テラス10

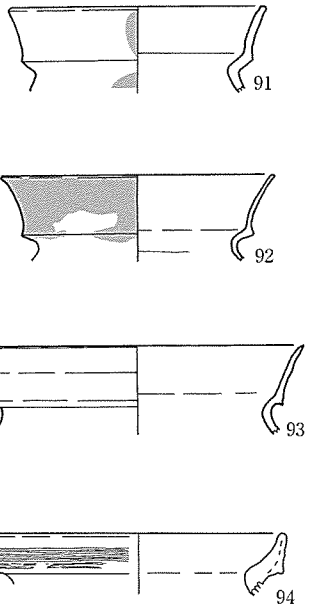
①暗褐色粘質土（炭化物ごく少量混）
②暗褐色粘質土（黒褐色土小ブロック少量、炭化物ごく少量混）

0　1:80　2m



テラス７：87～90
テラス10：91～94

煤



0　1:4　10cm

図60　テラス７～10および出土遺物

前期前葉の遺構と判断した。テラス７→５の順で構築されたと考えられる。　（湯川）

テラス８（図60、図版50－５）

東斜面部南側の上半部、Ｄ３グリッドで検出した。床面の北東側は流失し、平面形態は不明。床面は平坦で、一部は盛土と考えられる④層上に構築されていた。少量の遺物が出土した。弥生時代終末期前葉のテラス１に切られることから、弥生時代後期後葉～終末期前葉の遺構と判断した。　（湯川）

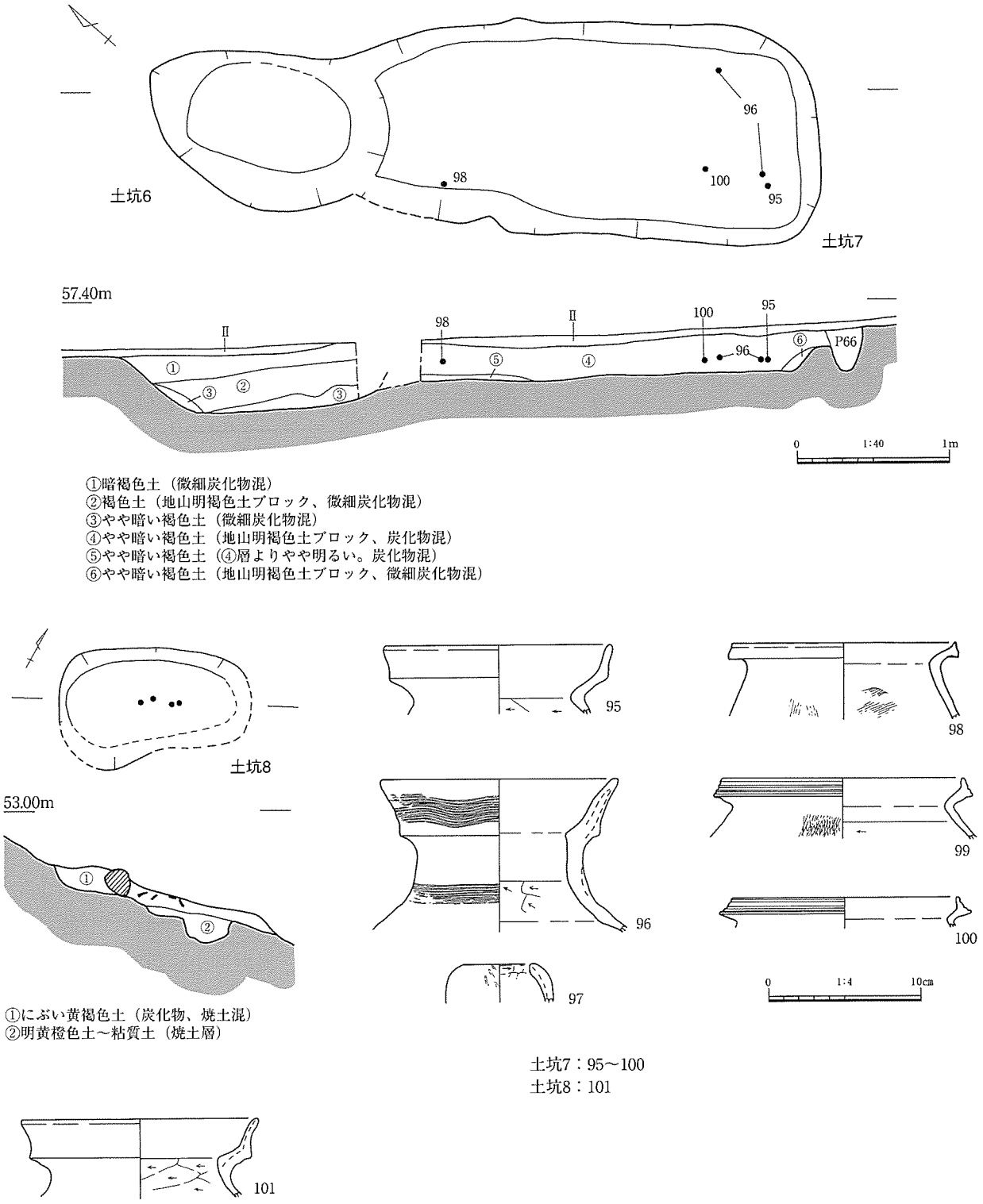


図61　土坑６～８および出土遺物

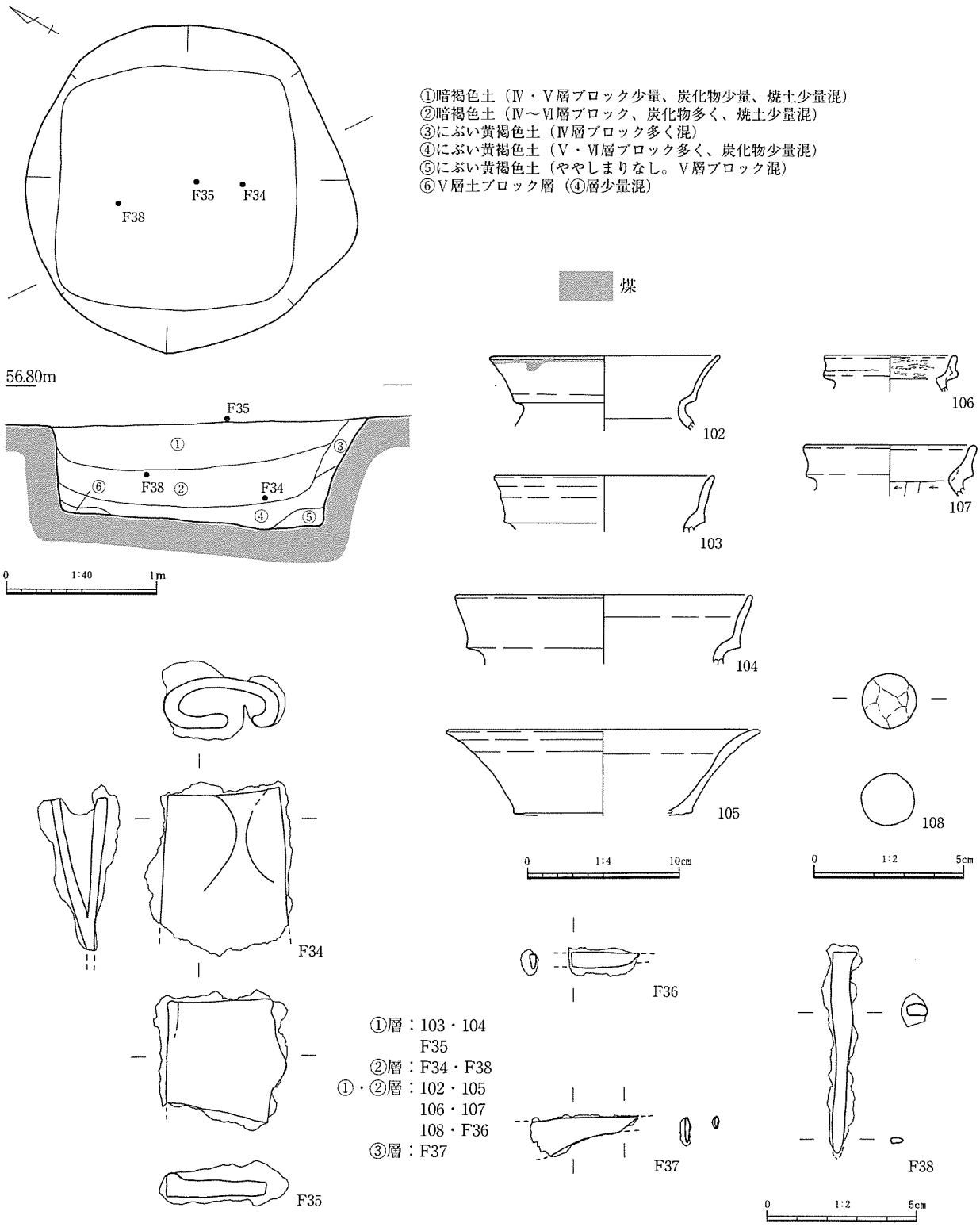


図62　土坑９および出土遺物

テラス９・土坑16・土坑17（図60・64、図版26－６）

東斜面部北側、Ｂ５グリッドで検出した。北東側が流失し、遺存状況は悪い。テラス９の北コーナーで土坑17が、南コーナーで土坑16が検出された。３遺構とも、主としてにぶい褐色土が堆積していた。テラスの両端にあり、両土坑の底面標高、主たる堆積土も同じことから、３遺構は一連の遺構であった可能性がある。

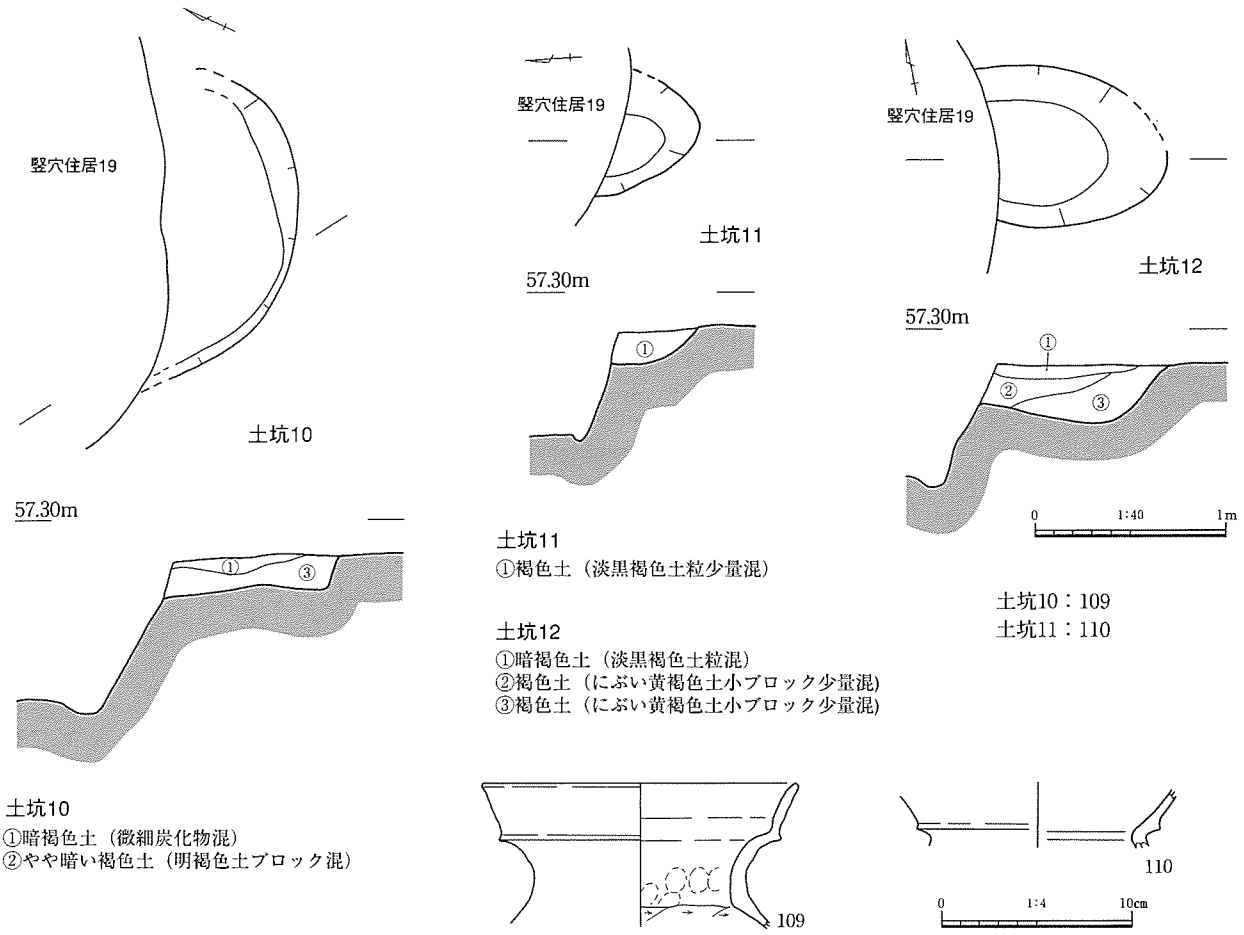


図63　土坑10～12および出土遺物

土色とＢ層除去後に検出したことから、弥生時代後期後葉～終末期の遺構と判断した。　（湯川）

テラス10（図60、図版24－7）

西斜面部中央、Ｆ７グリッドで検出した。西側を流失するが、残存部から方形の平面形態を呈すると推定できる。91は古墳時代前期前葉の甕、92・93が弥生時代終末期後葉の甕である。出土遺物から、弥生時代終末期後葉～古墳時代前期前葉の遺構と判断した。　（湯川）

６．土坑

土坑６・７（図61、図版25－６・25－７）

平坦部南東で検出した。両土坑の長軸方向は、尾根筋と平行する。調査時の攪乱により、切り合い関係は不明。平面形態は、土坑６が楕円形、土坑７が長方形を呈する。褐色系の土が堆積しており、両土坑とも色調は大差ない。土坑６からは少量の遺物が出土したが、図化できるものはなかった。土坑７は、④層から多くの遺物が出土している。95は弥生時代終末期前葉の甕、96は弥生時代後期後葉～終末期前葉の壺、97は土製品で土笛の可能性がある。98～100は弥生時代中期後葉の甕である。

堆積土と出土遺物から、両遺構とも弥生時代後期後葉～終末期前葉の遺構と判断した。　（湯川）

土坑８（図61）

東斜面中央、Ｄ３グリッド、テラス８の北側に位置する土坑である。平面形は長楕円形で、長径約2.6m、短径1.4m、検出面からの深さは最大約50cmである。①層から土器が多く出土している。

101は弥生時代終末期前葉の甕口縁で、①層出土である。テラス１に切られ溝１を切って構築され

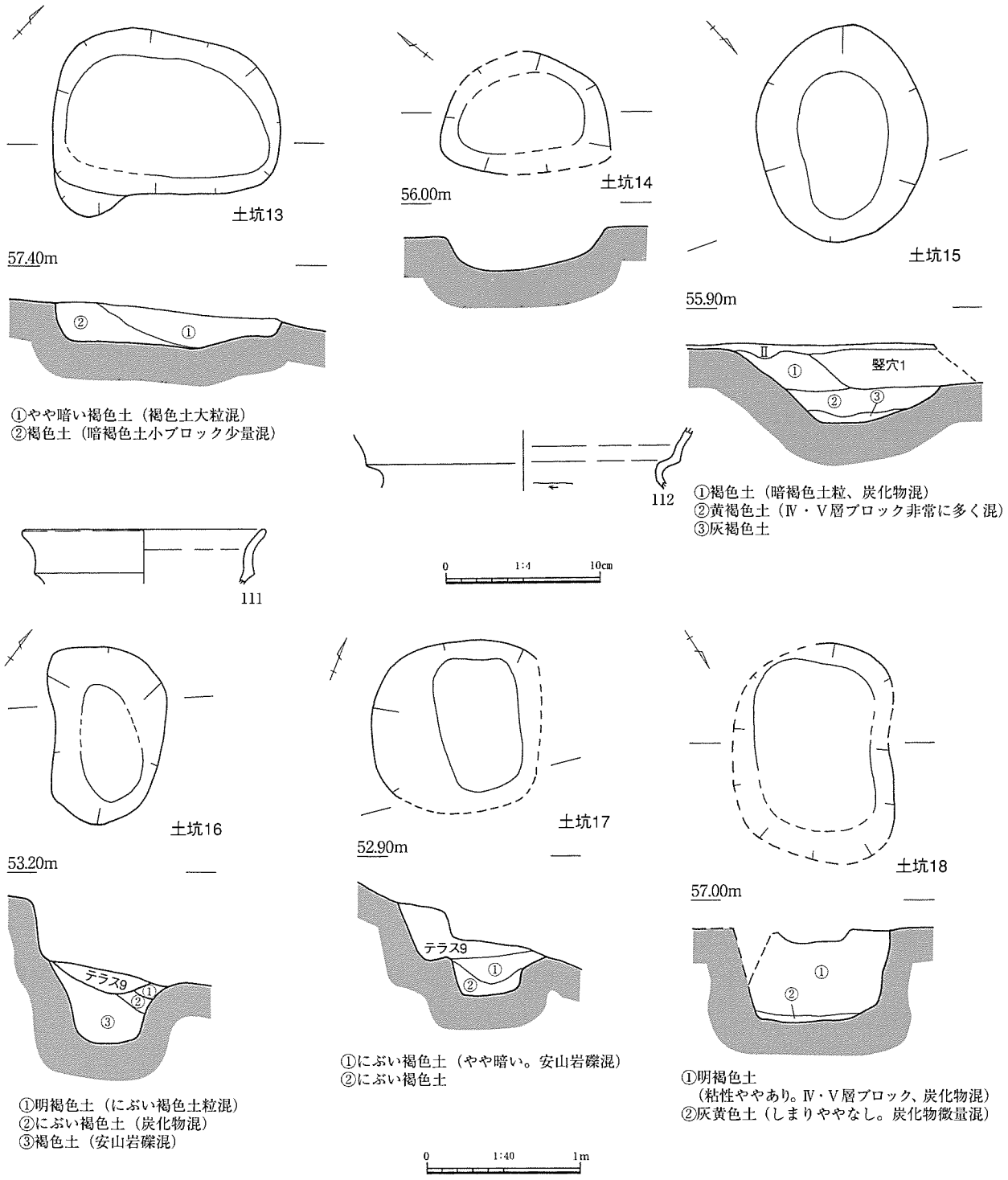


図64　土坑13～18および出土遺物

ていることと、出土遺物から弥生時代終末期の遺構と考えられる。　（三木）

土坑９（図62、図版25－３・25－５・51－１）

平坦部中央、Ｅ６グリッドに位置する。底面の平面形は一辺約1.6mの隅丸方形で、検出面からの深さは約1.4mである。断面から、①・②層土が③層土以下の土を切って堆積していることが観察できる。②層土上面の中央付近で焼土塊が検出されている。遺物は、①・②層土中から多く出土している。周囲には４本のピット（ピット434・438・445・454）がめぐり、土坑９に伴う可能性がある。

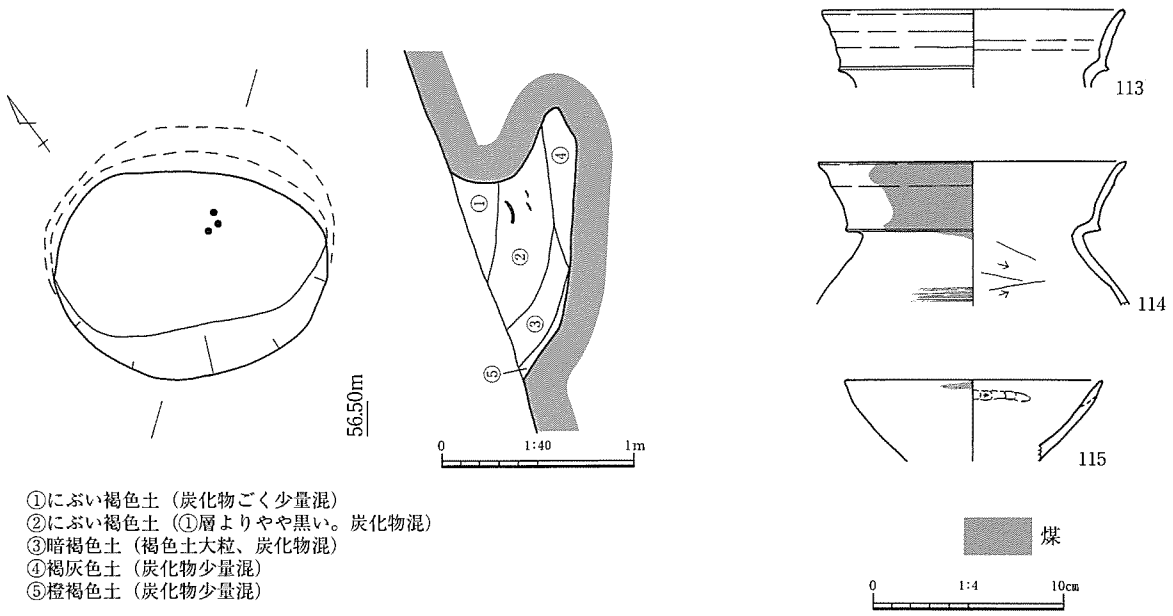


図65　土坑19および出土遺物

Ｆ37を除き、①もしくは②層の出土遺物である。102～104は甕の口縁部で、105は鼓形器台である。弥生時代終末期後半のものである。106・107は小型の壺である。弥生時代後期後葉～終末期のものである。108は無孔の土玉である。Ｆ34～38は鉄製品である。Ｆ34・35は、同一個体の袋状鉄斧で、Ｆ36・37は刀子である。Ｆ38は釘である。出土遺物から弥生時代終末期の遺構と考えられる。　（三木）

土坑10・11・12（図63、図版51－１）

平坦部南東、Ｆ４・５グリッドに位置する。３遺構とも竪穴住居19に切られているため、正確な規模は不明である。埋土はやや暗めの褐色系で、レンズ状の堆積であることから、自然堆積と考えられる。109は土坑10から、110は土坑11から出土している。109は壺である。110は鼓形器台である。弥生時代終末期後葉から古墳時代前期前葉のものである。

土坑12からは遺物は出土していないが、土坑11と同様な形態である事と、出土遺物から、３遺構とも弥生時代終末期後半から古墳時代前期前葉のものと考えられる。　（三木）

土坑13（図64、図版26－１・61－１）

平坦部南東、Ｆ４グリッドに位置する。平面形は略方形で、長軸1.5m、短軸1.1m、検出面からの深さ25cmを測る。褐色系の土が堆積しており、弥生時代終末期後葉～古墳時代前期前葉の土器が少量出土した。出土遺物から、弥生時代終末期後葉～古墳時代前期前葉の遺構と判断した。　（三木）

土坑14（図64、図版61－１）

平坦部北東の傾斜変換点付近、竪穴住居18の東側に隣接する。平面形態は、不正楕円形を呈し、長軸1.1mを測る。堆積土は、炭化物を含んだ褐色土の単層で、少量の遺物が出土した。112は弥生時代終末期後葉～古墳時代前期前葉の鼓形器台で、本遺構もこの時期の土坑と考えられる　（湯川）

土坑15（図64）

平坦部北に位置する。②層土は地山ブロックを多く含んでおり、上面は竪穴１の床面と同じ標高である。竪穴１構築時に、人為的に埋められた可能性があろう。遺物は出土していない。竪穴1と大きな時期差がないと考え、弥生時代後期後葉～終末期のものと判断した。　（三木）

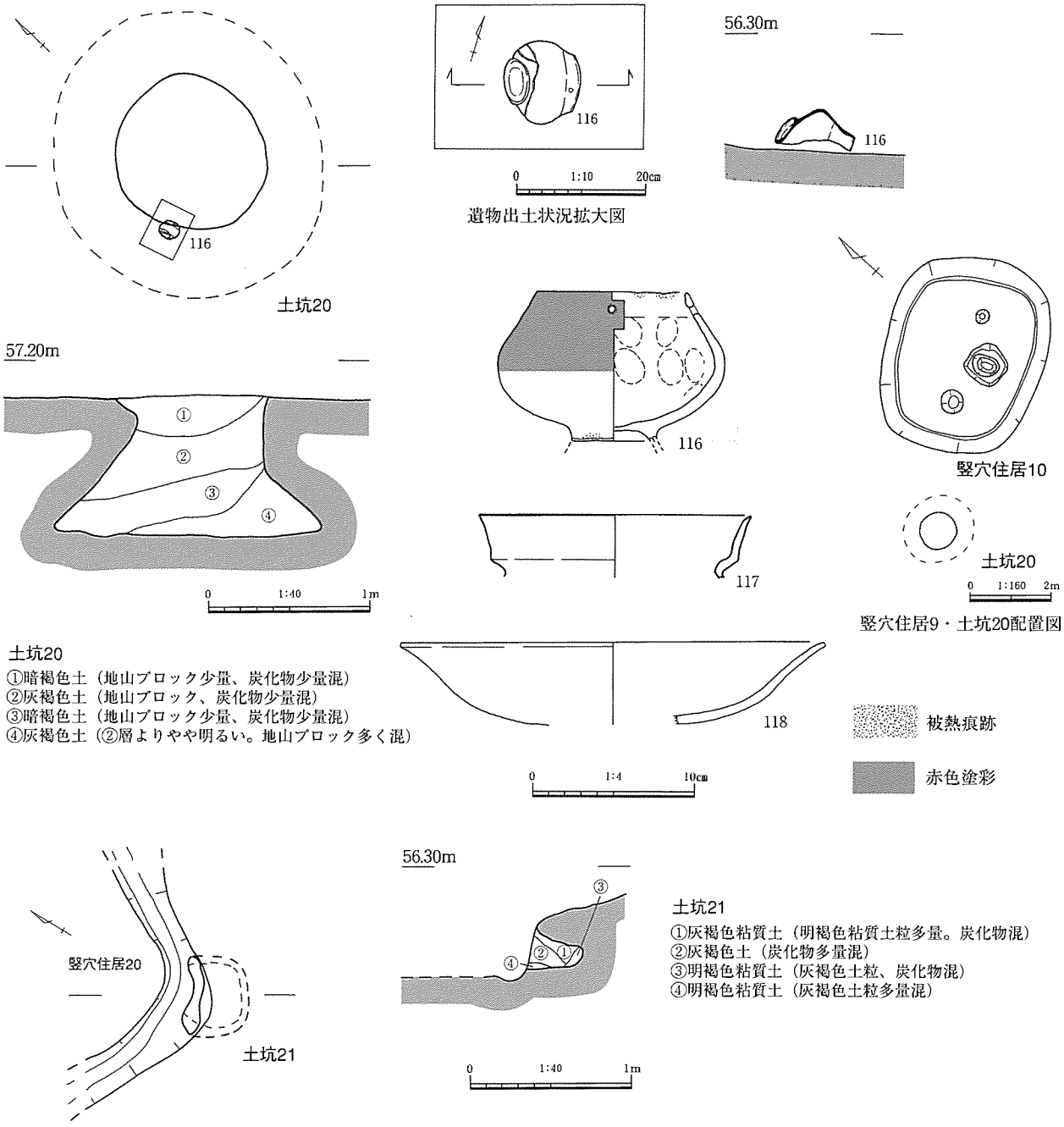


図66　土坑20・21および出土遺物

土坑18（図64、図版26－３）

平坦部中央、Ｆ６グリッドに位置する。正確な規模は不明である。検出面からの深さは56cmを測る。埋土はⅥ層土が主体である。遺物は出土していない。弥生時代中期から後期後葉の遺構はⅥ層を切って構築されている遺構がない事と、古墳時代前期前葉の土坑24と竪穴住居10に切られていることから、弥生時代終末期から古墳時代前期前葉のものと考えられる。（三木）

土坑19（図65、図版26－４・51－１）

西斜面南端、Ｈ７グリッドに位置する、長径1.4m、短径1.1mの平面形が楕円形を呈する土坑である。検出面からの深さは65cmを測る。断面形は斜面上側がオーバーハングしており、下側の壁面はゆるく立ち上がる。遺物が多く出土している。113・114は甕で、115は椀である。弥生時代終末期後葉から古墳時代前期前葉のものである。当遺構もこの時期に該当するものと考えている。（三木）

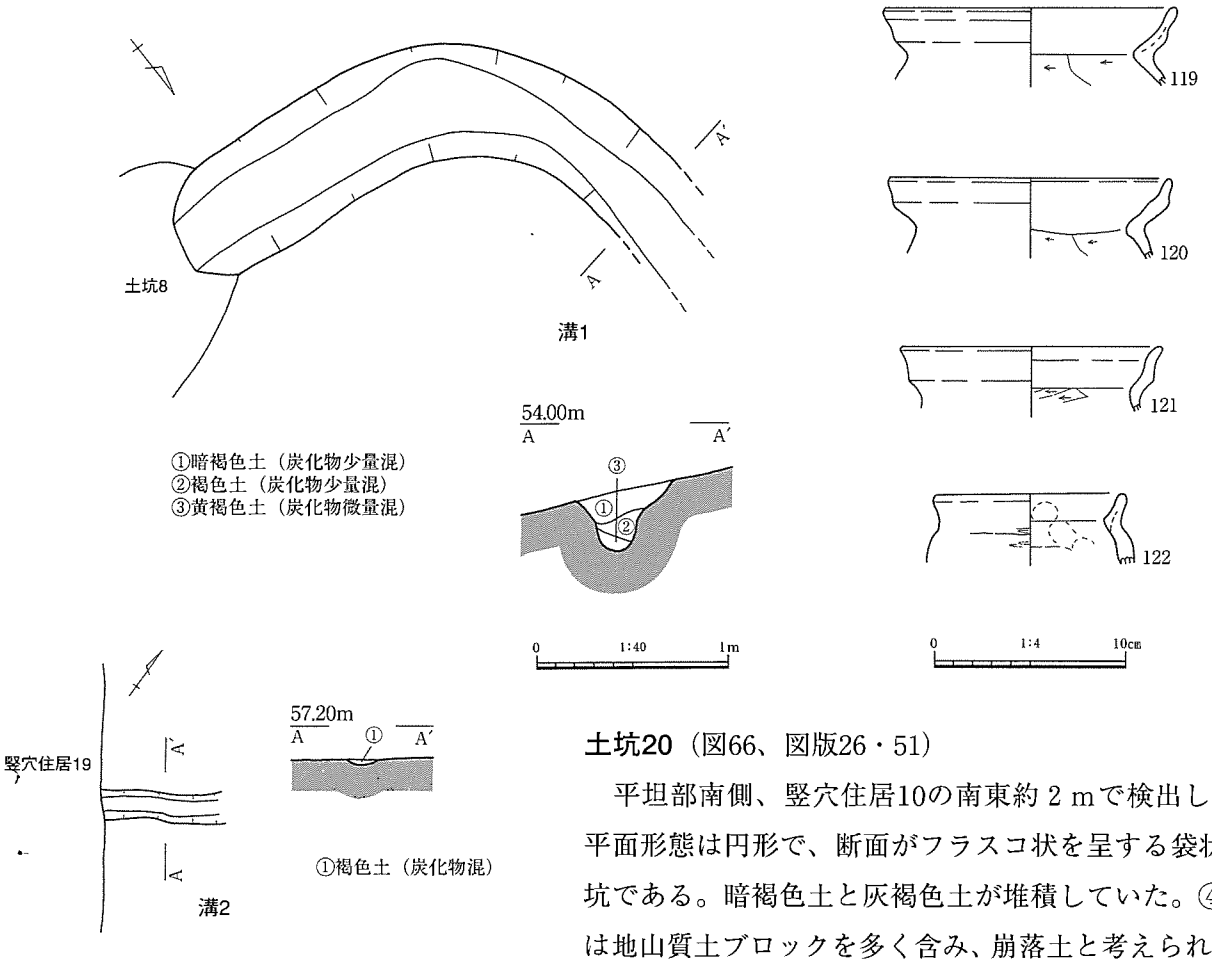


図67　溝１・２および出土遺物

土坑20（図66、図版26・51）

平坦部南側、竪穴住居10の南東約２ｍで検出した。平面形態は円形で、断面がフラスコ状を呈する袋状土坑である。暗褐色土と灰褐色土が堆積していた。④層は地山質土ブロックを多く含み、崩落土と考えられる。③層を中心に多くの遺物が出土している。116は、ブランデーグラス状の杯部を持つ高杯で、床面に伏せた状態で、約１／２個体が出土した。脚部切り取り、赤色塗彩され、口縁部には穿孔が1箇所ある。口縁部と底部には被熱し変色した部分がある。同一個体の破片が竪穴住居10から出土しており、両者の関連性は高いと推定している。117は甕、118は高杯、いずれも弥生時代終末期後葉の遺物で、③層から出土した。床面直上から出土した116から、古墳時代前期前葉の遺構と考えられる。（湯川）

土坑21（図66）

調査地平坦部東縁辺の、中央で検出した。竪穴住居20の壁面から横方向に掘り込まれ、掘り込む方向は住居壁と直交する。住居に伴う施設の可能性があるが、堆積土から当該期の遺構として報告する。遺物は出土していない。（湯川）

７．溝

溝１（図67）

東斜面中央に位置する。斜面下に向かい湾曲する。主に①・②層から多くの土器が出土している。119～121は甕口縁で、内面頸部までケズリで調整されている。胎土中に多くの安山岩小礫を含む。弥生時代終末期前葉のものである。122は壺と考えられる。テラス１、土坑８に切られることと、出土遺物から、弥生時代後期後葉～終末期前葉のものと考えている。（三木）

溝２（図67）

竪穴住居19に切られる。堆積する土の色から当該期の遺構と判断した。（湯川）

第４節　古墳時代中期の調査

１．概要

当該期の遺構は、尾根上の平坦部ではⅡ層上面のⅡ面、東西斜面部ではＡ層（暗褐色流土）直下で検出した。平坦部では東半部分、斜面部では東斜面南半部分に遺構が集中していた。遺物も、Ｃ２グリッドを中心とする東側斜面部谷地形のＡ層中から多く出土している。この時期の特徴として、遺構内に堆積する土が暗褐色から黒褐色を呈することと、調査区内においては東半に遺構が集中していることがあげられる。

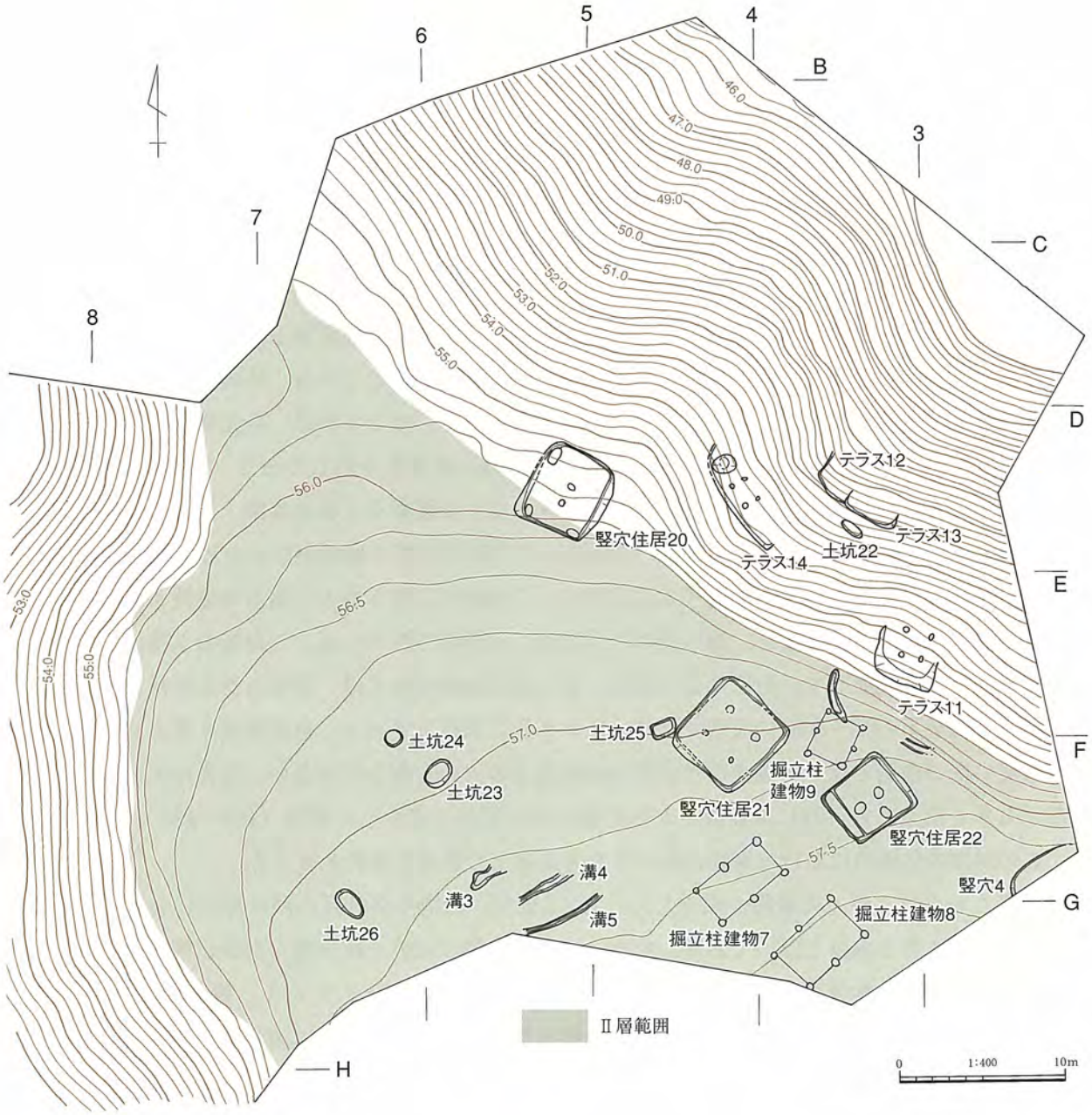


図68　古墳時代中期遺構配置図

検出した遺構数は、竪穴住居３棟、竪穴１基、掘立柱建物３棟、テラス４基、土坑５基、溝３条である。この内、中期前葉に属するのは、竪穴住居20、テラス12。中期中葉～後葉に属するのが、竪穴住居21、竪穴４、テラス13、土坑12。中期末葉に属するのが、竪穴住居22である。その他の遺構は、詳細な時期比定を行えないが、堆積する土の色と、形態、出土遺物などから古墳時代中期の時期幅に収まるものと判断した。

竪穴住居３棟を中心に、遺構内から比較的良好な一括資料が出土しており、当該期の土器の変遷を考える上で貴重な資料となりうる（第６章第８節参照）。

竪穴住居をはじめとする遺構は、古墳時代中期を通じ、連続して営まれている。したがって、調査地内の集落としての利用は、連続したものと捉えることができる。集落の時間的な連続性を重視し、本節では古墳時代中期の遺構をまとめて報告する。（湯川）

２．竪穴住居

竪穴住居20（図69～73、図版27・28・52・53・64－５・64－６、表26）

平坦部東側、傾斜変換点付近のＣ４・５グリッドで検出した。竪穴住居５、テラス２を切って構築され、北東壁面の大半は流出している。平面形はややいびつな隅丸方形を呈し、壁は約80°の角度で直線的に立ち上がる。床面の規模は、長軸4.9ｍ、短軸4.3ｍ、床面積20.4㎡、検出面よりの深さ83㎝、床面の標高は55.5ｍを測る。

床面からは、ピット６基と周壁溝を検出した。ピット１・２は、柱痕跡があり、配置から主柱穴と判断した。ピット３・４・５は、規模・形態、堆積する土も類似している。住居の隅に位置し、柱痕跡なども確認できなかったことから、貯蔵穴の可能性がある。ピット６は、炭化物を非常に多く含む土が堆積しており、炉や灰穴の可能性がある。周壁溝は、床面を全周しており、底面から径約10㎝、深さ約５㎝の小ピットを11基検出した。この小ピットは、壁板を支える杭痕跡、もしくは壁支柱穴の可能性がある。南隅には、土坑21がある（図66）。この住居に伴う確証がないため別遺構として報告したが、長軸方向は住居壁面と直交することから、この住居に伴うものである可能性がある。貼り床下には不整形の掘り方が存在し、地山質の土（⑫層）が充填されていた。この層の上端はしまりがあり、貼り床として機能していたと考えられる。竪穴部に堆積する土は、黒褐色から暗褐色を呈する①～③層と、褐色系の④～⑧層に大別できる。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。他の古墳時代中期の住居と比べ、覆土中における暗褐色土の占める割合は少ない。遺物は床面直上と②層下部から多く出土した。特に床面直上から完形に近い状況で出土した遺物（123～127・Ｓ14・Ｓ15）は、この時期の住居内における遺物のあり方を考える上で貴重な資料と言える。

床面直上からは、多くの遺物が出土した。123は甕で、西壁中央付近の凹み部分において正位で出土した。床面より５㎝ほど浮いており、床面との間と周辺には焼土粒を含んだ炭化物層が広がっていた。また、同じ炭化物層の直上から、高杯脚部や土器片が少量出土している。炭化物層は、123直下が一番厚く、周辺になるほど薄くなる。また、樹種同定の結果、燃料材に適したアカマツであることが判明している。この下の床面は被熱していなかったが、123と炭化物層は関連するものと判断している。123が置かれていたこの部分が煮炊きの場であり、この炭化物層は住居使用時に形成された可能性がある。124は甕で、ピット５からの出土である。123と同様肩部に２条の刻文が焼成前に刻まれている。同様の刻文は、土坑22出土の201や、東斜面谷地形Ａ層出土の257にも刻まれている。外面に

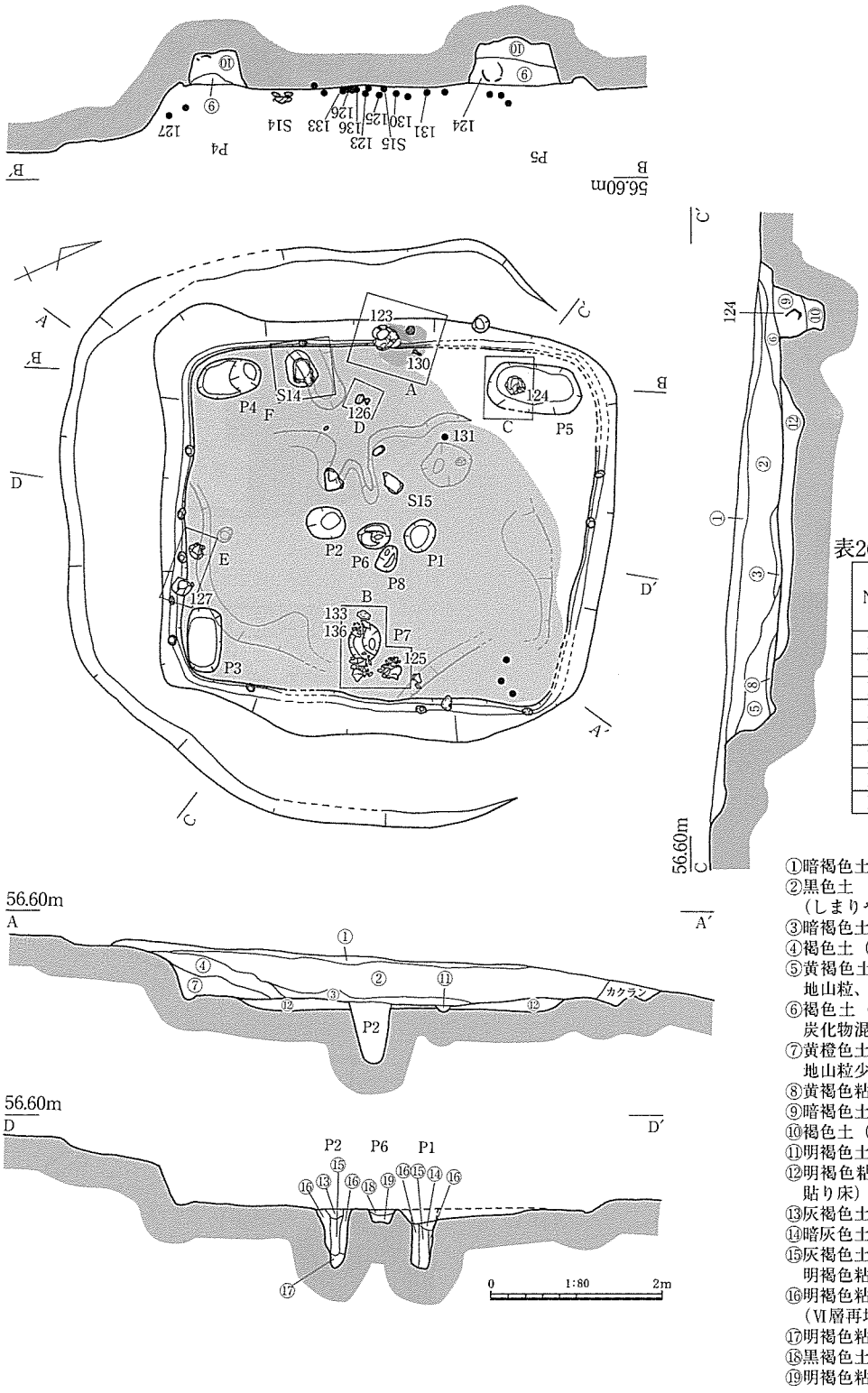


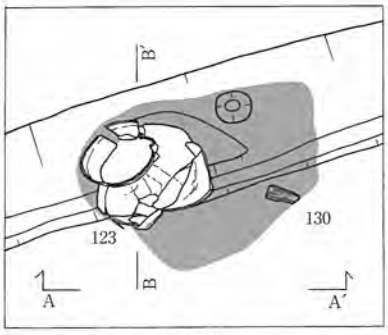
表26　竪穴住居20ピット計測表

No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm	底面標高 m
P1	77	40	26	55.2
P2	75	42	45	55.1
P3	106	55	58	55.0
P4	44	38	72	54.8
P5	38	30	19	55.3
P6	43	39	70	54.8
P7	46	36	32	55.2
P8	33	20	24	55.3

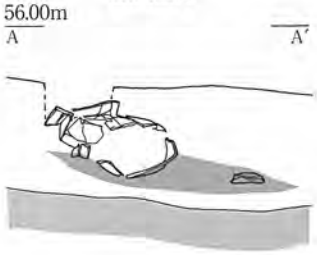
①暗褐色土（しまりややなし）
②黒色土
（しまりややあり、やや粘質。地山粒混）
③暗褐色土（しまりあり、やや粘質）
④褐色土（やや粘質。地山粒、炭化物混）
⑤黄褐色土（やや暗い。しまりあり、粘質。地山粒、炭化物混）
⑥褐色土（しまりややあり、粘質。地山粒、炭化物混）
⑦黄橙色土（しまりややあり、粘質。地山粒少量、炭化物混）
⑧黄褐色粘質土（しまりあり）
⑨暗褐色土（炭化物混）
⑩褐色土（Ⅳ～Ⅵ層粒混）
⑪明褐色土（暗褐色土混）
⑫明褐色粘質土（Ⅳ・Ⅴ層粒非常に多く混。貼り床）
⑬灰褐色土（炭化物混）
⑭暗灰色土（炭化物多く混）
⑮灰褐色土（しまりなし。明褐色粘質土ブロック非常に多く混）
⑯明褐色粘質土
（Ⅵ層再堆積土。暗褐色土ブロック混）
⑰明褐色粘質土（しまりややあり）
⑱黒褐色土（炭化物、焼土非常に多く混）
⑲明褐色粘質土（暗灰色土粒を混）

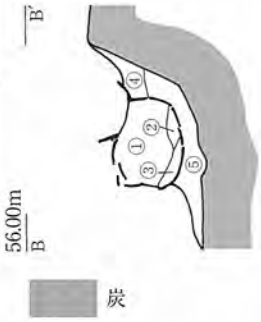
図69　竪穴住居20

は煤が、底部内面にはコゲに相当する炭化物が付着していた。125は甕、126は高杯、123･124同様ほぼ１個体分が出土している。127は、高杯杯部を転用した蓋と考えられる。脚部との接合部は摩耗しており、折り取り後調整されている可能性がある。北隣には、甕が口縁部を127に向けて出土している。この甕とセット関係にあった可能性がある。床面より浮いた状態で出土しているのも、蓋として甕に被せられていたものが、ある時期転落した可能性を示す。以上のことから、⑦層の出土であるが床面直上相当の遺物として報告する。



拡大図A

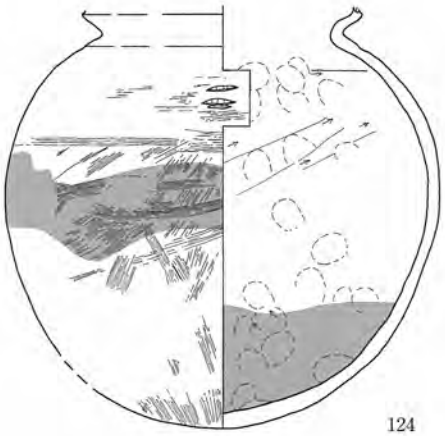


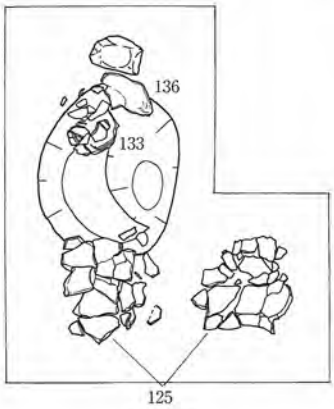


炭

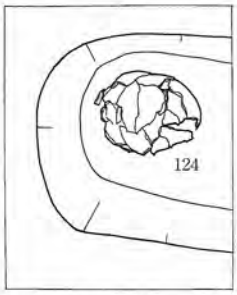
①褐色土
②暗褐色土（炭化物、焼土混）
③褐色土（焼土粒を多く混）
④黒色土（図69②層）
⑤褐色土（図69⑦層）

123・130　出土状況

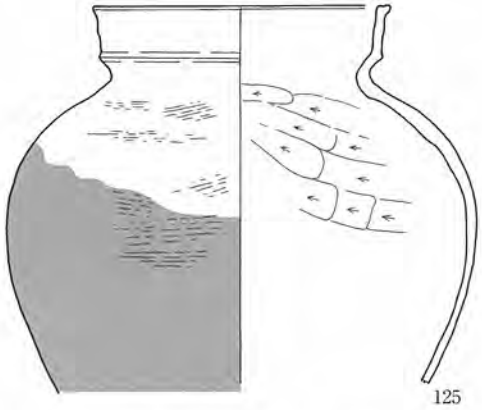




拡大図B



拡大図C



0　1:20　50cm

煤

0　1:4　10cm

床面直上：123・125
ピット５：124

図70　竪穴住居20遺物出土状況および出土遺物（１）床面直上・Ｐ５

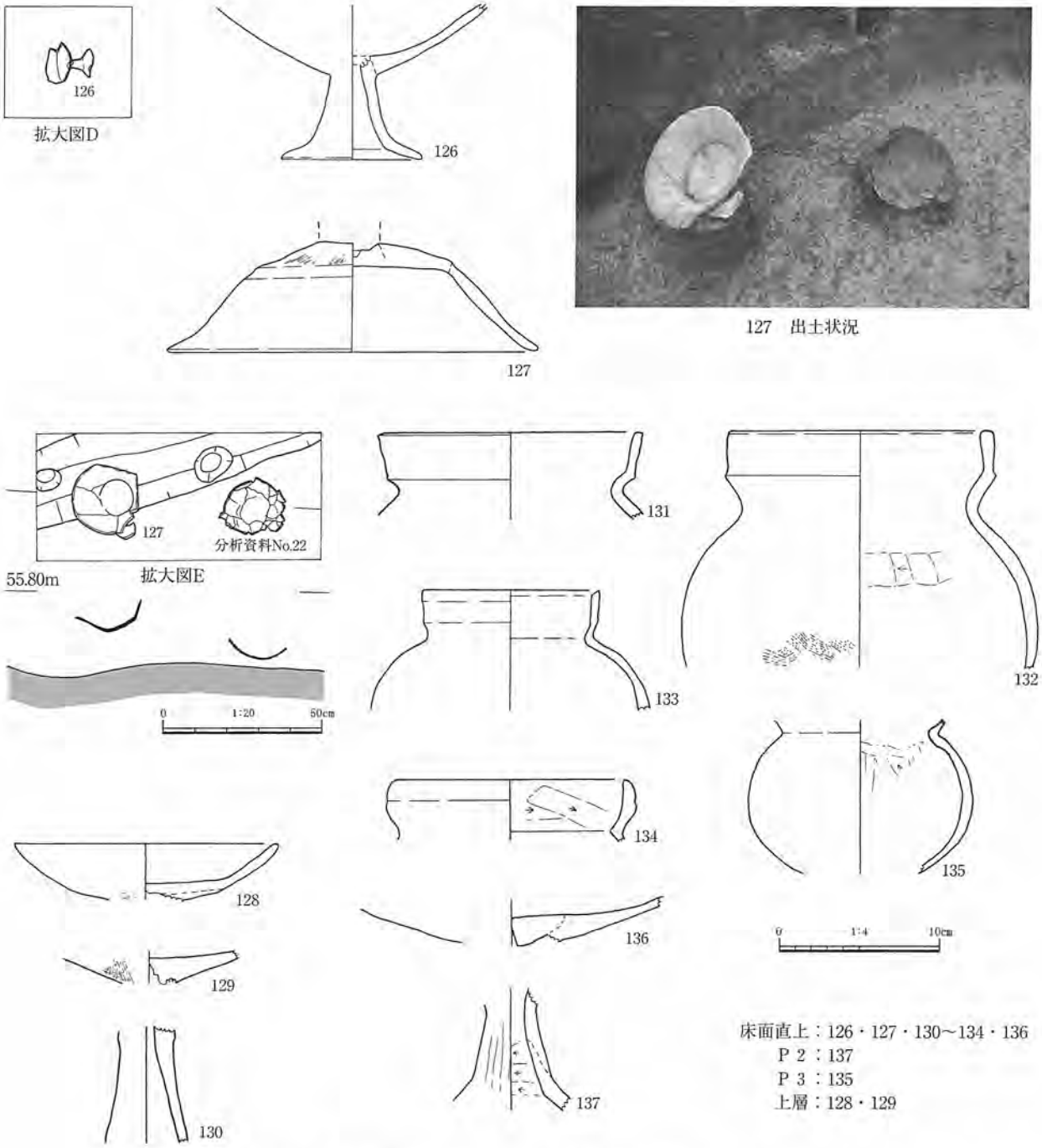
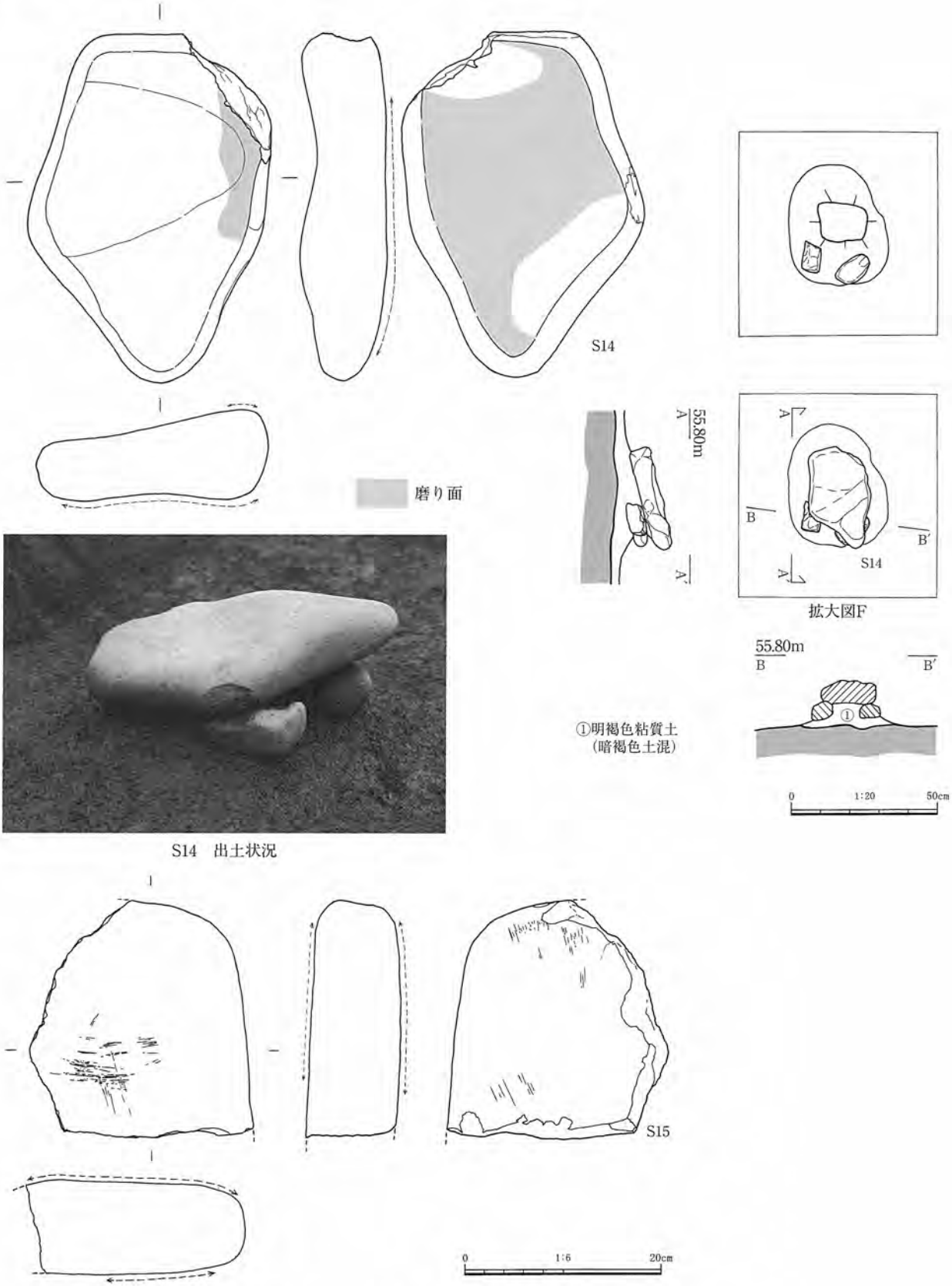


図71　竪穴住居20遺物出土状況および出土遺物（２）

Ｓ14・Ｓ15は、床面直上で出土した台石である。Ｓ14は、礫石器２個と地山質土の盛土によって、西壁側が約15°低くなるよう床面上に設置されていた。表裏面とも摩耗しており、使用痕を確認している。石皿や、大型の荒砥を想定している。遺物図を掲載しなかったが、Ｓ15から約50cm北東には、ほぼ同じ大きさの台石と、長さ約20cmで敲打痕と磨り面を有する礫石器が出土している。煮焚きの場と考えられる西辺中央付近を取り囲むように台石等が出土したことは、当時の竪穴住居の利用を考える上で示唆に富んでいる。これらは、出土状況からこの遺構が住居として機能していた時点から、検出位置に置かれていた可能性がある。照明、暖房を兼ね備えた煮焚きの場の周辺が、作業場となっていたことは想像に難くない。



S14　出土状況

図72　竪穴住居20遺物出土状況および出土遺物（３）

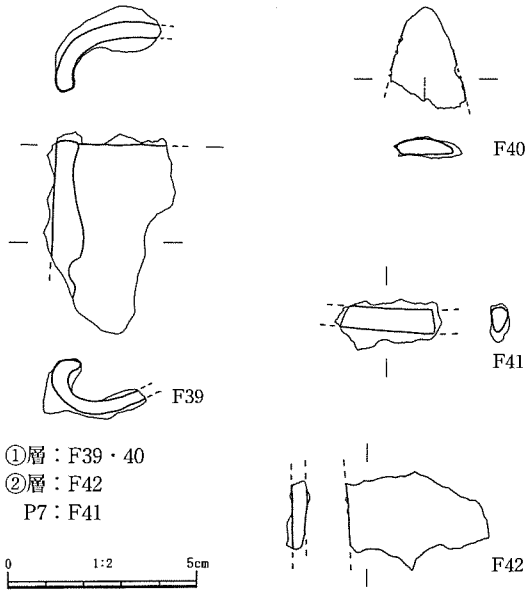


図73　竪穴住居20出土鉄製品

130～137も床面直上出土遺物である。ただし、残存率が低く、②層に覆われていることから、②層堆積時のものである可能性がある。131～133は甕で、123～125より型式学的には新しい。134も甕で、安山岩小礫を多く含み、口縁部内面にもケズリが施されている。この土器の類例を見出すことはできなかった。135は小型丸底壺、128は高杯の杯部で、古墳時代中期前葉のものと考えられる。129・130・136・137は高杯である。

その他、鉄製品も多く出土している。Ｆ39は袋状鉄斧。Ｆ40は、片側鎬を持つ鉈もしくは鉄鏃である。Ｆ41は、ピット７からの出土で、刀子である。

本住居は、床面直上出土遺物と形態から、古墳時代中期前葉の遺構と判断した。　（湯川）

竪穴住居21（図74～77、図版29・54・55・64－５・64－６、表27）

平坦部東側の傾斜変換点付近、Ｅ・Ｆ，３・４グリッドで検出した。前述した竪穴住居16の北西壁を切っている。

平面形態は床面形態から考えて方形と推測されるが、検出時には南東側を中心として壁上半部が広がり五角形状を呈していた。これは、竪穴住居21が先行する竪穴住居16・17の埋土を再掘削しているために、地山に比べて締まりが劣る住居埋土部分に形成された竪穴住居21の掘り方肩部が雨水等によって浸食され広がったためと推測される。この部分の規模は、長軸7.5m・短軸7.4m、深さ1.0mである。しかし、前述したように平面形は本来の形態とは変わっていると想定されるものである。床面の規模は、長軸5.3m・短軸4.9mのほぼ正方形状を呈するものであり、床面積は25.5㎡、床面の標高は56.3mを測る。北西壁が本来の壁形状を留めていると推測されるのであるが、北西壁のような傾斜を持ち周壁溝から直線的に立ち上がる形状が他の３方の壁面においても同様であったと想定するならば、本来の平面規模は、長軸5.8m・短軸5.6m程度の正方形状であったと考えられる。

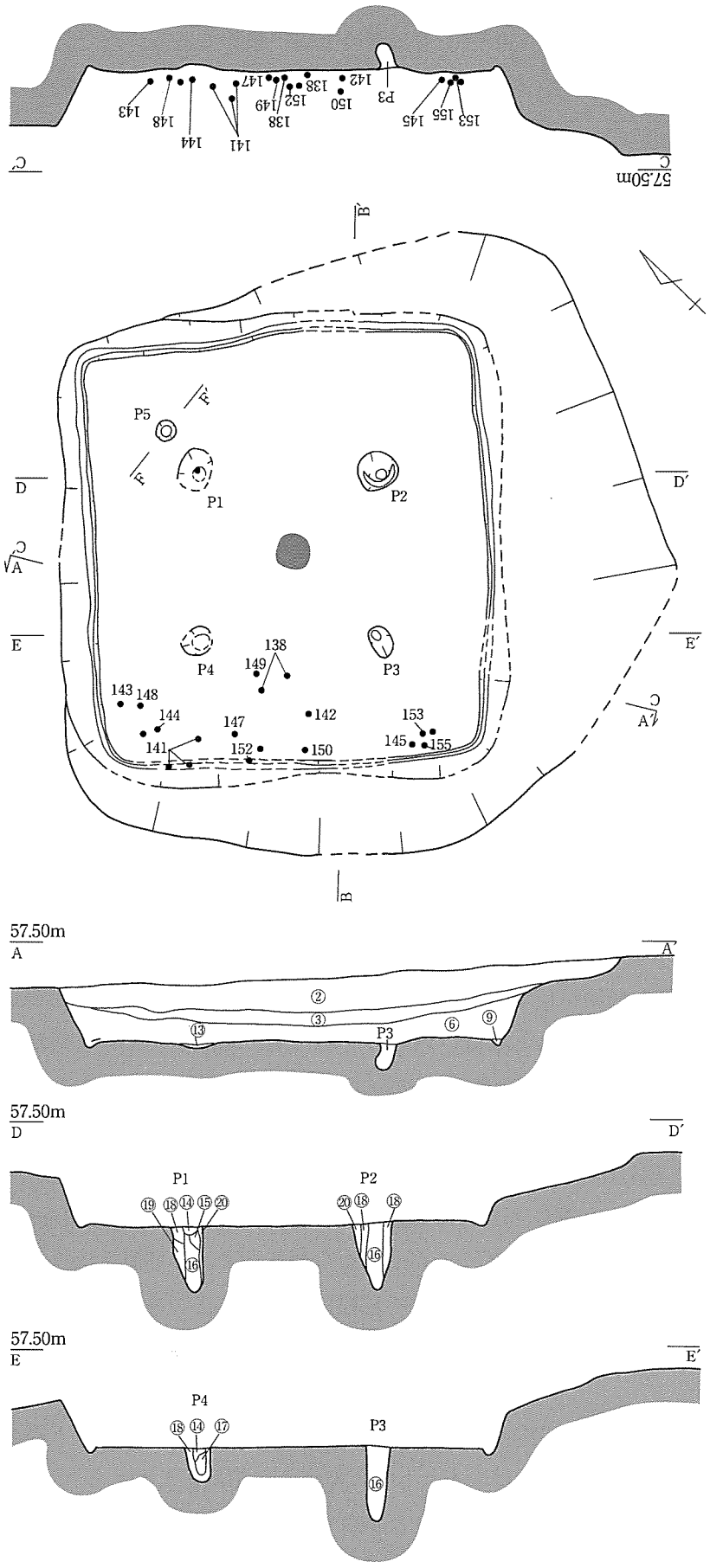
壁際には周壁溝が巡る。ピットは５基検出しており、ピット１～４が主柱穴、ピット５は用途不明のピットである。ピット５については上部から掘り込まれた別遺構の可能性も考えたが、径が15cm程度の小さなものであり、このように小さくてかつ深いピットが上部から掘り込まれる可能性はきわめて低いと判断し、竪穴住居21に伴うピットと判断した。主柱穴の規模にはばらつきがあり、径は38～47cm、深さ44～95cmを測る。主柱穴のピット１～４に囲まれた中央部には地床炉と考えられる径約40cmの焼土面が存在する。

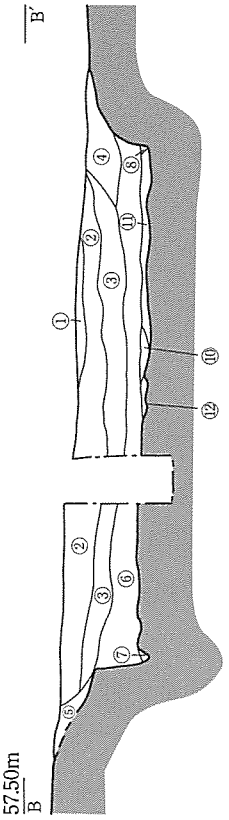
竪穴部には３つの主要な埋土が存在する。上層の②層と中層の③層は黒色系の埋土であり、下層の⑥層は暗褐色系の埋土を主体とする堆積である。埋土はいずれも流入による自然堆積と考えられるが、⑥層と②層の境界は漸移部分がほとんど無い明瞭なものであり、急激な埋土の変化を示している。

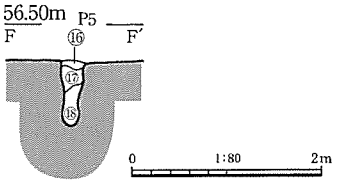
竪穴部からは、多くの遺物が出土した。②・③層からも破片となった多くの土器片が出土したが、

表27　竪穴住居21ピット計測表

No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm	底面標高 m
P1	－	－	80	55.4
P2	47	47	85	55.4
P3	38	26	44	55.4
P4	40	32	95	55.9
P5	25	22	70	55.5







①黒色粘質土
②淡黒色粘質土（明褐色土大粒混）
③黒色粘質土（明褐色土大粒混）
④黒色粘質土
⑤黒色粘質土
⑥暗褐色粘質土（褐色土大粒、炭化物少量混）
⑦暗褐色粘質土
⑧にぶい黄褐色粘質土（暗褐色土大粒混）
⑨にぶい橙褐色粘質土（暗褐色土大粒混）
⑩暗褐色粘質土（にぶい黄褐色土大粒、焼土少量、炭化物多量混。貼り床）
⑪明褐色土（地山土ブロック、暗褐色土大粒多量混。貼り床）
⑫にぶい黄褐色粘質土（暗褐色土小ブロック、黄褐色土小粒混。貼り床）
⑬明褐色土（地山土質土ブロック混。貼り床）
⑭暗褐色粘質土（地山土小粒少量混）
⑮褐色粘質土（地山土小ブロック多量混）
⑯暗褐色粘質土
⑰淡黒褐色粘質土（炭化物混）
⑱にぶい黄褐色粘質土（暗褐色土大粒多量混）
⑲橙色粘質土
⑳にぶい橙褐色粘質土

図74　竪穴住居21

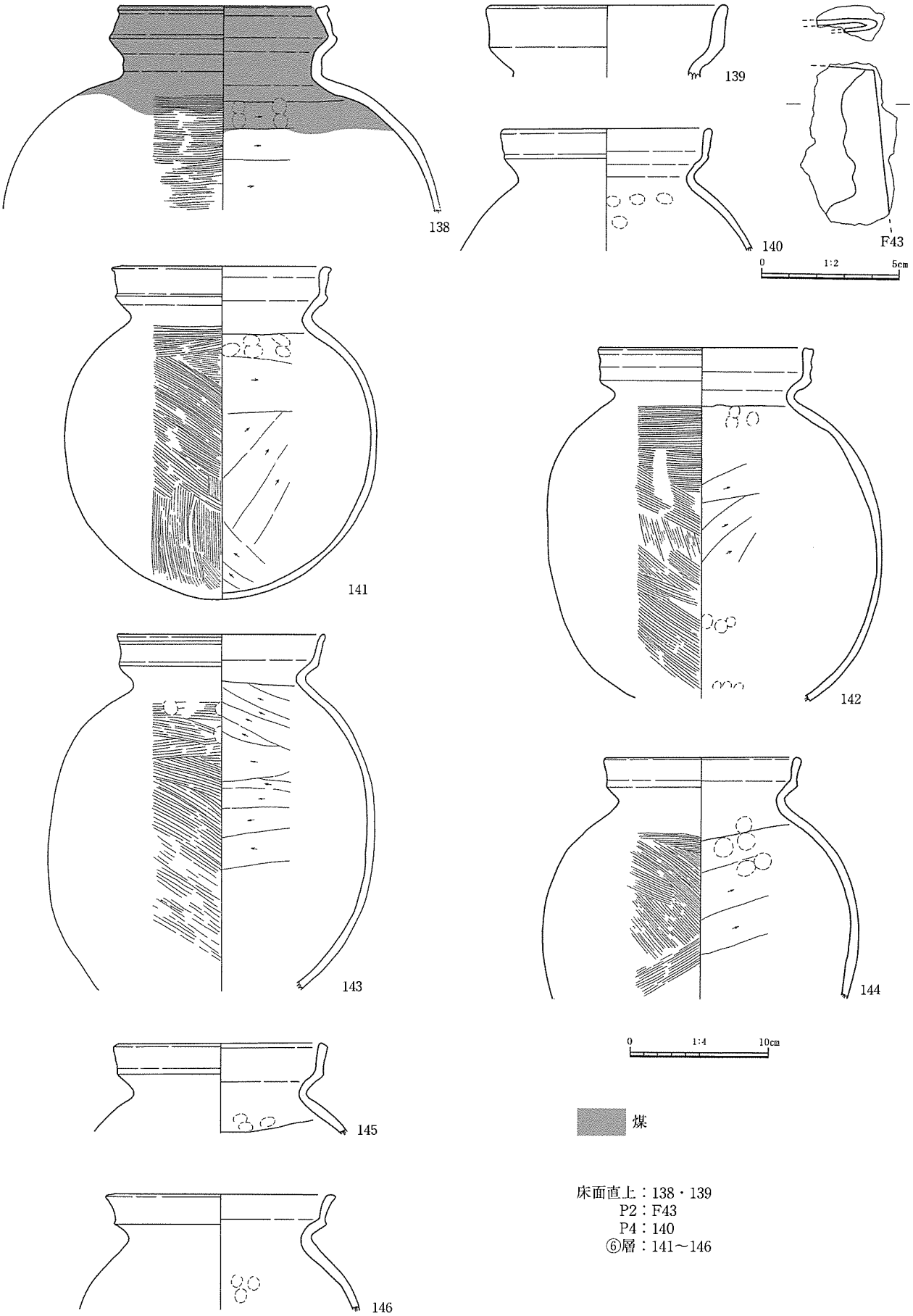


図75　竪穴住居21出土遺物（１）

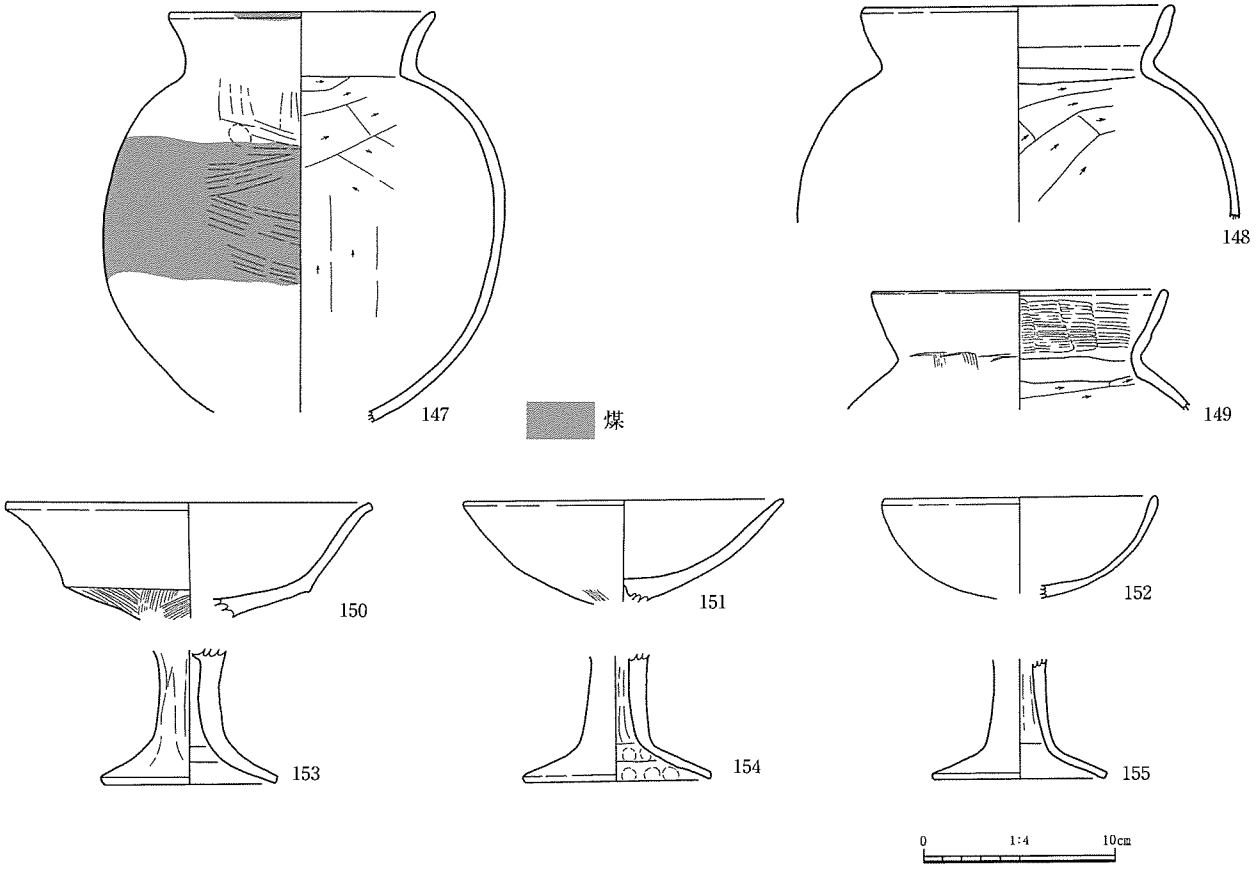


図76　竪穴住居21出土遺物（２）⑥層

⑥層中からは廃棄された完形に近い多くの土器が出土した。

138～140・Ｆ43は、床面直上ないしピット内から出土した。138･139の出土位置は、レベル的には床面直上であるが、平面的には⑥層が直接床面に接地する範囲にあたる。このため、⑥層出土の可能性がある。138は壺、139・140は複合口縁甕で、138には口縁部から肩部にかけての内外面に煤が付着している。Ｆ43は欠損しているが、鋤先の可能性が考えられる鉄製品である。141～155は⑥層中から出土したもので、床面に若干流入土が堆積した後に廃棄されたと想定されるものであり、一括遺物として捉えることが出来るものである。このうち、141～146は複合口縁の甕、147～149は単純口縁の甕、150～155は高杯である。その他にも埋土中から156～167、Ｆ44～Ｆ47、Ｓ16が出土した。土器には甕や高杯以外にも163の椀、167の鼓形器台などが出土している。Ｆ44は鉈の柄部、Ｆ45・46は刀子と考えられる。

出土した遺物から古墳時代中期中葉に属する竪穴住居と考える。　（西川）

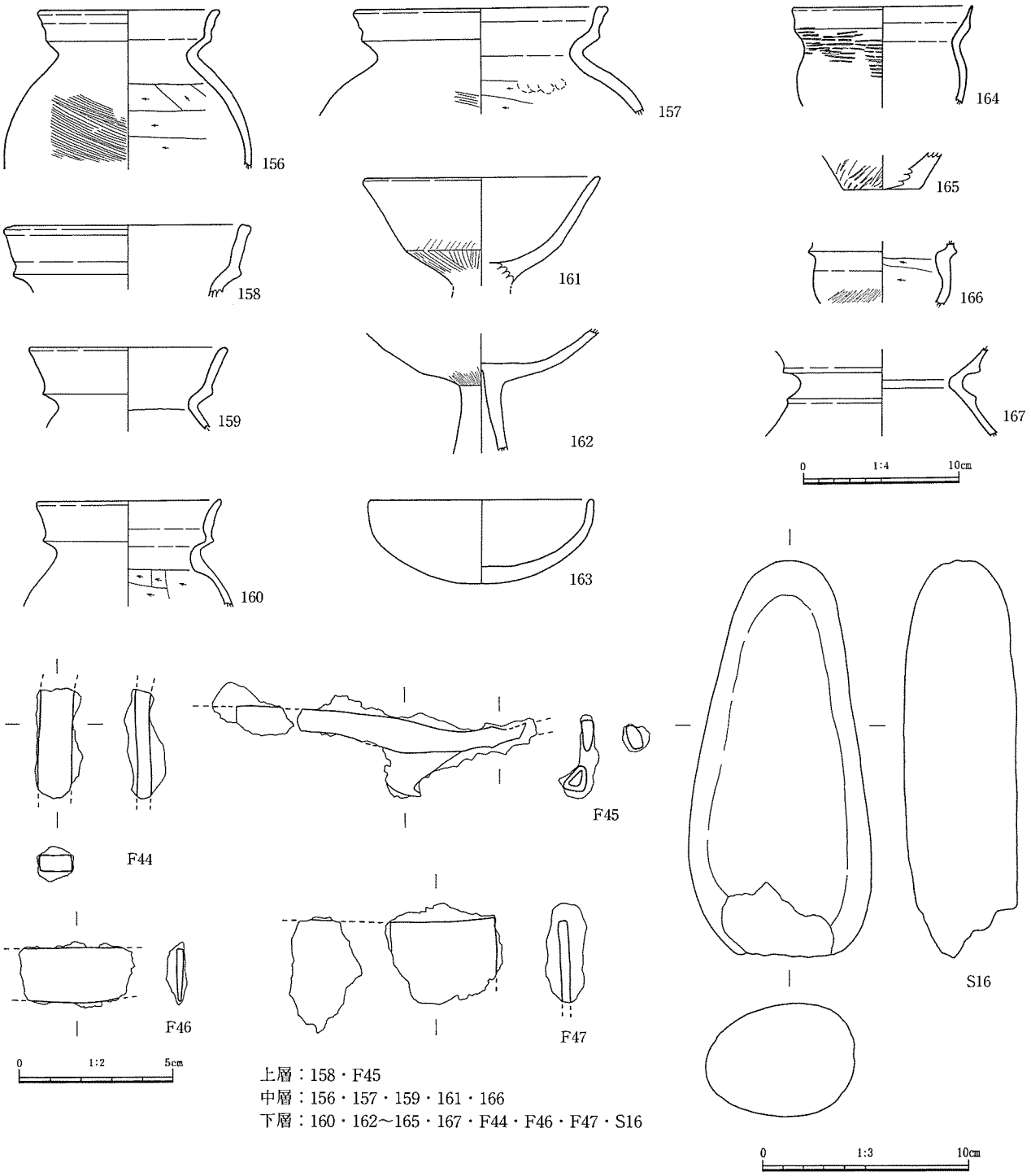


図77　竪穴住居21出土遺物（３）

竪穴住居22（図78・79、図版30・31・56・64－５・64－６、表28）

平坦部南東、Ｆ３グリッドで検出した。平面形は方形で、垂直に近い壁を持つ。床面の規模は、長軸4.4m、短軸3.8m、床面積18.9㎡、検出面よりの深さ80㎝、床面の標高は56.7mを測る。床面の大半は貼り床が施されており、ピット６基と周壁溝、床溝を検出した。ピット１・２は、柱痕があり、配置から主柱穴と判断した。ピット１には南北二つの柱痕跡があり、柱を立て直している可能性がある。ピット３は、いわゆる蓋置きの一段浅い掘り込みを有することから、貯蔵穴と考えられる。ピット５

の⑪層は、焼土化しており、上部には炭を多量に含むことから、⑪層堆積時点で地床炉として機能していた可能性がある。床面の周囲には周壁溝がめぐっており、南西辺から１ｍ内側には並行する床溝を検出した。床面下では、不整形の平面形をした掘り方を確認している。竪穴部に堆積する土は、暗褐色系の①～③層と、褐色系の④・⑤層に大別できる。他の古墳時代中期の住居と比べ、覆土中における暗褐色土の占める割合は多い。レンズ状の堆積をしており、自然堆積と考えている。遺物は床面直上から多くの遺物が出土している。

168は、土師器の甕である。ピット１柱痕跡の上、床面レベル前後からの出土である。出土した⑬層は、住居廃絶時もしくは、廃絶後あまり時間を経ずに堆積した可能性が高い。169～172も、土師器の甕で、床面直上からの出土である。169・170は、ほぼ１個体分が出土している。169～172は、168に比べ口縁部下端の張り出しが強く、１型式古い可能性がある。173は土師器椀。Ｓ17は凹石で、周縁部にも敲打痕がめぐる。Ｆ48は刀子で、柄から関にかけての部分である。この遺構は、床面直上の土器と、住居の形態から古墳時代中期末葉の遺構と判断した。　（湯川）

表28　竪穴住居22ピット計測表

No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm	底面標高 m
P1	65	63	46	56.1
P2	70	61	60	56.4
P3	53	50	31	56.5
P4	35	29	18	56.5
P5	65	50	31	56.4
P6	37	27	16	56.4
P7	75	53	29	56.6

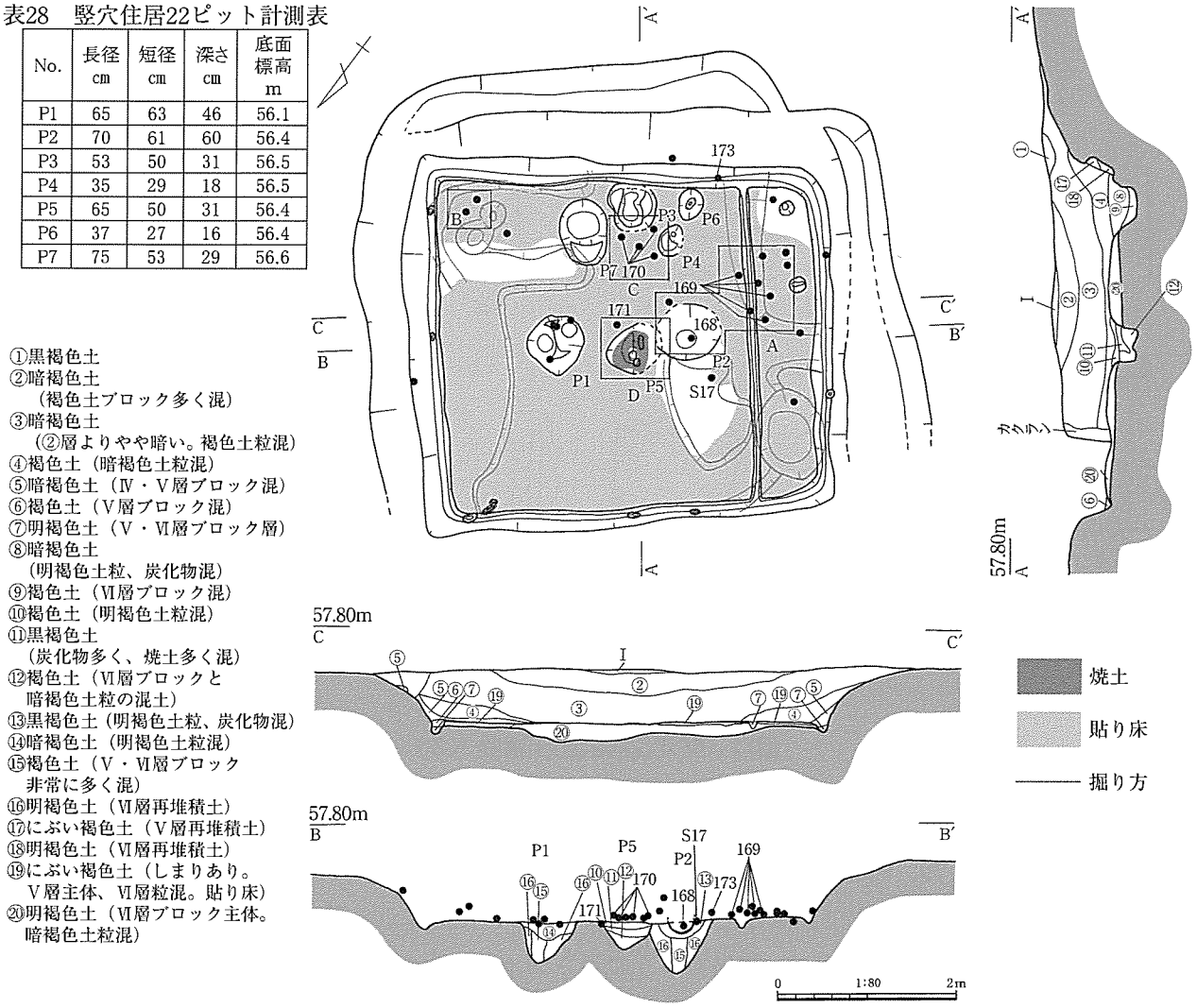


図78　竪穴住居22

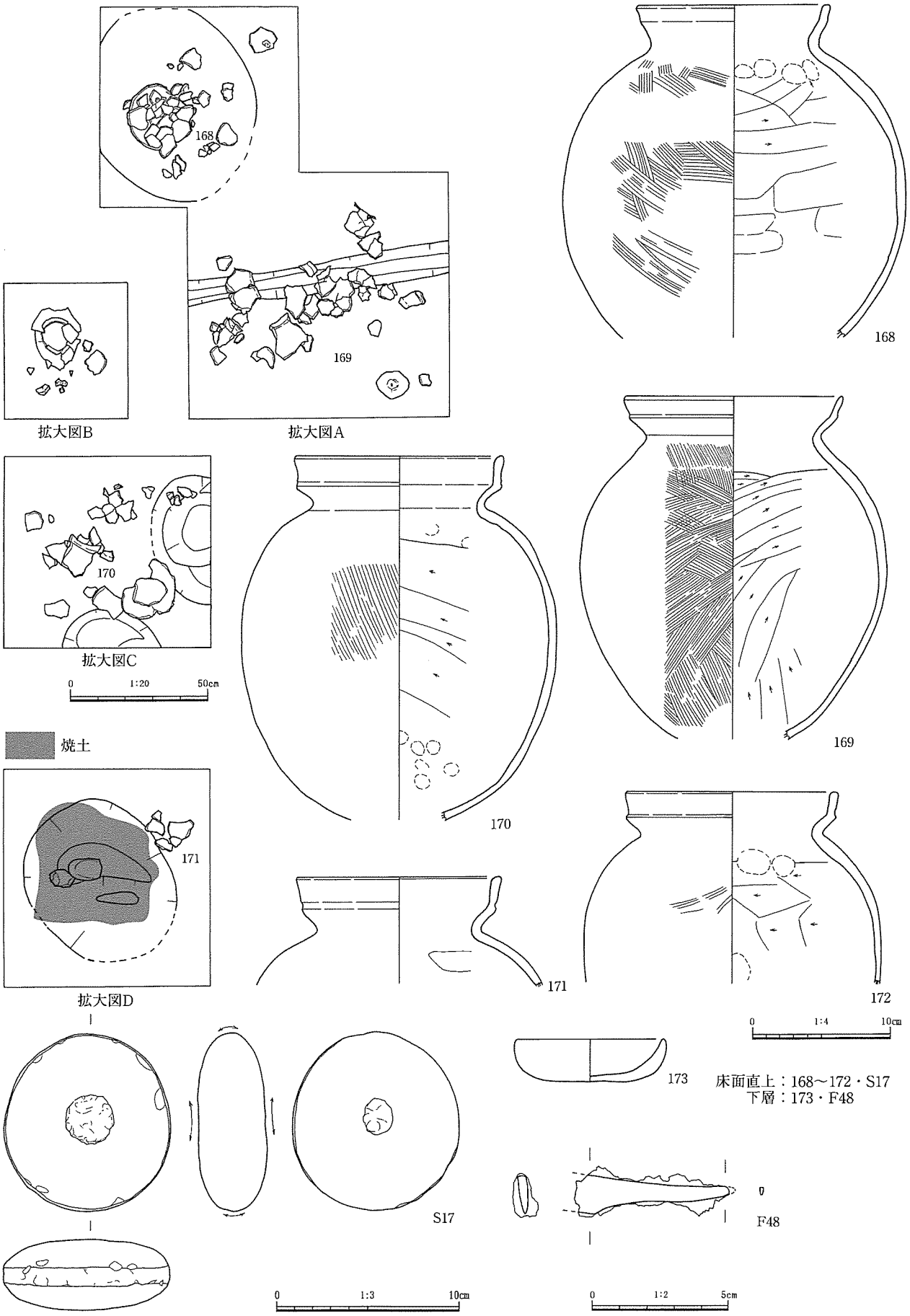


図79　竪穴住居22遺物出土状況および出土遺物

３．竪穴

竪穴４（図80、図版32－１・２）

調査区平坦部の南東隅、Ｆ２グリッドで検出した。南東側は調査地外へと延びており、北東側は流失している。全体の規模は不明であるが、残存部分から、楕円もしくは隅丸方形の平面形態を呈していた可能性がある。床面の標高は、57.5ｍを測る。床面からは、ピットや壁周溝等の諸施設は検出できなかったことと、床面が水平であることを重視し、竪穴として報告する。

堆積する土は、Ⅱ層に類似した暗褐色を呈する①・②層と、褐色系の④・③層の４層に分層した。②・④層間が水平であることから、この部分を床面と判断した。床面下の④層は、調査地境界付近で確認した。底面は、谷側に向かい、緩やかに傾斜している。また、掘り方を有する竪穴の類例が少ないことから、流土や、他の遺構など、この竪穴に伴わない堆積の可能性がある。

遺物は、②層及び床面直上から少量の土師器が出土している。174・175は、土師器甕で、174は複合口縁、175は単純口縁を持つ。176・177は土師器高杯で、赤色塗彩される。この遺構は、出土遺物と堆積する土色から、古墳時代中期中葉に属すると考えられる。（湯川）

４．掘立柱建物

掘立柱建物７（図81、図版32－３、表29）

調査地平坦部南側Ｆ・Ｇ，３・４グリッドのⅡ面で検出した。桁行２間、梁行１間の掘立柱建物である。桁行（長軸）約4.8ｍ、梁行（短軸）約2.7ｍを測る。主軸は尾根筋と直行しており、真北から東へ約51°傾く。柱間寸法は、平均で桁行約2.4ｍ、梁行約2.7ｍ。ピットの底面標高は56.5～56.6ｍを測る。ピット内に堆積する土は、主として暗褐色土である。柱を抜き取った可能性のあるピット２・６を除き、他のピットからは柱痕跡が検出された。土層断面の観察から、柱の直径は約15～20㎝と推定できる。ピット６から少量の土器片が出土している。

堆積する土の色と、形態から、古墳時代中期の遺構と判断した。（湯川）

掘立柱建物８（図82、図版32－４、表30）

調査地平坦部南端Ｆ・Ｇ３グリッドのⅡ面で検出した。竪穴住居４を切って構築されている。桁行２間、梁行１間の掘立柱建物である。桁行（長軸）約4.9ｍ、梁行（短軸）約3.0ｍを測る。主軸は尾根筋と直行しており、真北から東へ約46°傾く。柱間寸法は、平均で桁行東側が約2.3ｍ、西側が約2.5ｍ、梁行約3.0ｍ。ピットの底面標高は56.5～56.6ｍを測る。平面形態は、桁行方向東側が短く、ややいびつな方形を呈する。よって、ピット３は、他のピットよりも底面標高が低くこの建物に伴わない可能性もある。しかし、堆積土の色と、西側の柱間寸法に比べ、ピット２・３間同様、ピット１・２間もその距離が短いことから、この建物のピットと判断した。堆積する土は、暗褐色土が主体である。柱を抜き取った可能性のあるピット１・２を除き、他のピットからは柱痕跡が検出された。土層断面の観察から、柱の直径は約20㎝と推定できる。

遺物は、ピット１・３・６から少量の土器が出土している。178は古墳時代中期の甕で、ピット６からの出土である。179は弥生時代後期後葉の甕で、ピット３から出土した。

堆積する土の色と、形態、出土遺物から、古墳時代中期の遺構と判断した。（湯川）

掘立柱建物９（図82、表31）

調査地平坦部東端の傾斜変換点近くＥ・Ｆ３グリッドで検出した。桁行（長軸）約2.8ｍ、梁行（短軸）約2.4ｍ、桁行方向の柱間寸法は平均で1.4ｍを測る。主軸は尾根筋と直行しており、真北から東

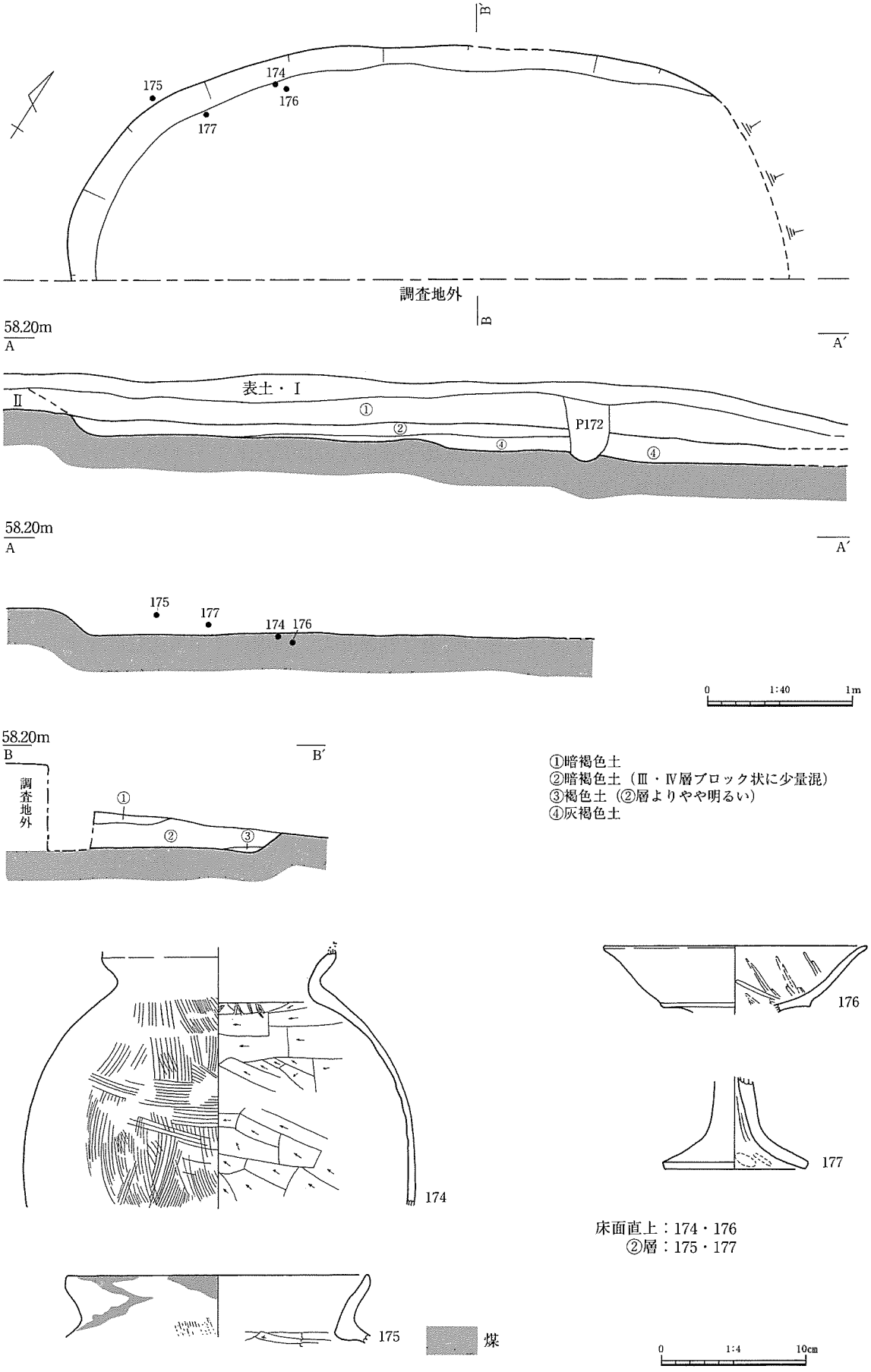


図80　竪穴４および出土遺物

へ約27°傾く。ピット２・５は、他のピットと規模が異なっており特に底面標高が高く、この建物に伴わない可能性がある。ピット１・３・４・６のみ、あるいは流失等の理由により検出しえなかったピットと組み合わせて、ひとつの建物を構成していた可能性もある。しかし、堆積する土の色が他のピットと同じく暗褐色を呈すること、柱筋が通り、桁行き方向のほぼ中間に位置する配置を重視し、ピット２・５は補助的な役割を果たしていた柱穴として報告する。遺物は、Ｐ３から少量の土器が出土している。

堆積する土の色から、古墳時代中期の遺構と判断した。　（湯川）

５．テラス

テラス11（図83、図版33－１・２・57－１、表32）

東斜面部南側の上半部、Ｅ２・３グリッドで検出した。想定される床面の北東側半分は流失しているものの、残存部分と後述する主柱穴の配置から、方形に近い床面を持っていたと推定している。床面の標高は55.3mである。床面および、想定される床面の範囲から、８基のピットを検出した。ピット１は、２～４よりも規模が小さい。しかし、柱痕跡を有するのはピット１～４のみであり、主柱穴と判断した。床面下には、西側を中心に不整形な掘り込みがある。地山質土⑪層が堆積しており、しまりのあることから、掘り方と考えられる。北側には、⑫層が堆積しており、地山質土と黒褐色土ブロックが主体となっている。斜面をカットし、谷側は盛土することで床面を構築と判断した。テラス上端から約２ｍ南の斜面上側からは、溝を検出した。一部途切れるものの、床面南側と並行し堆積する土の色も類似していることから、テラス外側の周溝と判断した。周溝と４本の主柱穴を有し、床面内の主柱穴の配置が竪穴住居と類似することから、このテラスは竪穴住居状に利用された可能性があ

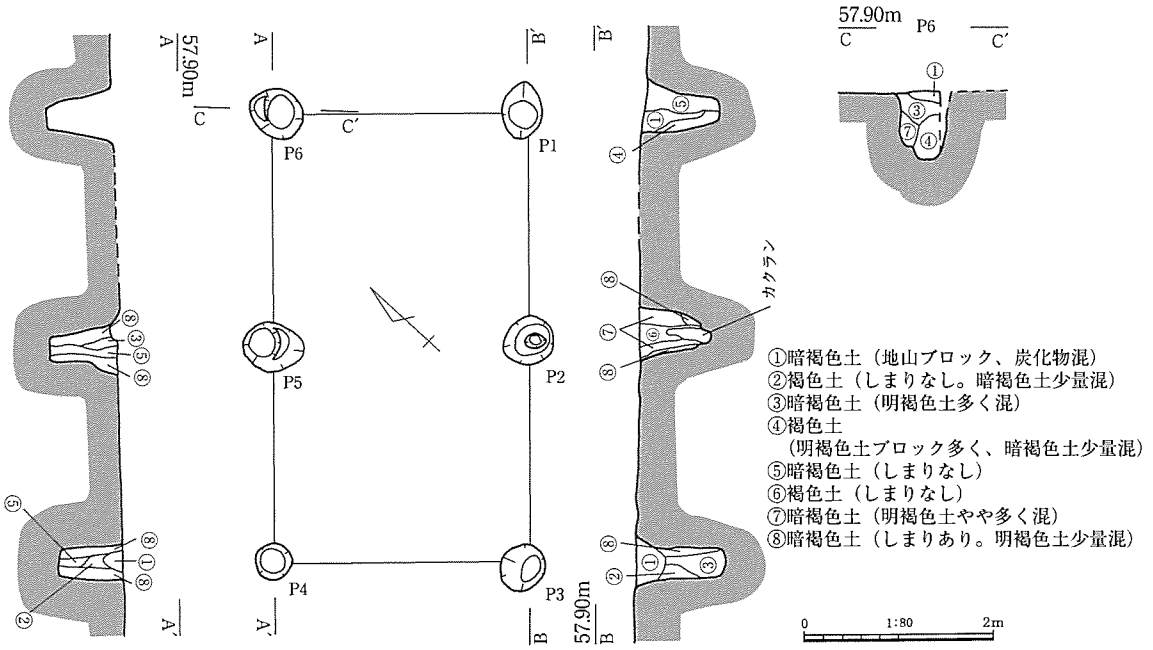
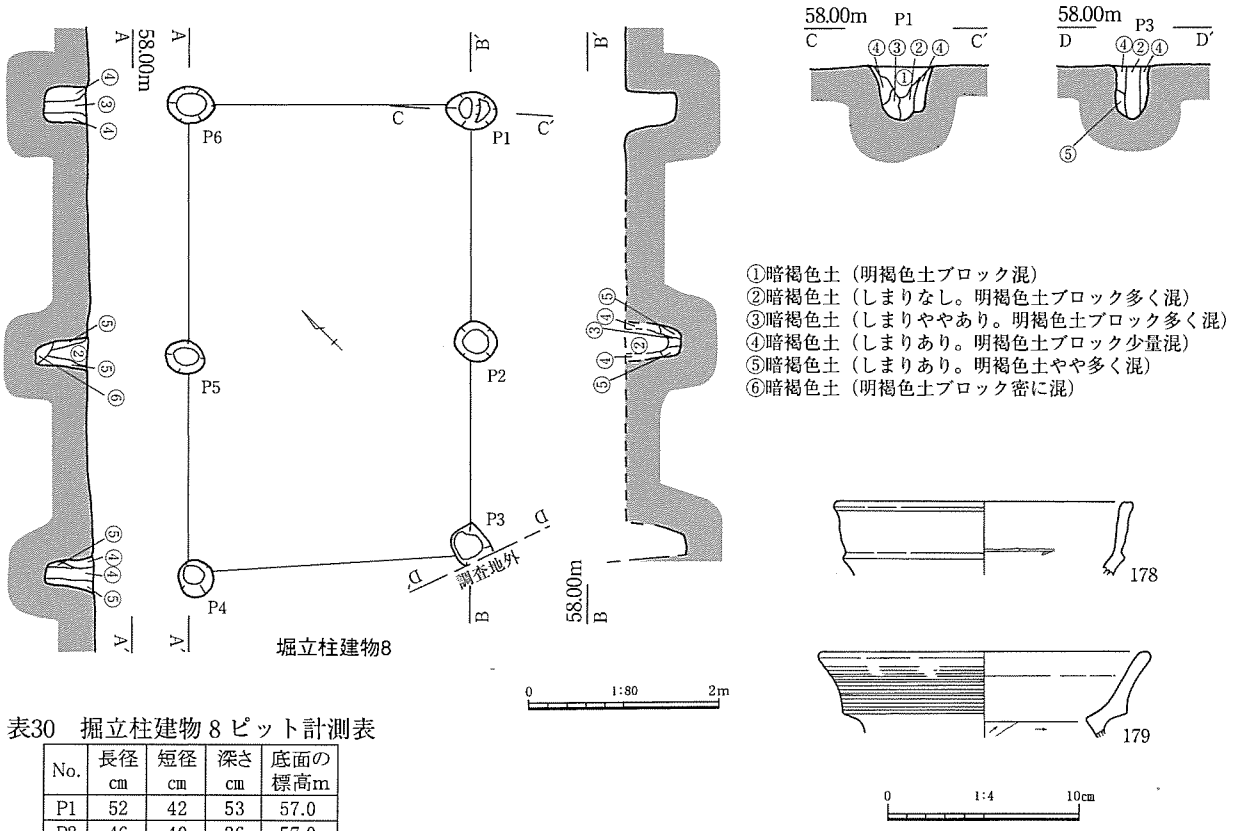


表29　掘立柱建物７ピット計測表

No.	長径cm	短径cm	深さcm	底面標高m	No.	長径cm	短径cm	深さcm	底面標高m
P1	60	45	88	56.5	P4	40	38	69	56.6
P2	55	50	73	56.7	P5	66	50	71	56.5
P3	51	45	91	56.6	P6	59	50	66	56.5

図81　掘立柱建物７



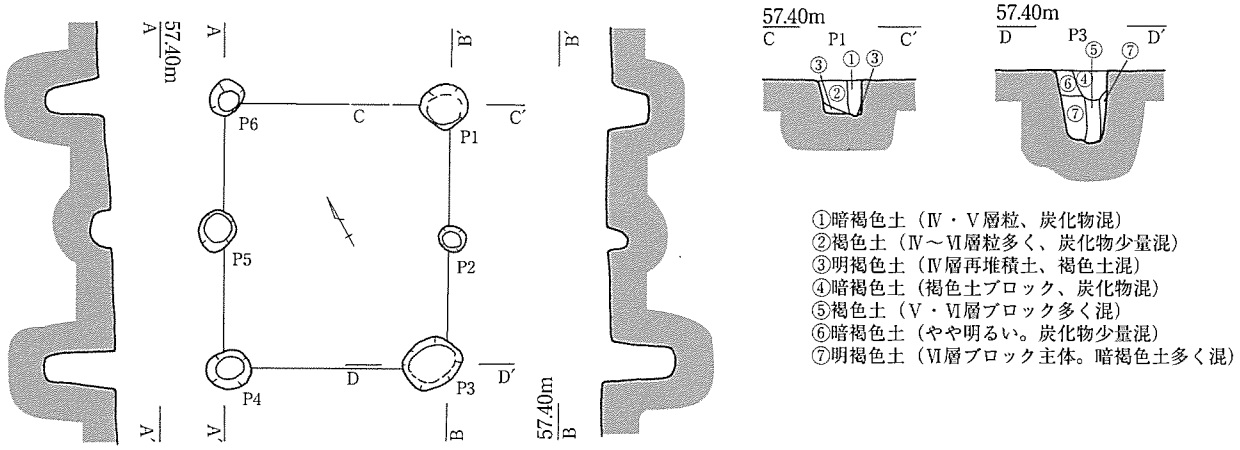
堀立柱建物8

表30　掘立柱建物８ピット計測表

No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm	底面の標高m
P1	52	42	53	57.0
P2	46	40	36	57.0
P3	46	37	35	57.4
P4	39	38	54	57.0
P5	42	36	58	57.0
P6	50	41	47	57.1

表31　掘立柱建物９ピット計測表

No.	長径cm	短径cm	深さcm	底面標高m	No.	長径cm	短径cm	深さcm	底面標高m
P1	52	48	36	56.5	P4	48	42	76	56.1
P2	30	27	13	56.8	P5	46	40	19	56.7
P3	63	52	75	56.2	P6	40	32	62	56.2



堀立柱建物9

図82　掘立柱建物８・９および出土遺物

る。テラス部分には、土色からＡ層に相当すると考えられる暗褐色系の上層（①～③層）と、地山質土ブロックが主体で暗褐色系の土を含んだ下層（④～⑤層）に大別できる。

遺物の多くは、上層からの出土である。180は複合口縁の甕、181は小型丸底壺である。古墳時代前期から中期の所産であろう。上層がＡ層に相当し、下層に暗褐色系の土が含まれることから、古墳時代中期の遺構と判断した。（湯川）

テラス12（図84、図版33－３・４・57－１）

東斜面部南側の中腹部Ｄ３グリッドで検出した。北東側は流失し、南東側もテラス13にきられているため、残存状況は悪い。残存する床面の壁際には、壁溝を検出した。床面の標高は、約51.5mである。堆積する土は、Ａ層相当の①層を除き、暗褐色土と褐色土の混土である。床面直上から、少量の土器が出土している。183は、土師器の椀で、古墳時代中期に属する。

①層がＡ層に相当し下層に暗褐色系の土が含まれること、及び床面直上出土遺物から、古墳時代中期前葉の遺構と判断した。（湯川）

表32　テラス11ピット計測表

No.	長径cm	短径cm	深さcm	底面標高m	No.	長径cm	短径cm	深さcm	底面標高m	No.	長径cm	短径cm	深さcm	底面標高m
P1	34	32	17	55.1	P4	54	42	10	55.2	P7	28	22	52	54.8
P2	49	28	23	54.7	P5	28	26	16	55.1	P8	18	17	39	54.9
P3	52	45	39	54.5	P6	27	22	7	55.2					

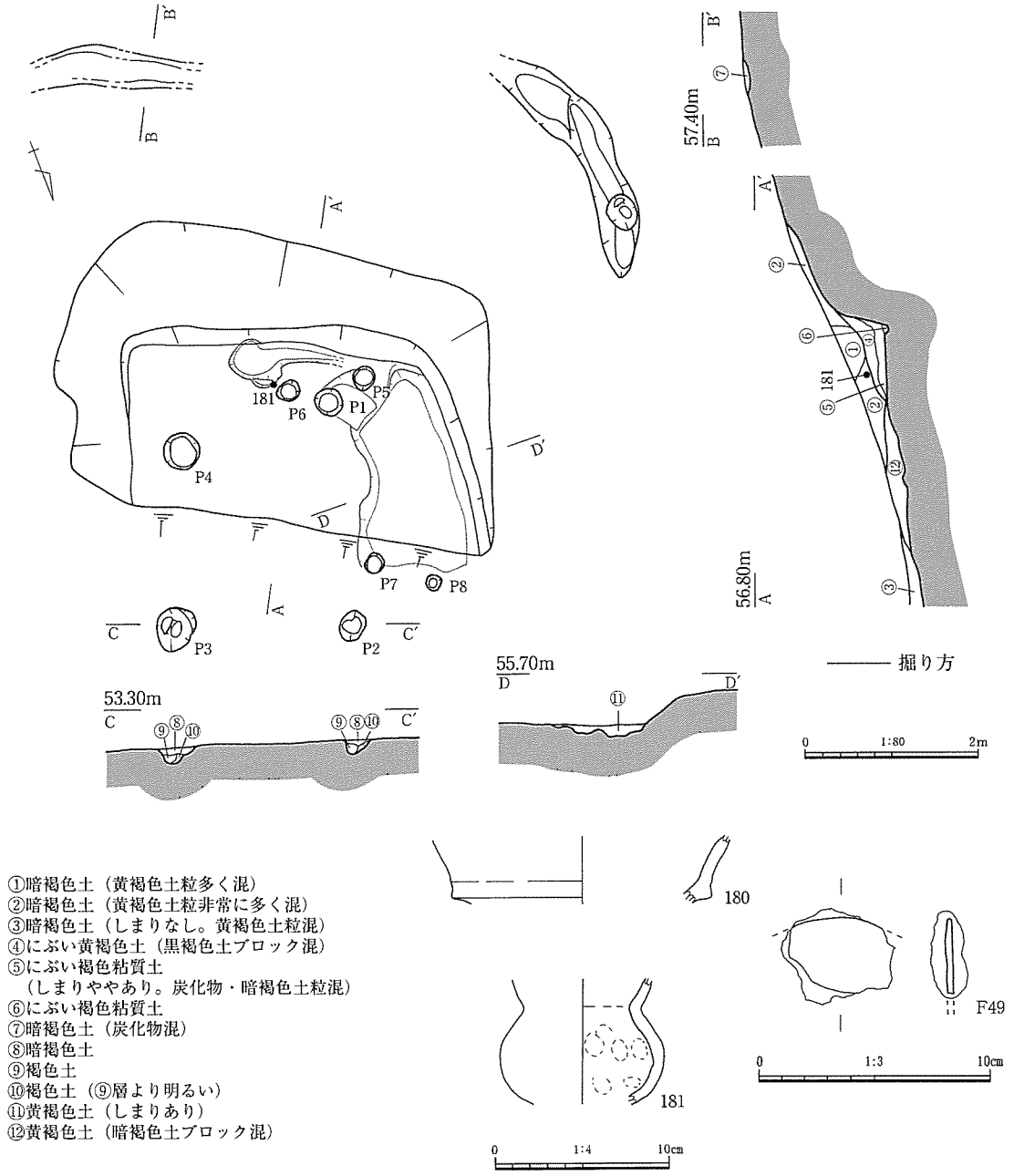


図83　テラス11および出土遺物

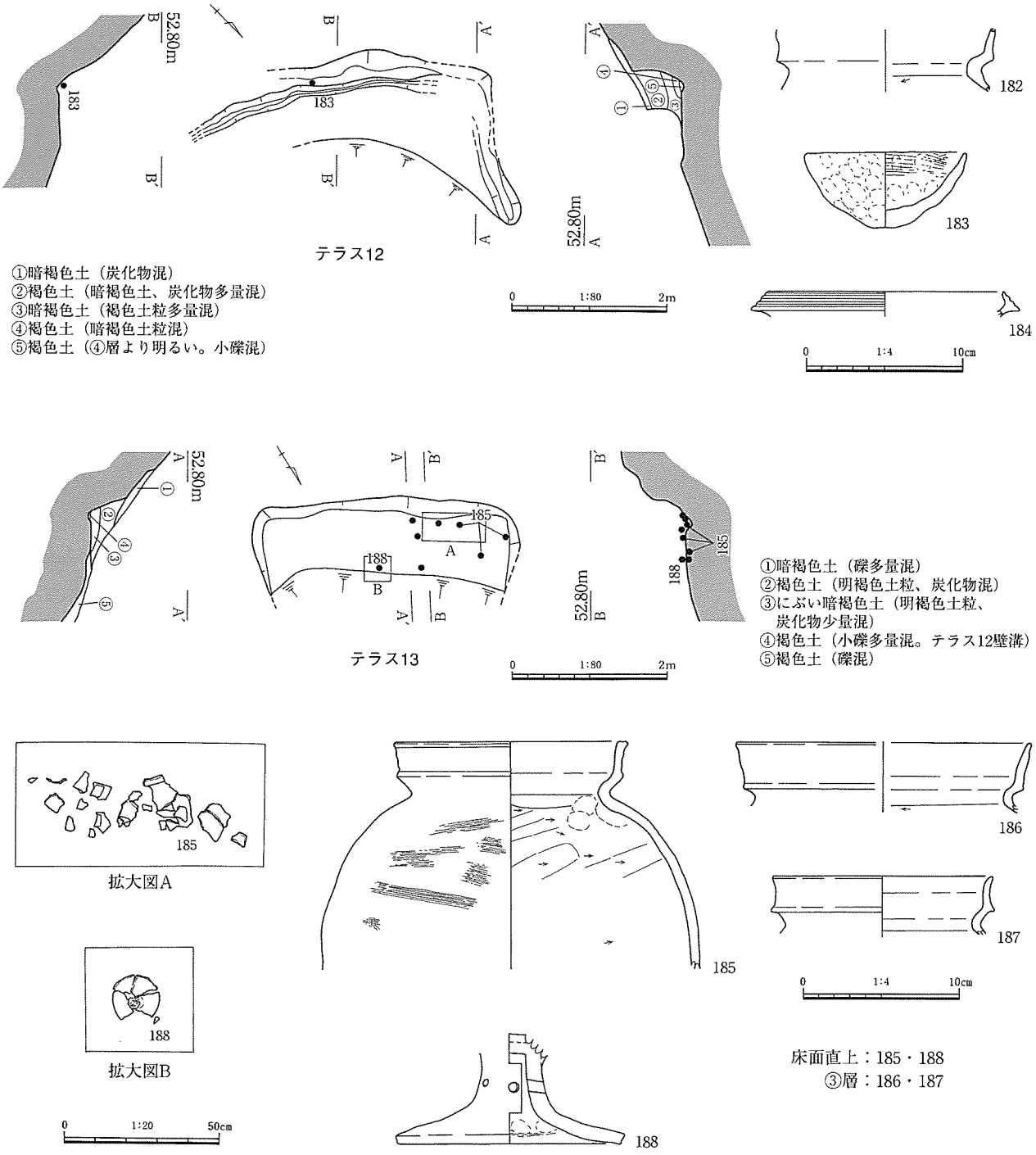


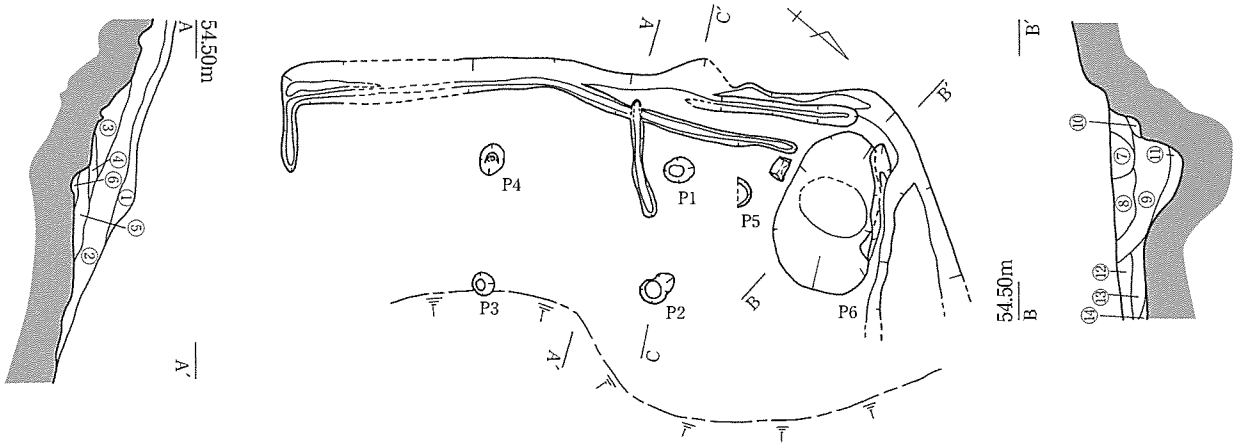
図84　テラス12・13および出土遺物

テラス13（図84、図版33・57－１・57－２）

東斜面部南側の中腹部Ｄ３グリッドで検出した。北西横のテラス12を切って構築されている。北東側は流失し、遺存状況は悪い。しかし、残存部分から方形の床面が想定される。床面の標高は、テラス12と同様、約51.5mである。堆積する土は、暗褐色系が主体である。床面下には少量の土器を含んだ⑤層があり、テラス構築時の盛土あるいは、それ以前の流土の可能性がある。

床面からは、185･188が出土している。185は土師器甕、188は高杯脚部で、正位で出土した。ともに古墳時代中期前葉～中葉の遺物である。

床面直上出土遺物から、古墳時代中期前葉～後葉の遺構と判断した。　（湯川）



①にぶい褐色土
②暗褐色土（5㎜大の小礫混）
③黄褐色土（やや暗い。小礫混）
④黄褐色土（やや暗い。Ⅷ層ブロック混）
⑤暗褐色土（黄褐色土粒、炭化物混）
⑥黄褐色土（褐色土粒少量、炭化物混）
⑦暗褐色土（炭化物混）
⑧暗褐色土（黄褐色土粒、炭化物混）
⑨黄褐色土（やや暗い。黄褐色土ブロック、炭化物混）
⑩暗褐色土（④・⑤層より暗い。炭化物多く混）
⑪にぶい暗褐色土
⑫黄褐色土（やや暗い。Ⅷ層ブロック混）
⑬暗褐色土（黄褐色土粒、炭化物混）
⑭黄褐色土（褐色土粒少量、炭化物混）

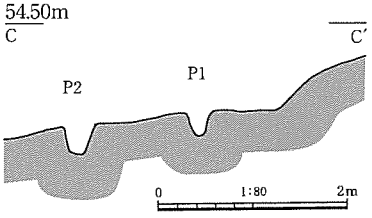
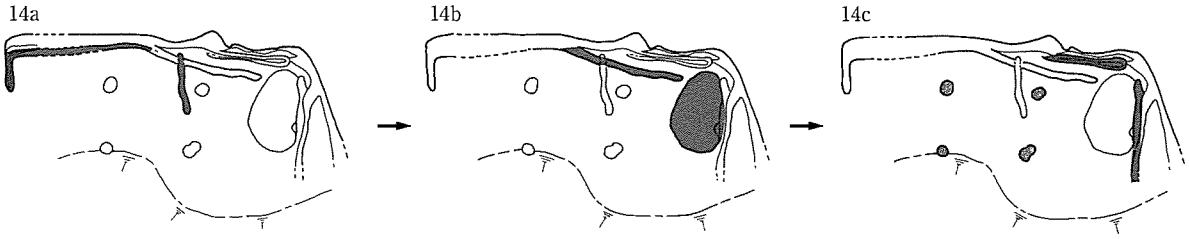


表33　テラス14ピット計測表

No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm	底面の標高m
P1	30	26	23	53.3
P2	40	28	40	53.2
P3	24	23	38	53.2
P4	33	26	40	53.2
P5	33	26	40	53.2



変遷図

図85　テラス14

テラス14（図85･86、図版34・57－１・２、表33）

東斜面上半部、Ｄ３・４グリッドで検出した。テラス１を切って構築されている。北東側は流失しており、正確な平面形態は不明であるが、残存部から平面形態は方形を呈していたと推定される。床面の標高は、53.2mを測る。床面南西側は地山削り出し、北東側は、床面構築のための盛土と推測する④～⑥・⑫～⑭層が堆積していた。なお、⑥・⑭層は褐色を呈しており、テラス１の堆積土である可能性がある。床面上には、暗褐色系の土が堆積するピットや溝が掘り込まれており、いくつかは切り合い関係にあった。このことから、テラス面上で最低３回にわたる利用があったと考え、それらを古いものから、テラス14ａ・14ｂ・14ｃとして以下に報告する。

テラス14ａは、コの字型に溝が配置され、この内部の床面は他の部分と比較して１～３㎝低い。北側壁溝と南側床溝の距離は、約3.8mを測る。

テラス14ｂは、14ａの床溝を切る南北方向の床溝と、ピット６で構成される。この２つが、同時期に機能していたかは不明である。しかし、同一テラス面を共有する14ａと14ｃの間に大きな時期差が

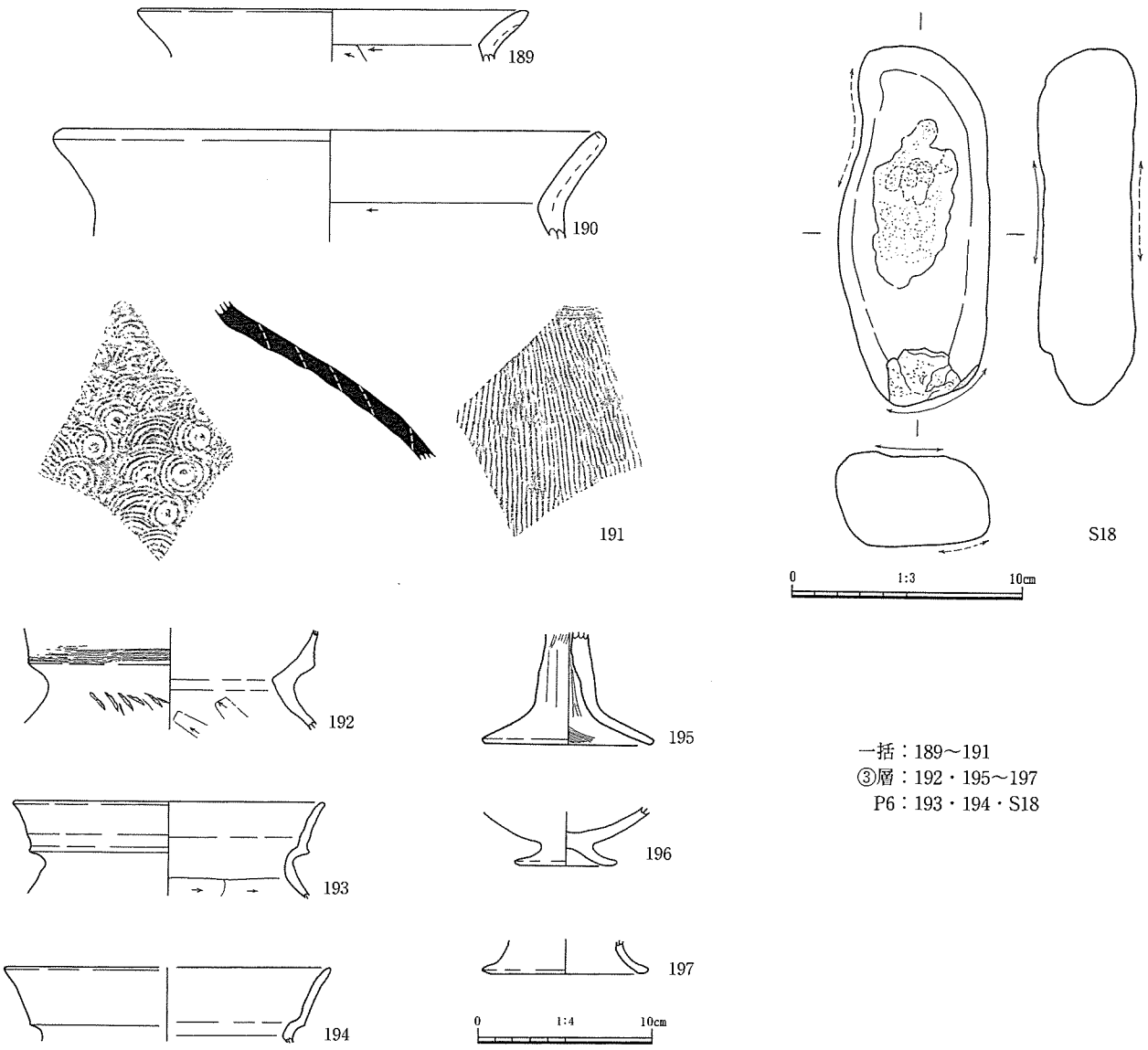


図86　テラス14出土遺物

ないと考え、14ｂとして報告する。ピット６は長軸1.7m、短軸1.1m、深さ75cmを測る。暗褐色土と黄褐色土が堆積していた。⑧・⑨層には、地山質土がブロックあるいは粒状に多く含まれており、人為的に埋め戻されたと判断した。このピットから193・194・Ｓ18が出土している。

14ｃは、ピット１～４を中心とする。これらのピットは、柱抜き取り痕跡を有し、方形に配列されていることから、何らかの上屋構造を支える主柱穴と考えられる。ピット６を切って構築される北西辺の溝、この溝と直交方向にある壁溝は、ピット１～４と軸を同じくすることから、同時期に機能していたと判断した。ピット１・２の中心から、北西辺の溝と14ａ南東辺の溝までの距離は、ほぼ同じである。このことから、14ｃの段階では、テラス14のほぼ全面が利用されていたと考えている。テラス部に堆積する土は③層で、この上に、Ａ層に相当する②層が堆積している。③層からは、弥生時代終末期から古墳時代中期の土器が少量出土している。

14ａ・ｂ・ｃは同一テラス面を利用しており、暗褐色系の土が堆積していることから、連続して営まれた可能性が高い。出土遺物と堆積する土の色から、古墳時代中期の遺構と判断した。　（湯川）

６．土坑

土坑22（図87、図版35・57－３・58－１）

東斜面南側中腹部、Ｄ３グリッドで検出した。テラス13から南西に約0.7ｍに位置する。平面形態は長楕円形、断面形態はＵ字状を呈する。長軸1.4ｍ、短軸0.7ｍ、検出面からの深さ48cmを測る。底面南東側には、径約40cm、深さ約10cmの落ち込みがある。堆積する土は、褐色～暗褐色を呈し、６層に分層した。すべての層から遺物が出土したが、特に④・⑤層から土師器がまとまって出土した。

198～200は甕、201は直口壺、202は椀、203は弥生時代終末期の甕である。203を除き古墳時代中期中葉の所産である。すべての個体は、欠損した状況での出土である。また、201は壺にもかかわらず内外面に煤が付着しており、廃棄前に火にかけられた可能性がある。これらから本遺構は、古墳時代中期中葉の廃棄土坑と考えている。（湯川）

土坑23（図88、図版57－３）

平坦部中央付近、Ｆ６グリッドに位置する、長径1.9ｍ、短径1.5ｍの平面形が長楕円形の土坑であ

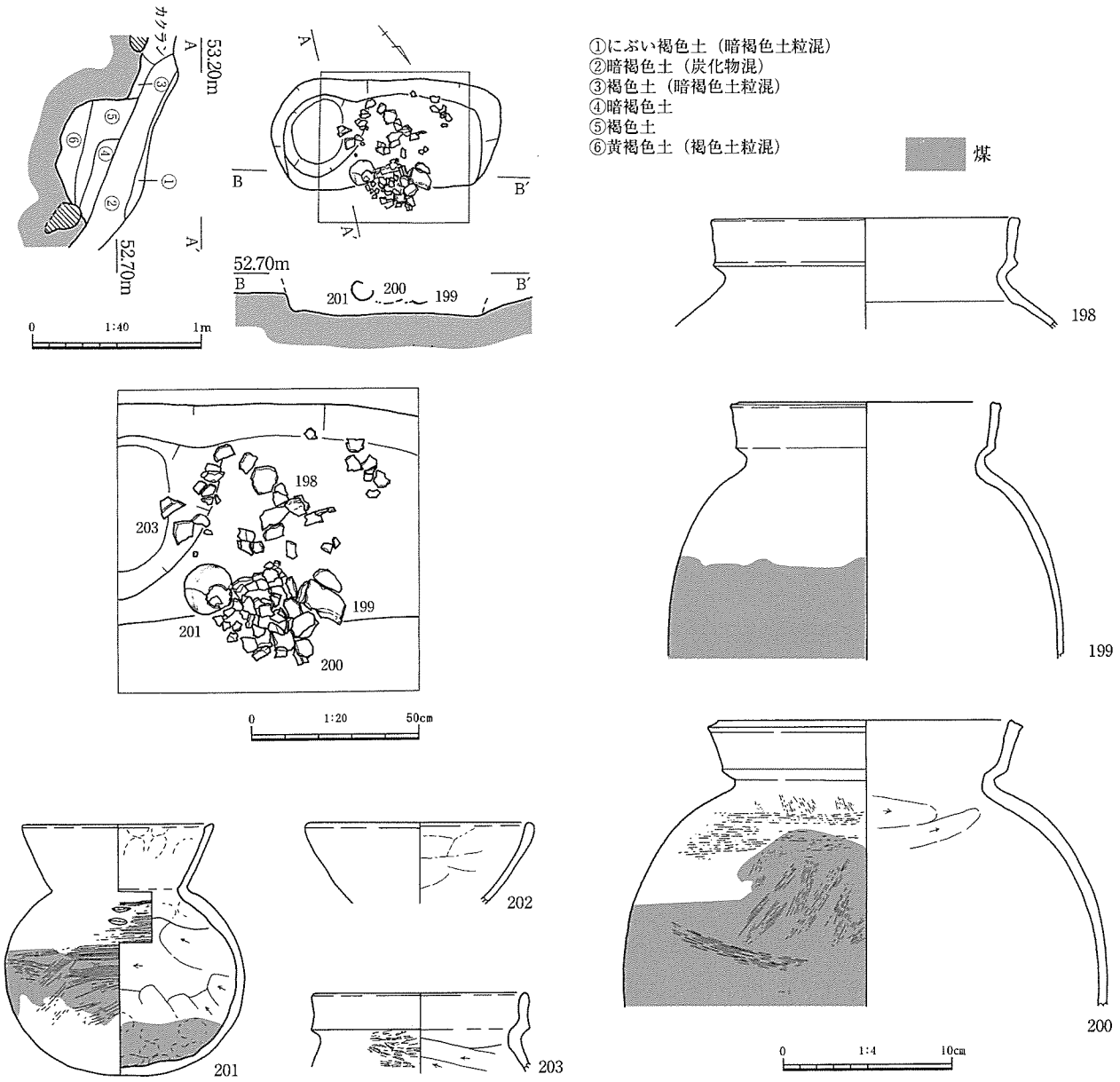


図87　土坑22および出土遺物

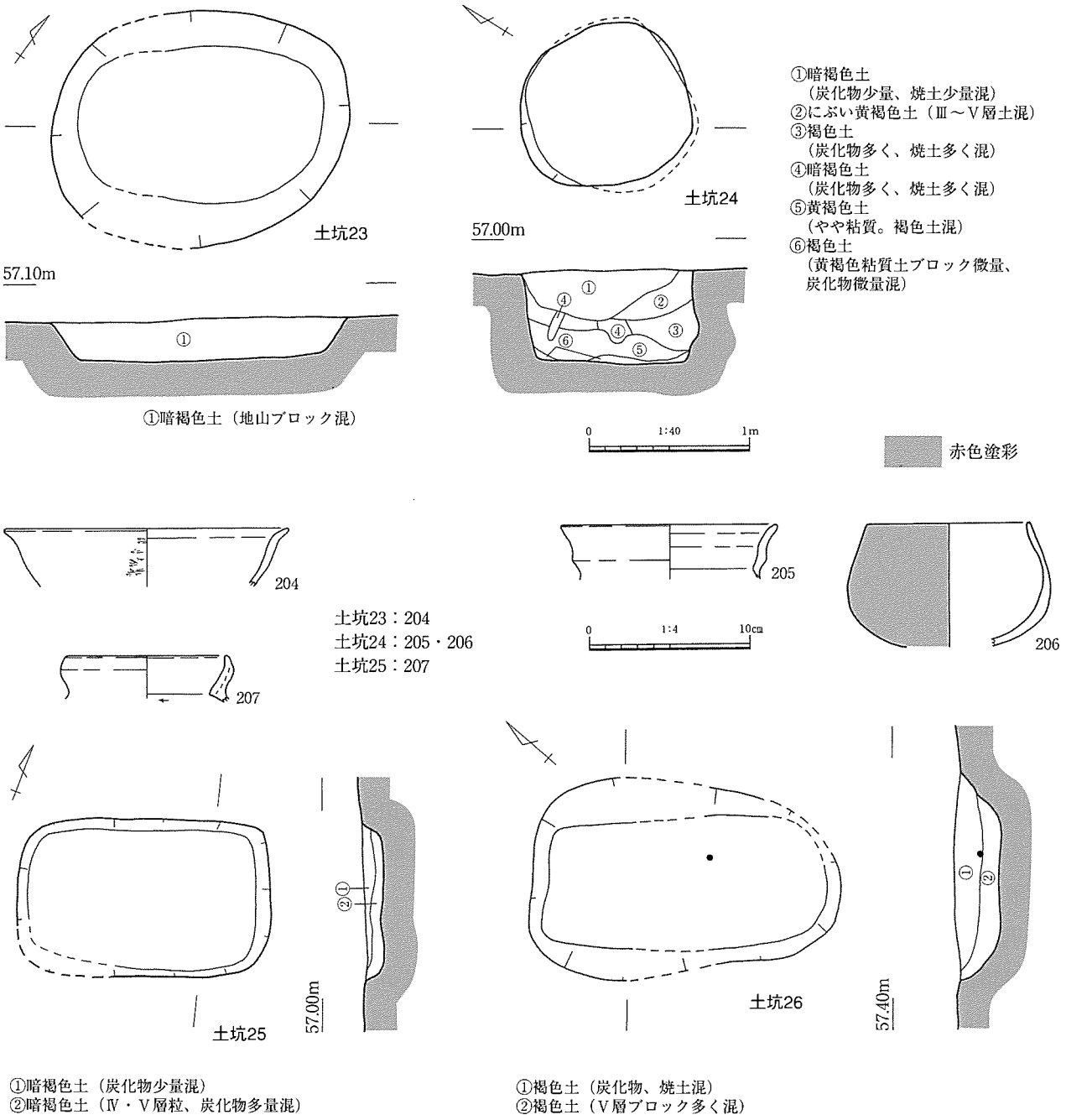


図88　土坑23～26および出土遺物

る。検出面からのは深さ28cmを測る。

204は高杯杯部口縁である。やや深い皿状を呈するもので、口縁端部が外反している。外面には赤色塗彩が施されている。古墳時代前期前葉のものである。

竪穴住居10の①層を切っていることから、古墳時代中期のものと考えている。　（三木）

土坑24（図88、図版36－１・57－３）

平坦部中央付近、Ｅ・Ｆ６グリッドに位置する、径1.0mの平面形が楕円形の土坑である。検出面からのは深さは60cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、下場は一部オーバーハングしている。土層は①・②層の上層と③層以下の下層とに大別できた。下層上面には、焼土と炭化物が広がり、壁面にも焼土が付いていた。また同一面で、炭化物と焼土の入る小ピット３基を検出した。この事から下層

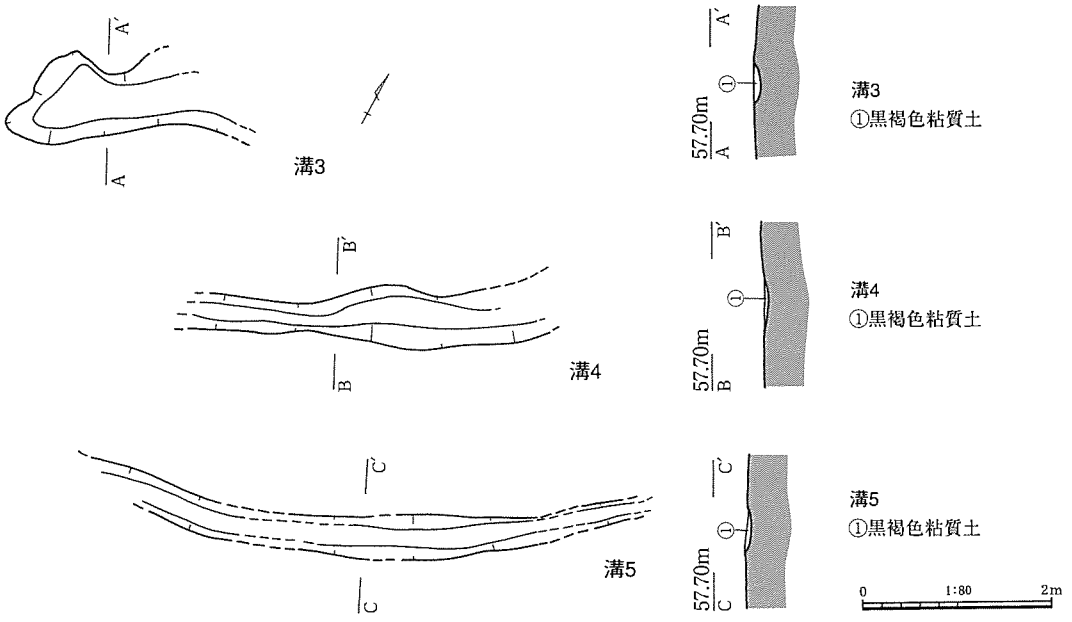


図89　溝３～５

以上は何らかの焼成遺構として機能していた可能性がある。

205は甕口縁で、下層出土遺物である。206は高杯で、杯部はブランデーグラス状を呈するものである。上層出土遺物である。ともに古墳時代前期前葉のものである。206は同一個体と思われるものが竪穴住居10と土坑20から出土しており、竪穴住居10の堆積土に由来する可能性もある。

古墳時代前期前葉の竪穴住居10の最上層である①層を切り、堆積する土が暗褐色系であることから、古墳時代中期のものと考えられる。　（三木）

土坑25（図88、図版36－２・57－３）

平坦部南東、Ｅ２グリッドに位置する、長辺1.5m、短辺1.1mで平面形が隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは12cmを測る。207は器種・時期は不明である。口縁は厚く、内面のケズリは頸部まであがっている。その他、古墳時代中期の土器が少量出土している。出土遺物と、暗褐色の埋土をもつことから、古墳時代中期のものと考えている。　（三木）

土坑26（図88、図版36－３）

平坦部南西、Ｆ・Ｇ６グリッドに位置する、長辺2.0m、短辺1.3mで平面形が長楕円形を呈する。検出面からの深さは30cmを測る。遺物は細片が出土している。図化はしていないが古墳時代中期の土器片が出土しており、Ⅱ面での検出とあわせ、古墳時代中期のものと考えている。　（三木）

７．溝

溝３・４・５（図89）

平坦部南、Ｆ・Ｇ５グリッドで検出した。長軸は、尾根筋にほぼ直交する。芯々で約２mの間隔を保ちほぼ並行する関係にある。幅は約50cmで、検出面からの深さは５cm程度と浅い。３条の東西の底面レベルはほぼ同じで、堆積する土からも流・湛水の証拠は見出せなかった。遺物は細片が少量出土している。検出がⅡ面であり、堆積する土の色から、古墳時代中期のものと考えられる。　（三木）

第５節　その他の時期の遺構と遺物

１．概要

本節では、これまで述べてきた以外の時期の遺構と、詳細な時期決定を行えない遺構、および遺構外出土遺物を報告する。遺構については、古墳時代前期の土器を含む遺物包含層であるⅡ層と、古代を最新とする遺物を含むＡ層（暗褐色流土）を挟み、これらの上面以上で検出した遺構と、下面以下で検出した遺構に大別した。一部、本来の検出面で把握できなかったものがある。これらについてはピットを除き、埋土・形態等の検討からどちらに帰属するものかを判断している。後者には、竪穴１基・掘立柱建物４棟・土坑35基が帰属する。前者には、土坑11基・溝１条が帰属する。後者のうち土

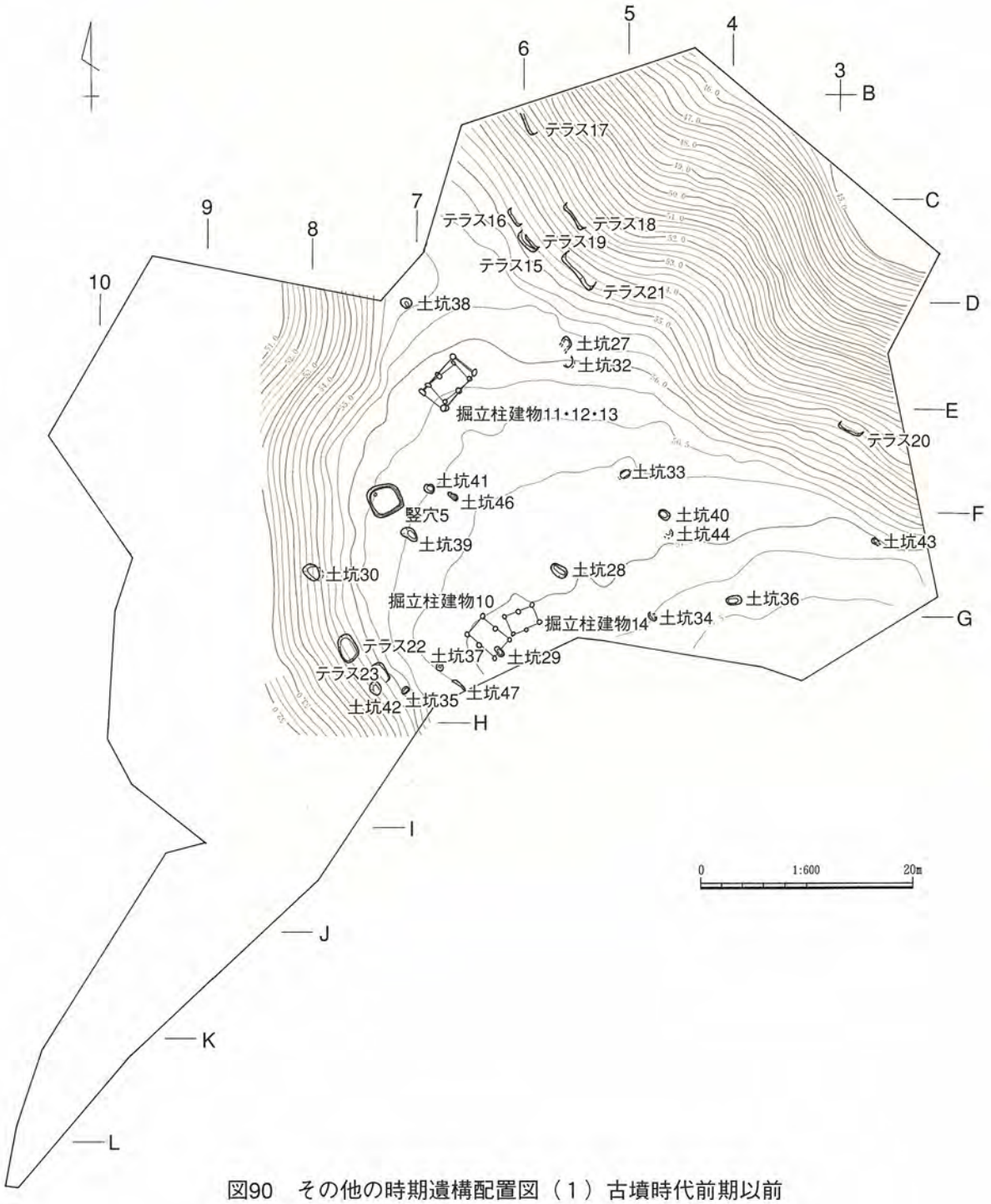


図90　その他の時期遺構配置図（１）古墳時代前期以前

坑48～61は、形態・配置等から落し穴状遺構と判断した。前者のうち、土坑69～72は、近世の遺物包含層であるⅠ層を掘り込んで構築していることから、近世以降の所産である。ピットは、時間的な制約から、その大半が本来の検出面以下での検出である。このため、本節にまとめて報告する。

遺物については、近世後半を最新とする遺物を含むⅠ層および、古墳時代前期以前の遺物を含むⅡ層の包含層、古墳時代初頭以前の遺物を含むＢ層（褐色流土）および平安時代以前の遺物を含むＡ層（暗褐色流土）の東西斜面流土、表土その他の遺物を報告する。（湯川）

２．古墳時代前期以前の遺構

竪穴５（図91、図版37－５、表44）

Ｅ・Ｆ７グリッドで検出。平面形は正方形に近く、規模は南北3.0m、東西2.9m、深さ20cmを測る。床面は地山で、壁に沿って深さ５cmの溝がめぐる。形態から簡易な建物跡の可能性がある。（北）

掘立柱建物10（図92、図版36－４、表34・45）

Ｇ６グリッドで検出。桁行２間、梁行１間で、桁行（長軸）約3.4m、梁行（短軸）約2.3mを測る。主軸は尾根方向にほぼ平行する。⑦・⑧層は掘り方込め土の可能性が高く、⑥層は柱痕跡の可能性が高い。Ｐ６の柱痕跡内から、柱材の一部の可能性がある拳大ほどの炭化材が出土しており、樹種同定の結果アカガシと判定されている（第６章第５節参照）。（北）

掘立柱建物11・12・13（図92・93、図版36－５，37－１～４、表35・45）

平坦部北側、Ｄ６グリッドに位置する。主軸は、ほぼ尾根筋に直交している。規模はすべて桁行２間×梁行１間で、柱穴の底面レベルは55.50mでほぼ揃っている。平面での切りあい関係の観察から、

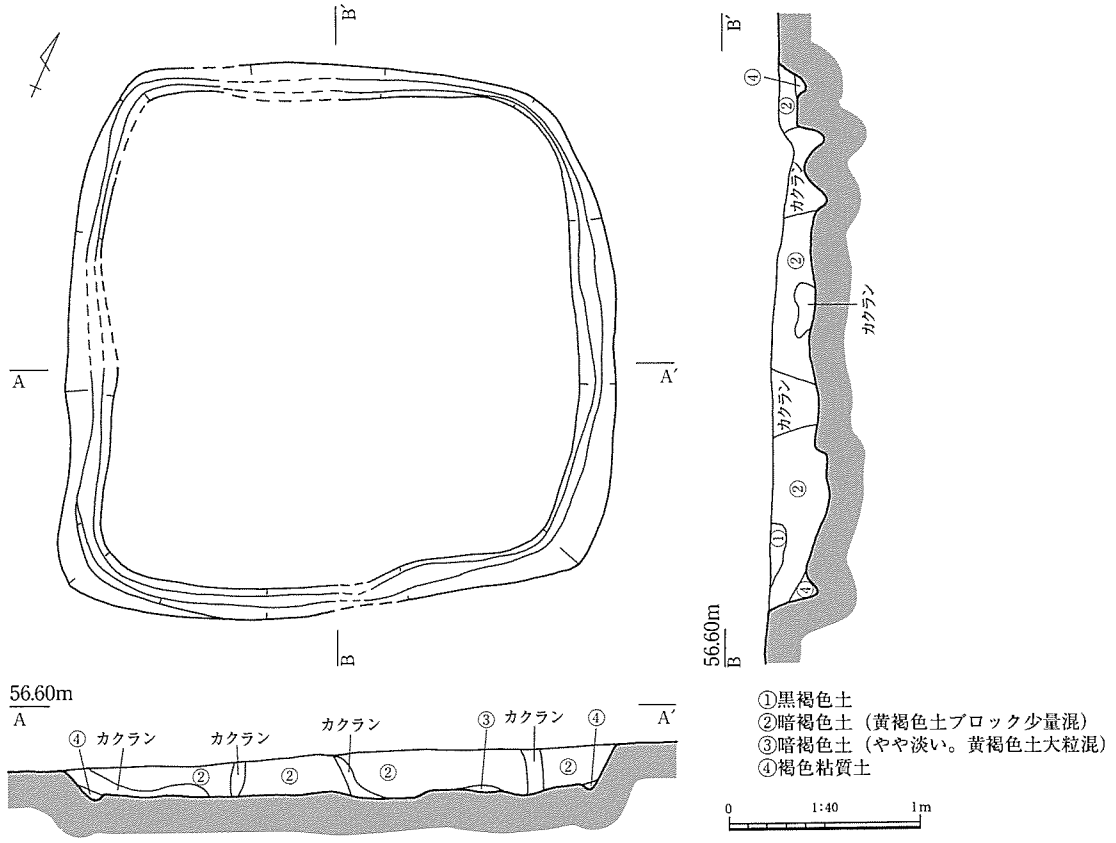


図91　竪穴５

11→12→13の順に構築されたと判断した。

掘立柱建物11は、柱間間隔にはばらつきがあり、平面形も平行四辺形を呈している。掘立柱建物12・13よりも規模は小さく、堆積している土の色調も暗い。Ｐ１・３・４・６で柱痕を確認した。掘立柱建物12・13は、桁行方向の柱間が2.3m程度で揃っており、規模・堆積している土の色調もほぼ同じである。共に、柱は抜き取っていると考えている。遺物は、細片が少量出土しているピットもあるが、時期を確定できるものはない。掘立柱建物12・13は共通性が多い事から、建て替えの可能性がある。（三木）

掘立柱建物14（図93、表38・45）

Ｆ・Ｇ，５・６グリッドで検出。桁行２間、梁行１間で、桁行（長軸）約2.9m、梁行（短軸）約

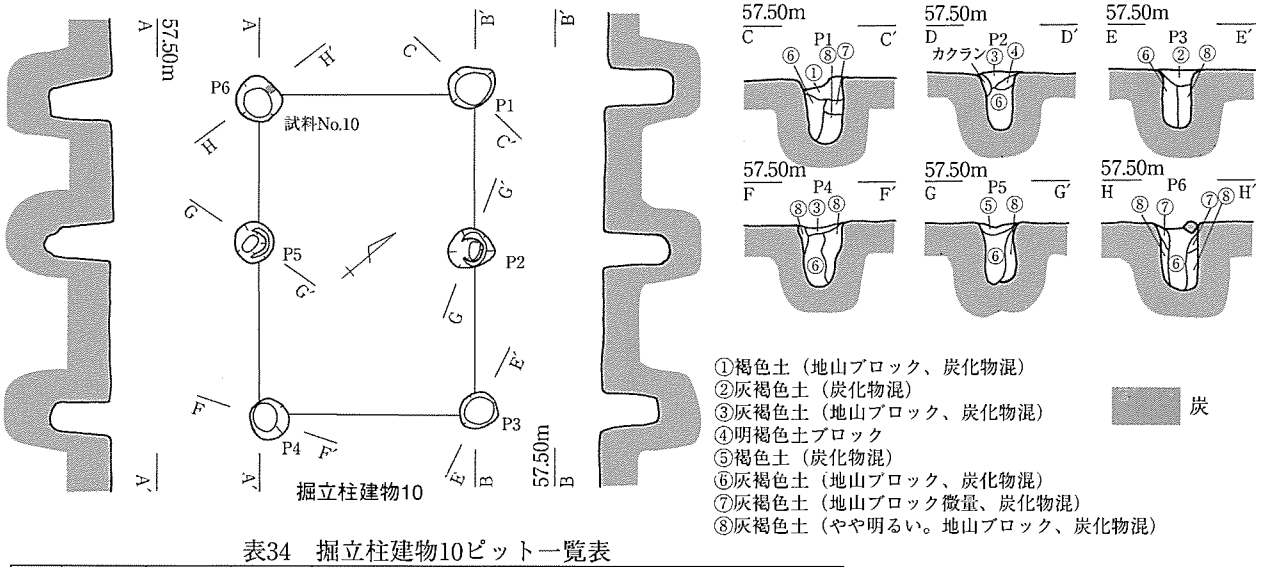


表34　掘立柱建物10ピット一覧表

No.	長径cm	短径cm	深さcm	底面標高m	No.	長径cm	短径cm	深さcm	底面標高m
P1	53	43	71	56.2	P4	46	42	73	56.4
P2	49	41	74	56.3	P5	45	42	74	56.3
P3	44	38	61	56.4	P6	49	44	69	56.3

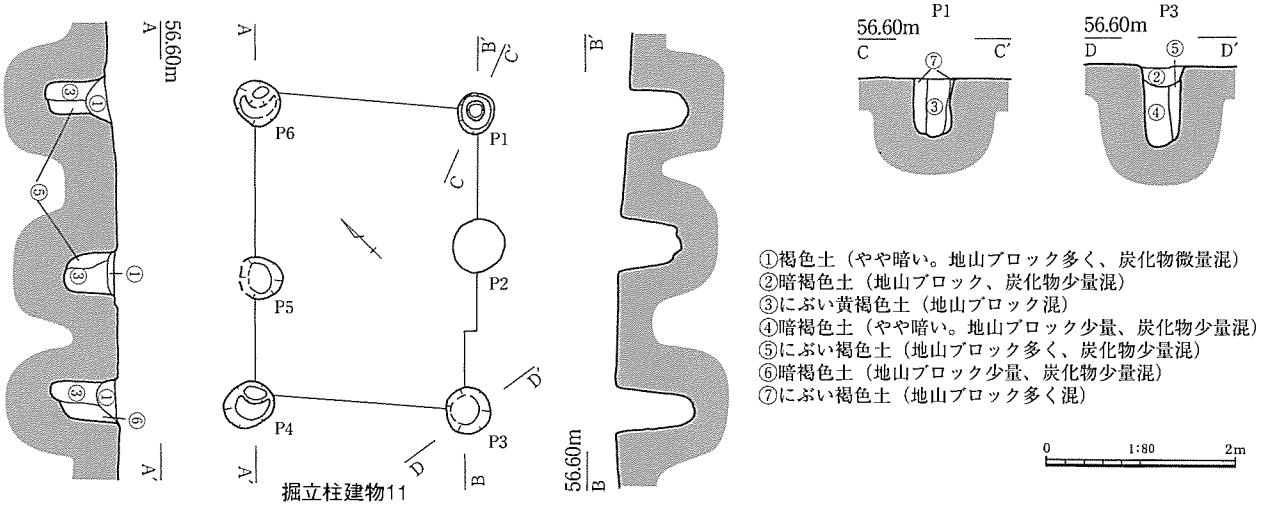
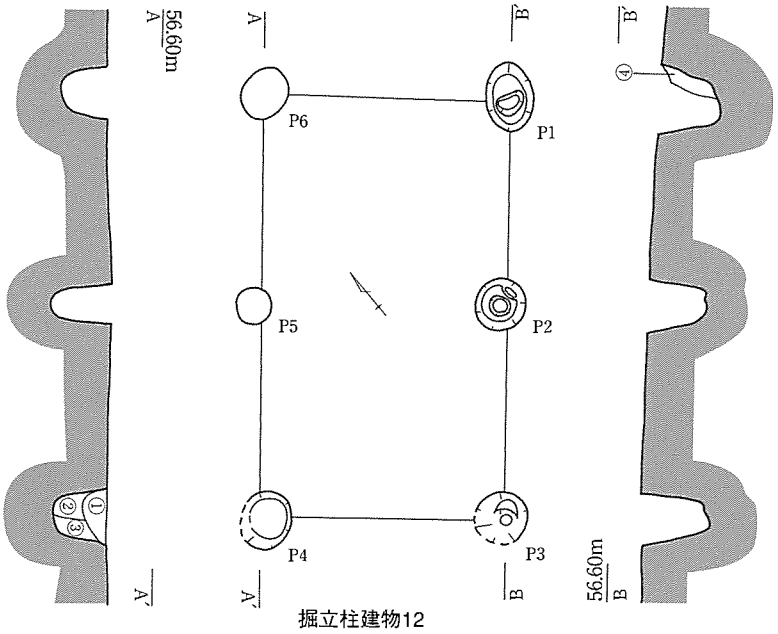


表35　掘立柱建物11ピット計測表

No.	長径cm	短径cm	深さcm	底面標高m	No.	長径cm	短径cm	深さcm	底面標高m
P1	46	38	64	55.5	P4	56	46	71	55.4
P2	57	53	66	55.6	P5	(48)	46	64	55.5
P3	50	50	82	55.5	P6	49	45	68	55.4

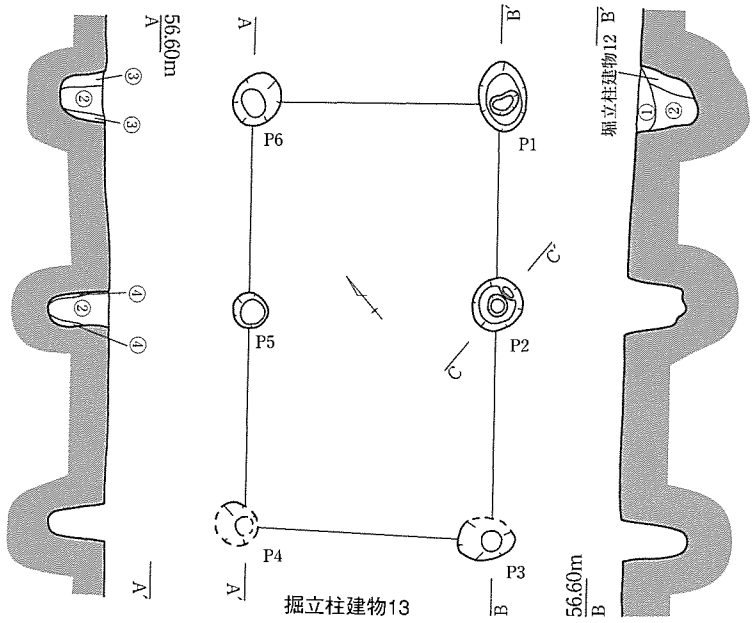
図92　掘立柱建物10・11

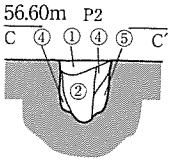


①灰褐色土（地山ブロック少量混）
②にぶい黄褐色土（地山ブロック多く混）
③暗褐色土（地山ブロック、炭化物少量混）
④にぶい褐色土（地山ブロック多く、炭化物微量混）

表36　掘立柱建物12ピット一覧表

No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm	底面の標高m
P1	74	50	70	55.5
P2	57	54	60	55.6
P3	57	55	70	55.54
P4	62	51	68	55.56
P5	38	37	74	55.50
P6	57	47	76	55.48

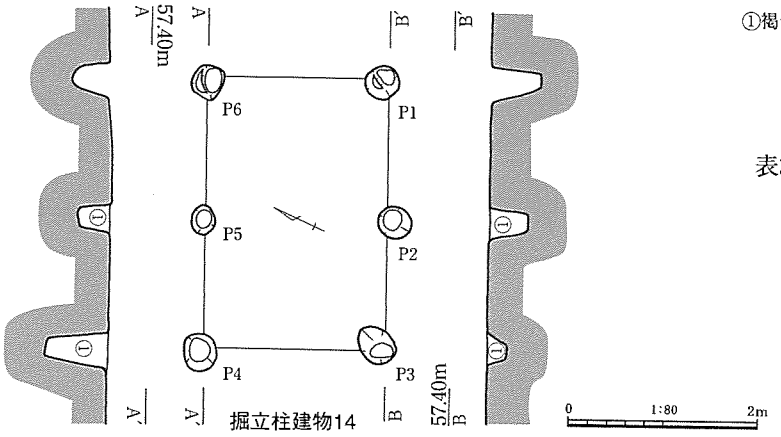




①灰黄色土（炭化物小量混）
②にぶい黄褐色土（地山ブロック、炭化物少量混）
③暗褐色土（地山ブロック多く、炭化物微量混）
④にぶい黄褐色土（地山ブロック多く混）
⑤にぶい黄褐色土
（しまりややなし。地山ブロック多く混）

表37　掘立柱建物13ピット計測表

No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm	底面の標高m
P1	75	52	66	55.5
P2	57	53	66	55.6
P3	(58)	56	76	55.5
P4	62	(52)	62	55.5
P5	40	37	62	55.5
P6	57	47	49	55.5



①褐色土

表38　掘立柱建物14ピット計測表

No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm	底面の標高m
P1	36	34	66	56.4
P2	35	32	46	56.6
P3	46	35	27	56.8
P4	40	34	66	56.3
P5	32	26	35	56.6
P6	40	33	32	56.7

図93　掘立柱建物12～14

1.9mを測る。主軸方向は尾根方向に直交する。柱穴内には褐色土が堆積している。　（北）

テラス15（図94、図版38－１）

Ｃ５・６グリッド斜面肩部で検出。テラス16、テラス３に隣接し、テラス19を切っている。半楕円形を呈し、長軸約2.6m、深さ25cmを測る。床面は地山削り出しで、壁に沿って深さ約５cmの溝が切られる。壁溝をもつことから建物跡の可能性がある。　（北）

テラス16（図94、図版38－２）

Ｃ６グリッド斜面肩部で検出。テラス15に北接する。方形を呈し、長軸約1.8m、深さ15cmを測る。①層がＢ層に対応する。地山削り出しで平坦面を造っており、作業場として利用するためや、建物建築のために造成した平場と見られる。　（北）

テラス17（図94、図版38－３）

Ｂ５・６グリッド、調査地北端部に位置し、遺構の一部は調査地外に延びる。遺存状態は悪い。①層がＢ層に対応する。長軸約2.5m（検出部分）、深さ17cmを測る。地山削り出しで平坦面を造っており、作業場として利用するためや、建物建築のために造成した平場と見られる。　（北）

テラス18（図94、図版38－４）

Ｃ５グリッド斜面部に位置する。不整矩形を呈し、長軸約2.9m、深さ25cmを測る。南側の一部は土坑16に切られる。遺構の流失が大きく、平坦面はわずかしか残っていない。①層がＢ層に対応する。平坦面は地山削り出しで造られる。残存する平坦面からは外れているが、付属すると考えられるピッ

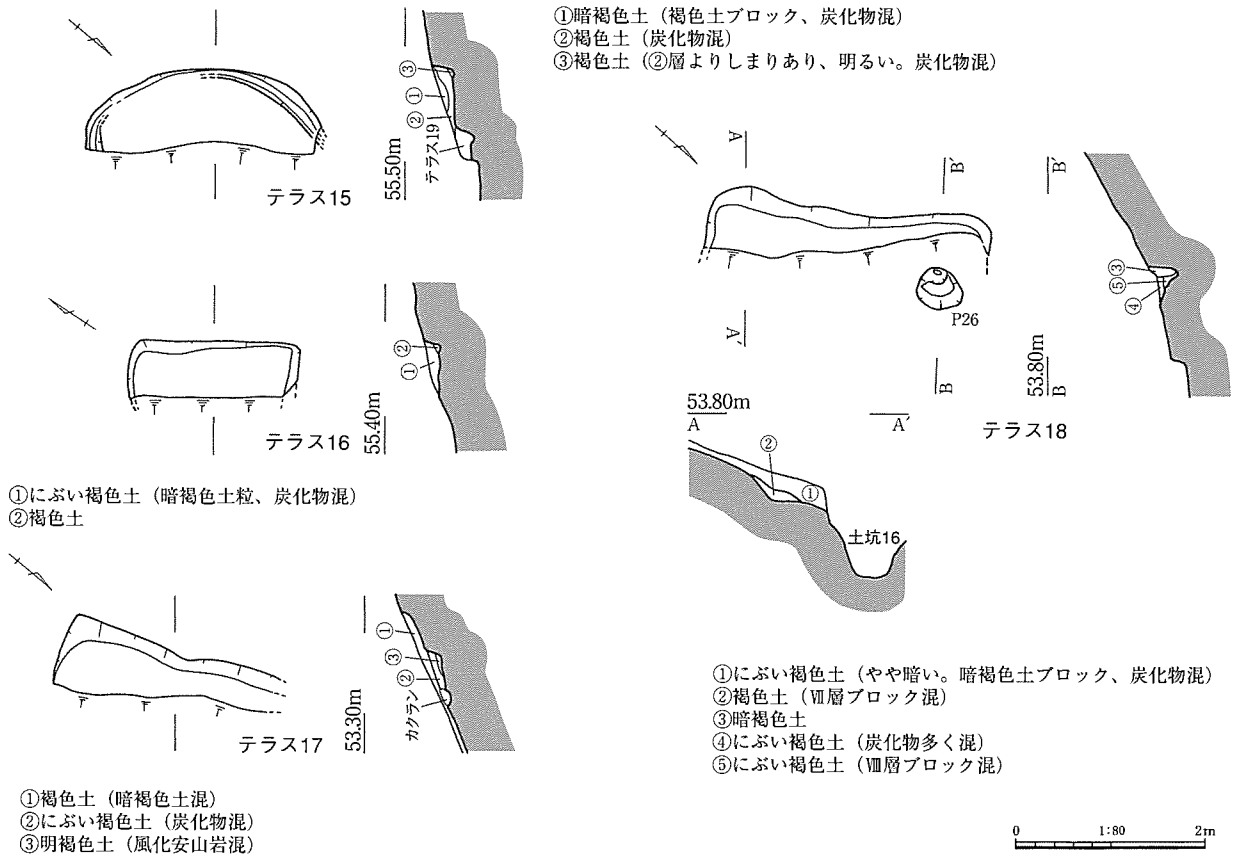


図94　テラス15～18

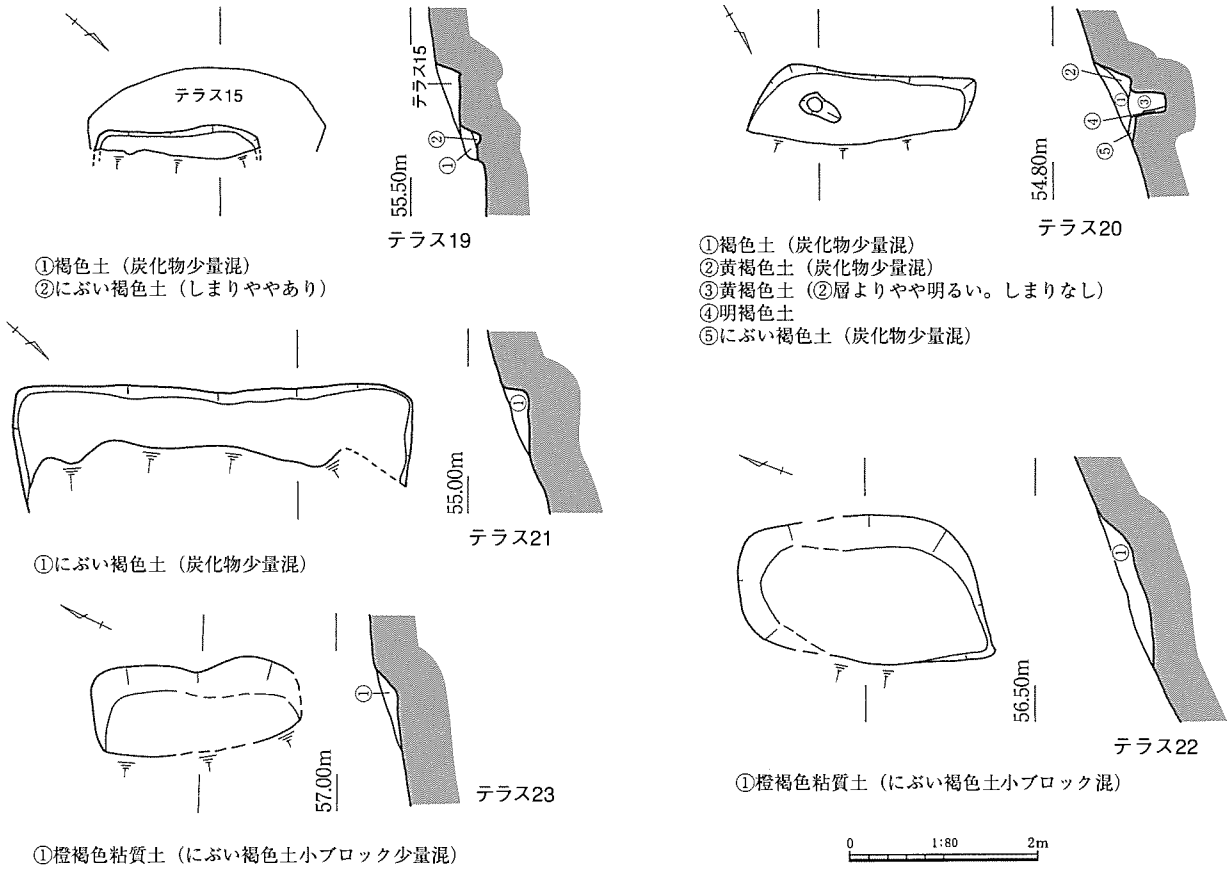


図95　テラス19～23

ト26を検出している。ピットの存在から建物跡の可能性も考えられる。（北）

テラス19（図95）

Ｃ５・６グリッド斜面肩部で検出。重なって造られたテラス15に上面の一部を切られる。平坦面の流失も大きく、遺存状態は極めて悪い。方形を呈し長軸約1.7m、深さ20cmを測る。地山削り出しで平坦面を造っており、作業場として利用するためや、建物建築のために造成した平場と見られる。（北）

テラス20（図95、図版38－５）

Ｅ２グリッドの斜面部に位置する。平面不整形で、長軸約2.1m、深さ35cmを測る。平坦面は地山削り出しで造られ、床面に掘り込まれた深さ約35cmのピットを１基検出している。ピットの存在から建物跡の可能性もある。（北）

テラス21（図95）

Ｃ５グリッドの浅い斜面部に立地する。方形を呈し、長軸約4.0m、深さ30cmを測る。①層がＢ層に相当する可能性がある。地山削り出しで平坦面を造っており、作業場として利用するためや、建物建築のために造成した平場と見られる。（北）

テラス22（図95、図版38－６）

Ｇ７グリッドの斜面肩部に位置する。遺存状態は比較的よい。平面不整形で、長軸2.2m、短軸約1.5m、深さ30cmを測る。地山削り出しで平坦面を造っており、作業場として利用するためや、建物建築のために造成した平場と見られる。（北）

テラス23（図95、図版38－７）

Ｇ７グリッドの斜面肩部に位置する。平面形は不整形で、長軸約2.2m、深さ25cmを測る。地山削り出

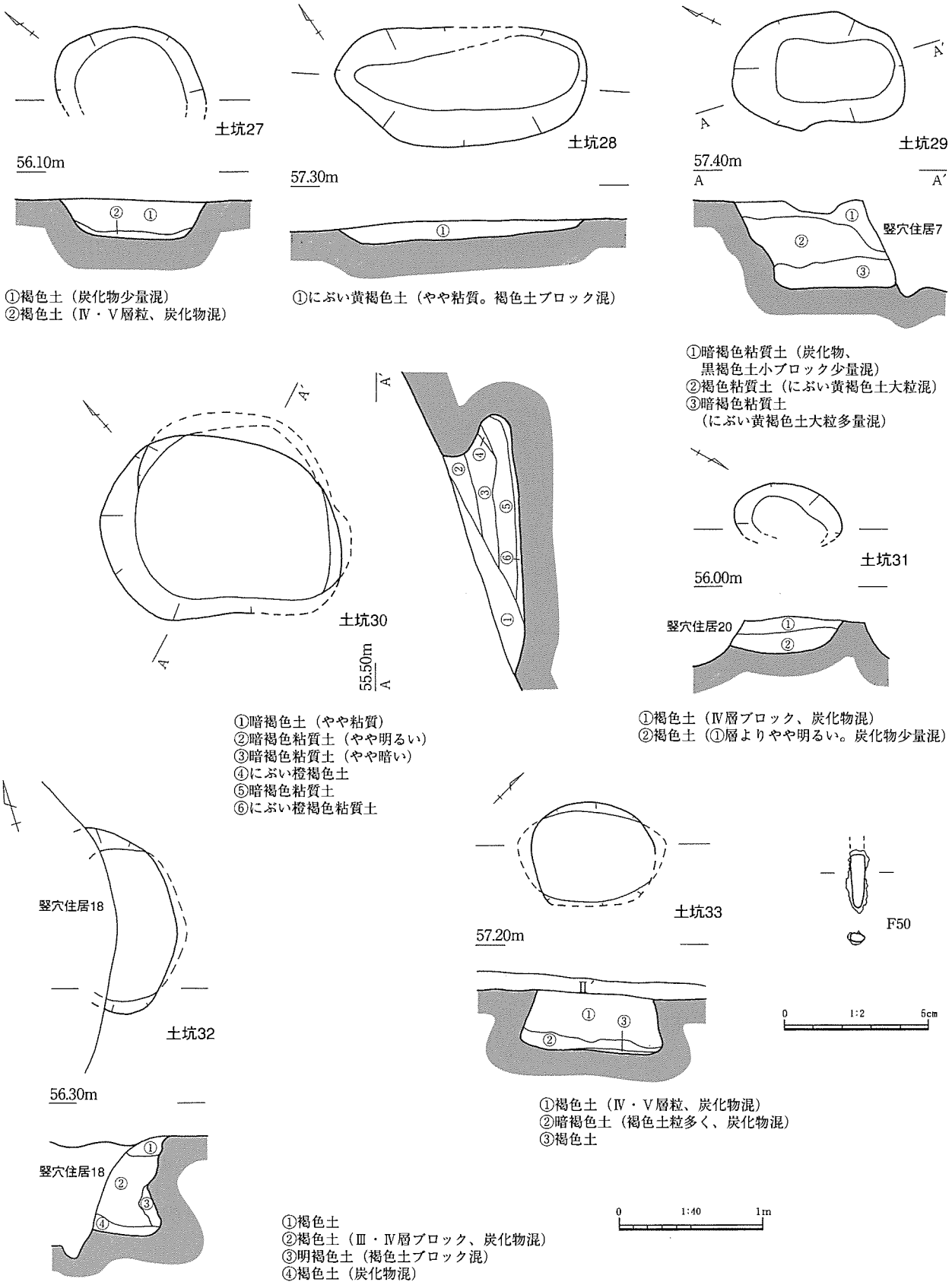


図96　土坑27～33および出土遺物

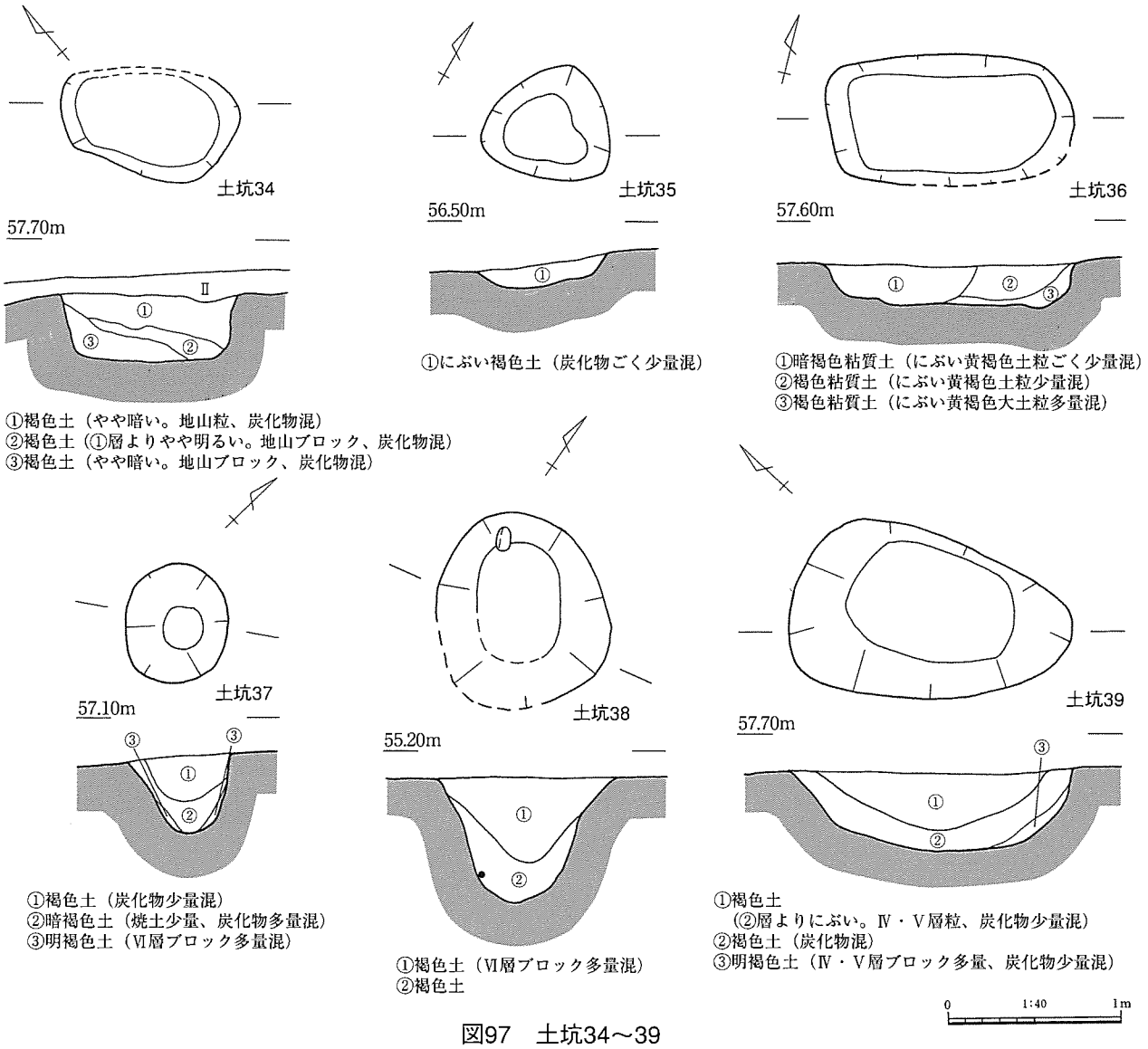


図97　土坑34～39

しで平坦面を造っており、作業場として利用するためや、建物建築のために造成した平場と見られる。

（北）

土坑27（図96）

Ｄ５グリッド検出。竪穴住居18に切られる。円形を呈し、径約1.1m、深さ約30cmを測る。　（北）

土坑28（図96）

Ｆ５グリッド検出。竪穴住居１を切る。長楕円形を呈し、長軸約1.2m、短軸約0.9m、深さ約10cmを測る。　（北）

土坑29（図96、図版39－１・２）

Ｆ３グリッドで検出。埋土はブロックを多く含むので、人為的に埋められた可能性がある。竪穴住居７に切られる。楕円形を呈し、長軸約1.2m、短軸約0.8m、深さ約60cmを測る。　（北）

土坑30（図96、図版39－３・４）

Ｆ７・８グリッドの緩斜面に位置する。西側はかなりの部分が流失している。いわゆる袋状土坑で、長径約1.7m、短径約1.3m、深さ約50cmを測る。埋土①層がＡ層に対応する。　（北）

土坑31（図96）

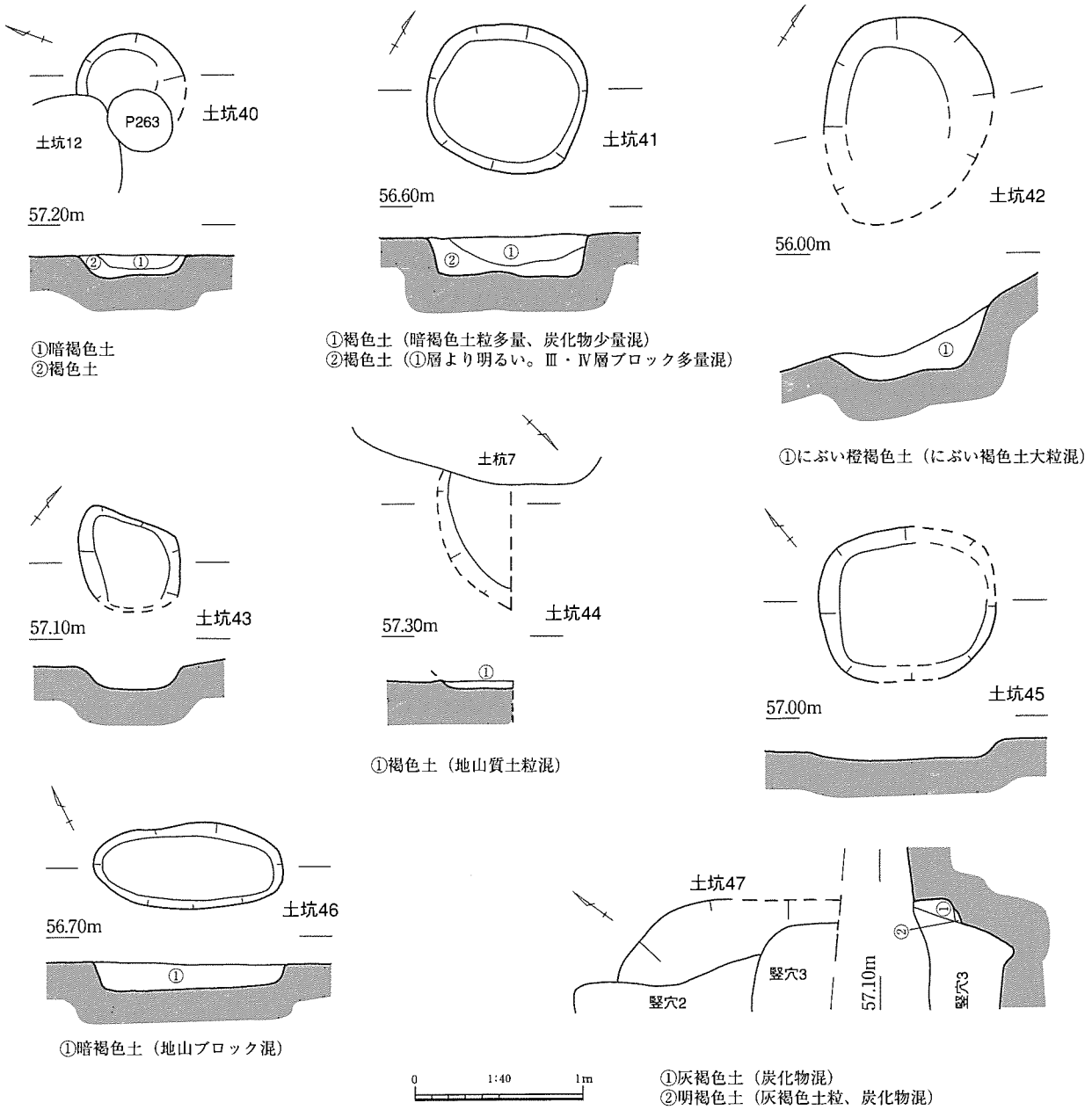


図98　土坑40～47

Ｄ５グリッドで検出。一部を竪穴住居20に切られる。平面形は楕円形で、長軸約0.7m、短軸約0.5m、深さ約30cmを測る。（北）

土坑32（図96）

Ｄ５グリッドで検出。褐色流入土と地山崩落土で埋まった後に、竪穴住居18に切られる。東壁側は断面フラスコ状を呈する。残存値で、長軸約1.3m、短軸約0.4m、深さ約70cmを測る。（北）

土坑33（図96、図版39－５）

Ｅ５グリッドで検出。いわゆる袋状土坑で、径約0.8m、深さ40cmを測る。刀子の柄部分の可能性がある棒状の鉄製品Ｆ50が出土している。（北）

土坑34（図97）

Ｇ４グリッドで検出。平面楕円形を呈し、長軸約1.0m、短軸約0.7m、深さ40cmを測る。（北）

土坑35（図97、図版39－６）

Ｇ７グリッドで検出。平面は不整円形を呈し、径約0.8m、深さ10cmを測る。（北）

土坑36（図97、図版39－７）

Ｆ３・４グリッドで検出。平面隅丸方形を呈し、長軸約1.4m、短軸約0.8m、深さ約20cmを測る。褐色の流入土によって埋没した後に、掘り返しを受けている。（北）

土坑37（図97）

Ｇ６グリッドで検出。円形を呈し、長軸約0.7m、短軸約0.6m、深さ約50cmを測る。③層は込め土の可能性が高い。形態的にもピットに近いので、柱の抜き取りを受けた柱穴と思われる。（北）

土坑38（図97、図版39－８）

Ｃ・Ｄ７グリッドで検出。上面を竪穴住居12に切られる。平面形は楕円形を呈し、長軸約1.2m、短軸約1.0m、深さ約40cmを測る。（北）

土坑39（図97）

Ｆ７グリッドで検出。平面形は楕円形で、長軸約1.6m、短軸約1.0m、深さ約50cmを測る。（北）

土坑40（図98）

Ｆ４グリッド検出。土坑12、Ｐ263に切られる。円形を呈し、径約0.6m、深さ15cmを測る。（北）

土坑41（図98）

Ｅ６グリッドで検出。円形を呈し、径約0.9m、深さ20cmを測る。（北）

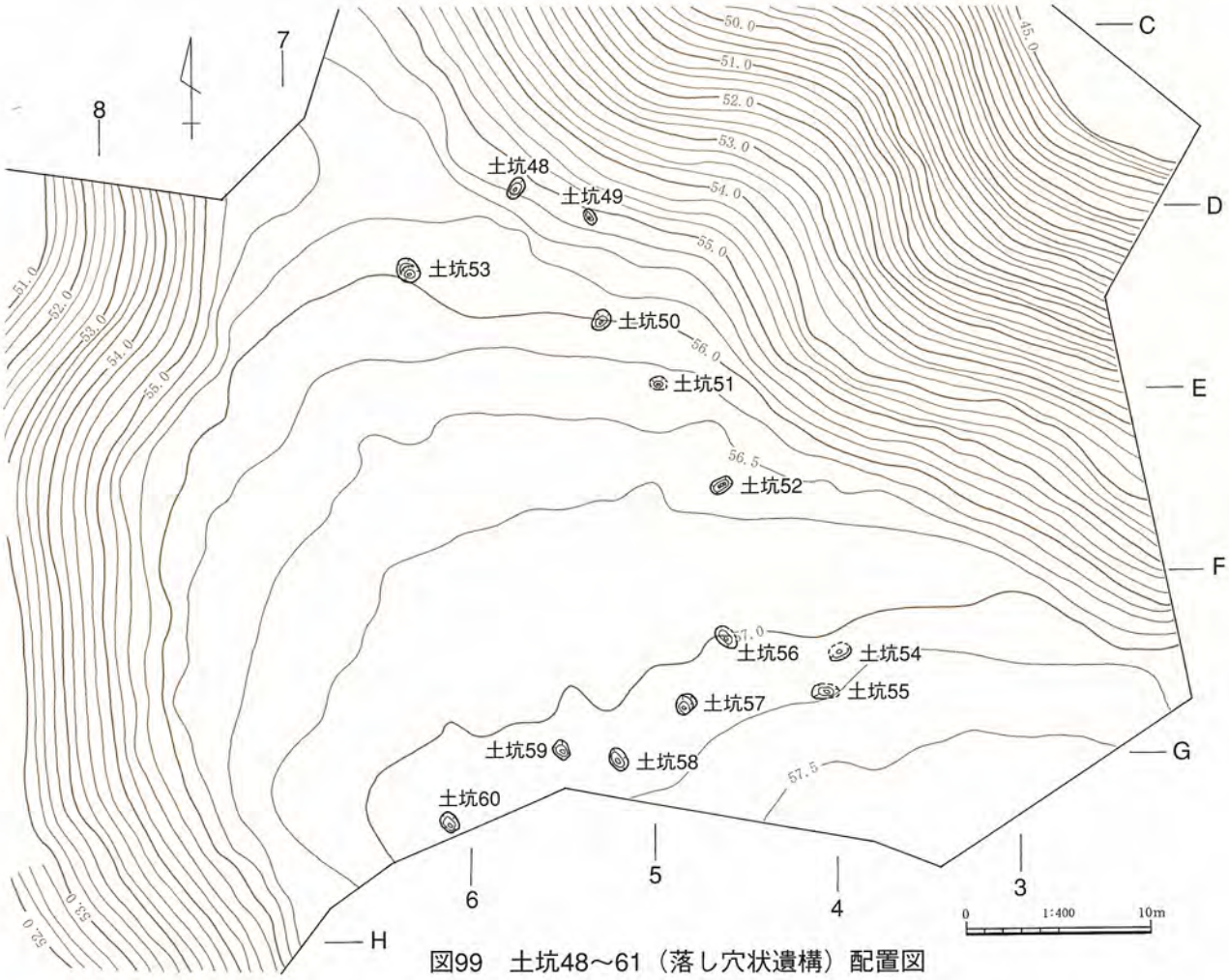


図99　土坑48～61（落し穴状遺構）配置図

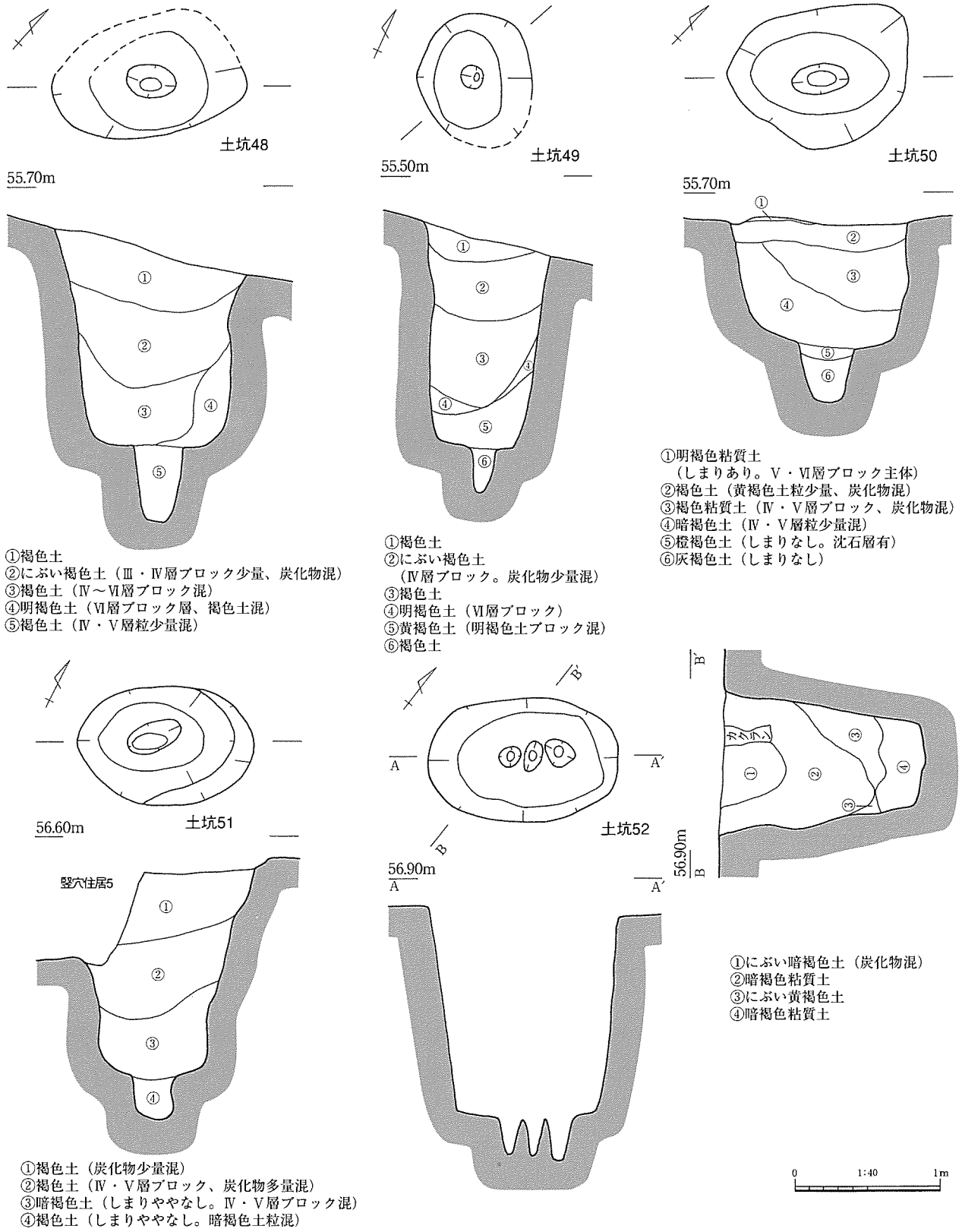


図100　土坑48～52

土坑42（図98）

Ｇ７グリッド、斜面肩部で検出。楕円形を呈し、長軸約1.2m、短軸約1.0m、深さ約40cmを測る（北）

土坑43（図98）

Ｆ２グリッドで検出。平面形は不整矩形を呈し、長･短軸約0.6m、深さ約10cmを測る。　（北）

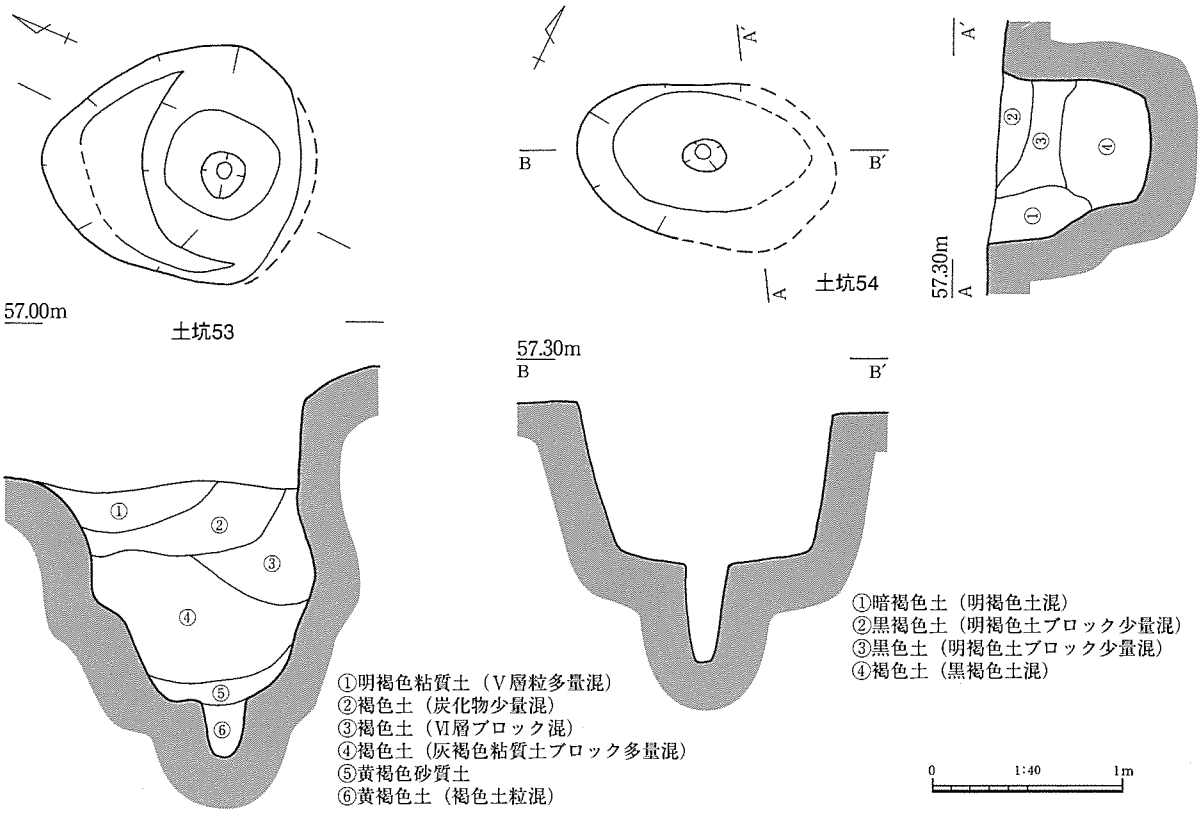


図101　土坑53・54

土坑44（図98）

Ｆ４グリッドで検出。土坑７に切られる。残存値で長さ約0.8m、深さ約10cmを測る。（北）

土坑45（図98）

Ｆ４グリッドで検出。隅丸方形を呈し、長軸約1.1m、短軸約0.9m、深さ約10cmを測る。（北）

土坑46（図98）

Ｅ６グリッドで検出。長楕円形を呈し、長軸約1.1m、短軸約0.5m、深さ約15cmを測る。（北）

土坑47（図98）

Ｇ６グリッドに位置し、竪穴２、竪穴３に切られる。残存部で長さ約1.2m、深さ約30cmを測る（北）

落し穴状遺構

深い掘り込みと底面ピットを有する土坑を14基検出した。各土坑の埋土は褐色～暗・黒褐色の近似した土質を見せる。調査区西南の谷に位置する土坑61以外は、丘陵上平坦部を中心に分布する。平坦部での分布は、平坦部東縁部付近に分布する一群（土坑48･49･50･51･52･53）と、調査区南部で尾根を横切るように分布する一群（土坑54･55･56･57･58･59･60）の二者に大きく分けられる。前者のうち、土坑48･50･51･52の４基は南北にほぼ直線に並び、列配置をとる可能性が高い。また、４土坑の長軸方向はいずれもほぼ北北東－南南西でそろい、列方向に対して直交している。土坑49もこの列配置と一連のものの可能性もあるが、列から東に外れ、長軸方向もそろわない。後者の一群の中には列配置を見せるものはなく、軸方向もそろわないので、すべてが相互に有機的な関連を持つ可能性は低い。

これらの土坑は縄文時代の「落し穴」とされる遺構に共通した形態を有しており、列配置をとるものや埋土に縄文土器を含むものもある。こうした点からこれらを「落し穴状遺構」と認定しておく。

（北）

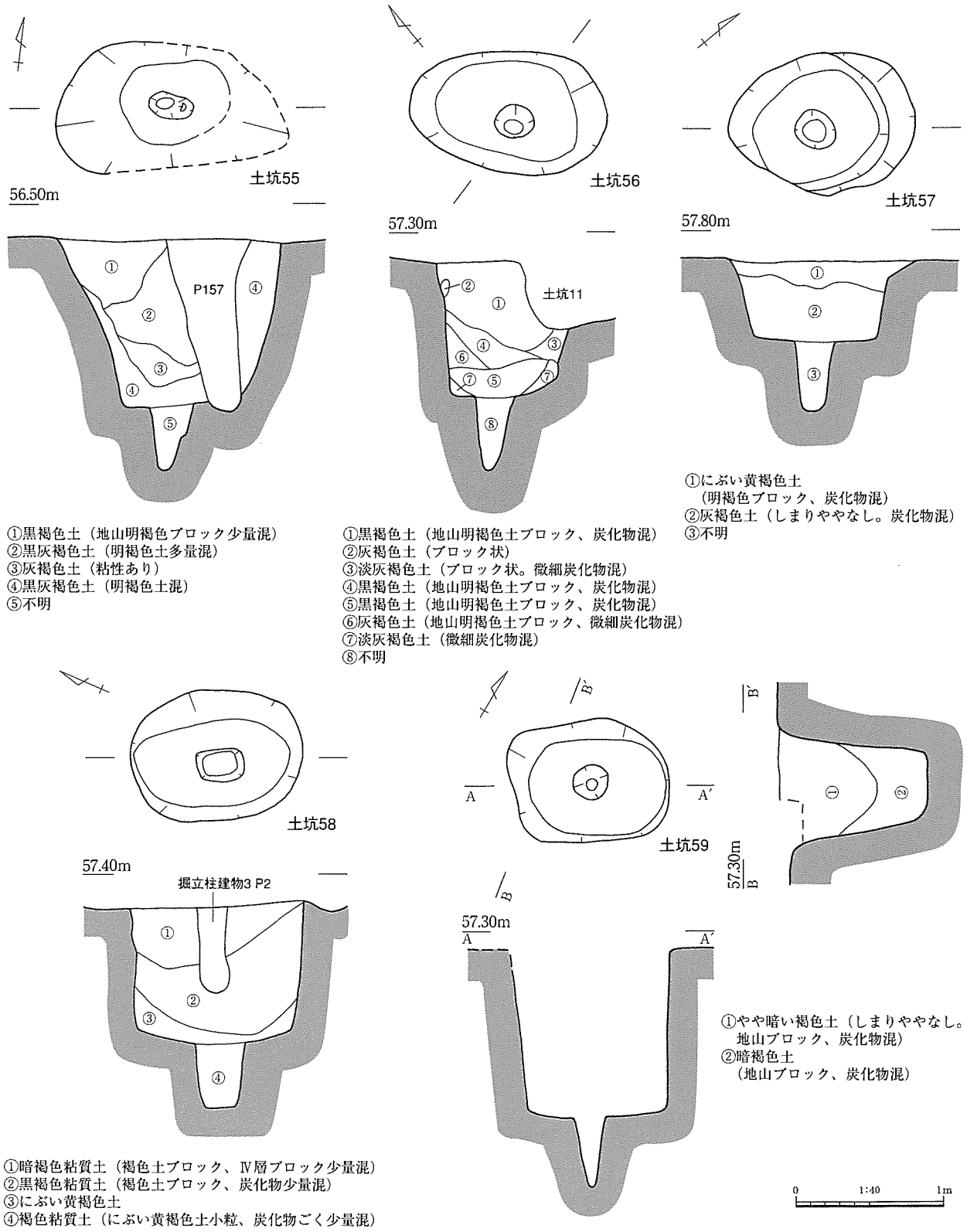


図102　土坑55～59

土坑48（図100、図版40－１）

Ｃ５グリッドの平坦面肩部からわずかに下った緩斜面地に位置する。楕円形を呈し、長軸約1.3m、短軸約0.8m、底面までの深さ約130cmを測る。底面に、長軸35cm、短軸25cm、深さ34cmのピットを１

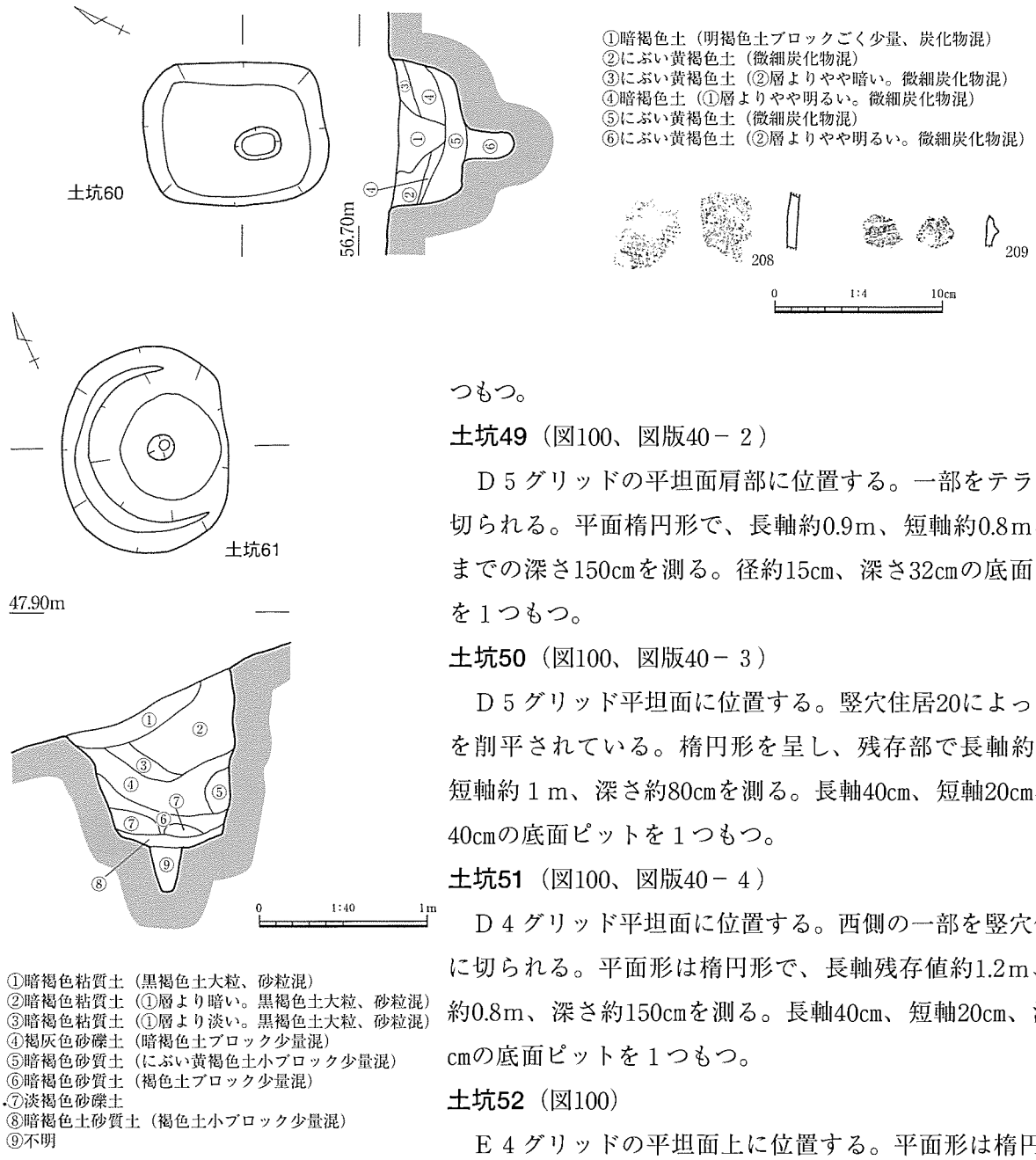


図103　土坑60・61および出土遺物

つもつ。（北）

土坑49（図100、図版40－２）

Ｄ５グリッドの平坦面肩部に位置する。一部をテラス６に切られる。平面楕円形で、長軸約0.9m、短軸約0.8m、底面までの深さ150cmを測る。径約15cm、深さ32cmの底面ピットを１つもつ。（北）

土坑50（図100、図版40－３）

Ｄ５グリッド平坦面に位置する。竪穴住居20によって上面を削平されている。楕円形を呈し、残存部で長軸約1.2m、短軸約１m、深さ約80cmを測る。長軸40cm、短軸20cm、深さ40cmの底面ピットを１つもつ。（北）

土坑51（図100、図版40－４）

Ｄ４グリッド平坦面に位置する。西側の一部を竪穴住居５に切られる。平面形は楕円形で、長軸残存値約1.2m、短軸約0.8m、深さ約150cmを測る。長軸40cm、短軸20cm、深さ40cmの底面ピットを１つもつ。（北）

土坑52（図100）

Ｅ４グリッドの平坦面上に位置する。平面形は楕円形で、長軸約1.3m、短軸約0.9m、深さ約140cmを測る。３つの底面ピットが底面中央付近で長軸方向に密に並んでいる。底面ピットは、それぞれ径20cm前後、深さ25cmから30cmを測る。（北）

土坑53（図101、図版40－５）

調査区北部、Ｄ６グリッドの尾根中央付近に位置する。上面は大部分が竪穴住居９に削平されている。平面不整円形で、径約1.3m、深さ約170cmを測る。北側にテラスを1段もち、その対面の壁面は抉れて南に拡がる。径26cm、深さ28cmの底面ピットを１つもつ。他の落し穴状土坑と形態的に差があるが、埋土は列配置をなすものとほぼ同一の褐色土が中心になる。（北）

土坑54（図101、図版40－６）

調査区南東部の平坦面上、Ｆ３・４グリッドに位置する。北半部上面を竪穴住居16に切られる。隣接する土坑55と長軸方向がほぼそろう。平面楕円形で、長軸約1.4m、短軸約0.9m、深さ80cmを測る。

径約20cm、深さ約50cmの底面ピットを1つもつ。（北）

土坑55（図102）

調査区南東部の平坦面上、Ｆ４グリッドに位置する。埋土は掘り返しを受け、更にピット157が掘りこまれている。埋土下層は土坑54の埋土と近似する褐色土である。平面形は楕円形で、長軸約1.6m、短軸約0.9m、深さ約110cmを測る。長軸30cm、短軸18cm、深さ45cmの底面ピットを1つもつ。（北）

土坑56（図102、図版40－７）

Ｆ４グリッドで検出。長軸はほぼ丘陵主軸方向に沿う。東側を土坑11に切られる。平面形は楕円形を呈し、長軸約1.3m、短軸約0.9m、深さ約90cmを測る。径約30cm、深さ50cmの底面ピットを１つもつ。（北）

土坑57（図102）

Ｆ４グリッドで検出。竪穴住居13に上面を削平される。平面形は楕円形で、残存値で長軸約1.2m、短軸約1.0m、深さ約60cmを測る。径約30cm、深さ50cmの底面ピットを1つもつ。埋土①層は竪穴住居13の貼り床で、②層灰褐色土が堆積土である。（北）

土坑58（図102）

Ｆ・Ｇ５グリッド検出。長軸は丘陵主軸方向に沿う。楕円形を呈し、長軸約1.2m、短軸約0.9m、深さ約80cmを測る。方形の底面ピットを１つもち、長軸30cm、短軸20cm、深さ45cmを測る。（北）

土坑59（図102）

Ｆ・Ｇ５グリッドで検出。長軸は丘陵主軸方向に沿う。平面楕円形で、長軸約1.1m、短軸約0.8m、深さ約110cmを測る。径25cm、深さ50cmの底面ピットを１つもつ。（北）

土坑60（図103、図版41－１）

調査区南縁部のＧ６グリッドに位置する。竪穴住居７に上面を削平される。長軸は丘陵主軸方向に沿う。平面形は隅丸方形で、残存値で長軸約1.1m、短軸約0.9m、深さ約50cmを測る。径20～25cm、深さ30cmの底面ピットを１つもつ。本土坑内からは縄文土器の小片･細片が15点出土している。

208は外面にＲＬの縄文が施される。209は刻み目隆帯を有する。また、図示し得なかった細片に、表裏に縄文が施された痕跡の残るものがある。これらはいずれも早期後葉から前期前葉にかけてのものであろう。（北）

土坑61（図103、図版41－２）

他の落し穴状遺構と立地を異にし、調査区南西端J９グリッドの谷斜面に位置する。楕円形を呈し、長軸約1.3m、短軸約1.0m、深さ約100cmを測る。径15cm、深さ25cmの底部ピットを１つもつ。（北）

３．古墳時代中期以降の遺構

土坑62・63・64（図105、図版41－３・４）

Ｄ５グリッドの平坦面東縁部のＩ層上面で検出した。いずれの土坑とも埋土に炭化物を大量に含み、土坑63には焼土も見られる。近世以降の製炭土坑と考えられる。（北）

土坑65（図105）

Ｃ６グリッドで検出。平面隅丸方形を呈し、長さ約0.9m、深さ約10cmを測る。（北）

土坑66（図105）

Ｄ６グリッドで検出。竪穴住居９を切る。平面不整形で、長軸約0.7m、短軸約0.6m、深さ約15cmを測る。（北）

土坑67（図105）

Ｄ６グリッドで検出。竪穴住居９を切る。残存部分で、長さ約0.5m、深さ約30cmを測る。　（北）

土坑68（図106）

Ｅ６グリッドで検出。平面楕円形を呈し、長軸約1.0m、短軸約0.7m、深さ約10cmを測る。　（北）

土坑69（図106）

Ｆ２グリッドで検出。平面隅丸長方形を呈し、長軸約1.1m、短軸約0.6m、深さ約40cmを測る。（北）

土坑70（図106）

Ａ･Ｂ４グリッド、東側の谷底検出。埋没後の溝６を切る。平面円形で、径約1.5m、深さ約80cmを測る。　（北）

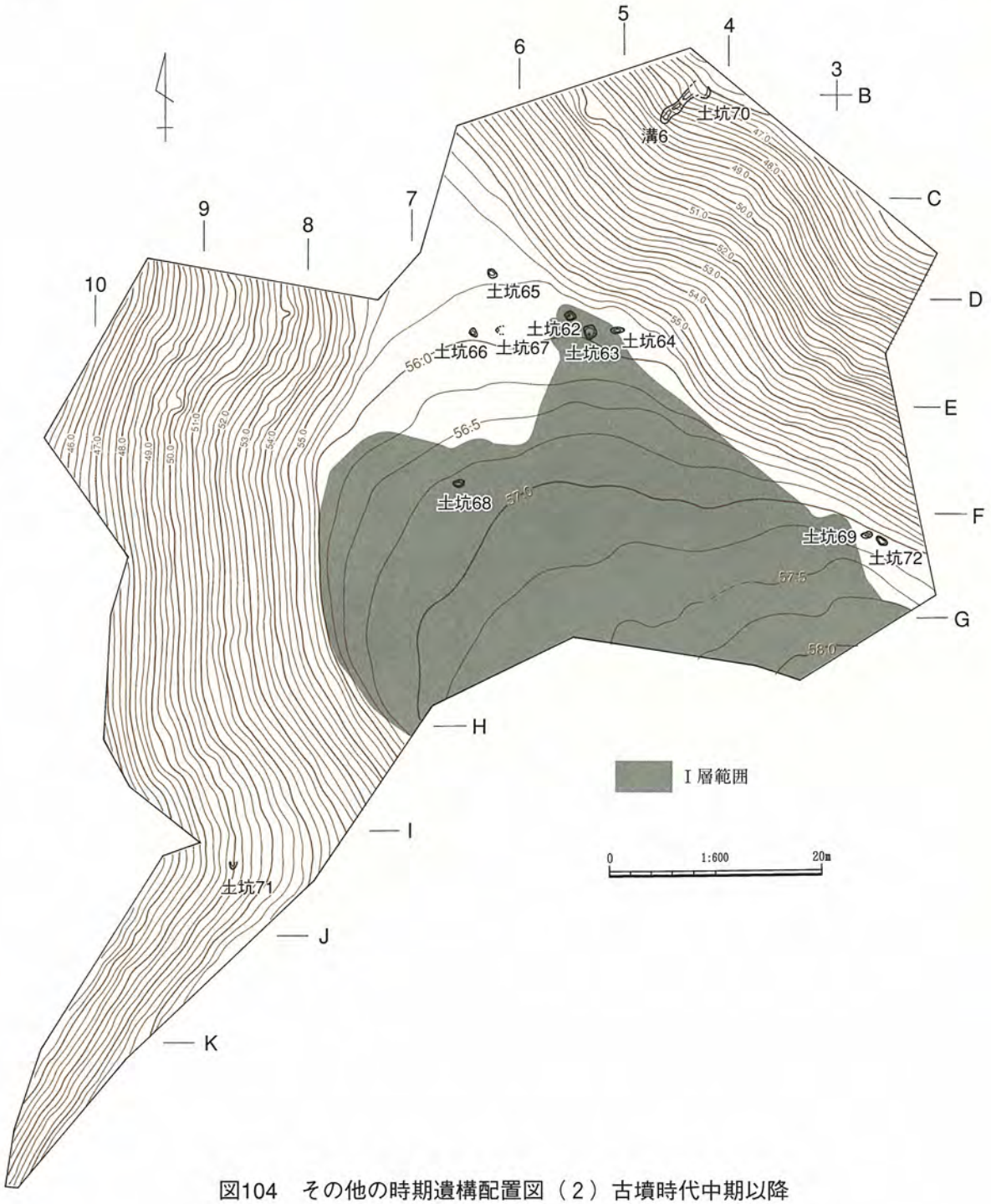


図104　その他の時期遺構配置図（２）古墳時代中期以降

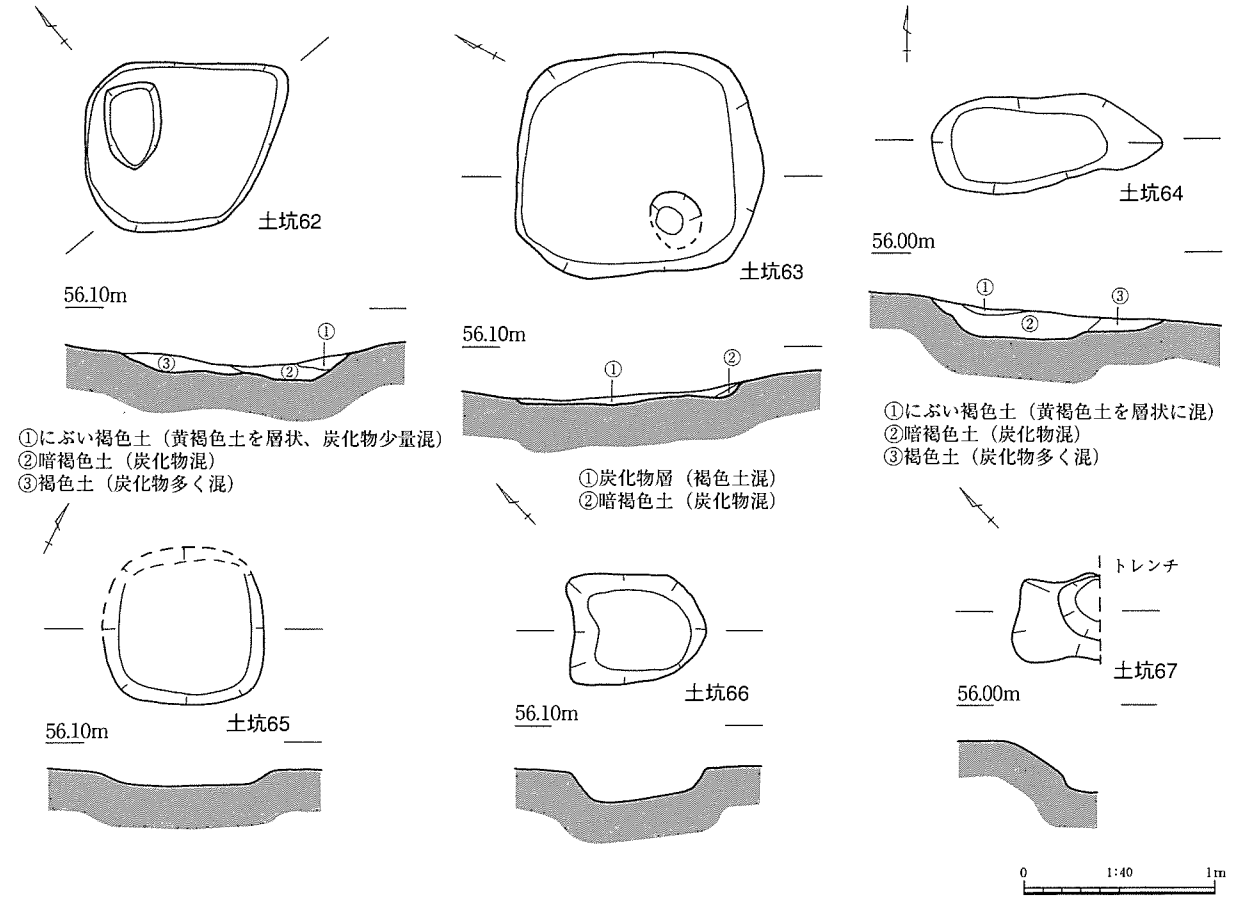


図105　土坑62～67

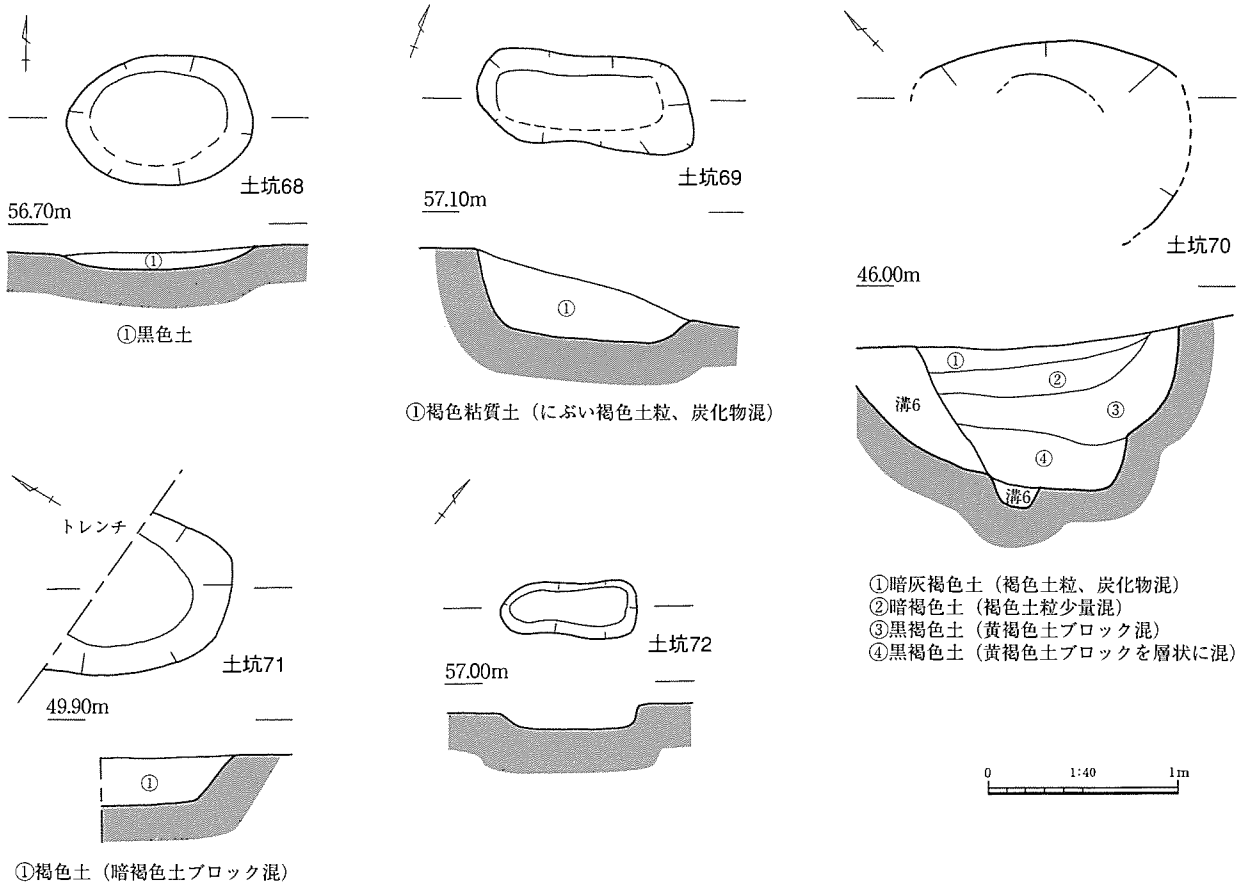


図106　土坑68～72

土坑71（図106）

西斜面Ｉ８グリッド検出。楕円を呈し、残存部長軸約1.0m、短軸約0.8m、深さ約30cmを測る。（北）

土坑72（図106）

Ｆ２グリッドで検出。平面隅丸長方形を呈し、長軸約0.7m、短軸0.3m、深さ15cmを測る。　（北）

溝６（図107、図版41－６）

Ａ・Ｂ４グリッド、丘陵東斜面の谷底付近に位置する。形態は、等高線にほぼ直交する直線状である。検出した長さは約4.2m、幅約1.0m、深さは平均で約60cmを測る。溝埋土は黒褐色土が主体になり、周囲の黄色系の土の崩落堆積がみられる。溝埋土からは、少数の土器とともに、加工痕ある剥片Ｓ19や石鏃が出土している。

遺構の時期は、埋土および土器から古墳時代中期以降と判断した。　（浜田）

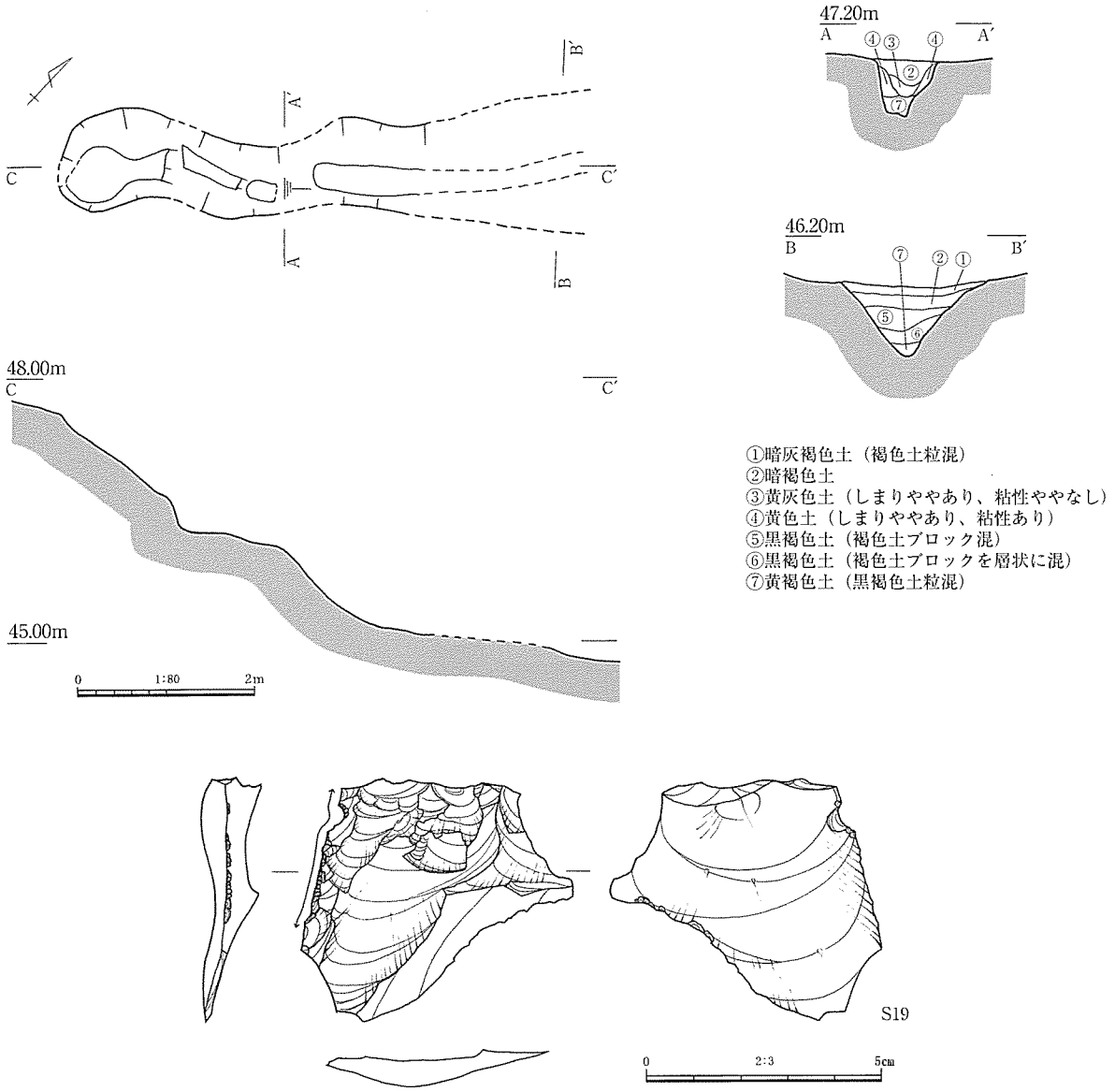


図107　溝６および出土遺物

４．ピット（図108、表40～43）

調査区平坦部を中心に、多数のピットを検出した。その大半が、平坦部に集中する。特に、柱痕跡あるいは、柱抜き取り痕跡を確認しうる柱穴は、尾根頂部付近にのみ確認している。特に、調査区南端の平坦部には、深さ30cmを超える柱穴が多数分布している。これらは、調査区外へと延びる掘立柱建物の柱穴になることが想定される。調査期間の制約上、その大半は本来の検出面以下での検出である。このため、良好な遺物が出土していないピットの詳細な時期決定を行うことはできなかった。しかし、その他の遺構の土色から、褐色系の土が堆積するピットは古墳時代前期以前、暗褐色系の埋土を持つピットは古墳時代中期以降の所産と考えられる。（湯川）

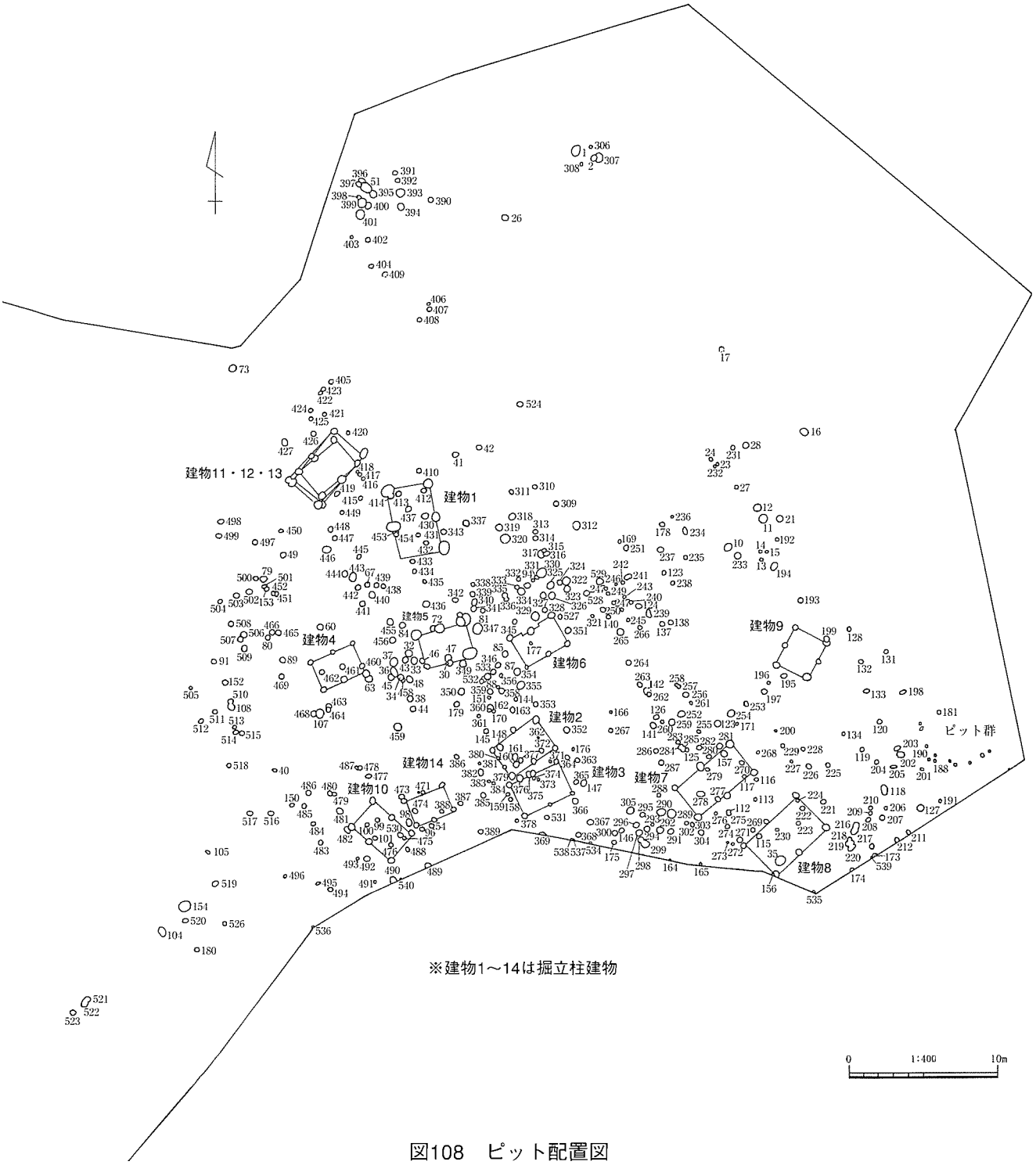


図108　ピット配置図

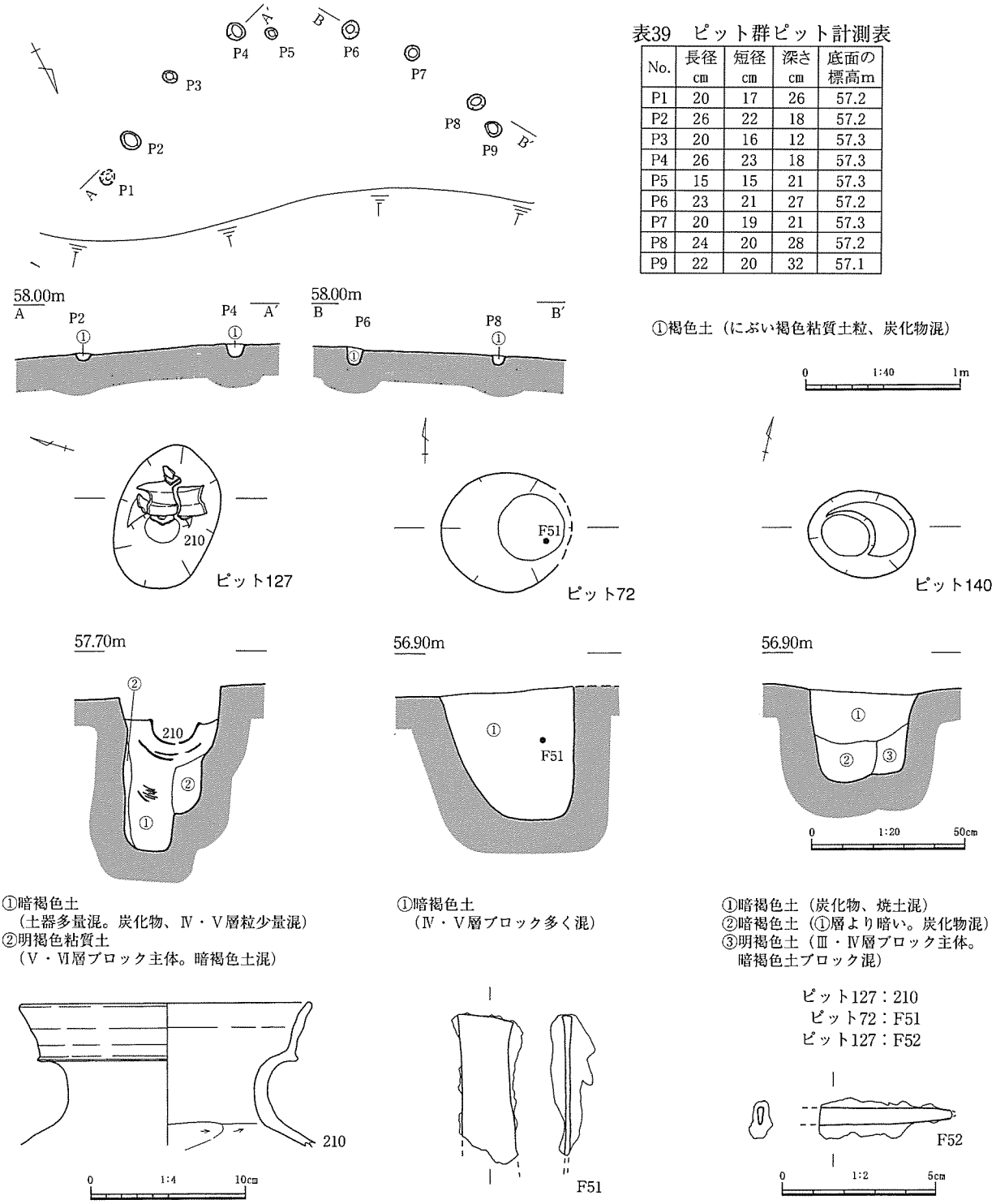


表39　ピット群ピット計測表

No.	長径 cm	短径 cm	深さ cm	底面の標高m
P1	20	17	26	57.2
P2	26	22	18	57.2
P3	20	16	12	57.3
P4	26	23	18	57.3
P5	15	15	21	57.3
P6	23	21	27	57.2
P7	20	19	21	57.3
P8	24	20	28	57.2
P9	22	20	32	57.1

図109　ピット群・ピット127・72・140および出土遺物

ピット群（図109、表39）

平坦部南東端の傾斜変換点付近で検出した。径10cm程度の小ピットが、半円形に並んでいる。各ピット間の距離は、一定しないものの、土色・形態とも類似している。北半は流失しているが、ピットの配置から直径約2.6mの円形を呈していたと推測できる。円形の平地住居の可能性がある。（湯川）

ピット127・72・140（図109、表40・41、図版41－５）

ピット127は、平坦部南東端、Ｇ２グリッドで検出した。柱抜取り痕（①層）から、古墳時代前期前葉に比定できる土師器壺が出土している。胴部破片は底面より20cmほどのレベルにまとまっており、肩部・口縁部はその上に横位で出土した。建物廃絶に伴う祭祀の可能性がある。

ピット72・140は、平坦部中央付近で検出した。ピット72からは楔状鉄製品のＦ51が、ピット140からは刀子柄部のＦ52が出土している。（湯川）

表40　ピット計測表（１）　（　）は残存値cm、底面高は標高m

P No.	長軸-短軸	深さ cm	底面高	土色/備考
P1	80.0-53.0	54.6	49.76	暗褐色/東斜面
P2	46.0-42.5	19.7	49.75	暗褐色
P3～9	欠番			
P10	53.0	(20.5)	55.85	
P11	77.5-51.5	30.0	54.54	
P12	45.0	(56.0)	53.97	
P13	36.5-26.5	18.0	55.77	
P14	30.0-28.5	20.5	55.61	
P15	24.0-22.0	8.5	55,62	
P16	52.5	(19.3)	51.69	備考:テラス12に切られる
P17,18	欠番			備考:溝1に変更
P19	-	-	-	備考:竪穴住居2を切る
P20	-	-	-	
P21	22.5	32.0	54.39	
P22	-	-	-	暗褐色
P23	26.5-23.5	36.4	53.99	暗褐色
P24	28.5-27.5	24.5	53.88	褐色
P25	-	-	-	褐色
P26	47.0-42.5	29.3	52.38	にぶい褐色
P27	46.5-32.0	55.1	53.75	暗褐色/P12,23と一連か
P28	44.0	(37.3)	53.15	にぶい褐色
P29	-	-	-	黄褐
P30	19.5-17.5	9.2	56.22	暗褐色/竪穴住居10を切るか
P31	48.5	81.3	56.07	暗褐色/掘立柱建物5-P2
P32	45.0	50.8	56.31	暗褐色
P33	53.5	47.7	56.35	黒褐色
P34	48.0-47.0	53.9	56.31	暗褐色
P35	70.0	42.0	57.38	備考:竪穴住居4を切る
P36	72.5	23.9	56.61	黒褐色
P37	70.0	9.4	56.74	黒灰色
P38	45.0	30.2	56.31	黒褐色
P39	-	-	-	にぶい黄褐色
P40	40.0-35.0	23.3	56.14	暗褐色/竪穴住居8を切る
P41	42.5	55.6	55.59	暗褐色/竪穴住居18を切る
P42	38.0	44.6	55.66	暗褐色/竪穴住居18を切る
P43	-	-	-	暗褐色/竪穴住居8を切る
P44	48.0	30.2	56.56	暗褐色/竪穴住居8を切る
P45	-	(58.5)	56.25	褐色/竪穴住居8を切る
P46	39.0	62.0	56.28	褐色/竪穴住居8を切る
P47	45.0	89.9	56.05	暗褐色/竪穴住居8を切る
P48	-	68.8	56.18	暗褐色/竪穴住居8を切る
P49	42.0	45.6	55.70	暗褐色/竪穴住居11を切る
P50	-	-	-	暗褐色/竪穴住居19を切る
P51	-	-	-	暗褐色
P52	-	-	-	暗褐色/竪穴住居3を切る
P53	-	-	-	暗褐色
P54	35.5-35.0	53.3	56.72	褐色土
P55	-	-	-	黄灰色土
P56	56.0-55.0	66.0	55.58	備考:掘立柱建物11-13-P2
P57	74.0-48.5	66.4	55.49	備考:掘立柱建物12,13-P1
P58	44.0-40.0	63.7	55.53	備考:掘立柱建物11-P1
P59	49.0-48.0	81.5	55.48	備考:掘立柱建物11-P3
P60	47.0-42.5	65.3	55.91	
P61	42.0-41.0	92.7	55.70	備考:掘立柱建物4-P3
P62	45.5	72.5	56.05	備考:掘立柱建物4-P1
P63	(47.5)	48.7	56.30	
P64	72.0-57.5	91.4	55.91	備考:掘立柱建物5-P5
P65	106.0-77.5	98.2	55.89	備考:掘立柱建物5-P1
P66	42.5	93.1	55.79	備考:掘立柱建物4-P2
P67	40.0-37.0	11.0	56.51	黒褐色/(近世)
P68	-	-	-	備考/土坑7を切る
P69	-	-	-	
P70	69.0	69.9	56.09	備考:P71を切る
P71	75.0	80.1	56.01	備考:掘立柱建物11-P6
P72	45.5-39.5	63.8	56.62	暗褐色
P73	-	-	-	暗灰色
P74	55.0-48.0	70.8	55.42	備考:掘立柱建物11-P4
P75	38.5-38.0	62.1	55.46	備考:掘立柱建物12,13-P5
P76	46.0	64.4	55.50	備考:掘立柱建物11-P5
P77	55.0-47.5	48.6	55.54	備考:掘立柱建物12,13-P6
P78	47.0-44.5	68.3	55.36	備考:掘立柱建物11-P6
P79	48.0	29.0	56.28	暗褐色
P80	43.0-37.0	47.0	55.95	暗褐色
P81	34.5-32.5	25.9	56.51	暗褐色
P82	60.0	61.7	55.51	備考:掘立柱建物12-P4
P83	80.0-65.5	89.2	55.90	備考:掘立柱建物5-P4
P84	46.5-45.0	43.4	56.27	暗褐色
P85	51.5-45.5	45.9	56.51	暗褐色
P86	47.5-44.5	81.6	56.10	暗褐色/掘立柱建物6-P4
P87	41.0-35.0	51.2	56.54	褐色
P88	45.5-42.0	23.9	56.53	暗褐色
P89	40.0-34.5	21.3	56.30	暗褐色
P90	44.0-34.5	48.7	56.12	暗褐色/掘立柱建物4-P4
P91	39.0-34.0	30.7	55.94	褐色
P92	-	-	-	褐色
P93	88.0-81.5	42.2	55.87	暗灰色/掘立柱建物1-P6
P94	27.5-24.0	28.0	56.43	暗褐色
P95	45.0-40.0	49.0	56.23	
P96	32.5-30.5	65.3	56.41	褐色
P97	43.0-34.5	26.5	56.81	褐色/掘立柱建物14-P3
P98	54.0-39.0	47.5	56.65	褐色
P99	36.0-35.5	61.1	56.47	
P100	32.5-30.0	48.6	56.58	褐色
P101	40.0-38.0	52.4	56.53	
P102	96.0-72.0	57.0	55.99	暗灰色/掘立柱建物1-P3
P103	43.5-42.5	58.6	56.21	備考:掘立柱建物6-P6
P104	78.0-55.0	73.8	53.26	
P105	39.5-20.0	25.5	55.76	
P106	-	-	-	
P107	70.5-61.5	33.0	56.44	褐色
P108	(46.0)-41.5	76.1	55.61	
P109～11	-	-	-	
P112	30.0-(25.5)	38.2	57.19	
P113	24.5	26.8	57.23	
P114	37.0-36.5	53.7	57.03	備考:掘立柱建物8-P4
P115	35.0	32.4	57.32	
P116	29.0-26.0	33.2	57.06	
P117	-	-	-	
P118	72.0-41.5	45.4	57.08	
P119	29.0-28.0	45.5	56.84	
P120	-	(52.6)	56.78	
P121	-	-	-	
P122	40.0-30.0	60.7	56.16	備考:掘立柱建物9-P6
P123	46.5-44.0	69.3	56.52	
P124	44.0-32.5	63.3	56.15	
P125	39.5	58.2	56.62	
P126	46.0-37.0	64.1	56.36	
P127	33.0	54.5	57.05	
P128	36.0-32.5	42.5	56.24	
P129	-	36.6	56.48	備考:掘立柱建物9-P1
P130	62.5-50.0	75.2	56.19	備考:掘立柱建物9-P3
P131	32.0-29.0	36.4	56.43	

表41　ピット計測表（２）　（　）は残存値cm、底面高は標高m

P No.	長軸-短軸	深さ cm	底面高	土色/備考
P132	32.5-27.0	24.1	56.69	
P133	-	(55.8)	56.47	
P134	30.0-20.5	22.6	56.85	
P135	39.0-25.5	13.4	56.77	備考:掘立柱建物9-P2
P136	42.0-37.5	19.2	56.67	備考:掘立柱建物9-P5
P137	45.0-42.0	77.5	56.14	備考:掘立柱建物9-P4
P138	39.5-33.5	37.2	56.36	
P139	43.0	60.0	-	
P140	36.0-30.0	32.0	56.46	
P141	50.0-37.0	44.0	56,64	
P142	-	14.5	56.79	
P143	48.0-37.0	36.5	56.20	備考:掘立柱建物6-P1
P144	37.0-20.0	32.2	56.54	
P145	38.0-35.0	39.9	56.53	
P146	39.0	25.4	57.04	
P147	51.0-45.0	80.3	56.31	
P148	60.0-40.0	65.4	56.41	
P149	34.0-32.0	64.9	56.37	備考:掘立柱建物14-P1
P150	37.0-33.0	39.1	56.26	
P151	33.0-20.0	57.2	56.26	
P152	40.0-35.0	31.4	55.79	
P153	40.0-37.5	48.7	55.78	
P154	69.0	50.1	54.55	
P155	-	-	-	備考:竪穴住居4を切る
P156	-	-	-	備考:竪穴住居4を切る
P157	-	-	-	備考:土坑55を切る
P158	(27.0)	29.3	56.88	
P159	45.0-40.5	108.9	56.09	
P160	39.0-32.0	30.1	56.83	
P161	59.5-27.5	16.6	57.18	
P162	47.5	31.3	56.71	
P163	-	-	-	備考:竪穴住居6埋土を切る
P164	(38.0)	24.0	57.00	暗褐色/竪穴住居6を切る
P165	-	-	-	褐色
P166	28.0-25.0	-	-	暗褐色
P167	-	-	-	暗褐色
P168	-	-	-	黒色
P169	-	-	-	暗褐色/土坑1を切る
P170	25.0-(22.5)	19.3	56.68	褐色/竪穴住居1を切る
P171	-	-	-	暗褐色/土坑54を切る
P172-5	-	-	-	暗褐色
P176	21.0-20.0	18.0	56.86	不明
P177	19.0	5.1	56.53	暗褐色/土坑4を切る
P178	-	-	-	暗褐色
P179	47.0	17.8	56.92	暗褐色
P180	-	-	-	褐色
P181	25.0-20.0	13.9	57.05	褐色
P182	17.5	10.7	57.20	ピット群P1
P183	25.0-23.0	8.6	57.28	ピット群P2
P184	20.0-16.5	7.5	57.35	ピット群P3
P185	25.0-21.0	8.3	57.38	ピット群P4
P186	15.0-14.5	6.5	57.27	ピット群P5
P187	21.5-21.0	19.5	57.19	ピット群P6
P188	21.0-17.5	12.1	57.29	暗褐色
P189	19.5-18.0	9.9	57.25	暗褐色/ピット群P7
P190	21.0-20.0	15.3	57.26	暗褐色
P191	22.5	26.9	57.28	
	31.0-29.0	(38.9)	(54.93)	
P193	42.5-34.5	44.6	56.08	
P194	57.5	31.7	55.70	
P195	(45.0)-(29.0)	15.9	56.89	
P196	26.0-22.5	13.9	56.85	
P197	41.5-39.0	33.8	56.72	暗褐色
P198	46.0-26.0	23.7	56.82	褐色
P199	44.0-40.0	16.6	56.86	
P200	25.0-20.0	10.5	57.18	暗褐色
P201	32.5-30.0	23.6	57.21	褐色
P202	62.5-50.0	33.0	57.07	褐色
P203	50.0-25.0	12.8	57.23	褐色
P204	32.0-23.5	30.0	57.12	褐色
P205	34.0	38.9	57.04	暗褐色
P206	27.5-27.0	19.1	57.39	褐色
P207	42.0-35.0	22.2	57.39	褐色
P208	35.0-34.0	24.8	57.38	褐色
P209	34.0-29.5	39.6	57.15	暗褐色
P210	35.5-25.5	19.2	57.38	褐色
P211	(28.0)	38.0	57.09	暗褐色
P212	(17.5)	13.8	57.36	暗褐色
P213	35.0	35.6	57.35	暗褐色
P214	-	-	-	褐色/ピット群P9
P215	-	-	-	褐色/ピット群P8
P216	(40.0)-38.5	29.7	57.38	褐色
P217	(50.0)-45.0	29.0	57.40	
P218	30.0-(25.0)	35.7	57.27	
P219	54.0-(31.0)	25.0	57.38	暗褐色
P220	67.5-(34.0)	39.2	57.31	暗褐色
P221	40.0-36.5	9.9	57.44	褐色
P222	32.0-30.0	17.4	57.35	
P223	19.0-16.0	34.1	57.03	
P224	21.0-20.5	16.6	57.36	
P225	45.0-29.0	22.0	57.21	暗褐色
P226	32.5-33.0	36.4	57.08	暗褐色
P227	24.0-19.0	29.8	57.11	暗褐色
P228	30.5-25.5	20.6	57.16	暗褐色
P229	30.5-27.0	37.4	56.96	暗褐色
P230	-	(15,0)	57.38	暗褐色
P231	45.5	(42.2)	53.18	
P232	19.0-16.5	23.5	53.96	
P233	52.5-42.0	25.1	55.85	
P234	52.0-42.0	11.7	56.07	黒色
P235	32.0-31.5	17.9	56.28	
P236	20.5	31,.5	55.98	
P237	43.0-42.5	21.8	56.28	
P238	30.0-29.0	38.6	56.26	暗褐色
P239	72.5-37.0	15.9	56.63	暗褐色
P240	42.0-38.0	23.9	56.51	褐色
P241	55.0-32.0	34.8	56.33	暗褐色
P242	35.0-28.0	24.4	56.41	
P243	23.0	13.9	56.58	
P244	30.0-29.5	37.1	56.39	褐色
P245	28.0-24.0	9.8	56.72	
P246	35.0-34.0	24.0	56.42	暗褐色
P247	32.0-30.0	15.2	56.58	暗褐色
P248	21.5-20.0	31.7	56.39	暗褐色
P249	26.0-25.0	23.5	56.47	暗褐色
P250	41.5-32.0	24.3	56.54	
P251	51.5-33.5	55.7	56.03	
P252	52.5-46.0	17.3	57.10	褐色/土坑13を切る
P253	45.0-22.0	28.0	56.89	
P254	55.0	51.6	56.65	暗褐色
P255	30.0	25.9	56.75	暗褐色
P256	50.0-45.0	11.3	56.74	灰褐色
P257	(25.0)-25.0	10.6	56.50	褐色
P258	(19.0)-19.0	12.1	56.53	褐色
P259	51.5-40.0	38.7	56.50	暗褐色
P260	30.0-24.0	32.1	56.56	暗褐色
P261	23.0-19.0	14.6	56.83	褐色/土坑13を切る
P262	35.0-32.0	27.7	56.46	暗褐色
P263	44.0-36.0	37.3	56.68	土坑13を切る
P264	41.0-39.0	49.3	56.51	黒色/土坑45を切る
P265	44.0-41.5	64.6	56.26	暗褐色
P266	33.0-30.0	42.3	56.39	暗褐色
P267	36.0-31.0	45.0	56.29	
P268	19.0-18.0	4.5	57.11	
P269	32.5-28.0	13.1	57.49	褐色
P270	37.5-32.5	31.4	57.11	
P271	43.0-42.0	34.5	57.27	暗褐色
P272	22.0-18.0	15.4	57,40	暗褐色
P273	23.0-16.5	15.1	57.40	暗褐色
P274	36.0-22.5	8.2	57.46	

表42　ピット計測表（３）　（　）は残存値cm、底面高は標高m

P No.	長軸-短軸	深さ cm	底面高	土色/備考
P275	28.0-(24.0)	18.5	57.38	褐色
P276	28.0-20.5	38.6	57.11	暗褐色
P277	39.5-36.0	19.5	57.26	
P278	67.0-40.5	18.4	57.21	
P279	29.0-20.0	24.1	56.86	
P280	(28,5)	29.7	56.95	備考:土坑55を切る
P281	(45.0)	24.1	56.94	備考:土坑56と切合い
P282	33.0-31.0	11.9	57.14	褐色
P283	31.5-26.0	32.4	56.60	暗褐色
P284	42.5	24.7	56.70	暗褐色
P285	51.0	62.3	56.60	暗褐色
P286	35.0-30.0	14.4	57.04	褐色
P287	34.0-33.0	45.7	56.76	褐色
P288	35.5	47.0	56.87	
P289	72.0-65.5	17.8	57.30	
P290	60.0-52.0	55.7	56.91	暗褐色
P291	44.0-39.0	31.6	57.18	暗褐色
P292	50.0-44.0	41.0	57.06	暗褐色
P293	19.0-17.5	22.8	57.16	暗褐色
P294	38.0	14.0	57.31	暗褐色
P295	36.0-33.0	10.9	57.07	
P296	45.0-44.5	38.0	56.98	
P297	55.0-46.0	53.5	56.81	
P298	(60.0)-43.0	41.4	56.95	
P299	37.0	37.2	57.01	
P300	48.0-45.0	13.4	57.06	暗褐色
P301	32.5	44.6	56.83	
P302	34.0-30.0	25.7	57.37	暗褐色
P303	34.0-31.0	17.0	57.37	暗褐色
P304	42.5-40.0	26.1	57.30	暗褐色
P305	(48.0)-(46.0)	51.7	56.85	
P306	27.5-22.0	23.1	49.63	暗褐色
P307	75.5-55.0	-	-	
P308	21.0-20.0	13.4	50.18	暗褐色
P309	53.5-53.0	-	-	
P310	30.0	38.6	55.79	
P311	37.5	44.7	55.77	
P312	57.0-50.0	-	-	
P313	31.0-30.0	59.4	55.75	
P314	36.0-32.0	39.0	55.94	
P315	30.5	-	-	
P316	42.0	-	-	
P317	57.0	-	-	
P318	51.0-48.0	-	-	
P319	-	48.1	56.06	
P320	(55.0)	54.4	56.05	
P321	28.0-24.0	14.4	56.67	
P322	60.5-53.0	40.8	56.35	褐色
P323	48.5	26.6	56.53	褐色
P324	37.5	15.9	56.58	暗褐色
P325	52.0-47.5	12.8	56.65	暗褐色
P326	52.0-44.0	13.6	56.64	暗褐色
P327	46.5-39.0	23.2	56.54	褐色
P328	40.0-35.0	24.1	56.55	褐色
P329	58.0-53.5	28.0	56.51	暗褐色
P330	65.0-63.5	16.0	56.53	暗褐色
P331	29.5-29.0	14.1	56.45	暗褐色
P332	42.0-38.5	31.3	56.40	暗褐色
P333	36.0-34.0	24.0	56.50	褐色
P334	55.5-45.5	15.6	56.60	暗褐色
P335	38.0-(37.0)	15.9	56.60	褐色
P336	29.0	32.6	56.43	暗褐色
P337	56.0-47.0	26.3	56.24	にぶい黄褐色
P338	31.0-30.0	16.5	56.51	暗灰色
P339	46.5-36.0	21.7	56.50	褐色
P340	48.0-41.5	23.8	56.51	褐色
P341	43.0-40.0	17.1	56.60	褐色
P342	42.0-41.5	28.9	56.42	褐色
P343	40.5-39.0	28.0	56.23	褐色
P344	35.5-32.0	67.2	56.10	暗灰色
P345	37.0-32.0	23.3	56.53	褐色
P346	40.0	39.1	56.69	
P347	77.0-69.0	38.4	56.43	黒色
P348	30.5-30.0	29.3	56.53	暗褐色
P349	48.0-47.0	39.7	56.44	暗褐色
P350	51.0-44.0	32.3	56.56	暗褐色
P351	50.0-45.0	54.0	56.36	
P352	30.0-43.0	24.0	56.76	
P353	38.0-35.5	32.1	56.65	褐色
P354	51.0-41.5	35.0	56.55	褐色
P355	55.0-50.0	36.8	56.61	褐色
P356	26.0-25.5	23.4	56.65	
P357	30.0-29.0	29.4	56.66	
P358	45.0-44.5	43.3	56.49	暗褐色
P359	42.5-38.0	24.4	56.60	
P360	30.0-22.0	16.1	56.71	褐色
P361	29.0-27.5	37.4	56.56	暗褐色
P362	23.0-17.0	38.1	56.52	
P363	33.0-30.0	18.5	56.81	
P364	36.0-29.5	52.4	56.48	暗褐色
P365	37.5-30.0	17.4	56.93	暗褐色
P366	41.0-40.0	34.1	56.89	暗褐色
P367	38.0-37.0	42.3	56.81	暗褐色
P368	37.0-35.0	36.3	56.90	暗褐色
P369	49.0	38.1	56.77	
P370	29.0	-	-	備考:根の攪乱?
P371	25.0-24.0	18.2	56.81	褐色
P372	37.0-31.5	13.6	56.85	褐色
P373	25.0-16.0	19.2	56.87	暗褐色
P374	29.5-(25.5)	20.2	56.87	暗褐色
P375	57.5-40.0	29.7	56.73	暗褐色
P376	57.0-47.0	53.4	56.57	褐色
P377	32.0-(29.5)	23.0	56.88	暗褐色
P378	33.0-30.0	32.6	56.85	暗褐色
P379	32.5-25.0	23.5	56.84	
P380	23.0-20.0	47.8	56.58	暗褐色
P381	30.0-20.0	22.5	56.74	
P382	53.0-38.0	40.0	56.68	
P383	30.0-23.0	20.8	56.81	暗褐色
P384	31.0-28.0	24.6	56.79	暗褐色
P385	34.5-34.0	42.9	56.64	
P386	35.0-30.0	56.2	56.39	
P387	35.5-31.5	80.3	56.39	暗褐色
P388	(28.0)-28.0	9.6	56.96	暗褐色
P389	37.0-32.5	46.2	56.80	
P390	-	-	-	褐色
P391-7	-	-	-	暗褐色
P398-9	-	-	-	褐色
P400	-	-	-	暗褐色
P401,2	-	-	-	褐色
P403,4	-	-	-	暗褐色
P405	39.0-36.5	28.3	55.55	暗褐色
P406	-	-	-	暗褐色
P407-9	-	-	-	褐色
P410	46.5-46.0	44.6	55.77	暗褐色
P411	61.0	58.2	55.86	暗灰色/掘立柱建物1-P1
P412	38.0-33.5	34.7	56.00	褐色
P413	45.0-40.5	32.6	56.00	褐色
P414	42.5	30.7	56.02	
P415	22.5-21.5	29.3	56.10	褐色
P416	30.0-29.0	40.2	55.87	暗褐色
P417	25.0-24.0	16.2	56.08	暗褐色
P418	24.5-24.0	11.3	56.10	暗褐色
P419	40.0-34.0	13.7	56.17	黒色
P420	33.0-30.0	23.3	55.81	褐色
P421	29.0-27.5	21.1	55.74	褐色
P422	28.0-24.0	25.7	55.60	褐色
P423	30.5-30.0	28.8	55.57	暗褐色
P424	30.0-29.5	32.4	55.58	褐色
P425	28.0-27.0	18.2	55.77	褐色

表43　ピット計測表（４）　（　）は残存値cm、底面高は標高m

P No.	長軸-短軸	深さ cm	底面高	土色/備考
P426	43.0-35.0	33.6	55.70	暗褐色
P427	55.0-42.5	29.9	55.69	黄褐色
P428	35.5	54.9	55.54	備考:掘立柱建物13-P4
P429	54.5	75.5	55.53	備考:掘立柱建物12-P3
P430	44.5-39.5	37.8	56.08	褐色
P431	30.5-29.5	47.5	56.05	
P432	37.5-35.5	32.2	56.20	褐色
P433	35.0-32.0	23.3	56.20	暗灰色
P434	35.0-34.0	31.2	56.28	暗灰色
P435	28.5-28.0	18.2	56,46	暗灰色
P436	54.5-50.0	11.8	56.61	暗灰色
P437	39.5-38.5	37.2	56.08	褐色
P438	34.5-32.5	29.4	56.30	褐色
P439	41.5	11.0	56.16	褐色
P440	44.0-40.5	26.2	56.36	褐色
P441	36.5-32.0	38,6	56.36	
P442	40.0-37.5	30.9	56.28	暗灰色
P443	64.0-54,5	38.6	56.20	暗灰色
P444	50.0-42.5	16.8	56.14	褐色
P445	32.5-31.5	61.9	55.91	暗灰色
P446	57.0	49.4	55.93	暗灰色
P447	33.0	55.3	55.88	暗灰色
P448	43.5-39.5	35.4	56.06	褐色
P449	35.0-31.0	39.7	55.96	暗灰色
P450	32.0-29.0	15.8	55.92	
P451	32.0	9.5	56.24	灰褐色
P452	44.0	19.3	56.14	
P453	36.0	59.7	55.90	暗灰色
P454	32.5	50.6	55.99	暗灰色
P455	53.0-46.0	45.9	56.26	
P456	46.5-40.0	42.0	56.34	褐色
P457	45.0-35.5	20.6	56.08	備考:掘立柱建物5-P3
P458	30.0	19.1	56.09	
P459	56.0-54.5	26.2	56.57	黒色
P460	40.0-37.5	54.9	56.20	褐色
P461	37.5-36.5	43.5	56.25	褐色
P462	42.0-41.0	66.6	55.96	褐色
P463	41.5	27.4	56.44	暗灰色
P464	50.0-47.5	36.5	56.44	
P465	47.0-40.0	47.2	55.88	暗灰色
P466	40.0-37.0	47.4	56.41	
P467	38.5-37.5	55.7	55.95	暗灰色
P468	45.5-(37.0)	-	-	
P469	17.0-16.0	-	-	
P470	30.5-26.0	33.8	56.65	褐色/掘立柱建物14-P5
P471	19.0-15.5	15.6	56.83	
P472	33.5-25.0	10.8	56.81	褐色
P473	40.0-(34.0)	49.5	56.49	
P474	38.0	28.6	56.74	褐色
P475	33.0-29.0	17.1	56.90	褐色
P476	38.0	41.9	56.83	褐色
P477	43.0-33.0	15.5	56.85	
P478	35.5-25.0	64.4	56.23	
P479	37.0-35.5	26.7	56.23	褐色
P480	35.0-34.5	16.7	56.62	褐色
P481	43.0-40.0	72.7	56.23	褐色
P482	51.0-(42.5)	23.9	56.74	暗灰色
P483	39.5-31.5	33.2	56.58	
P484	29.0-24.0	34.65	56.53	
P485	44.0-35.5	63.4	56.13	褐色
P486	43.0-36.5	42.7	55.28	
P487	22.0-21.0	30.5	56.56	
P488	24.0-(23.0)	43.0	56.59	
P489	42.0	51.0	55.95	
P490	38.0	52.2	56.56	
P491	25.0-20.0	10.7	56.95	
P492	51.0-40.5	43.9	56.61	褐色
P493	24.5-23.0	10.4	56.91	褐色
P494	35.5-30.0	16.7	56.74	
P495	32.0-28.0	18.3	56.74	
P496	29.5-24.5	11.5	56.62	
P497	40.0-35.0	8.0	55.61	暗灰色
P498	40.0-34.5	15.7	55.80	褐色
P499	40.0-23.5	30.7	55.71	黒色
P500	37.5-33.5	44.1	55.82	暗灰色
P501	36.0	14.9	56.11	灰褐色
P502	48.0-42.5	37.2	55.93	暗灰色
P503	42.0-35.0	47.6	55.80	暗灰色
P504	27.0-25.0	10.8	56.11	黒色
P505	-	23.7	55.92	灰褐色
P506	47.0-40.5	34.9	55.86	暗灰色
P507	44.0-38.0	12.7	55.80	暗灰色
P508	38.0	45.5	55.68	褐色
P509	47.5-40.5	45.8	55.64	褐色
P510	36.0-(32.0)	36.4	56.00	暗灰色
P511	33.0-30.0	29.2	56.01	暗灰色
P512	35.5-27.0	31.2	55.87	灰褐色
P513	29.0	40.5	55.98	
P514	-	24.6	56.11	
P515	36.5	38.0	56.03	
P516	42.5-30.5	40.0	56.28	
P517	44.5-37.5	29.9	56.36	
P518	33.0-32.0	18.2	56.22	
P519	41.0	63.0	55.26	
P520	42.5-36.0	53.6	54.24	
P521	36.0	50.4	54.11	
P522	41.5	42.5	54.07	
P523	41.0-39.5	53.7	53.54	
P524	42.5-42.0	100.4	56.01	
P525	62.5	65.5	55.57	備考:掘立柱建物13-P3
P526	-	-	-	
P527	-	-	-	
P528	-	-	-	
P529	44.0	70.2	56.34	
P530	37.0-36.0	44.4	56.62	暗灰色
P531	32.5-30.0	25.5	56.91	暗灰色

５．遺構外出土遺物

東・西斜面部Ｂ層（褐色流土）出土遺物（図111、図版61－３・４・５・６）

弥生時代中期後葉の土器（211・213・215～218）が多い。212はＢ層中、最新の遺物で、古墳時代前期前葉の甕である。214は、深鉢状の土器で、内外面ともケズリ調整される。縄文土器の可能性がある。その他、石斧基部と考えられるＳ21等の石製品も出土している。（湯川）

Ⅱ層出土遺物（図112、図版60－５、61－１・２、65－３・４）

219は、縄文時代中期の深鉢。220～224は、弥生時代後期後葉から終末期の土器である。224の外面にはタタキが施される。225～227は、古墳時代前期前葉に属する土器で、この層中で最新の遺物である。227は蓋で、低脚杯の脚部と口縁部を打ち欠いて転用している。石製品では、砥石（Ｓ23～25）

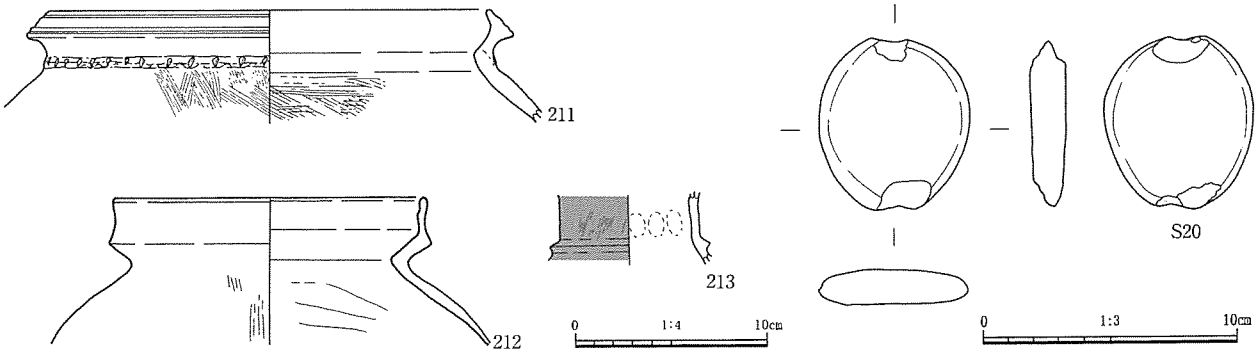


図110　東斜面Ｂ層出土遺物

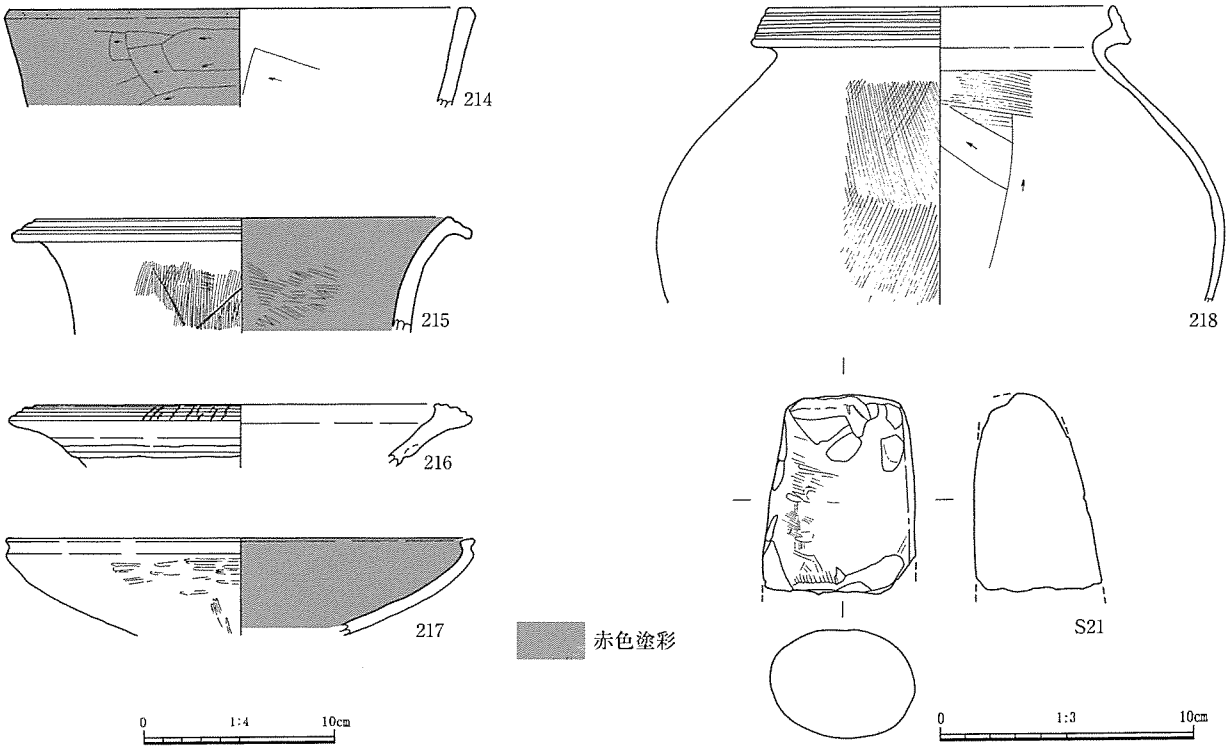


図111　西斜面Ｂ層出土遺物

が多く出土している。鉄製品は、袋状鉄斧（Ｆ53)、板状鉄製品（Ｆ54～56）が出土している。(湯川)

東斜面Ａ層（暗褐色流土）出土遺物（図113、図版58－２、60－１・２、65－５・６）

南半部からの出土量が多い。特に南半部東端の谷地形からは、古墳時代中期の遺物が多く出土している。228は、弥生時代後期前葉の鉢もしくは壺。230は、弥生土器で壺の底部と考えている。233は、古墳時代前期前葉の器台。237･238は古墳時代中期後葉の甕で、237肩部には「廾」形の刻文が施される。Ｓ28は磨製の石槍状石器で、細かい敲打の後、丁寧に磨かれている。刃部には、調整もしくは使用痕と考えられる細かい欠けがある。Ｓ29は、扁平片刃石斧。Ｆ57は刀子である。その他、被熱した粘土塊が出土している（図版60－３)。スサの痕跡と考えられる小孔が開いており、一部には平らな面を持つものもある。炉壁や、焼けた壁土などが想定できる　(湯川)

西斜面Ａ層（暗褐色流土）出土遺物（図114・115、図版59－1、60－3･4、65－5･6)

弥生時代中期後葉から、古代までの遺物が出土している。Ｈ８グリッドを中心とする南側の谷地形から非常に多くの遺物が出土した。古墳時代中期以降の遺物は、大きな破片が多い。調査地より南に

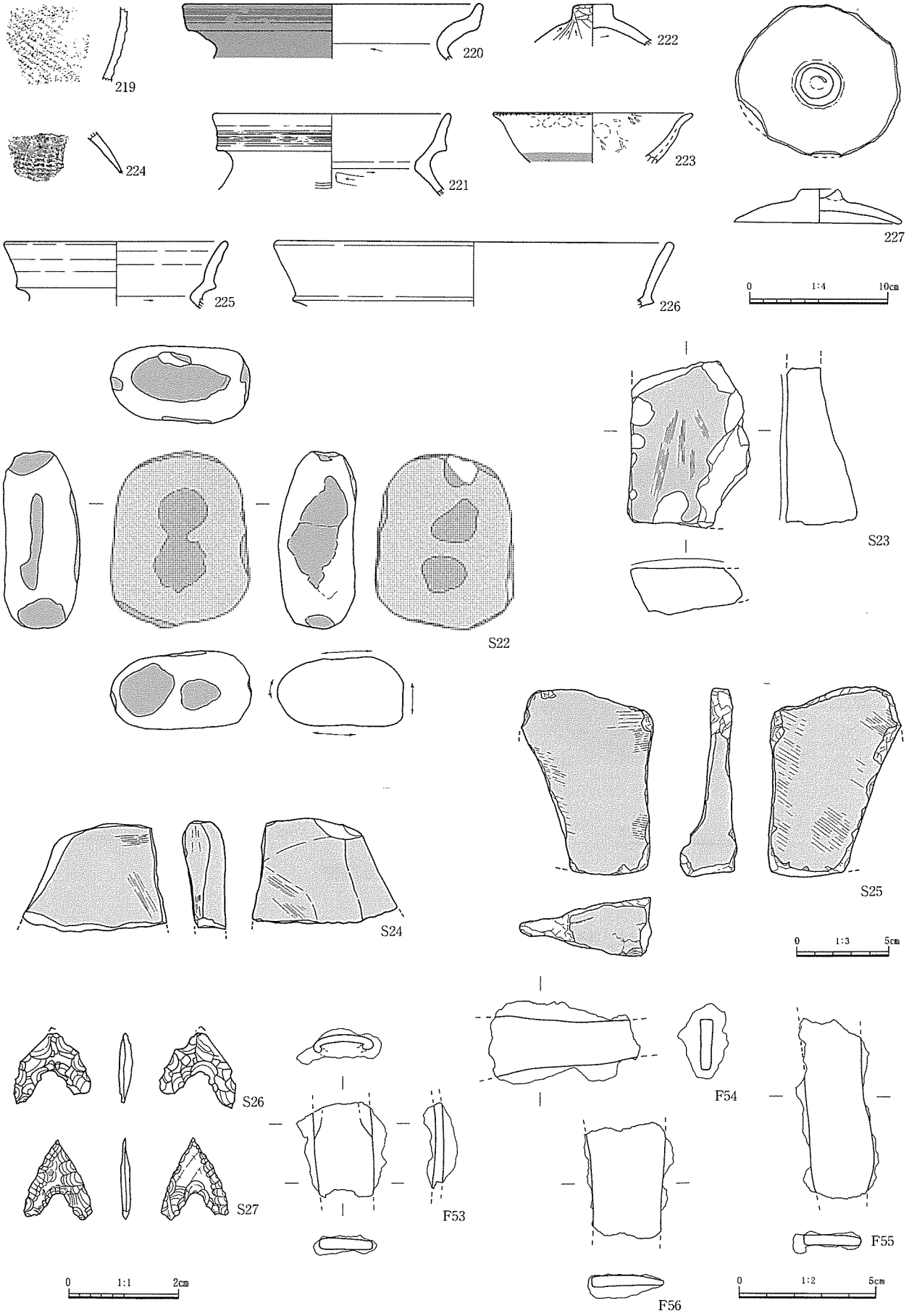

219
220
222
224
221
223
227
225
226
0 1:4 10cm
S23
S22
S25
S24
0 1:3 5cm
S26
S27
F53
F54
F55
F56
0 1:1 2cm
0 1:2 5cm

図112　Ⅱ層出土遺物

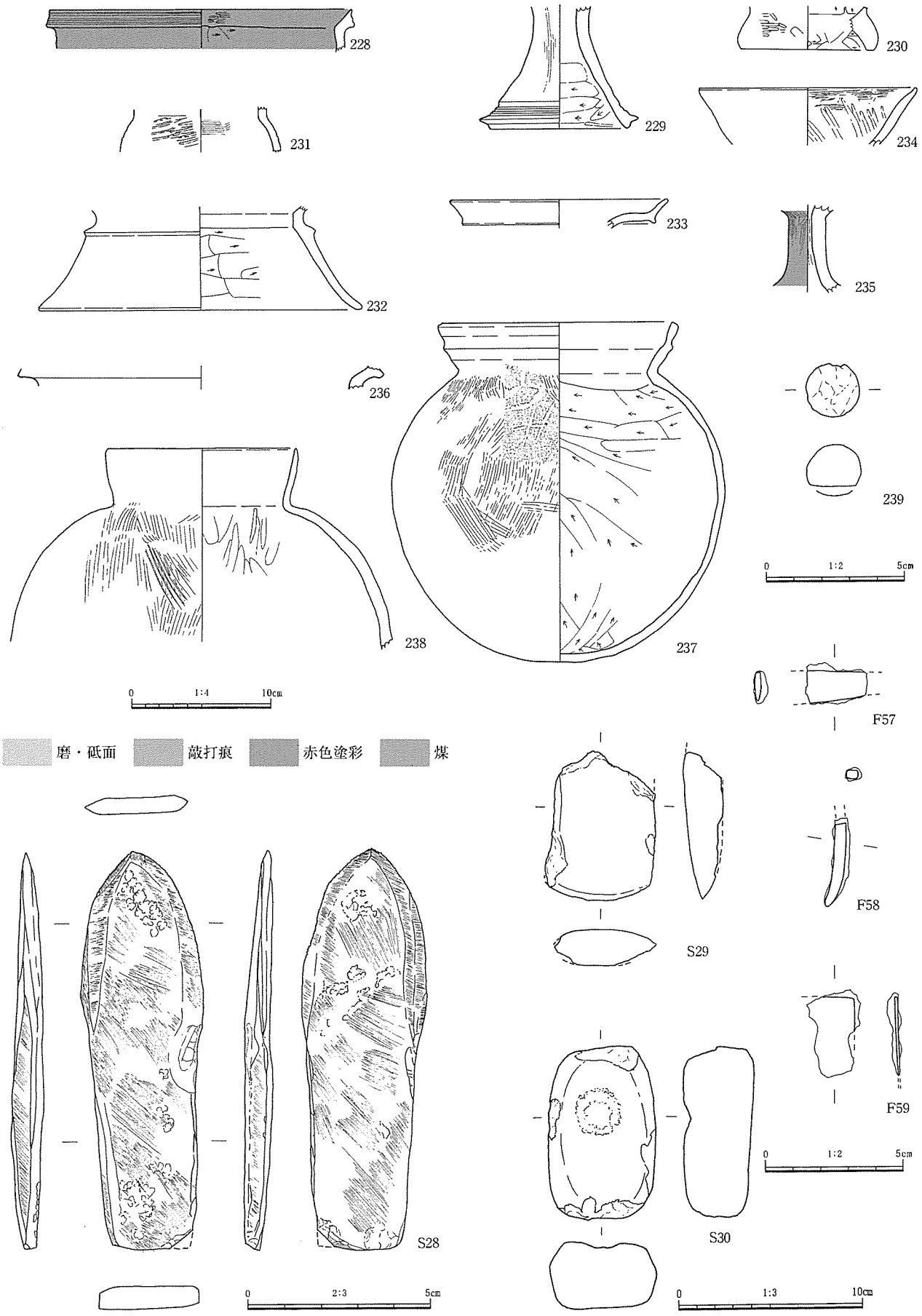


図113　東斜面Ａ層出土遺物

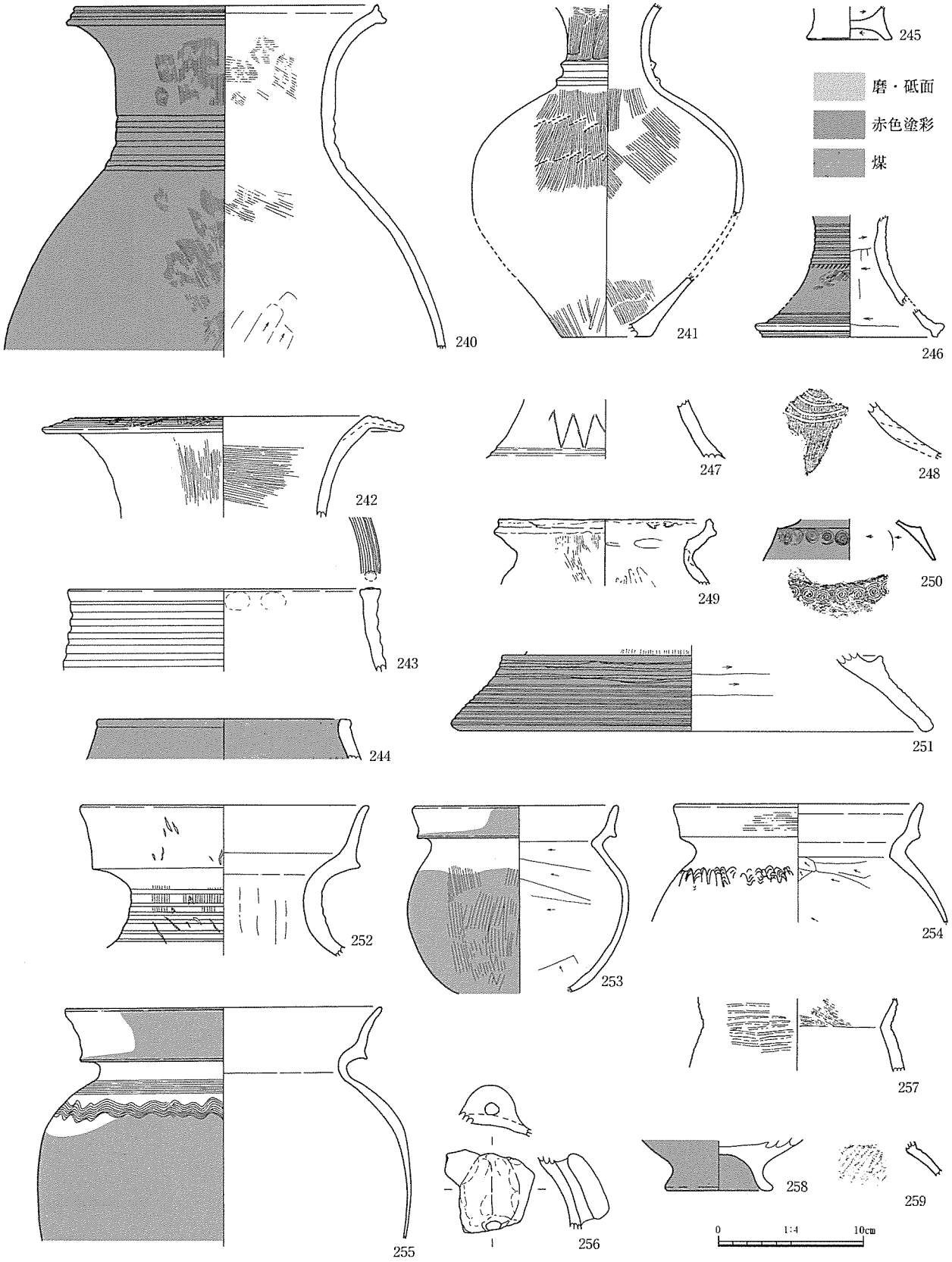


図114　西斜面Ａ層出土遺物（１）

も集落が広がっており、その生活の残滓が廃棄された可能性がある。240～247は弥生時代中期後葉、248～251は弥生時代後期後葉、252～259は弥生時代終末期の土器である。249は甕で、口縁端部を粗くつまみあげている。251は大型の器台で外面赤色塗彩される。口縁部260は古墳時代中期前葉の壺で

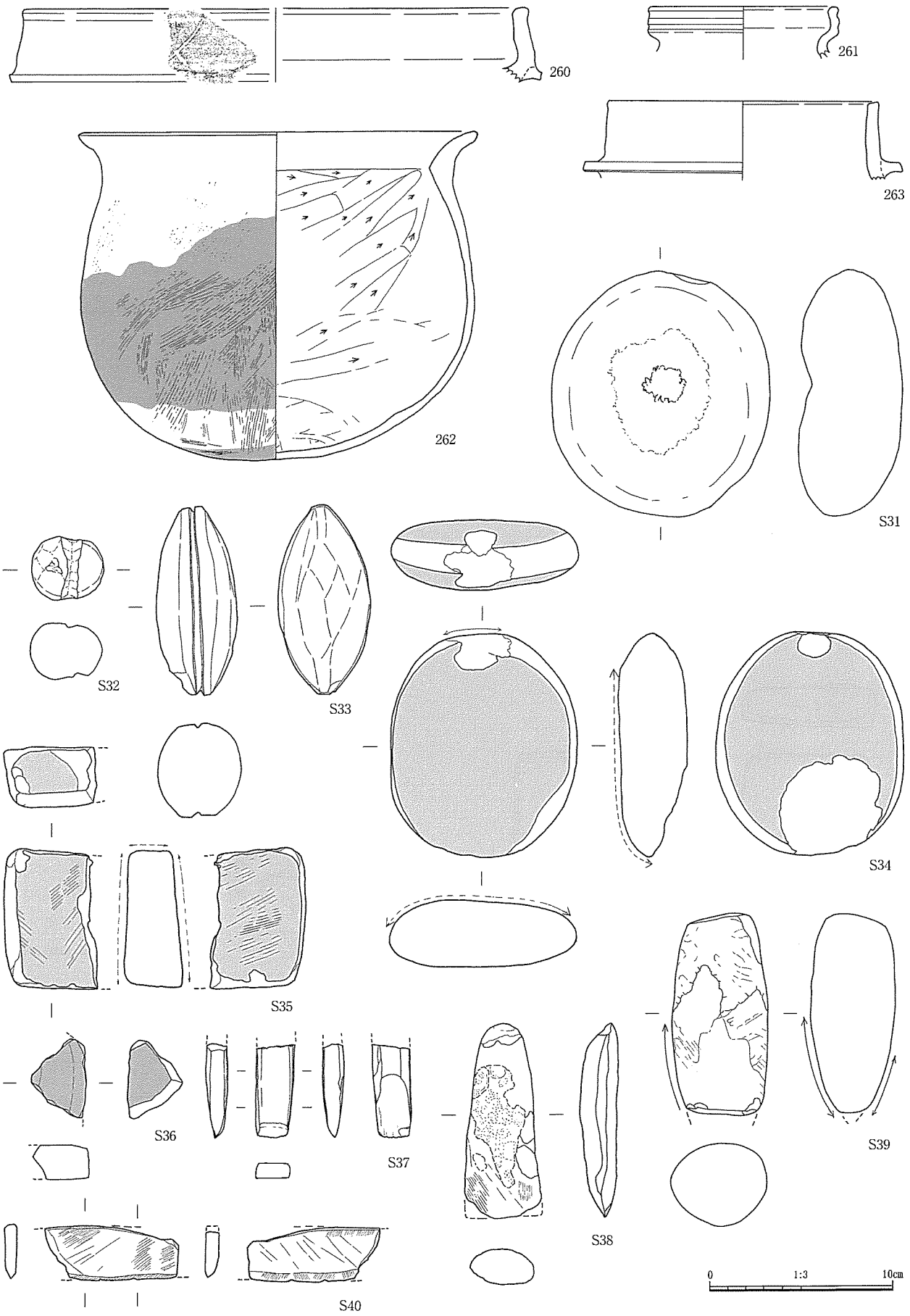


図115　西斜面A層出土遺物（２）

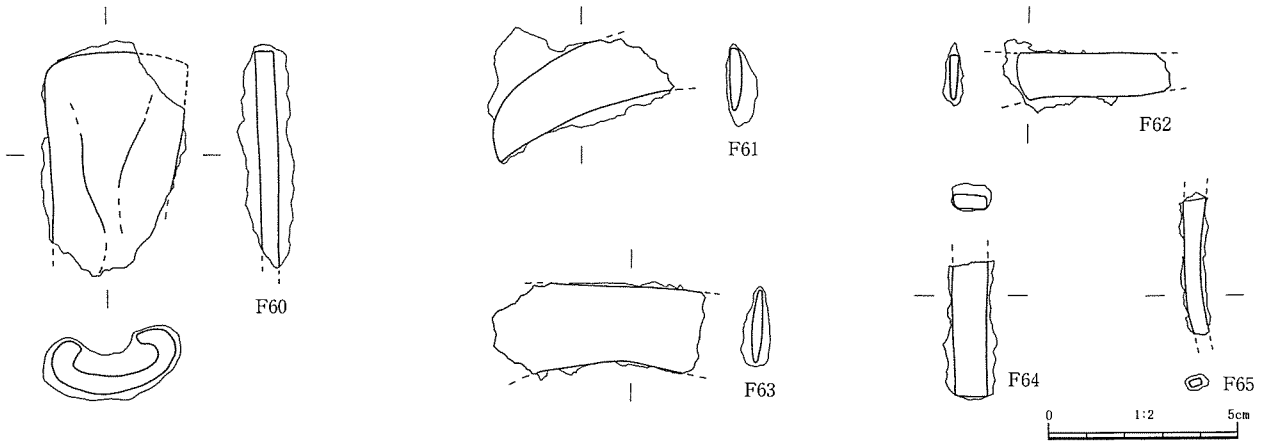


図116　西斜面Ａ層出土遺物（３）

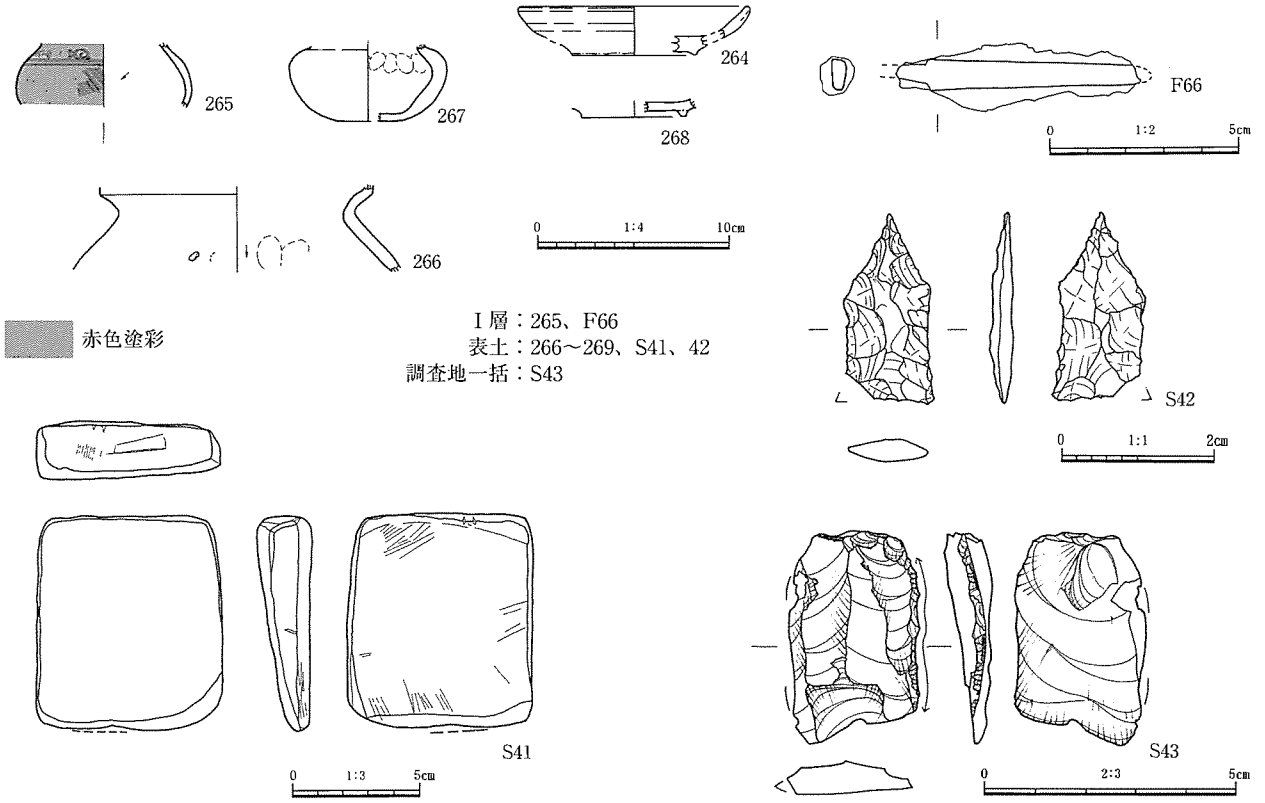


図117　Ｉ層および表土出土遺物

口縁部に刻文が施される。262は甕、263は羽釜でＩ９グリッドの谷地形から出土した。古代の所産と考えられる。Ｓ32・Ｓ33は有溝石錘で、後者はミガキ調整される。Ｓ37は扁平片刃石斧、Ｓ38・Ｓ39は蛤刃石斧、Ｓ40は石鎌である。いずれも、刃部に使用痕がつく。Ｆ60は袋状鉄斧の可能性がある。Ｆ61は鉄鎌、Ｆ62・Ｆ63は刀子、Ｆ64は鉈の柄部である。（湯川）

Ｉ層およびその他の出土遺物（図117、図版62－１～４・65－５）

Ｉ層からは、近世後半を最新とする少量の遺物が出土している。264・268は瀬戸美濃系の陶器皿で、18世紀以降の所産であろう。267は瓦形の土師器で、古墳時代中期中葉に属する。266は弥生土器の甕で、片部に籾圧痕が残る。Ｆ66は、刀子柄部。Ｓ41は扁平片刃石斧。Ｓ42は平基式の石鏃で、平面形は五角形を呈する。Ｓ43は黒曜石製のスクレイパーで、石刃状の剥片を素材とする。（湯川）

遺構一覧表凡例

１．（　）内の数値は残存値を示す。

２．規模は、長軸×短軸で示した。

３．竪穴住居・竪穴の規模・床面積は、竪穴部下端もしくは周壁溝外側下端を計測点としている。

４．掘立柱建物の占有面積は、柱筋線に囲まれた範囲の面積である。

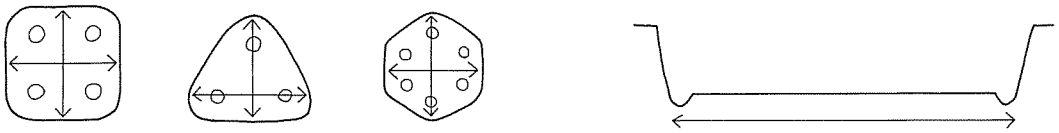


表44　竪穴住居・竪穴計測表

遺構名	平面形	主柱穴数	規模(m)	床面積(㎡)	深さ(m)	時期	備考
竪穴住居1a	円形	3	(5.6)×(5.5)	(23.4)	0.07	弥生中期後葉	
竪穴住居1b	円形	4	(6.7)×(6.0)	(32.5)	0.07	弥生中期後葉	
竪穴住居2	円形	―	―	(32.2)	0.56	弥生中期後葉	竪穴住居5に切られる
竪穴住居3a	円形	―	―	(3.4)	0.30	弥生中期後葉	床外周約1/4残有,竪穴5に切られる
竪穴住居3b	円形	―	―	(5.5)	0.30	弥生中期後葉	床外周約1/4残有,竪穴5に切られる
竪穴住居4	円形	―	(6.8)	(15.9)	0.52	弥生後期前葉	床外周1/2残有
竪穴住居5	隅丸方形	4	5.5×4.9	(22.5)	0.90	弥生後期後葉-終末期	竪穴住居２を切る
竪穴住居6	隅丸方形か	―	―	(3.4)	0.37	弥生後期後葉-終末期	床外周1/4残有
竪穴住居7	隅丸方形か	(2)	(3.5)	(4.6)	0.64	弥生後期-古墳前期	床外周1/2残有, 竪穴住居3・土坑29・60を切る
竪穴住居8	隅丸方形	4	4.9×4.8	21.3	0.80	弥生後期後葉-終末期	
竪穴住居9	隅丸方形	4	5.1×5.1	24.1	0.90	弥生後期後葉-終末期	
竪穴住居10	隅丸長方形	2	4.0×3.2	11.5	0.81	古墳前期前葉	
竪穴住居11a	隅丸方形	3	4.7×4.6	17.7	0.89	弥生後期後葉-古墳前期前葉	
竪穴住居11b	隅丸方形	4	4.7×4.6	17.7	0.89	弥生後期後葉-古墳前期前葉	a,bは平面形は同じ、主柱穴が異なる
竪穴住居12a	隅丸方形に	(3)	(4.2)	(10.9)	0.68	古墳前期前葉	
竪穴住居12b	近い円形	(3)	(4.5)	(12.8)	0.64	古墳前期前葉	
竪穴住居13	隅丸方形	3	3.8×3.4	11.0	0.72	古墳前期前葉	竪穴住居15を切る
竪穴住居14	隅丸三角形	(3)	(3.2)	(4.2)	0.76	弥生後期後葉-古墳前期前葉	床外周1/2残有,竪穴2,3を切る
竪穴住居15	楕円形	2	(2.8)	(2.5)	0.60	弥生後期後葉-終末期	竪穴住居13に切られる
竪穴住居16	方形	4	(5.5)×(5.4)	(28.7)	1.16	古墳前期前葉	
竪穴住居17	方形	2	(4.7)×(4.4)	(20.9)	0.76	弥生後期後葉-古墳前期前葉	
竪穴住居18	隅丸方形	4	(4.6)×(4.6)	(18.3)	1.20	弥生後期後葉-古墳前期前葉	
竪穴住居19a	隅丸方形	3	4.8×4.4	17.6	0.77	弥生後期後葉-古墳前期前葉	
竪穴住居19b	隅丸方形	4	4.9×4.7	19.7	0.77	弥生後期後葉-古墳前期前葉	
竪穴住居20	方形	2	4.9×4.3	20.4	0.83	古墳中期前葉	
竪穴住居21	方形	4	5.5×5.0	25.5	0.86	古墳中期中葉	竪穴住居16,17を切る
竪穴住居22	方形	2	4.4×3.8	18.9	0.80	古墳中期後葉	
竪穴1	楕円形	―	3.1	6.0	0.50	弥生後期後葉-終末期	
竪穴2	方形か	―	―	(0.5)	0.08	弥生後期-古墳前期前葉	竪穴住居3,14に切られる
竪穴3	方形か	―	―	(0.2)	0.52	弥生後期-古墳前期前葉	竪穴2を切り竪穴住居14に切られる
竪穴4	楕円形か	―	(4.8)	(6.3)	0.18	古墳中期中葉	床外周1/2残有
竪穴5	方形	―	2.8×2.7	7.6	0.25	―	

表45　掘立柱建物一覧表

遺構名	平面形	規模(m)	占有面積(㎡)	主軸	時期	備考
掘立柱建物1	2間×1間	4.9×2.9	14.2	N－14°-W	弥生中期後葉-後期初頭	土坑9に切られる
掘立柱建物2	2間×1間	3.6×2.3	8.3	N－56°-E	弥生後期後葉-古墳前期前葉	竪穴住居1を切る
掘立柱建物3	2間×1間	3.6×2.5	9.0	N－62°-E	弥生後期後葉-古墳前期前葉	竪穴住居1を切る
掘立柱建物4	2間×1間	3.1×2.2	6.8	N－66°-E	弥生後期後葉-古墳前期前葉	
掘立柱建物5	2間×1間	3.5×2.4	8.4	N－73°-E	弥生後期後葉-古墳前期前葉	竪穴住居10を切る
掘立柱建物6	2間×1間	3.0×2.1	6.3	N－61°-E	弥生後期後葉-古墳前期前葉	P86,103,土坑5を切る
掘立柱建物7	2間×1間	4.8×2.7	13.0	N－51°-E	古墳中期	
掘立柱建物8	2間×1間	4.9×3.0	14.7	N－46°-E	古墳中期	竪穴住居4を切る
掘立柱建物9	2間×1間	2.8×2.4	6.7	N－27°-E	古墳中期	
掘立柱建物10	2間×1間	3.4×2.3	7.8	N－49°-W	時期不明	土坑26に切られる
掘立柱建物11	2間×1間	3.2×2.3	7.4	N－46°-E	時期不明	掘立柱建物12,13に切られる
掘立柱建物12	2間×1間	4.5×2.6	11.7	N－40°-E	時期不明	掘立柱建物13に切られる
掘立柱建物13	2間×1間	4.5×2.6	11.7	N－41°-E	時期不明	掘立柱建物12,11を切る
掘立柱建物14	2間×1間	2.9×1.9	5.5	N－64°-E	時期不明	

表46　押平尾無遺跡出土土器観察表（１）

No.	遺構・層位	図	図版	器種	法量(cm)			色調 外 内	調整		残存率	備考
					口径	底径	器高		内	外		
1	竪穴住居1 床直	15	44	甕	(12.2)	—	(13.5)	橙色	ナデ,ケズリ	ナデ,ハケ	口縁2/3	外面煤付着,口縁凹線
2	竪穴住居1 床直	15	44	甕	(13.8)	—	(18.1)	明黄褐-橙色 橙色	ハケ	ハケ	口縁1/5	口縁凹線
3	竪穴住居2 ②層	16	44	甕	(15.2)	—	(12.4)	にぶい黄橙色 明黄褐色	ケズリ,ナデ	ナデ,ハケ	口縁1/2	煤付着, 口縁下端突出
4	竪穴住居3	17	44	高杯	14.4	—	(4.4)	橙色	ナデ,ミガキ	ミガキ	口縁1/12	口縁外面3条の凹線, 赤彩,杯部
5	竪穴住居3 床直	17	44	高杯	—	(13.4)	(5.1)	淡黄色 褐灰色	ナデ,ハケ	ナデ,ハケ	底部1/4	脚部,外面赤彩,凹線
6	竪穴住居4 床直	19	45	甕	(12.2)	—	(12.2)	橙色-明黄褐色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/3	口縁外面平行沈線,貝殻 による刺突文ナデ消し
7	竪穴住居4 床直	19	44	壺	(8.0)	—	(9.8)	浅黄橙-灰黄褐 にぶい黄橙-褐灰	ナデ,ケズリ	ハケ,ナデ	口縁1/7	口縁外面平行沈線, 刻み目,煤付着
8	竪穴住居4 下層	19	44	甕	(17.1)	—	(3.3)	にぶい黄橙	ナデ	ナデ	口縁1/5	外面全体に煤付着 口縁平行沈線
9	竪穴住居4 床直	19	45	壺	18.0	—	(5.9)	橙	ナデ	ナデ	口縁2/3	口縁平行沈線 頸部外面刻み目
10	竪穴住居4	19	44	小型 土器	(3.4)	—	3.1	灰黄褐色	ナデ	ミガキ	口縁1/3	外面赤彩
11	掘立柱 建物1	20	45	甕	—	6.2	(6.2)	橙色-明赤褐色	ケズリ,ナデ	ナデ,ミガキ	口縁1/1	底部板目痕のちナデ 内面指頭圧痕
12	土坑1	21	45	甕	(14.4)	—	(2.8)	橙色	ナデ	ナデ	口縁1/10	口縁平行沈線
13	土坑1	21	45	甕	—	5.8	(8.1)	にぶい橙-橙色 にぶい黄橙色	ケズリ,ハケ	ナデ,ミガキ	口縁1/1	底部完存,外底部はナデ 内面指頭圧痕
14	土坑1	21	45	甕	(16.0)	—	(2.7)	浅黄橙色	ナデ	ナデ	口縁1/10	口縁部凹線5条,刻み目 頸部貼付突帯刻み目
15	土坑1	21	45	直口 壺	(13.2)	—	(3.4)	橙色	ナデ	ナデ	小片	口縁凹線7条 外面赤彩
17	土坑2	21	45	無頸 壺	—	—	(5.9)	赤褐色 にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	胴部1/5	外面赤彩,刻み目 内面指頭圧痕
19	竪穴住居5 ②層	25	45	甕	(19.2)	—	(4.3)	黄褐色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/14	口縁7条平行沈線, 頸部刺突文,煤付着
20	竪穴住居5 ③層	25	45	甕	(19.2)	—	(5.0)	黄褐色 黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/12	口縁8条の平行沈線 口縁下部に煤痕
21	竪穴住居5 ③層	25	45	甕	(16.8)	—	(4.8)	橙色 灰黄褐色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/20	外頸部煤付着
22	竪穴住居5 ④層	25	45	壺	(18.8)	—	(9.0)	明黄褐色	ナデ,ケズリ	ナデ	口縁1/5	頸部外刻み目 内面シボリメ
23	竪穴住居6	26	45	甕	(14.5)	—	(3.8)	黄褐色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/4	口縁部煤付着
24	竪穴住居7	27	45	甕	(17.0)	—	(3.9)	にぶい黄橙色 橙色-淡黄色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/8	口縁外面平行沈線5条 煤付着
25	竪穴住居7	27	45	甕	(16.9)	—	(4.5)	にぶい橙	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/8	外面煤付着
26	竪穴住居8	28	45	壺	13.2	—	(11.0)	橙色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/2	複合口縁, 外面細かいハケメ
27	竪穴住居8	28	45	甕	(12.2)	—	(3.8)	黒灰色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/12	
28	竪穴住居9	31	46	甕	(16.5)	—	(4.0)	にぶい褐色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/6	
29	竪穴住居9	31	-	器台	—	—	(7.8)	にぶい橙	ケズリ	ナデ	小片	脚部
30	竪穴住居10 床直	34	46	甕	(17.0)	—	(7.3)	浅黄橙色 黄橙-浅黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/1	肩部波状文 外面煤付着
31	竪穴住居10 床直	34	-	甕	(17.2)	—	(3.5)	橙色	ナデ	ナデ	口縁1/12	
32	竪穴住居10 中層	35	46	甕	(18.8)	—	(6.3)	淡黄灰色 にぶい黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/12	外面工具痕あり
33	竪穴住居10 上層	35	46	壺	(27.8)	—	(12.9)	橙-黄橙色 橙色	ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/4	大型,外頸部下部 細かいハケメ
34	竪穴住居10 中層	35	46	壺	(22.8)	—	(7.8)	浅黄橙色 黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/4	
35	竪穴住居10 中層	35	46	壺	(8.6)	—	(5.8)	橙色 黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/4	外面平行沈線,羽状文 赤彩か
36	竪穴住居12 床直	39	46	甕	(18.6)	—	(7.0)	浅黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/4	
37	竪穴住居12 下層	39	46	甕	(16.4)	—	(5.5)	浅黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/10	
38	竪穴住居13 床直	41	47	高杯	—	12.0	(6.0)	浅黄橙-橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	底部1/1	脚部

表47　押平尾無遺跡出土土器観察表（２）

No.	遺構・層位	図	図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	色調 外 内	調整 内	外	残存率	備考
39	竪穴住居13 床直	41	47	壺	—	—	(30.4)	橙-暗灰色 橙-浅黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	胴部1/2	外面肩部平行沈線か 最大径52cm,大型
40	竪穴住居13	42	47	甕	(24.8)	—	(8.0)	黄灰褐色 黄灰褐色－浅黄色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/5	外面頸部煤付着
41	竪穴住居13	42	47	甕	(16.4)	—	(3.7)	黄灰色	ナデ	ナデ	口縁1/10	
42	竪穴住居13 ③・④層	42	47	壺	(16.0)	—	(7.0)	浅黄-黄橙色 黄橙色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/2	
43	竪穴住居13 ③・④層	42	47	甕	(11.8)	—	(5.1)	黄橙色	ハケ,ナデ	ナデ	口縁1/8	小型,単純口縁
44	竪穴住居13	42	47	壺	—	(17.3)	(2.6)	黄灰色－黒褐色 淡黄色	ケズリ,ナデ	ナデ,ミガキ	脚部1/6	脚部,外面煤付着
45	竪穴住居14	43	48	甕	(12.4)	—	(3.8)	橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/8	外面煤付着
46	竪穴住居14	43	48	器台	—	(17.5)	(5.1)	浅黄色	ケズリ,ナデ	ナデ	小片	雲母片多く含む
47	竪穴住居14 ②層	43	48	甕	(15.6)	—	(5.1)	にぶい黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/7	口縁外面平行沈線ナデ消し,外面煤付着
48	竪穴住居15 中層	44	48	甕	(15.4)	—	(4.8)	浅黄色	ナデ	ナデ	口縁1/10	外面一部煤付着
49	竪穴住居15 中下層	44	48	甕	(16.6)	—	(4.1)	浅黄色-黄灰色	ナデ	ナデ	口縁1/4	
50	竪穴住居16 P５	46	48	甕	16.6	—	(9.6)	にぶい黄橙色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/2	外面煤付着,口縁外面ナデ強
51	竪穴住居16	46	48	甕	(14.6)	—	(5.8)	にぶい黄橙色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/8	
52	竪穴住居16	46	48	甕	(10.4)	—	(5.6)	にぶい黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/8	
53	竪穴住居16	46	48	甕	—	—	—	明黄褐色	ナデ	タタキ	細片	
54	竪穴住居16	46	48	甕	—	—	—	にぶい黄橙色 暗褐色	ケズリ	タタキ	細片	
55	竪穴住居16	46	-	甕	—	—	—	褐灰色 暗灰色	ケズリ	タタキ	細片	風化安山岩小礫多く含む
56	竪穴住居16	46	48	甕	—	—	—	黄橙色	ナデ	タタキ	細片	
57	竪穴住居16	46	48	甕	—	—	—	黄灰色 灰色-黄灰色	ナデ	タタキ	細片	内面ナデ強
58	竪穴住居18 中層	48	48	甕	(19.8)	—	(9.1)	にぶい黄橙色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/7	
59	竪穴住居19 床直	50	49	甕	16.1	—	(4.9)	浅黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁3/4	
60	竪穴住居19 床直	50	49	甕	15.5	—	(5.6)	橙色-浅黄色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/2	口縁下端部突出
61	竪穴住居19 ピット	50	49	直口壺	10.8	—	(8.2)	橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/1	肩部波状文
62	竪穴住居19 ③層	50	49	甕	17.5	—	(8.8)	黄橙色-浅黄色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/2	肩部波状文
63	竪穴住居19 ③層	50	49	甕	18.3	—	(10.6)	浅黄橙色-橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁3/4	口縁外面・胴部煤, 胴部平行沈線,波状文
64	竪穴住居19 ③層	50	48	甕	(18.6)	—	(5.7)	黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/7	外面煤付着
65	竪穴住居19 ③層	50	49	低脚杯	—	(5.7)	9.0	浅黄橙-橙色 にぶい黄橙,黒色	ナデ,ミガキ	ナデ	口縁1/12	
66	竪穴住居19 ③層	50	49	器台	—	(21.4)	(5.1)	浅黄橙色 浅黄橙-橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/5	脚部
67	竪穴住居19 ③層	50	49	壺	(17.0)	—	(8.1)	橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/8	外面頸部煤付着 肩部平行沈線
68	竪穴住居19 ③層	50	49	壺	18.35	—	(11.3)	浅黄橙色-黄灰色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁2/3	平行沈線,内面シボリメ
69	竪穴1	52	-	甕	(12.2)	—	(3.8)	暗灰色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/12	口縁波状文
70	竪穴1	52	-	高杯	(19.6)	—	(5.6)	にぶい黄橙-暗灰色 黄灰色	ミガキ	ナデ	口縁1/14	内外面 赤彩
71	竪穴3	53	-	甕	(10.4)	—	(3.6)	橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/10	外面口縁波状文
72	掘立柱 建物2 P5	54	-	甕	(15.0)	—	(3.0)	橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/10	口縁平行沈線6条 外面煤付着
73	テラス1 下層	57	-	甕	(16.0)	—	(5.3)	にぶい黄橙色 黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/5	口縁平行沈線ナデ消 内外面煤付着
74	テラス1 下層	57	-	甕	(15.8)	—	(4.3)	にぶい黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/10	外面頸部刺突文 口縁平行沈線
75	テラス2	58	50	甕	(15.8)	—	(3.3)	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	口縁1/8	外面煤付着 口縁下端被熱
76	テラス2	58	50	甕	(14.8)	—	(3.7)	浅黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/8	外面煤付着,平行沈線

表48　押平尾無遺跡出土土器観察表（３）

No.	遺構・層位	図	図版	器種	法量(cm)			色調 外 内	調整		残存率	備考
					口径	底径	器高		内	外		
77	テラス3	58	50	甕	(18.4)	—	(6.5)	にぶい黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/4	平行沈線,外面煤付着
78	テラス4	59	-	甕	(19.6)	—	(3.3)	黄橙色	ナデ	ナデ	口縁1/10	
79	テラス4	59	-	甕	—	—	(3.6)	橙色	ナデ	ナデ	小片	
80	テラス4	59	-	高杯	—	—	(4.1)	橙色	ナデ,ミガキ	ナデ	小片	杯部
81	テラス4	59	50	甕	(19.6)	—	(3.9)	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	口縁1/10	平行沈線
82	テラス5	59	50	甕	(14.0)	—	(4.1)	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	口縁1/14	
83	テラス6	59	50	甕	(18.0)	—	(8.2)	橙色 橙色-黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/5	外面煤付着
84	テラス6	59	-	甕	—	—	(3.7)	橙色	ナデ	ナデ	細片	
85	テラス6	59	-	甕	(17.0)	—	(4.7)	黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/10	平行沈線ナデ消, 内外面煤付着
86	テラス6	59	50	甕	(15.8)	—	(2.8)	灰褐色 灰黄褐色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/5	口縁穿孔2・平行沈線 施文後竹管状刺突文 頸部赤彩,安山岩含む
87	テラス7	60	-	甕	(17.8)	—	(4.5)	橙色	ナデ	ナデ	口縁1/10	
88	テラス7	60	-	甕	(18.4)	—	(3.9)	浅黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	小片	外面煤付着
89	テラス7	60	-	甕	(15.4)	—	(3.6)	黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	小片	
90	テラス7	60	-	甕	(18.4)	—	(3.2)	にぶい黄橙色	ハケ,ナデ	ナデ	口縁1/10	外面凹線5条後刻み目 頸部貼付突帯刻み目
91	テラス10	60	50	甕	(13.4)	—	(4.5)	橙色-黄橙色	ナデ	ナデ	口縁1/12	外面煤付着
92	テラス10	60	50	甕	(14.4)	—	(4.6)	浅黄褐色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/8	口縁煤付着
93	テラス10	60	50	甕	(17.6)	—	(4.7)	浅黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/12	
94	テラス10	60	-	甕	(15.4)	—	(3.3)	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	口縁1/10	平行沈線
95	土坑7　④層	61	50	甕	(15.0)	—	(4.6)	橙色 橙色-黄灰色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/3	口縁ナデ強
96	土坑7　④層	61	50	壺	(15.8)	—	(10.2)	浅黄色-黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁2/5	口縁平行沈線10条 頸部櫛描平行沈線
98	土坑7　④層	61	50	甕	(14.7)	—	(5.2)	浅黄橙色	ハケ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/10	口縁凹線
99	土坑7	61	50	甕	(16.0)	—	(4.1)	黄褐-にぶい黄褐色 にぶい黄褐色	ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/10	口縁凹線3条, 外面煤付着
100	土坑7　④層	61	50	甕	(15.0)	—	(2.1)	浅黄色-橙色	ナデ	ナデ	口縁1/10	口縁凹線3条
101	土坑8	61	50	壺	(15.4)	—	(5.3)	にぶい黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/10	
102	土坑9	62	51	甕	(15.0)	—	(5.0)	にぶい黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/10	外面煤付着
103	土坑9　①層	62	51	甕	(14.6)	—	(3.8)	黄橙-にぶい黄褐色 黄橙色	ナデ	ナデ	口縁1/10	外面煤付着
104	土坑9　①層	62	51	甕	(18.0)	—	(4.6)	浅黄色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/12	
105	土坑9	62	51	高杯	(20.4)	—	(5.8)	橙色	ナデ	ナデ	口縁1/10	杯部
106	土坑9	62	51	甕	(8.6)	—	(2.45)	黄橙-黄灰色	ケズリ,ミガキ	ナデ,ミガキ	口縁1/5	小型
107	土坑9	62	-	甕	(11.3)	—	(3.4)	にぶい褐-褐灰色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/10	安山岩小礫多く含む
109	土坑10	63	51	壺	(16.4)	—	(7.7)	橙色-黄橙色 橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/10	肩部に平行沈線
110	土坑11	63	51	器台	—	—	(3.0)	黄橙色	ナデ	ナデ	小片	
111	土坑13	64	51	甕	(16.0)	—	(3.7)	黄橙色	ナデ	ナデ	口縁1/10	
112	土坑14	64	51	器台	(21.8)	—	(4.0)	黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	小片	
113	土坑19	65	51	甕	(15.6)	—	(3.7)	橙色	ナデ	ナデ	口縁1/10	内外面煤付着
114	土坑19	65	51	甕	(16.4)	—	(7.7)	淡黄色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/12	肩部平行沈線, 外面煤付着
115	土坑19	65	51	椀	(13.6)	—	(4.3)	灰黄褐-褐灰色	ケズリ,ナデ	ケズリ,ナデ	口縁1/6	外面煤付着
116	土坑20 床直	66	51	高杯	(9.5)	4.7	(9.25)	橙色-黄色	指頭圧痕, ナデ	ナデ	口縁1/3	外面赤彩,口縁・脚部被熱,口縁穿孔,ブランデーグラス形,脚部切り取り
117	土坑20 ③層	66	51	甕	(17.0)	—	(8.0)	浅黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	小片	
118	土坑20 ③層	66	51	高杯	(26.6)	—	(5.2)	明黄褐-赤色 明黄褐色	ナデ,ミガキ	ナデ	口縁2/5	杯部
119	溝1	67	57	甕	(15.2)	—	(4.2)	橙色 橙褐色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/10	安山岩粗砂多く含む 外面煤付着
120	溝1	67	57	甕	(14.6)	—	(4.3)	橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/8	安山岩粗砂多く含む
121	溝1	67	-	甕	(13.4)	—	(3.5)	にぶい黄褐色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/10	安山岩粗砂多く含む 外面煤付着
122	溝1	67	-	不明	(9.8)	—	(3.8)	にぶい黄褐色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/10	安山岩小礫多く含む

表49　押平尾無遺跡出土土器観察表（４）

No.	遺構・層位	図	図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	色調 外 内	調整 内	外	残存率	備考
123	竪穴住居20	70	53	甕	(17.9)	—	30.0	浅黄橙色	ケズリ,指頭圧痕,ナデ	ハケ,ナデ	全体9/10	外面肩部2条の刻み目 内外面下半煤付着
124	竪穴住居20	70	53	甕	(14.9)	—	(22.4)	にぶい黄橙色	ケズリ,指頭圧痕,ナデ	ハケ,ナデ	全体4/5	外面肩部2条の刻み目 内外面下半煤付着
125	竪穴住居20	70	53	甕	17.8	—	(20.6)	浅黄橙色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	全体7/10	外面煤付着
126	竪穴住居20	71	53	高杯	(17.0)	(9.2)	(9.8)	橙色	不明	ハケ	脚部1/3	
127	竪穴住居20	71	53	蓋	(23.4)	(6.9)	—	橙色-浅黄色	ナデ	ハケ,ナデ	杯部1/1	高杯脚部折り取り後転用
128	竪穴住居20 上層	71	-	高杯	(16.6)	—	—	にぶい黄橙色	ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/3	
129	竪穴住居20 上層	71	52	高杯	—	(11.0)	—	橙色	ナデ	ハケ,ナデ	杯部2/5	口縁端部磨耗
130	竪穴住居20	71	52	高杯	—	—	—	橙色	ナデ	不明	小片	脚部
131	竪穴住居20	71	52	甕	(15.8)	—	(5.5)	浅黄橙色	ナデ	ナデ	口縁1/12	
132	竪穴住居20	71	53	甕	15.6	—	(14.9)	にぶい橙-明黄褐色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁3/4	
133	竪穴住居20	71	52	甕	(11.2)	—	(6.6)	橙-浅黄橙色 浅黄橙色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/3	外面煤付着
134	竪穴住居20	71	52	甕	(14.4)	—	(3.9)	灰黄色 黄灰色-黒褐色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/12	安山岩粗砂多く含む
135	竪穴住居20 ピット3	71	52	小型丸底壺	(10.8)	—	(9.8)	橙色 にぶい黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	胴部1/4	
136	竪穴住居20	71	52	高杯	—	—	(3.0)	浅黄橙-橙色 浅黄橙色	ナデ	ナデ	杯部1/5	杯部
137	竪穴住居20 ピット2	71	52	高杯	—	—	(7.6)	にぶい黄橙色	ケズリ,ナデ	ハケ, ヘラナデ	小片	
138	竪穴住居21 床直	75	55	壺	(12.6)	—	(15.0)	にぶい橙-浅黄橙色	ケズリ,指頭圧痕,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/2	内外面煤付着
139	竪穴住居21 床直	75	55	甕	(16.4)	—	(5.2)	橙色-浅黄橙色	ナデ	ナデ	口縁2/3	
140	竪穴住居21	75	54	甕	(14.6)	—	(8.8)	にぶい赤褐-黄褐色 褐色	指頭圧痕 ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/3	
141	竪穴住居21	75	55	甕	14.8	—	24.5	橙色-浅黄橙色 橙色-黄橙色	ケズリ,指頭圧痕,ナデ	ハケ,ナデ	全体1/2	外面煤付着
142	竪穴住居21	75	55	甕	14.8	—	(25.9)	にぶい黄橙色	ケズリ,指頭圧痕,ナデ	ハケ,ナデ	全体2/3	内外面下半煤付着 口縁下端部沈線
143	竪穴住居21	75	55	甕	14.6	—	(26.0)	橙色-浅黄橙色 橙色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	全体4/5	外面煤付着
144	竪穴住居21	75	55	甕	13.6	—	(17.7)	赤褐-にぶい黄橙色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/1	外面煤付着 肩部タタキ及び稜線あり
145	竪穴住居21	75	54	甕	(14.2)	—	(6.5)	にぶい黄色	ケズリ,指頭圧痕,ナデ	ハケ,ナデ	口縁2/5	外面煤付着
146	竪穴住居21	75	54	甕	(15.4)	—	(8.5)	橙色 浅黄橙色	指頭圧痕 ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/12	
147	竪穴住居21	76	55	甕	14.0	—	(21.8)	にぶい橙色 橙色-黄橙色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	全体4/5	内外面下半煤付着 肩部タタキ及稜線あり
148	竪穴住居21	76	-	甕	(15.6)	—	(11.3)	橙色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁4/10	外面煤付着
149	竪穴住居21	76	54	甕	16.5	—	(6.4)	浅黄橙色-橙色	ケズリ,ナデ, ハケ	ハケ,ナデ	口縁1/2	
150	竪穴住居21	76	55	高杯	19.0	—	(6.2)	橙色	不明	ハケ,ナデ	口縁1/2	杯部
151	竪穴住居21	76	-	高杯	16.6	—	(5,5)	橙色	ナデ	ハケ,ナデ	杯部9/10	杯部椀形
152	竪穴住居21	76	54	高杯	14.3	—	(5.4)	橙色	ナデ	ナデ	杯部1/2	杯部椀形
153	竪穴住居21	76	55	高杯	—	(9.0)	(7.1)	橙色	ナデ	ヘラナデ, ナデ	底部1/4	脚部,内面シボリメ
154	竪穴住居21	76	55	高杯	—	(9.8)	(6.6)	橙色	ケズリ,指頭圧痕,ナデ	ナデ	脚部1/1	脚部,内面シボリメ
155	竪穴住居21	76	55	高杯	—	(9.0)	(6.3)	橙-黄橙色	ケズリ,指頭圧痕,ナデ	ナデ	底部1/8	脚部,内面シボリメ
156	竪穴住居21 中層	77	-	甕	(10.8)	—	(10.4)	淡橙-浅黄橙色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/10	
157	竪穴住居21 中層	77	54	甕	15.0	—	(6.8)	にぶい橙色 黄褐色	ケズリ,指頭圧痕,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/2	外面煤付着
158	竪穴住居21 上層	77	54	甕	(14.0)	—	(4.4)	にぶい橙色	ナデ	ナデ	口縁1/12	外面煤,口縁端部沈線
159	竪穴住居21 中層	77	54	甕	(11.8)	—	(5.2)	にぶい黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/4	

表50　押平尾無遺跡出土土器観察表（５）

No.	遺構・層位	図	図版	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	色調 外 内	調整 内	外	残存率	備考
160	竪穴住居21 下層	77	-	甕	(11.6)	—	(7.0)	にぶい橙色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/8	外面煤付着
161	竪穴住居21 中層	77	55	高杯	(14.6)	—	(7.0)	橙-黄橙色 橙色	ナデ,ミガキ	ハケ,ナデ	杯部1/2	
162	竪穴住居21 下層	77	-	高杯	—	—	(7.6)	橙-黄橙色 橙色	ナデ	ハケ,ナデ	全体1/2	内面シボリメ
163	竪穴住居21 下層	77	-	椀	(14.4)	—	5.6	橙色	ナデ	ナデ	口縁2/5	
164	竪穴住居21 下層	77	54	甕	(11.4)	—	(6.4)	黄橙色	ハケ,ナデ	タタキ,ナデ	口縁2/5	
165	竪穴住居21 下層	77	54	甕	—	(5.0)	(2.2)	にぶい黄橙色	不明	タタキ,ナデ	底径1/3	
166	竪穴住居21 中層	77	54	壺	—	—	(4.3)	にぶい黄灰色 黄橙色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	小片	小型
167	竪穴住居21 下層	77	-	器台	—	—	(5.4)	淡黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	接合部 1/4	
168	竪穴住居22 床直	79	56	甕	13.2	—	(24.4)	橙色	ケズリ,指頭圧痕,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/2 全体2/3	外面煤付着,胴部タタキによる稜線
169	竪穴住居22 床直	79	56	甕	(15.8)	—	(25.3)	にぶい黄橙色	ケズリ,指頭圧痕,ナデ	ハケ,ナデ	胴部1/3	外面煤付着
170	竪穴住居22 床直	79	56	甕	14.4	—	(26.7)	にぶい黄橙色	ケズリ,指頭圧痕,ナデ	ハケ,ナデ	口縁2/3 全体1/2	外面煤付着
171	竪穴住居22 床直	79	56	甕	(14.8)	—	(7.9)	橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/5	口縁下端部沈線
172	竪穴住居22 床直	79	56	甕	14.6	—	(14.1)	にぶい黄橙色 橙色～黄橙色	ケズリ,指頭圧痕,ナデ	ハケ,ナデ	口縁9/10	外面煤付着
173	竪穴住居22 下層	79	56	椀	10.7	—	3.1	にぶい黄橙-橙色	ナデ	ケズリ,ナデ	口縁1/2	
174	竪穴4 床直	80	52	甕	—	—	(17.8)	にぶい黄橙	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	頸部1/5	外面煤付着
175	竪穴4 ②層	80	52	甕	20.1	—	(4.8)	にぶい黄橙-浅黄色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁2/3	外面煤付着
176	竪穴4 床直	80	52	高杯	(18.4)	—	(4.6)	橙色	ナデ,ミガキ	ナデ	口縁1/5	
177	竪穴4 ②層	80	52	高杯	—	9.9	(6.4)	橙色	指頭圧痕,ナデ	ケズリ,ナデ	底部1/3	外面赤彩,内面一部赤彩 脚部,内面シボリメ
178	掘立柱 建物8　P8	80	-	甕	(15.5)	—	(3.9)	黄灰色 褐色	ナデ	ナデ	小片	外面煤付着
179	掘立柱 建物8　P3	80	50	甕	(17.0)	—	(4.5)	浅黄橙色 浅黄色-黄橙色	ナデ,ケズリ	ナデ	口縁1/5	口縁平行沈線15条,外面煤付着,安山岩小礫多混
180	テラス11	83	57	甕	—	—	(4.0)	にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	細片	
181	テラス11	83	57	直口壺	(7-8.0)	—	(7.4)	橙色	指頭圧痕,ナデ	ナデ	頸部1/3	小型
182	テラス12	84	57	甕	—	—	(4.0)	にぶい黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	細片	
183	テラス12 床直	84	57	椀	(10.4)	—	4.85	にぶい黄褐色	指頭圧痕,ハケ,ナデ	指頭圧痕	口縁2/5	
184	テラス12	84	-	甕	(15.4)	—	(1.6)	にぶい橙色	ナデ	ナデ	小片	口縁凹線3条
185	テラス13 床直	84	-	甕	(15.0)	—	(14.7)	外にぶい橙 -にぶい褐色 内にぶい褐色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/10	赤色粒多く含む
186	テラス13	84	-	甕	(19.0)	—	(4.5)	にぶい黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	細片	
187	テラス13	84	57	甕	(14.1)	—	(3.8)	橙色-黄橙色 橙色	ナデ,ケズリ	ナデ	口縁1/10	外面煤付着
188	テラス13 床直	84	57	高杯	—	14.4	(5.8)	橙色	ケズリ,指頭圧痕,ナデ	ナデ	底部1/4	脚部穿孔2
189	テラス14	86	-	甕	(21.0)	—	(2.9)	黒褐色 にぶい黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	細片	外面煤付着
190	テラス14	86	-	甕	(31.4)	—	(6.5)	黄褐色 にぶい黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/20	外面煤付着
191	テラス14	86	57	甕	—	—	(9.1)	灰色	当て具痕	タタキ,ナデ	小片	須恵器肩部,外面自然釉
192	テラス14 ③層	86	57	甕	(18.0)	—	(5.8)	浅黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	頸部1/10	外面口縁平行沈線 肩部刺突文
193	テラス14 P6	86	51	甕	(17.6)	—	(5.7)	黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/8	外面煤付着
194	テラス14 P6	86	51	甕	(18.8)	—	(4.4)	黄橙色 橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/12	
195	テラス14 ③層	86	57	高杯	—	(10.0)	(6.4)	にぶい黄橙色 橙色	ハケ	ハケ,ナデ ヘラナデ	底部1/3	内面シボリメ
196	テラス14 ③層	86	57	低脚杯	—	(5.0)	(3.5)	橙色-黄橙色	ナデ	ナデ	小片	

表51　押平尾無遺跡出土土器観察表（６）

No.	遺構・層位	図	図版	器種	法量(cm)			色調 外 内	調整		残存率	備考
					口径	底径	器高		内	外		
197	テラス14 ③層	86	-	低脚杯	—	(8.6)	(1.9)	橙色 黄褐色	ナデ	ナデ	底部1/10	脚部
198	土坑22	87	57	甕	(18.0)	—	(6.6)	明黄褐色 橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/10	外面煤付着
199	土坑22	87	58	甕	(15.2)	—	(15.4)	黄橙色 黄橙色-浅黄橙色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/8	外面煤付着
200	土坑22	87	58	甕	(17.6)	—	(17.1)	黄橙色	ケズリ,指頭圧痕,ナデ	ハケ,ナデ	口縁4/10	外面煤付着
201	土坑22	87	58	直口壺	(11.4)	—	(15.0)	橙色	ケズリ,指頭圧痕,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/5 体部1/1	胴部外面煤付着,胴部内面下半煤付着,小型
202	土坑22	87	57	椀	(13.3)	—	(4.8)	灰黄褐色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/4	
203	土坑22	87	-	甕	(12.4)	—	(4.9)	灰褐色	ケズリ,ナデ	ナデ,ミガキ	口縁1/5	
204	土坑23	88	57	高杯	(16.1)	—	(3.6)	黄橙色	ナデ	ナデ	口縁1/20	外面赤彩
205	土坑24	88	57	甕	(13.6)	—	(3.5)	黄橙色 黄灰色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/10	
206	土坑24	88	57	高杯	(10.2)	—	(7.5)	橙色-黄色	ナデ,指頭圧痕	ナデ	小片	外面赤彩,杯部ブランデーグラス形
207	土坑25	88	57	不明	(10.2)	—	(3.0)	黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/10	甕か
208	土坑60	103	-	深鉢	—	—	(3.5)	褐色 灰褐色	ナデ	縄文	細片	縄文時代早期 福呂式か
209	土坑60	103	-	深鉢	—	—	—	褐色-暗褐色	ナデ	縄文	細片	縄文土器,隆帯
210	ピット127	109	51	壺	(18.4)	—	(9.6)	黄橙-浅黄色 浅黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁4/5	肩部波状文
211	東斜面B層	110	61	甕	(23.2)	—	(6.0)	にぶい黄橙色 橙色	ハケ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/8	口縁凹線3条,頸部貼付突帯,刻み目
212	東斜面B層	110	61	甕	(16.3)	—	(7.8)	橙-黄橙色 橙-浅黄色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/4	
213	東斜面B層	110	61	壺	—	—	(3.6)	黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ,ミガキ	細片	外面赤彩
214	西斜面B層	111	61	深鉢	(24.3)	—	(5.2)	黄橙色	ケズリ,ナデ	ケズリ	口縁1/8	縄文土器,粗製,後期か
215	西斜面B層	111	61	壺	(21.8)	—	(6.2)	灰白色 橙-浅黄橙色	ハケ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/10	頸部刻文,口縁凹線2条
216	西斜面B層	111	61	壺	(20.8)	—	(3.3)	浅黄橙色	ナデ	ナデ	口縁1/10	口縁4凹線条後刻み目 頸部貼付突帯
217	西斜面B層	111	61	高杯	(24.6)	—	(5.1)	黄橙色	ナデ	ナデ,ミガキ	口縁1/5	外面赤彩
218	西斜面B層	111	61	甕	(18.2)	—	(15.7)	浅黄橙-橙色 橙色	ケズリ,ハケ ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/2	口縁凹線4条 外面煤付着
219	Ⅱ層	112	60	深鉢	—	—	(5.9)	黄灰色	ナデ,指頭圧痕	縄文	小片	縄文LR 縄文中期船元式か
220	Ⅱ層	112	60	甕	(21.4)	—	(4.1)	橙色 黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/8	口縁平行沈線6条
221	Ⅱ層	112	60	甕	(16.8)	—	(6.0)	浅黄橙色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/4	口縁平行沈線,外面煤
222	Ⅱ層	112	60	蓋	—	—	(2.6)	黄橙色	ナデ	ケズリ,ナデ	小片	つまみ径2.8cm
223	Ⅱ層	112	-	高杯	(14.8)	—	(3.6)	橙色	ナデ,ミガキ	ナデ	口縁1/10	口縁端部刻み目,外面煤付着,(外面線刻か)
224	Ⅱ層	112	60	甕	—	—	(3.5)	黄灰色	ケズリ,ナデ	タタキ	細片	外面煤付着
225	Ⅱ層	112	60	甕	(16.0)	—	(4.8)	橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	口縁1/4	安山岩粗砂多く含む
226	Ⅱ層	112	60	甕	(28.5)	—	(4.8)	黄橙色 にぶい黄橙色	ナデ	ナデ	口縁1/9	
227	Ⅱ層	112	61	蓋	12.0	—	(2.6)	浅黄橙色	ナデ	ナデ	口縁1/1	口縁端部つまみ部摩耗
228	東斜面Ａ層	113	60	不明	(21.8)	—	(2.7)	褐色	ケズリ,ナデ	ナデ	小片	鉢または壺, 口縁平行沈線,内外面赤彩
229	東斜面Ａ層	113	58	高杯	—	10.0	(9.0)	浅黄橙色 黒灰色	ケズリ,ナデ	ナデ,ミガキ	底部1/1	外面端部凹線3条
230	東斜面Ａ層	113	58	不明	—	(9.5)	(3.2)	橙色	ケズリ,ナデ	ナデ,ミガキ	底部1/5	壺か
231	東斜面Ａ層	113	58	甕	—	—	(3.1)	にぶい橙色	ハケ,ナデ	タタキ	細片	
232	東斜面Ａ層	113	58	鼓形器台		(23.6)	(7.5)	橙色－浅黄色	ケズリ,ナデ	ナデ	脚部1/12	
233	東斜面Ａ層	113	58	器台	(15.8)	—	(2.5)	橙色	ナデ	ナデ	口縁1/4	
234	東斜面Ａ層	113	58	高杯	(16.0)	—	(4.1)	にぶい黄橙色 橙色- 黄橙色	ハケ,ナデ ミガキ	ナデ	口縁1/5	
235	東斜面Ａ層	113	58	高杯	—	—	(6.4)	にぶい橙色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	筒部1/1	外面赤彩,内面シボリメ
236	東斜面Ａ層	113	-	甕	—	—	(1.7)	橙色	ナデ	ナデ	小片	安山岩粗砂多く含む
237	東斜面Ａ層	113	-	甕	(16.6)	—	(25.0)	にぶい黄橙色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/2	外面煤付着,肩部刻文

表52　押平尾無遺跡出土土器観察表（７）

No.	遺構・層位	図	図版	器種	法量(cm)			色調　外 内	調整		残存率	備考
					径	底径	器高		内	外		
238	東斜面Ａ層	113	58	甕	(13.6)	—	(14.6)	浅黄橙色-橙色 橙色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/20	
240	西斜面A層	114	59	壺	(21.2)	—	(24.0)	橙色-黄橙色	ケズリ,指頭 圧痕,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/5	口縁凹線2条,頸部凹線 5条,外面煤付着 (平行沈線か)
241	西斜面A層	114	59	壺	—	—	(14.6)	にぶい黄橙色	ハケ,ナデ	ハケ,ナデ ミガキ	頸部1/2 底部1/3	外面肩部刻み目 頸部2条貼付突帯
242	西斜面A層	114	-	壺	(20.4)	—	(7.1)	にぶい黄橙色	ハケ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/10	口縁5凹線条施文後 櫛描き斜格子文
243	西斜面A層	114	59	無頸 壺	(22.0)	—	(5.7)	橙色	ナデ	ナデ	口縁1/10	口縁端凹線4条施文後 円形浮文
244	西斜面A層	114	59	無頸 壺	(17.8)	—	(2.8)	橙色	ナデ	ナデ	口縁1/10	内外面赤彩
245	西斜面A層	114	59	壺	—	5.9	(2.4)	浅黄橙色 黄色-浅黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	底部1/1	外面煤付着
246	西斜面A層	114	59	高杯	—	(12.2)	(8.5)	灰黄色	ケズリ,ナデ	ナデ,ミガキ	底部1/8	底部端部凹線・刺突文 外面凹線・赤彩
247	西斜面A層	114	59	不明	—	—	(4.1)	淡黄色	ケズリ,ナデ	ナデ	小片	器台脚部か 外面ヘラ描鋸歯文
248	西斜面A層	114	59	不明	—	—	(3.6)	橙色 浅黄色	ハケ,ナデ	ハケ,ナデ	小片	外面沈線
249	西斜面A層	114	59	甕	(14.8)	—	(4.6)	暗褐色 にぶい黄色-橙色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/8	安山岩小礫多く含む
250	西斜面A層	114	59	不明	—	—	(3.9)	にぶい黄橙色 黄橙色	ナデ	ナデ,ミガキ	小片	壺又は器台,外面赤彩, 渦巻状スタンプ文
251	西斜面A層	114	59	器台	—	(32.3)	(5.5)	にぶい黄色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	底部1/20	外面煤付着 平行沈線12条
252	西斜面A層	114	59	壺	(19.8)	—	(10.6)	橙色-浅黄色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/4	頸部平行沈線, 外面赤彩
253	西斜面A層	114	59	甕	14.0	—	(13.2)	にぶい黄橙-灰褐色 にぶい黄橙色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/2	小型,外面煤付着
254	A層	114	59	甕	(16.9)	—	(8.4)	黄橙-にぶい黄橙色 黄橙色	ヘラケズリ, ナデ	ナデ	口縁1/1	口縁平行沈線後ナデ 肩部波状文
255	西斜面A層	114	59	甕	(22.0)	—	(16.3)	橙色 明黄褐色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/4	肩部平行沈線・波状文 外面煤付着
256	A層	114	59	壺	—	—	(5.4)	橙色 橙色-黄褐色	ケズリ	ハケ,ナデ	小片	把手, 内面赤色付着物あり
257	西斜面A層	114	59	甕	(13.8)	—	(5.2)	淡黄灰色 浅黄色	ハケ,ナデ	タタキ	口縁1/10	外面一部ナデ
258	西斜面A層	114	59	低脚 杯	—	7.0	(3.6)	黄橙色 浅黄色-黄橙色	ナデ	ハケ,ナデ	底部1/1	外面・脚内赤彩
259	西斜面A層	114	59	甕	—	—	(2.4)	浅黄橙色 明赤褐色	ハケ	タタキ,ナデ	細片	
260	西斜面A層	115	59	甕	(36.6)	—	(5.4)	淡黄色	ナデ	ナデ	口縁1/24	口縁線刻
261	西斜面A層	115	-	甕	(13.0)	—	(3.9)	浅黄橙色	ナデ	ナデ	口縁1/20	
262	西斜面A層	115	-	甕	28.4	—	25.2	橙-にぶい黄橙色	ケズリ,ナデ	ハケ,ナデ	口縁1/1 胴部9/10	外面煤付着
263	西斜面A層	115	59	羽釜	(10.2)	—	(5.7)	灰黄色	ナデ	ナデ	口縁1/20	外面煤付着
264	Ｉ層	117	62	高台 付皿	(12.0)	(6.4)	(2.6)	オリーブ灰色	ナデ	ケズリ,ナデ	口縁1/10	瀬戸美濃系陶器
265	表土直下	117	62	壺	—	—	(3.2)	浅黄橙色	ケズリ,ナデ	ナデ	細片	渦巻状スタンプ文
266	表土	117	-	甕	—	—	(4.6)	浅黄橙色 灰黄色	指頭圧痕, ナデ	ナデ	小片	外面肩部籾圧痕
267	排土	117	62	壺	—	—	(4.1)	にぶい黄橙色 黄橙色,黒褐色	ナデ	ナデ	体部1/4	瓔形土師器
268	表土	117	62	高台 付皿	—	(4.4)	(0.9)	オリーブ灰色	ナデ	ケズリ,ナデ	底部1/8	瀬戸美濃系陶器

表53　押平尾無遺跡出土土製品観察表

No.	遺構・層位	図	図版	種別	法量(cm)			重さ(g)	色調	調整	備考
					最大長	最大幅	最大厚				
16	土坑1	21	62	土玉	2.2	2.25	2.2	11.0	黒褐色	ナデ	無孔
18	土坑5	22	62	土玉	2.05	2.15	1.9	9.0	黒褐色	ナデ	無孔,一部欠損
97	土坑7	61	50	不明	(4.4)	—	(2.6)	-	橙色	ケズリ,ナデ,ミガキ	土笛か
108	土坑9　①・②層	62	62	土玉	1.8	1.85	1.8	6.0	褐灰色一黒褐色	ナデ	無孔
239	Ⅱ層	113	62	土玉	1.95	1.95	1.55	7.0	褐色	ナデ	無孔

表54　押平尾無遺跡出土石製品観察表

No.	遺構・層位	図	図版	種別	法量(cm)				材質	備考
					最大長	最大幅	最大厚	重さ(g)		
S1	竪穴住居4　床直	19	44	蛤刃石斧	12.0	6.2	3.9	480	角閃石安山岩	刃部磨製,基部の敲打緻密
S2	土坑1	21	-	砥石	(9.5)	(6.8)	3.8	(339.0)	花崗岩	
S3	竪穴住居5　④層	25	62	角錐状石器	5.1	1.9	0.9	10.1	黒曜石	
S4	竪穴住居10　床直	34	-	台石	22	23.8	6.2	5.47kg	角閃石安山岩	
S5	竪穴住居12　床直	39	46	砥石	(13.9)	4.3	3.5	258	細粒花崗岩	
S6	竪穴住居12　上層	39	46	打欠石錘	4	3.5	1.4	28.0	角閃石安山岩	
S7	竪穴住居13　床直	41	47	台石	33.6	37.3	10.9	19.5kg	角閃石安山岩	
S8	竪穴住居14　周壁溝	43	48	砥石	9.3	3.4	3.6	142.0	細粒花崗岩	欠損後も利用
S9	竪穴住居16	48	48	不明	(3.2)	(3.9)	0.5	11.6	無斑晶安山岩	石包丁か
S10	竪穴住居19　②層	51	49	石槍状石器	(10.95)	3.15	1.02	38.4	無斑晶安山岩	鏃部一部磨製
S11	竪穴住居19　②層	51	49	砥石	(10.6)	8.8	2.5	375.0	細粒花崗岩	中砥
S12	竪穴住居19　①層	51	49	敲石	16.9	6.5	5.7	970.0	角閃石安山岩	集石の一部
S13	テラス1　下層	57	-	不明	(10.95)	(11.9)	0.6	27.6	無斑晶安山岩	大型石包丁もしくは石鎌 刃部使用痕
S14	竪穴住居20　床直	72	53	台石	36.1	24.8	9.3	11.85kg	角閃石安山岩	裏面擦痕あり
S15	竪穴住居20　床直	72	53	台石	25.1	22.6	9.6	8.9kg	角閃石安山岩	断面一部摩耗
S16	竪穴住居21　下層	77	-	敲石	19.3	8.9	5.5	1.24kg	角閃石安山岩	緻密
S17	竪穴住居22　床直	79	56	敲石	9.85	9.1	3.9	484	角閃石安山岩	擦石
S18	テラス14　P6	86	-	敲石	15.6	6.5	4.0	63.0	角閃石安山岩	
S19	溝6	107	62	加工痕ある剥片	5.4	4.9	1.1	16.0	黒曜石	使用痕あり
S20	東斜面B層	110	61	打欠石錘	6.9	6.0	1.4	90.0	安山岩	
S21	西斜面B層	111	61	石斧	7.9	4.9	4.3	38.0	細粒花崗岩	磨製
S22	Ⅱ層	112	61	敲石	9.5	7.5	3.8	473.0	角閃石安山岩	擦面あり
S23	Ⅱ層	112	61	砥石	(9.1)	(6.5)	3.4	263.0	細粒花崗岩	
S24	Ⅱ層	112	61	砥石	(5.8)	8.0	1.9	125.0	細粒花崗岩	
S25	Ⅱ層	112	61	砥石	10.1	7.2	3.1	165.0	細粒花崗岩	
S26	Ⅱ層	112	62	石鏃	1.3	1.4	0.25	0.4	黒曜石	凹基式
S27	Ⅱ層	112	62	石鏃	1.5	1.2	0.2	0.2	黒曜石	凹基式
S28	東斜面A層	113	60	石槍状石器	11.0	3.4	0.6	41.0	無斑晶安山岩	磨製,刃先に微細な欠け
S29	東斜面A層	113	60	蛤刃石斧	7.9	6.0	2.0	139.0	角閃石安山岩	使用痕あり
S30	東斜面A層	113	60	敲石	(9.4)	6.1	3.7	345.0	角閃石安山岩	窪みあり
S31	西斜面A層	115	60	凹石	13.4	12.0	5.5	105.0	角閃石安山岩	
S32	西斜面A層	115	-	有溝石錘	2.3	2.7	2.1	15.0	角閃石安山岩	
S33	西斜面A層	115	60	有溝石錘	10.4	4.9	4.5	226.0	角閃石安山岩	
S34	西斜面A層	115	60	打欠石錘	12.2	10.2	3.7	690.0	角閃石安山岩	打欠部摩耗
S35	西斜面A層	115	60	砥石	7.6	(5.0)	3.3	200.0	細粒花崗岩	
S36	西斜面A層	115	-	砥石	4.3	3.0	1.9	28.0	花崗岩	
S37	A層	115	60	扁平片刃石斧	(5.1)	2.1	1.2	24.4	弱変成安山岩	磨製,刃部使用痕あり
S38	西斜面A層	115	60	蛤刃石斧	10.7	4.2	2.0	123.0	弱変成安山岩	刃部使用痕
S39	西斜面A層	115	60	蛤刃石斧	(11.1)	5.3	4.6	404.0	細粒花崗岩	部分磨製,刃部使用痕(光沢)
S40	西斜面A層	115	60	石鎌	(7.2)	3.0	0.7	24.0	細粒花崗岩	刃部に斜方向の使用痕
S41	表土	117	-	扁平石斧	8.4	7.2	2.3	191.0	細粒花崗岩	磨製,刃部使用痕
S42	表土直下	117	62	石鏃	2.4	1.1	0.3	0.7	無斑晶安山岩	平基式,五角形
S43	調査地一括	117	62	スクレイパー	6.3	3.9	1.2	8.0	黒曜石	刃部に使用痕,摩滅

表55　押平尾無遺跡出土桃核計測表

遺構名	取り上げNo.	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
竪穴住居8　下層	707	(1.2)	(1.3)	1.3	(0.7)
竪穴住居8	708	1.7	1.5	1.45	1.3
竪穴住居8　下層	968	1.8	1.55	(0.8)	(0.8)
竪穴住居8　P4	1065	2.0	1.7	1.55	1.3
竪穴住居9　上層	975	(1.8)	1.7	1.45	(1.1)
竪穴住居9　中層	1360	(2.2)	1.75	(0.8)	(1.0)
竪穴住居14　床直	1003	-	-	-	(1.4)
竪穴住居14　下層	1042	1.95	1.55	1.3	1.2
遺構外	1261	2.45	1.9	1.6	2.8

表56　押平尾無遺跡出土鉄関連遺物観察表

No.	層位・遺構	図	図版	種類・名称	長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	磁着度	メタル度	備考
F1	竪穴住居3	17	64	鉄製品・板状不明	(4.2)	(5.1)	2.1	(62.5)	3	L(●)	鍛造品,袋状鉄斧か
F2	竪穴住居5　③層	25	64	鉄製品・袋状鉄斧	(3.4)	6.7	2.4	(45.6)	2	錆化(△)	鍛造品,小型
F3	竪穴住居5　②層	25	64	鉄製品・板状不明	(2.3)	(3.8)	1.1	(5.7)	2	錆化(△)	鍛造品
F4	竪穴住居8	28	63	鉄製品・不明	(2.9)	(8.5)	2.4	(56.5)	2	錆化(△)	鍛造品,鋤か
F5	竪穴住居8	28	63	鉄製品・刀子	(6.1)	2.2	1.8	(12.8)	1	錆化(△)	鍛造品,片関
F6	竪穴住居8	28	63	鉄製品・不明	(3.9)	3.1	1.6	(4.7)	2	錆化(△)	鍛造品,鎌か
F7	竪穴住居8	28	63	鉄製品・不明	(3.2)	(5.7)	1.8	(25.4)	2	錆化(△)	鍛造品,鋤か
F8	竪穴住居9	31	46・63	鉄製品・鋤	(10.9)	5.9	1.6	(89.0)	3	錆化(△)	鍛造品,木質残存
F9	竪穴住居10　床直	34	63	鉄製品・不明	(4.6)	2.5	0.7	(21.6)	2	錆化(△)	鍛造品,鎌か
F10	竪穴住居10　床直	34	63	含鉄鉄滓	1.5	1.4	0.9	3.9	3	錆化(△)	
F11	竪穴住居10　中層	35	63	鉄製品・棒状不明	(0.9)	3.8	0.8	(3.4)	2	錆化(△)	鍛造品
F12	竪穴住居10　上層	35	63	鉄製品・不明	(1.7)	1.1	0.8	(1.8)	1	錆化(△)	鍛造品,刀子か
F13	竪穴住居11　周壁溝	37	63	鉄製品・不明鉄片	(1.9)	1.1	0.7	(1.7)	1	錆化(△)	鍛造品,刀子か
F14	竪穴住居11	37	63	鉄製品・板状不明	(5.2)	3.0	1.6	(20.0)	2	錆化(△)	鍛造品,鎌か
F15	竪穴住居11　⑤層	37	63	鉄製品・棒状不明	(5.5)	1.3	1.0	(8.7)	2	錆化(△)	鍛造品,刀子か
F16	竪穴住居11	37	63	鉄製品・刀子	(3.8)	0.9	0.6	(2.4)	1	錆化(△)	鍛造品
F17	竪穴住居11　③層	37	63	鉄製品・不明	(3.2)	(9.8)	1.8	(30.2)	1	錆化(△)	鍛造品
F18	竪穴住居12　床直	39	63	鉄製品・刀子	(4.3)	1.8	1.3	(7.9)	2	錆化(△)	鍛造品
F19	竪穴住居12　床直	39	63	鉄製品・刀子	(3.8)	1.3	1.1	(4.5)	1	錆化(△)	鍛造品
F20	竪穴住居12　中層	39	63	鉄製品・不明	(2.7)	1.3	1.1	(3.4)	2	錆化(△)	鍛造品,刀子か
F21	竪穴住居13　③④層	42	63	鉄製品・不明	4.5	4.4	(1.1)	(12.4)	2	錆化(△)	鍛造品,袋状鉄斧もしくは鎌
F22	竪穴住居13　③④層	42	63	鉄製品・不明	(3.1)	(1.6)	1.4	(12.2)	2	錆化(△)	鍛造品
F23	竪穴住居13	42	63	鉄製品・不明	(3.6)	3.0	1.2	(8.7)	2	錆化(△)	鍛造品,鎌か
F24	竪穴住居14	43	63	鉄製品・刀子	(4.0)	1.3	1.1	(3.4)	1	錆化(△)	鍛造品
F25	竪穴住居16	46	63	鉄製品・板状不明	(2.0)	(3.8)	1.0	(13.9)	2	錆化(△)	鍛造品
F26	竪穴住居16　床直	46	48・63	鉄製品・刀子	(10.1)	2.2	1.4	(10.2)	2	錆化(△)	鍛造品,柄部分木質残存
F27	竪穴住居19　床直	51	63	鉄製品・不明	(3.0)	(4.1)	2.8	(38.8)	2	錆化(△)	鍛造品,袋状鉄斧または鋤
F28	竪穴住居19　②層	51	63	鉄製品・刀子4本銹着	(3.3)	0.8	0.3	(29.4)	2	錆化(△)	鍛造品
F29	竪穴住居19　②層	51	63	鉄製品・刀子	(3.0)	1.3	0.9	(3.4)	2	錆化(△)	鍛造品
F30	竪穴住居19　②層	51	63	鉄製品・板状不明	(3.9)	3.5	0.9	(11.0)	2	錆化(△)	鍛造品,直刀もしくは鎌
F31	竪穴住居19　①②層	51	63	鉄製品・不明	(3.0)	2.2	1.1	(7.6)	2	錆化(△)	鍛造品,刀子か
F32	竪穴住居19　①②層	51	63	鉄製品・板状不明	(3.1)	2.8	1.4	(7.2)	2	錆化(△)	鍛造品
F33	テラス6	59	64	鉄製品・刀子	(8.6)	1.5	0.9	(7.0)	2	錆化(△)	鍛造品
F34	土坑9　②層	62	64	鉄製品・袋状鉄斧	(5.2)	3.9	1.8	(110.0)	2	L(●)	鍛造品
F35	土坑9　①層	62	64	鉄製品・袋状鉄斧	(3.4)	4.1	0.9	(83.0)	2	L(●)	鍛造品
F36	土坑9　①②層	62	64	鉄製品・刀子	(2.4)	1.0	0.7	(3.4)	1	錆化(△)	鍛造品
F37	土坑9　③層	62	64	鉄製品・刀子	(3.6)	1.5	0.9	(3.2)	2	錆化(△)	鍛造品
F38	土坑9　②層	62	64	鉄製品・釘	1.4	7.0	0.7	9.6	2	錆化(△)	鍛造品
F39	竪穴住居20　①層	73	64	鉄製品・袋状鉄斧	(3.5)	(5.5)	1.8	(32.8)	3	L(●)	鍛造品
F40	竪穴住居20　①層	73	64	鉄製品・不明	(2.1)	(2.7)	0.7	(4.2)	2	錆化(△)	鍛造品,鏃もしくは鉈,鎬あり
F41	竪穴住居20　P7	73	64	鉄製品・刀子	(2.8)	1.4	0.8	(3.9)	2	錆化(△)	鍛造品
F42	竪穴住居20　②層	73	64	鉄製品・板状不明	(3.8)	2.6	0.8	(7.2)	2	錆化(△)	鍛造品
F43	竪穴住居21　P2	75	54・64	鉄製品・不明	(3.2)	(6.0)	2.0	(15.0)	2	錆化(△)	鍛造品,袋状鉄斧か
F44	竪穴住居21　下層	77	64	鉄製品・不明	(1.6)	3.6	1.4	(13.4)	3	H(○)	鍛造品,鉈茎部か
F45	竪穴住居21　上層	77	64	鉄製品・刀子	(9.4)	1.1	1.3	(22.6)	2	錆化(△)	鍛造品
F46	竪穴住居21　下層	77	64	鉄製品・板状不明	(3.3)	2.2	0.8	(8.2)	2	錆化(△)	鍛造品,刀子か
F47	竪穴住居21　下層	77	64	鉄製品・板状不明	(3.3)	(2.1)	0.3	(43.2)	2	錆化(△)	鍛造品
F48	竪穴住居22　下層	79	64	鉄製品・不明	(5.8)	2.0	1.0	(8.4)	2	錆化(△)	鍛造品,刀子か
F49	テラス11	83	65	鉄製品・円盤状不明	(3.4)	(2.8)	1.2	(13.8)	2	錆化(△)	鍛造品
F50	土坑33	96	64	鉄製品・棒状不明	(0.7)	2.2	0.8	(2.4)	2	錆化(△)	鍛造品
F51	ピット72	109	65	鉄製品・鍥状鉄製品	(2.3)	5.0	1.7	(18.8)	2	錆化(△)	鍛造品
F52	ピット140	109	65	鉄製品・刀子	(4.4)	1.3	1.0	(6.1)	2	錆化(△)	鍛造品
F53	Ⅱ層	112	65	鉄製品・袋状鉄斧	(3.5)	3.3	1.5	(16.0)	2	錆化(△)	鍛造品,小型
F54	Ⅱ層	112	65	鉄製品・不明	(5.6)	3.1	2.0	48.2	3	L(●)	鍛造品,鉈か
F55	Ⅱ層	112	65	鉄製品・板状不明	(3.1)	6.7	1.7	(38.0)	3	L(●)	鍛造品
F56	Ⅱ層	112	65	鉄製品・板状不明	(4.3)	3.3	1.4	(34.2)	3	L(●)	鍛造品
F57	東斜面A層	113	65	鉄製品・刀子	(2.2)	1.5	0.7	(2.9)	1	錆化(△)	鍛造品
F58	東斜面A層	113	65	鉄製品・棒状不明	(0.8)	3.4	0.6	(2.3)	2	錆化(△)	鍛造品,釘か
F59	東斜面A層	113	65	鉄製品・薄板状不明	(2.0)	(3.2)	0.6	(4.0)	3	錆化(△)	鍛造品
F60	西斜面A層	116	65	鉄製品・不明	(5.2)	3.6	2.1	(59.5)	3	錆化(△)	鍛造品,袋状鉄斧か
F61	西斜面A層	116	65	鉄製品・不明	(5.0)	3.7	1.1	(16.0)	3	錆化(△)	鍛造品,鎌か
F62	西斜面A層	116	65	鉄製品・刀子	(4.4)	1.9	0.7	(5.4)	2	錆化(△)	鍛造品
F63	西斜面A層	116	65	鉄製品・板状不明	(5.7)	2.4	1.2	(17.3)	2	錆化(△)	鍛造品,鎌か
F64	西斜面A層	116	65	鉄製品・不明鉄製品	(3.7)	1.5	0.9	(9.5)	2	錆化(△)	鍛造品,鉈か
F65	西斜面A層	116	65	鉄製品・棒状不明	(0.8)	3.8	0.9	(4.1)	2	錆化(△)	鍛造品,釘か
F66	Ⅰ層	117	65	鉄製品・不明	(6.5)	1.8	1.4	(18.4)	3	錆化(△)	鍛造品,刀子か

調査地完掘状況（北西から）

図版2　押平尾無遺跡

1　調査前遠景（北から）

2　調査後遠景（北東から）

3　調査地完掘状況（垂直）

1　調査地完掘状況
（南東から）

2　東斜面南半上部
完掘状況（北西から）

3　西斜面南半部　完掘状況
（北東から）

図版4　押平尾無遺跡

1　東斜面北半上部　完掘状況（南東から）

2　西斜面北半部　完掘状況（南東から）

3　竪穴住居1　床面直上遺物（1・2）出土状況（北西から）

4　竪穴住居3　土層断面（北東から）

5　竪穴住居3　石出土状況（南東から）

6　竪穴住居4　土層断面および遺物出土状況（北から）

1　竪穴住居４　完掘状況（北西から）

2　竪穴住居４　土層断面（西から）

3　竪穴住居４　遺物（９）出土状況（北から）

4　竪穴住居４　遺物（６）出土状況（北東から）

図版6　押平尾無遺跡

1　土坑1　完掘状況（南から）

2　土坑2　完掘状況（南から）

3　土坑2　土層断面（北西から）

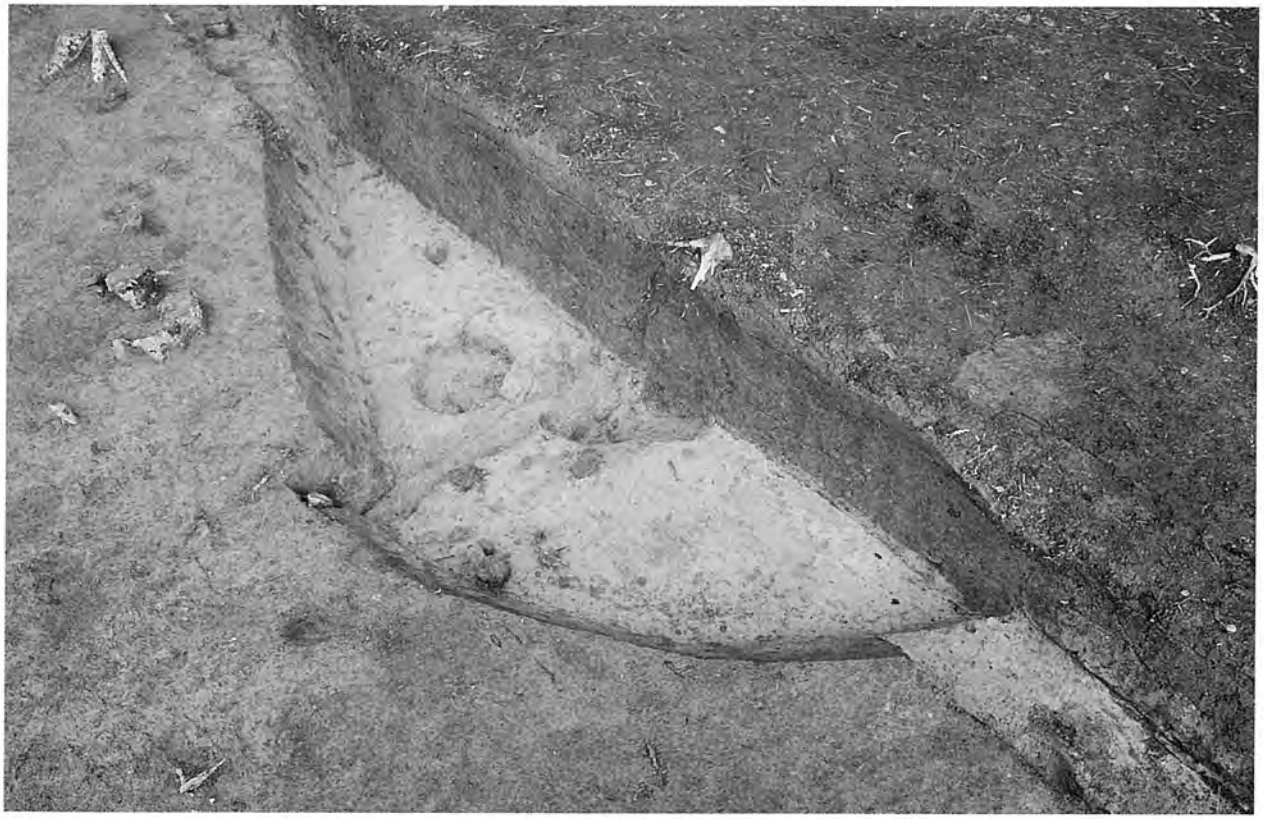
4　竪穴住居2　完掘状況
竪穴住居5　床面検出状況（南から）

6　竪穴住居5　下層炭化物出土状況（南から）

5　竪穴住居2・5　土層断面（南から）

7　竪穴住居5　掘り方土層断面（南から）

1　竪穴住居２・５　完掘状況（南から）



2　竪穴住居６　完掘状況（北西から）

図版8　押平尾無遺跡

1　竪穴住居６　土層断面および遺物出土状況（北から）

2　竪穴住居７　土層断面（南西から）

3　竪穴住居７　完掘状況（北西から）

4　竪穴住居８　土層断面（南西から）

5　竪穴住居８　土層断面（北東から）

1　竪穴住居８　炭化材・焼土検出状況（北東から）

2　竪穴住居８　炭化材・焼土検出状況拡大(北東から)

3　竪穴住居８　北西隅　炭化材・焼土検出状況
(北東から)

4　竪穴住居８　Ｐ５周辺　炭化材・焼土検出状況
(南西から)

5　竪穴住居８　南西隅　炭化材・焼土検出状況
(北東から)

図版10　押平尾無遺跡

1　竪穴住居９　上面炭化材検出状況（南西から）

2　竪穴住居９　下面炭化材検出状況（南から）

1　竪穴住居９　南西隅
上面炭化材・焼土検出状況
（東から）

2　竪穴住居９　南西隅
上面炭化材・焼土検出状況
（西から）

3　竪穴住居９　南東隅
上面炭化材検出状況
（北西から）

図版12　押平尾無遺跡

1　竪穴住居９　北西隅カヤ材検出状況（北東から）

2　竪穴住居９　南西部上面カヤ材検出状況（西から）

3　竪穴住居９　南隅下面カヤ材検出状況（北西から）

4　竪穴住居９　南西部下面炭化材・焼土堆積状況（西から）

5　竪穴住居９　南西部下面炭化材検出状況（北西から）

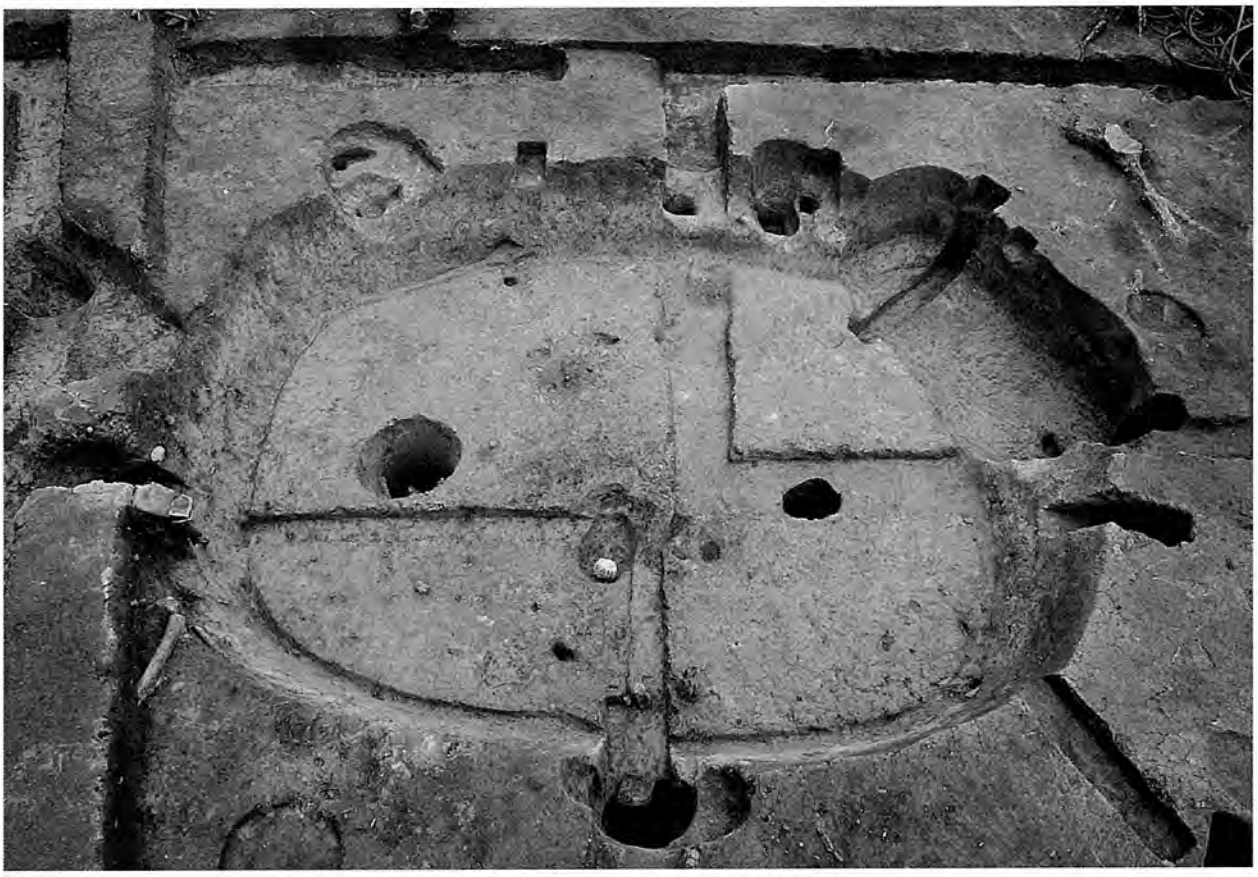
6　竪穴住居９　南西部下面炭化材・焼土堆積状況（東から）

1　竪穴住居９　完掘状況（西から）

2　竪穴住居９　土層断面（南西から）

3　竪穴住居９　土層断面（東から）

図版14　押平尾無遺跡



1　竪穴住居10　完掘状況（北東から）

2　竪穴住居10　土層断面（南東から）

3　竪穴住居10　炭化材検出状況（北東から）

4　竪穴住居10　P 3　周堤下面炭化物検出状況（北東から）

5　竪穴住居10　炭化材検出状況（北西から）

1　竪穴住居11　完掘状況（北から）

2　竪穴住居11　土層断面（北西から）

3　竪穴住居11　土層断面（北東から）

4　竪穴住居11　中層　鉄製品（F17）出土状況
（南西から）

5　竪穴住居11　下層　鉄製品（F15）出土状況
（南西から）

図版16　押平尾無遺跡

1　竪穴住居12ａ　完掘状況（南から）

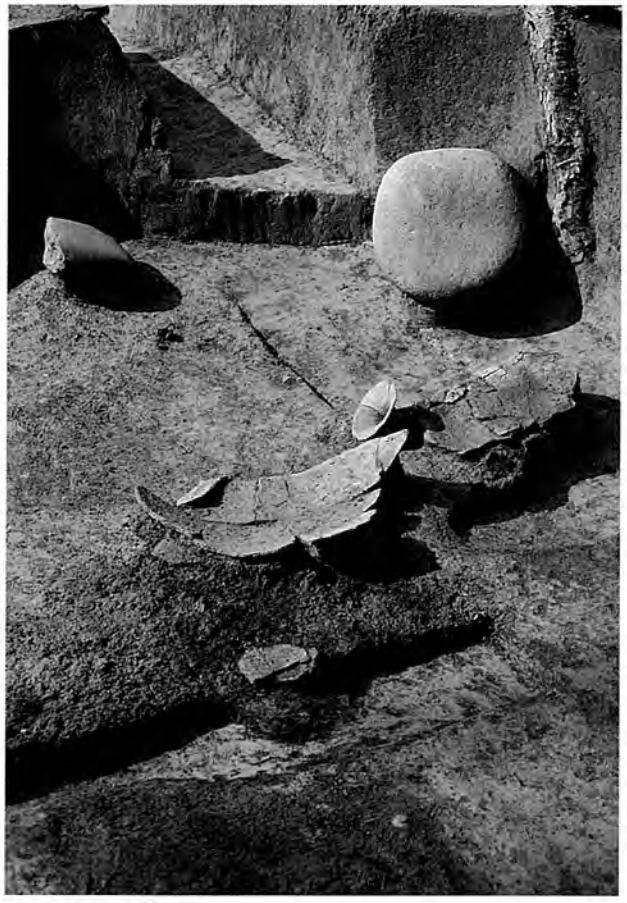
2　竪穴住居12ｂ　完掘状況（南から）

3　竪穴住居12
床面直上
遺物（36・Ｓ5）
出土状況
（南から）

4　竪穴住居12　土層断面（北東から）

5　竪穴住居12　土層断面（南西から）

1　竪穴住居13・15　完掘状況（北から）



2　竪穴住居13
床面直上遺物（38・39・S 7）出土状況（南から）

3　竪穴住居13　遺物出土状況（南西から）

図版18　押平尾無遺跡

1　竪穴住居13　土層断面（南西から）

2　竪穴住居13　Ｐ４　土層断面（南東から）

3　竪穴住居13　Ｐ４　炭化物検出状況（南西から）

4　竪穴住居13　遺物出土状況（南西から）

5　竪穴住居14　完掘状況（北西から）

1　竪穴住居16・17・21　完掘状況（北西から）

2　竪穴住居16　床面直上石出土状況（北東から）

3　竪穴住居16　土層断面（南から）

図版20　押平尾無遺跡

1　竪穴住居16　P 5　土層断面（北西から）

2　竪穴住居17　炭化材検出状況（南西から）

3　竪穴住居18　完掘状況（南西から）

4　竪穴住居18　土層断面（北西から）

5　竪穴住居18　土層断面（南西から）

1　竪穴住居19　完掘状況
（北東から）

2　竪穴住居19　土層断面（南西から）

3　竪穴住居19　上層石出土状況（東から）

4　竪穴住居19　床面直上遺物（59）出土状況（北から）

5　竪穴住居19　床面直上遺物出土状況（西から）

図版22　押平尾無遺跡

1　竪穴１　完掘状況（南から）

2　掘立柱建物２　Ｐ４　土層断面（西から）

3　掘立柱建物４　Ｐ１・Ｐ63　土層断面（北東から）

4　掘立柱建物５　Ｐ４Ｐ１　土層断面（南から）

5　掘立柱建物５　Ｐ６・Ｐ70　土層断面（北から）

1　テラス１　完掘状況（南東から）

2　テラス１　遺物（73）出土状況（東から）

3　テラス１　土層断面（南東から）

4　テラス１　Ｐ９　土層断面（南東から）

5　テラス２　完掘状況（東から）

図版24　押平尾無遺跡

1　テラス3　完掘状況（南東から）

2　テラス4　完掘状況（西から）

3　テラス4　掘り方完掘状況（北西から）

4　テラス5　完掘状況（南東から）

5　テラス6　土層断面（南東から）

6　テラス9　完掘状況（南東から）

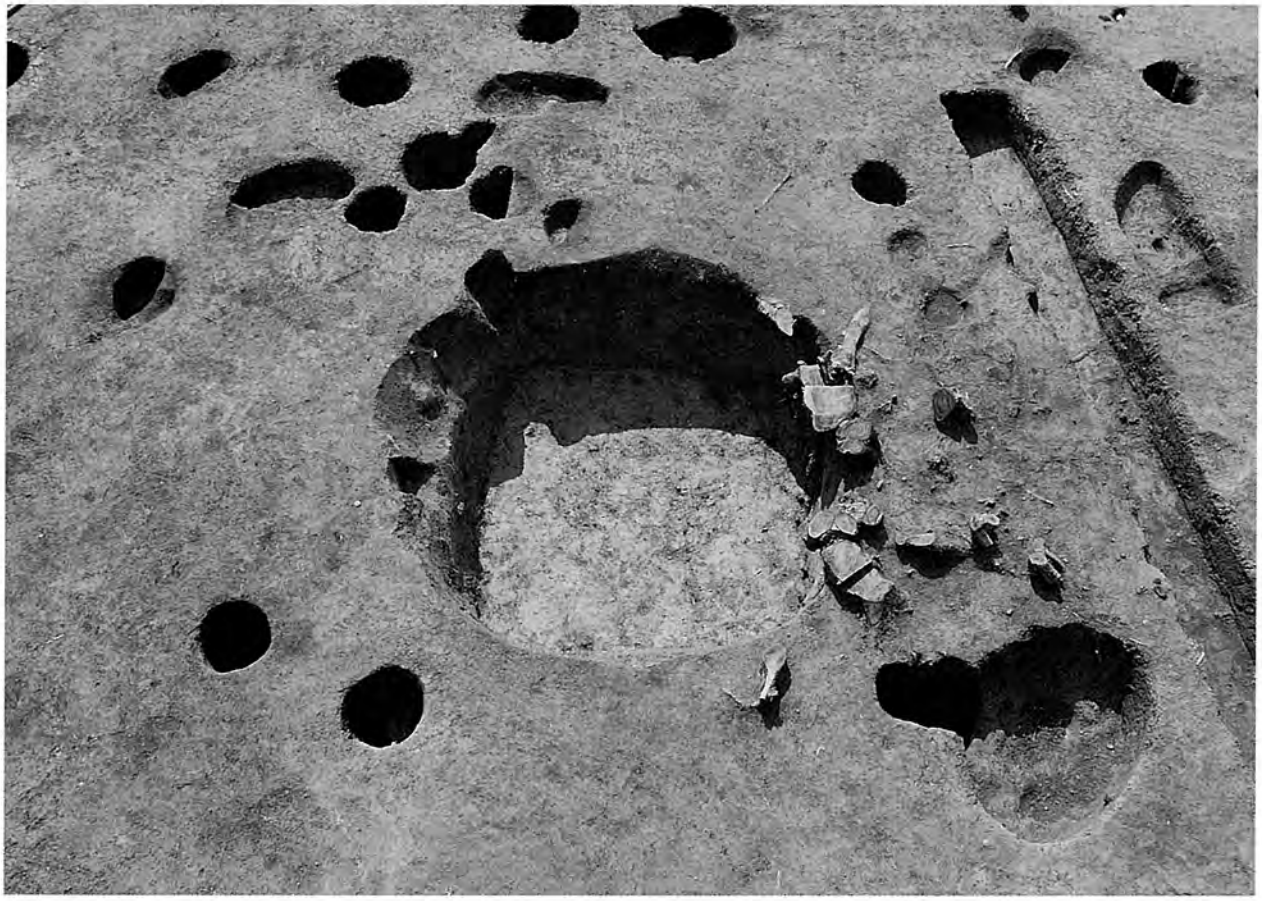
7　テラス10　完掘状況（南から）

1　土坑６　土層断面（北東から）

2　土坑７　土層断面（北東から）

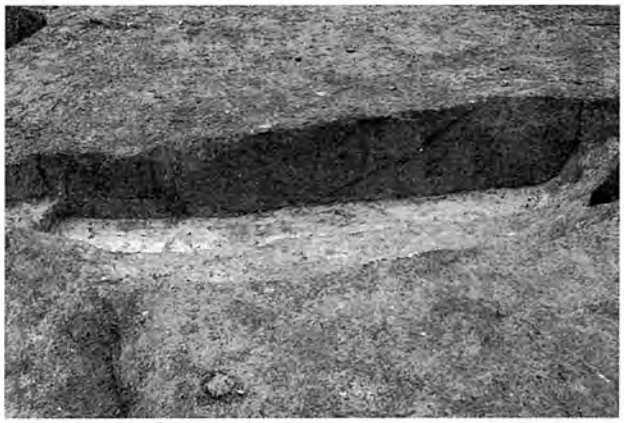
3　土坑９　土層断面（南西から）

4　土坑12　土層断面（北から）



5　土坑９　完掘状況（北東から）

図版26　押平尾無遺跡

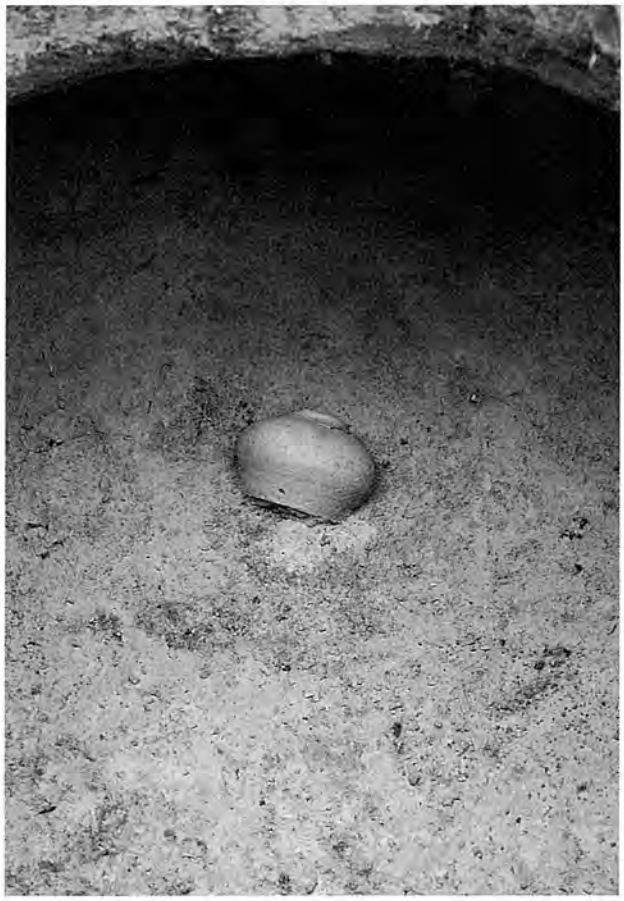


1　土坑13　土層断面（北東から）

2　土坑17　土層断面（北東から）

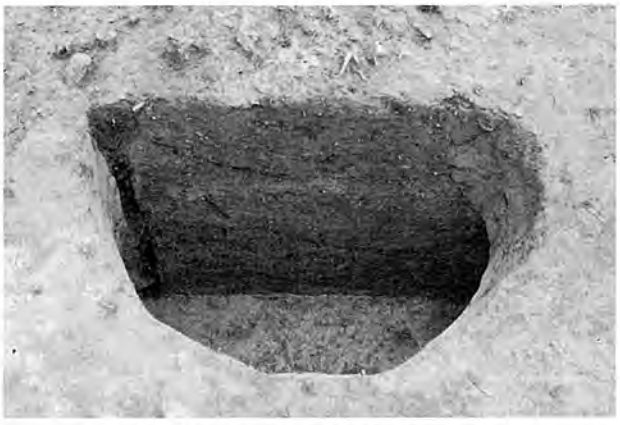
3　土坑18　土層断面（南西から）

4　土坑19　完掘状況（南西から）



5　土坑20　底面遺物（116）出土状況（北東から）

6　土坑20　完掘状況（東から）



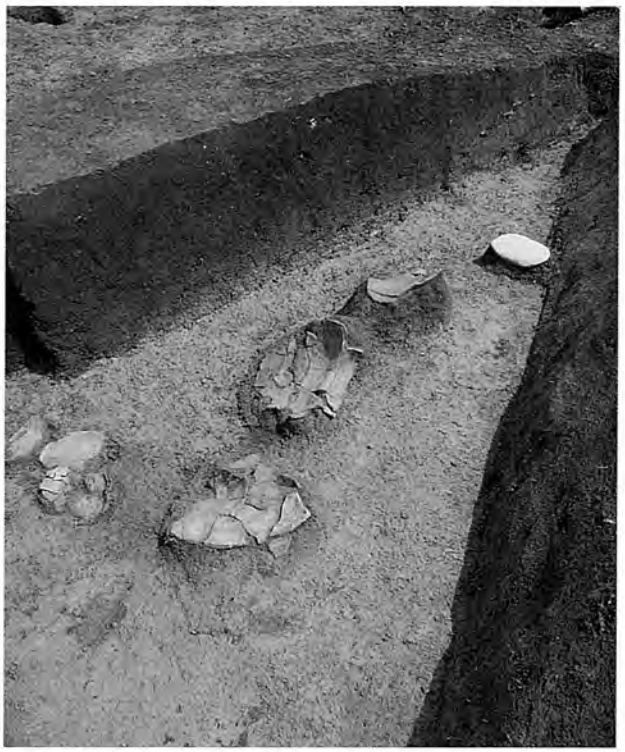
7　土坑20　土層断面（東から）

1　竪穴住居20　完掘状況（南西から）

2　竪穴住居20　遺物出土状況（南東から）

図版28　押平尾無遺跡

1　竪穴住居20　土器（123）炭化物検出状況（南東から）



2　竪穴住居20　遺物（125・133・136）出土状況（南西から）

3　竪穴住居20　遺物（127）出土状況（北東から）

4　竪穴住居20　台石（S14）出土状況（南から）

5　竪穴住居20　P 3　遺物（124）出土状況（南から）

6　竪穴住居20　土層断面（北東から）

1　竪穴住居21　完掘状況
（南東から）

2　竪穴住居21　遺物出土状況（南西から）

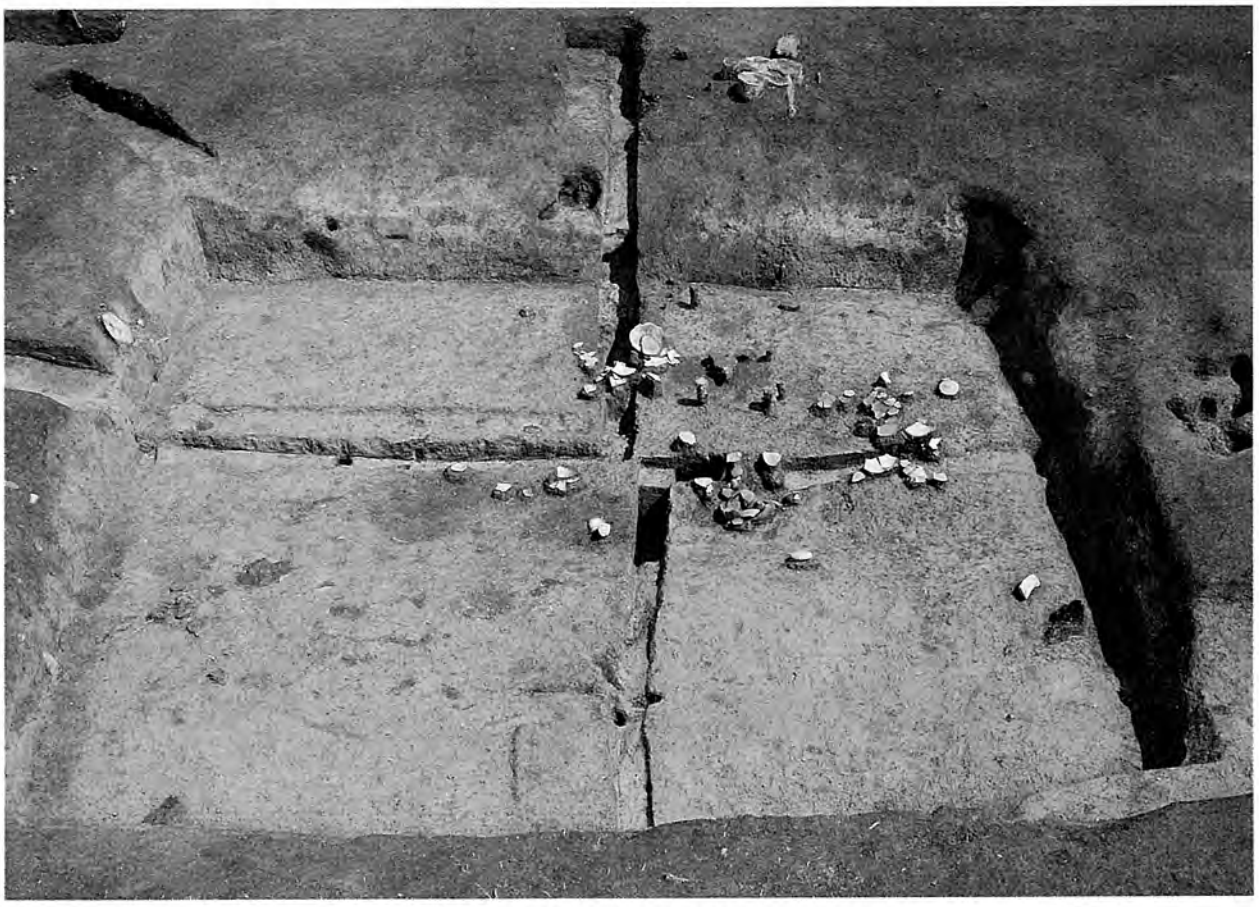
3　竪穴住居21　遺物出土状況（北西から）

4　竪穴住居21　遺物（142）出土状況（東から）

5　竪穴住居21　土層断面（北東から）

図版30　押平尾無遺跡

1　竪穴住居22　完掘状況（北西から）



2　竪穴住居22　遺物出土状況（北西から）

1　竪穴住居22　土層断面（西から）

2　竪穴住居22　土層断面（東から）

3　竪穴住居22　遺物（168）出土状況（北西から）

4　竪穴住居22　Ｐ１　土層断面（西から）

5　竪穴住居22　遺物（168・169）出土状況（南から）

6　竪穴住居22　遺物出土状況（北西から）

図版32　押平尾無遺跡

1　竪穴4　土層断面（東から）

2　竪穴4　遺物（174～177）出土状況（南西から）

3　掘立柱建物7　完掘状況（南東から）

4　掘立柱建物8　完掘状況（東から）

1　テラス11　完掘状況（北西から）

2　テラス11　掘り方土層断面（北西から）

3　テラス12･13　検出状況（東から）

4　テラス12　完掘状況（南東から）

5　テラス13　土層断面（北東から）

6　テラス13　遺物（185）出土状況（北東から）

図版34　押平尾無遺跡

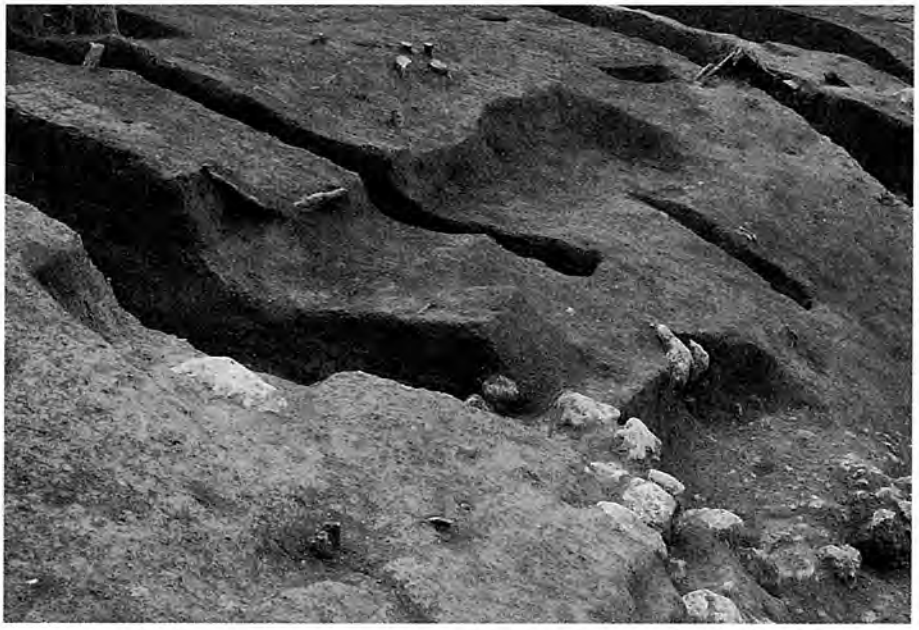
1　テラス14　完掘状況
（北西から）

2　テラス14　土層断面
（南東から）

3　テラス14　Ｐ５
完掘状況（南東から）

1　土坑22　遺物出土状況
（南から）

2　土坑22　下面遺物
出土状況（南から）



3　土坑22　完掘状況
（南東から）

図版36　押平尾無遺跡

1　土坑24　下面土層断面（北東から）

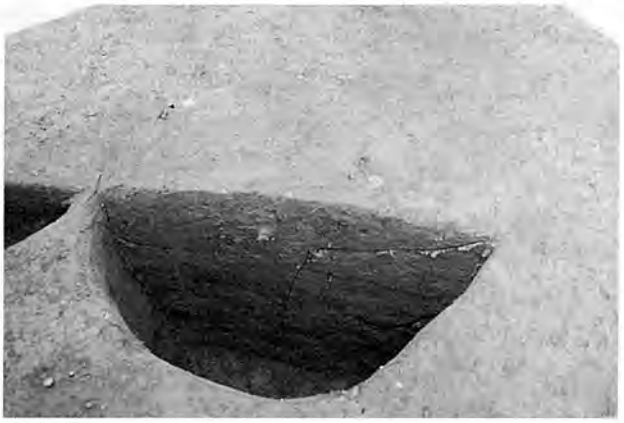
2　土坑25　土層断面（北西から）

3　土坑26　土層断面（北西から）

4　掘立柱建物10　Ｐ６　炭化材検出状況（東から）

5　掘立柱建物11･12･13　完掘状況（北西から）

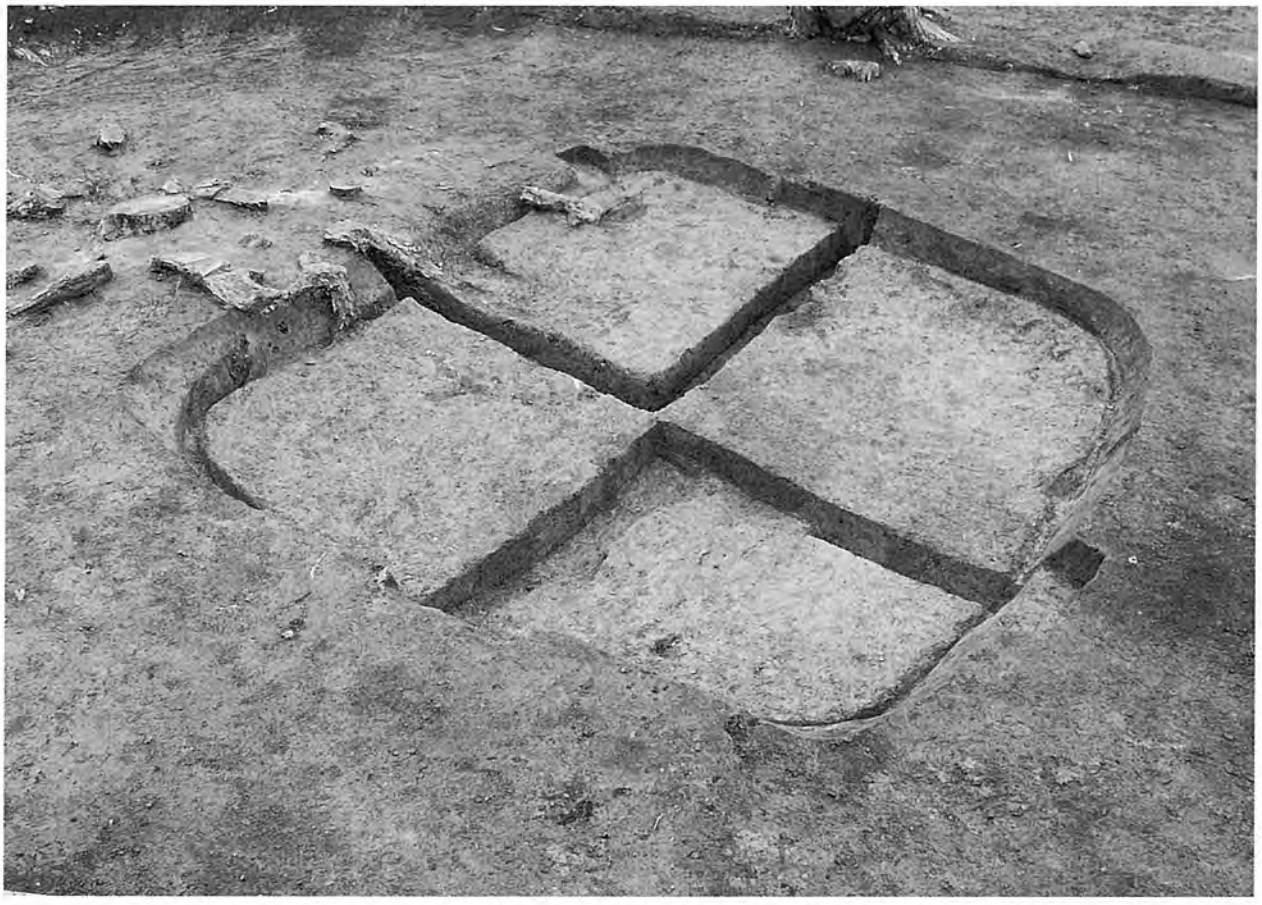
1　掘立柱建物12･13　Ｐ１　土層断面（南東から）



2　掘立柱建物11･12･13　Ｐ２　土層断面（南から）

3　掘立柱建物11　Ｐ１　土層断面（南から）

4　掘立柱建物11　Ｐ３　土層断面（南から）



5　竪穴５　完掘状況（南東から）

図版38　押平尾無遺跡

1　テラス15　完掘状況（北東から）

2　テラス16　土層断面（北西から）

3　テラス17　土層断面（南東から）

4　テラス18　土層断面（南東から）

5　テラス20　完掘状況（南東から）

6　テラス22　土層断面（南東から）

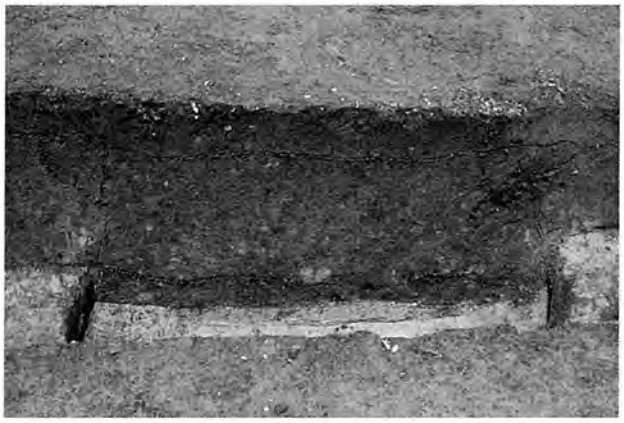
7　テラス23　土層断面（北西から）

1　土坑29　完掘状況（北東から）

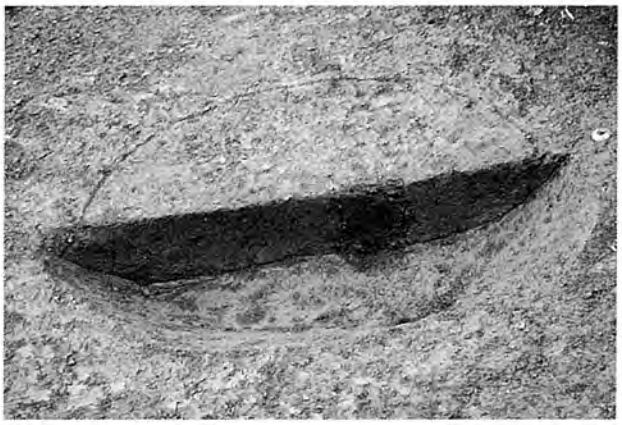
2　土坑29　土層断面（北東から）

3　土坑30　完掘状況（西から）

4　土坑30　土層断面（南東から）

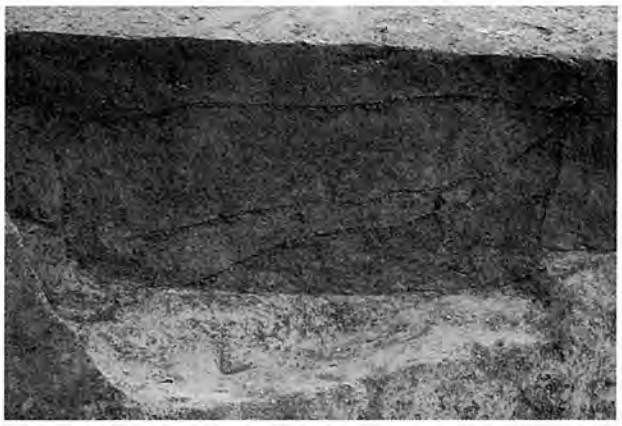


5　土坑33　土層断面（南から）



6　土坑35　土層断面（南東から）

7　土坑36　土層断面（南東から）



8　土坑38　土層断面（東から）

図版40　押平尾無遺跡

1　土坑48　土層断面（北西から）

2　土坑49　土層断面（南東から）

3　土坑50　土層断面（北西から）

4　土坑51　土層断面（西から）

5　土坑53　土層断面（東から）

6　土坑54　土層断面（北東から）

7　土坑56　土層断面（南から）

1　土坑60　土層断面（南東から）

2　土坑61　完掘状況（南東から）

3　土坑62・63　完掘状況（北西から）

4　土坑64　完掘状況（北から）

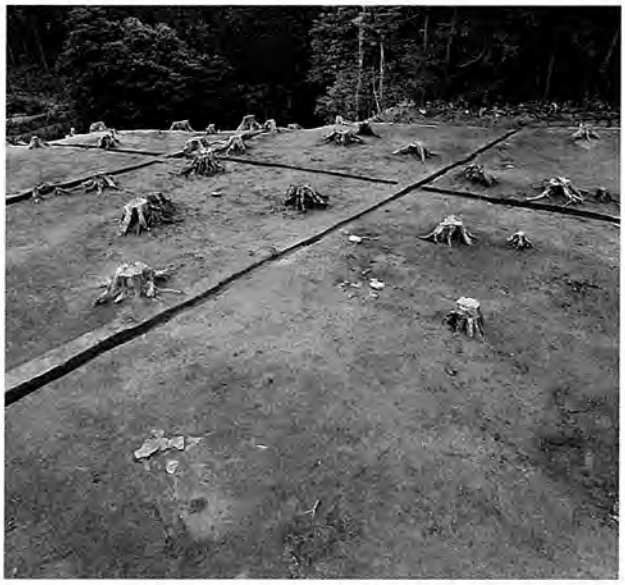
5　P127　遺物（210）出土状況（西から）

6　溝6　完掘状況（北東から）

図版42　押平尾無遺跡

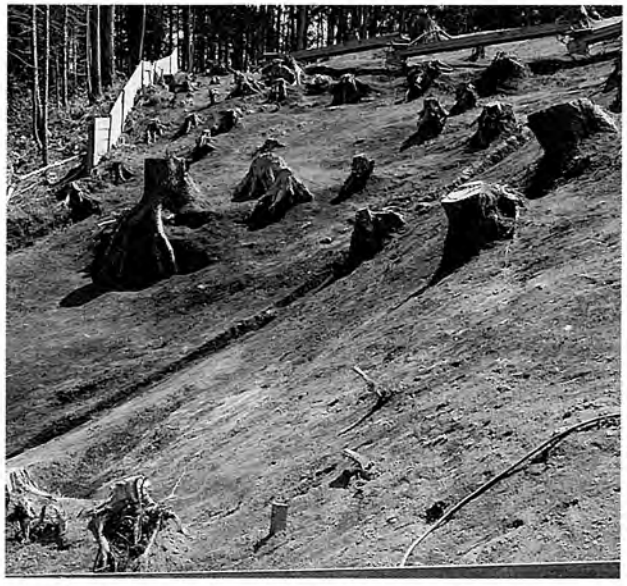
1　平坦部Ⅰ面　検出状況（北から）

2　平坦部南半Ⅱ面　検出状況（北から）



3　平坦部北半Ⅱ面　検出状況（南東から）

4　東斜面南半部　検出状況（西から）



5　東斜面南半部　検出状況（北から）

6　東斜面北半部　検出状況（南東から）

1　東斜面南東端　検出状況（南から）

2　東斜面南東端　遺物（237）出土状況（北西から）

3　東斜面北壁西半　土層断面（南西から）

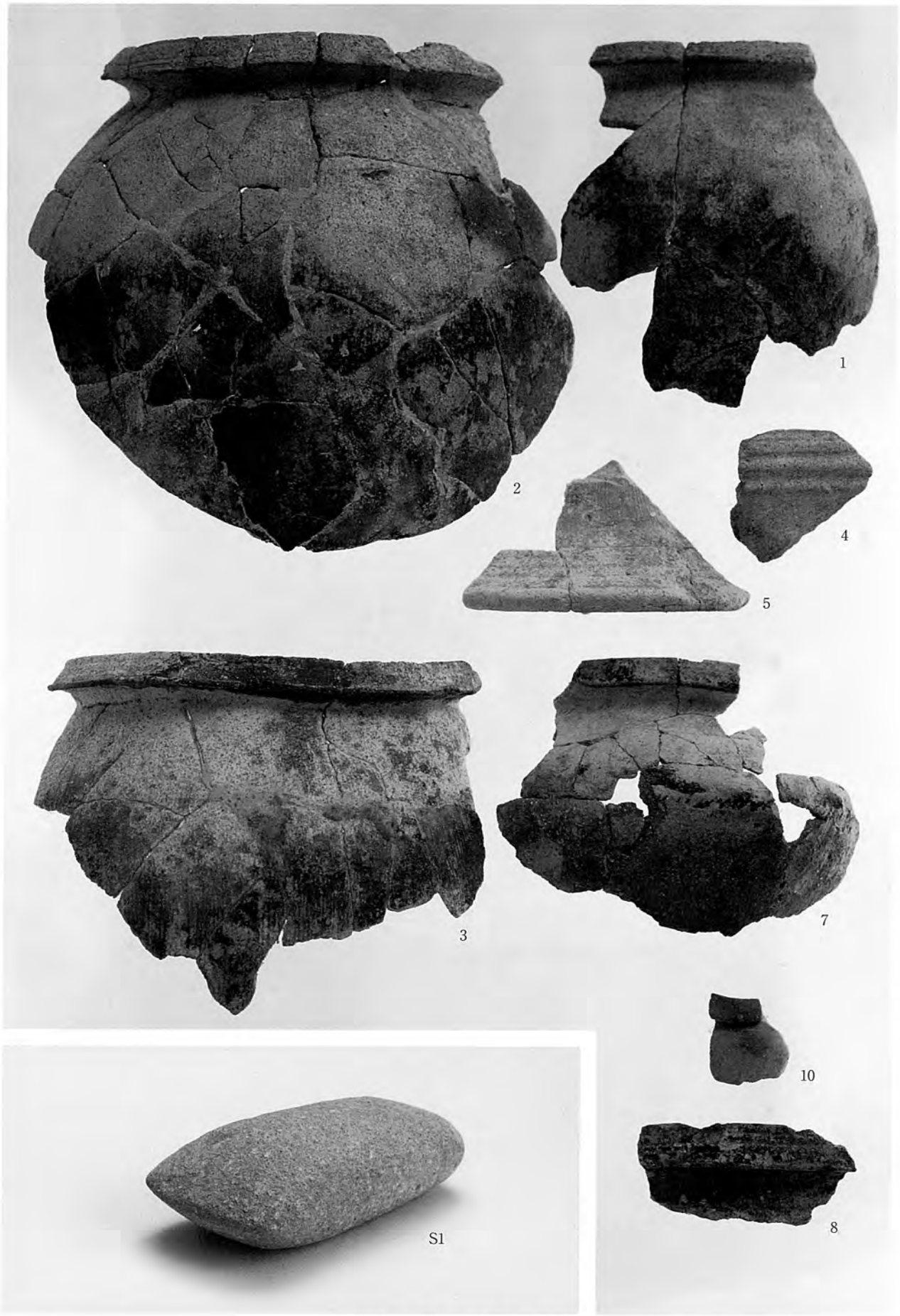
5　平坦部Ｄ－Ｄ′　土層断面（南東から）

4　東斜面北壁東半　土層断面（南西から）

6　西斜面Ｉ－Ｉ′　土層断面（南西から）

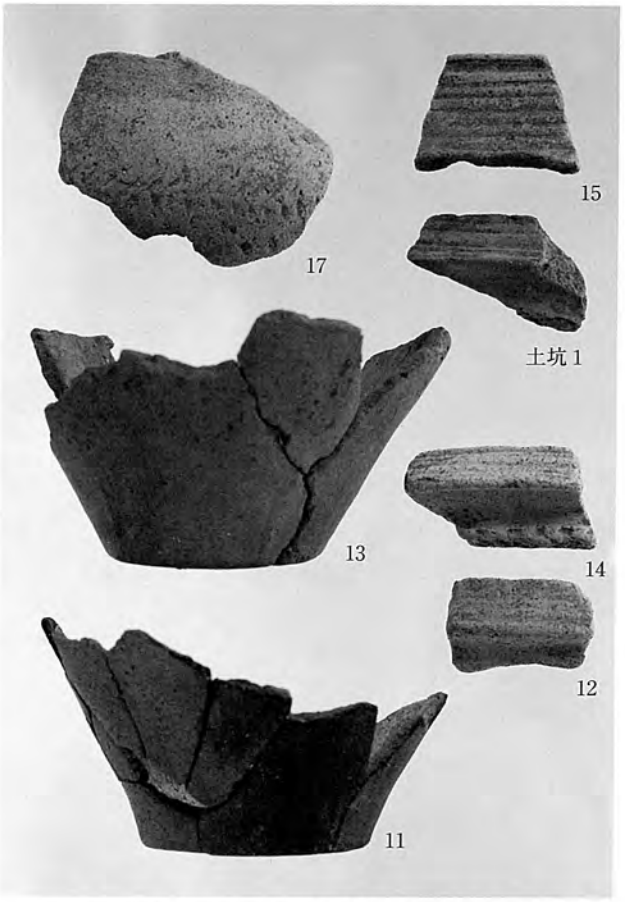
7　西斜面Ｉ－Ｉ′　遺物（262）出土状況（南西から）

図版44　押平尾無遺跡

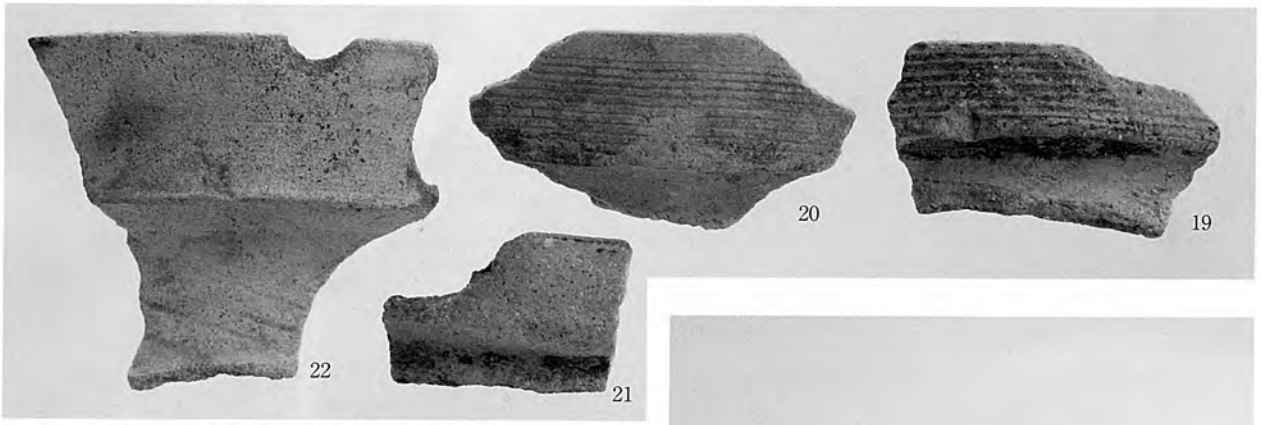


竪穴住居１～４　出土遺物

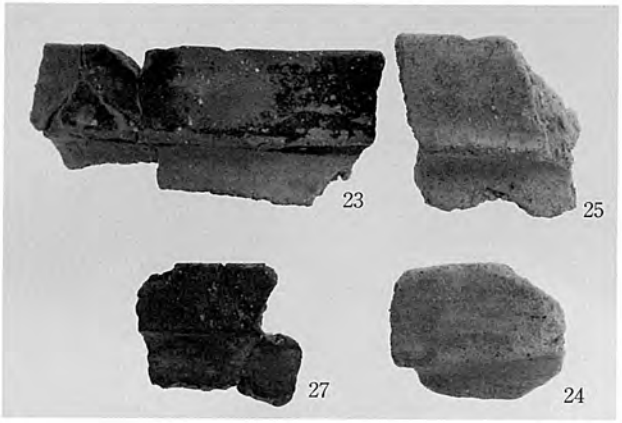
1　竪穴住居４　出土土器



2　土坑１・２、掘立柱建物１　出土遺物



3　竪穴住居５、竪穴１　出土土器

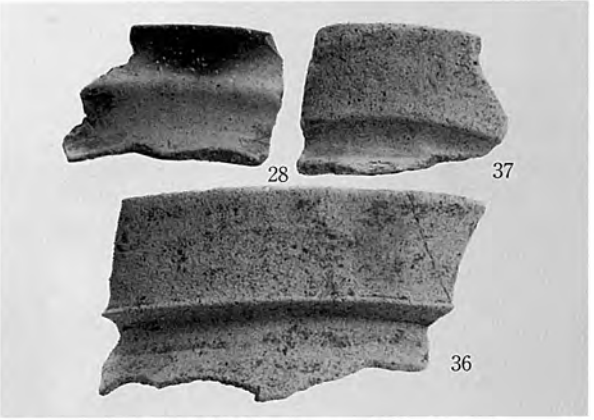


4　竪穴住居６～８　出土土器

5　竪穴住居８　出土土器

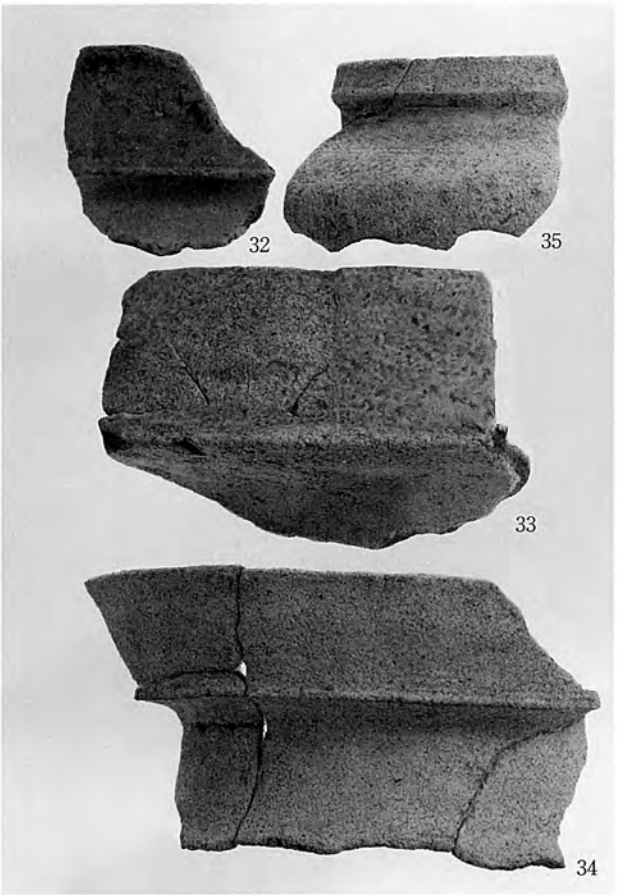
図版46　押平尾無遺跡

1　竪穴住居 9　出土鉄製品

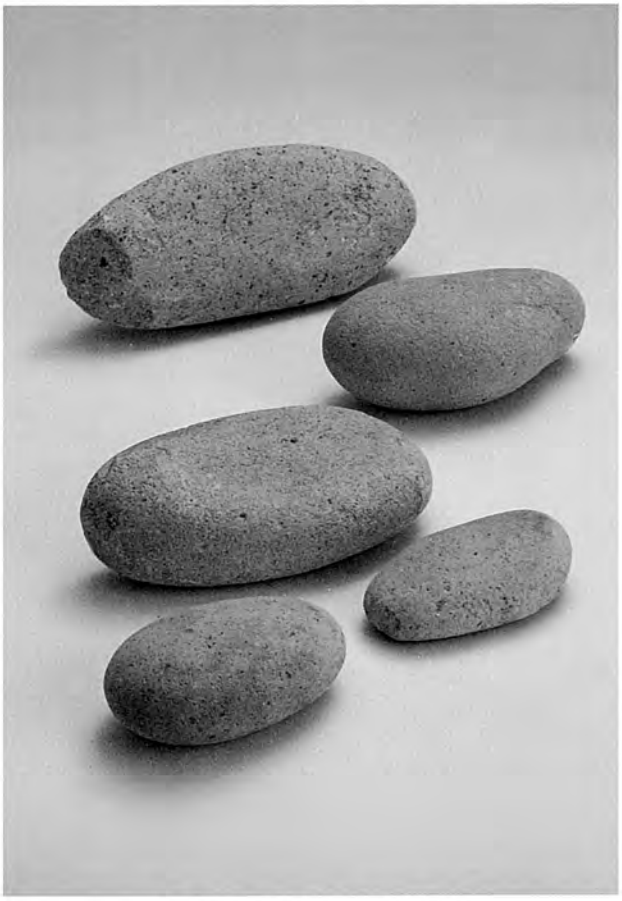


2　竪穴住居 9・12　出土土器

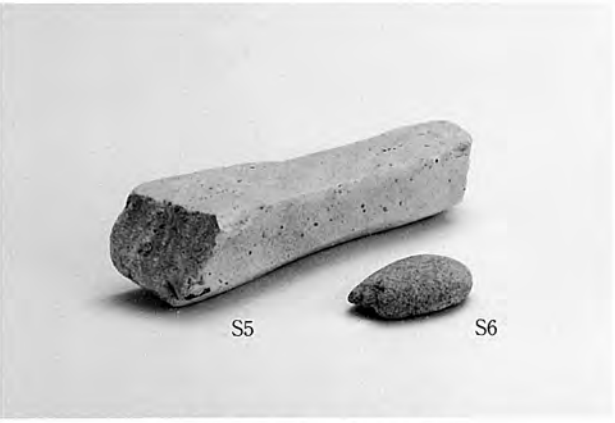
3　竪穴住居10　出土土器（1）



4　竪穴住居10　出土土器（2）



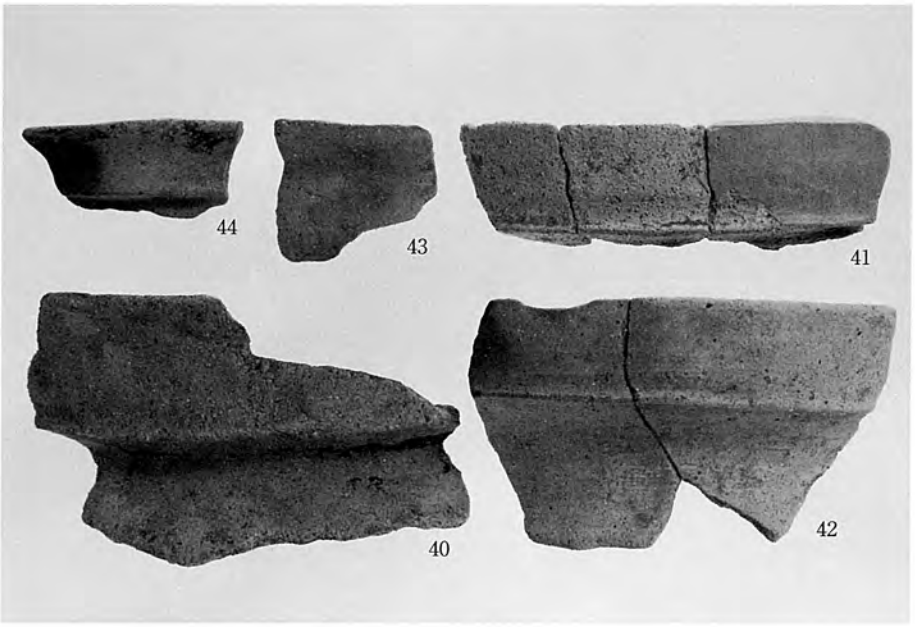
5　竪穴住居11　出土石製品



6　竪穴住居12　出土石製品

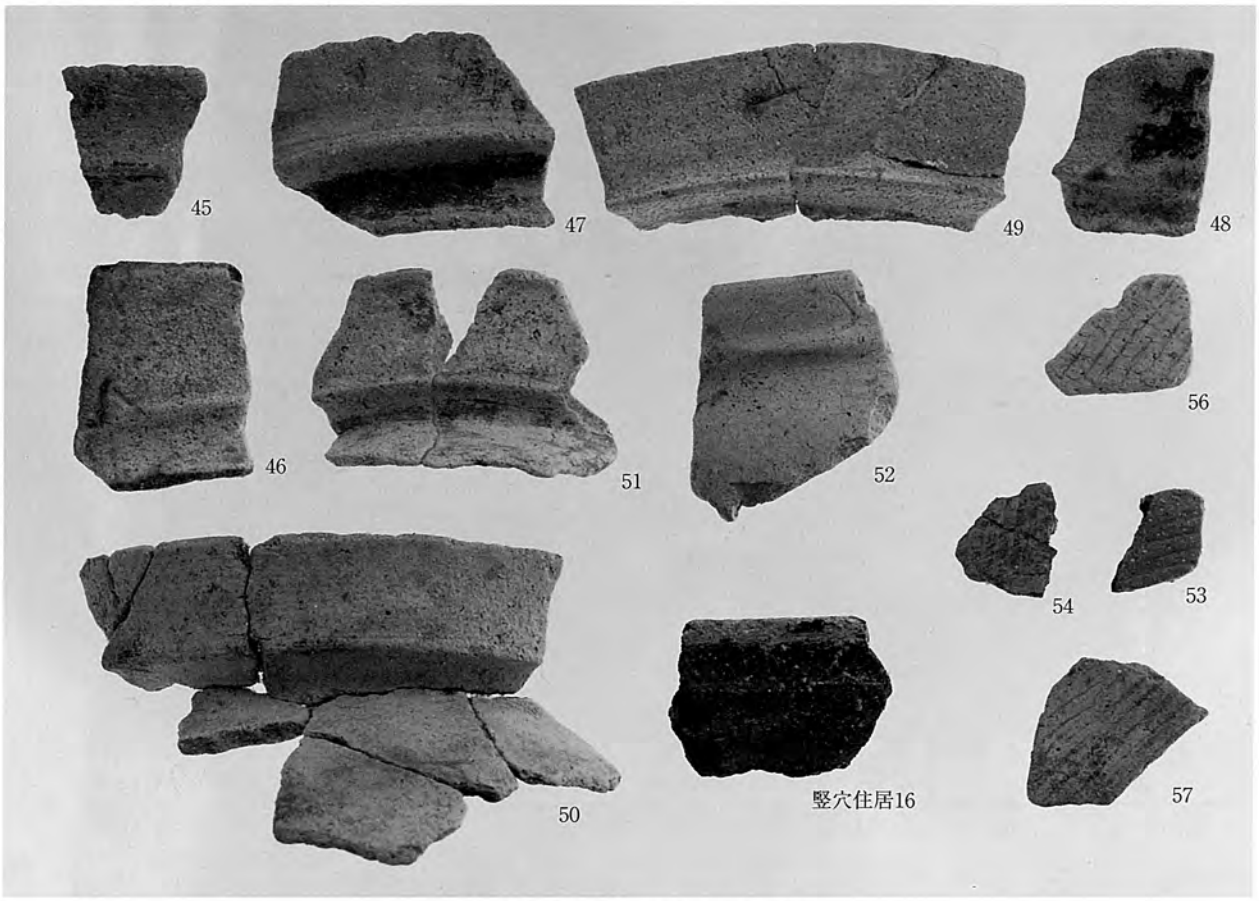
1　竪穴住居13
出土土器（1）

2　竪穴住居13
出土石製品



3　竪穴住居13
出土土器（2）

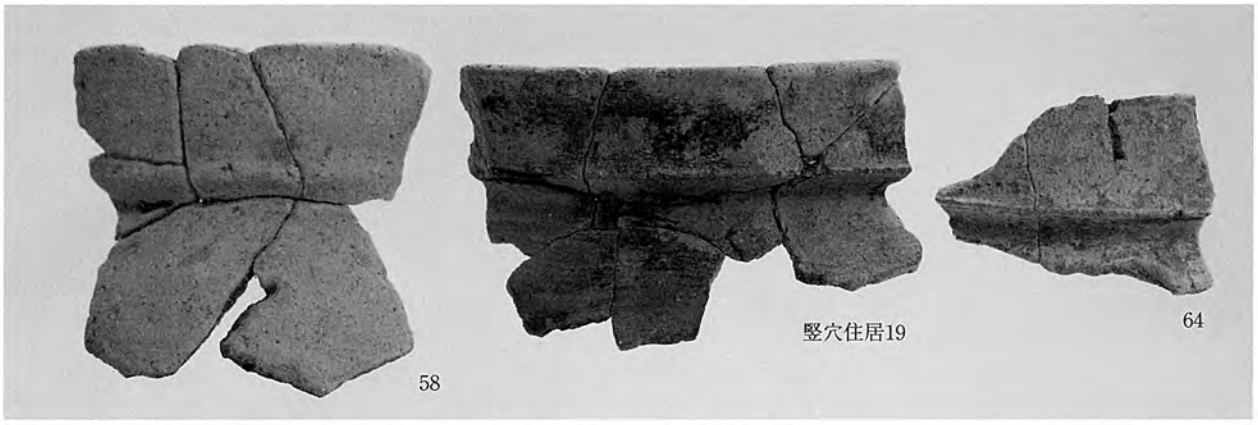
図版48　押平尾無遺跡



1　竪穴住居14～16　出土土器

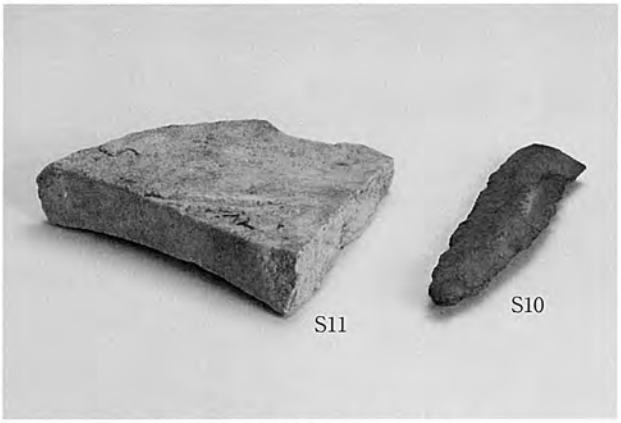
2　竪穴住居14・16　出土土器

3　竪穴住居16　出土鉄製品

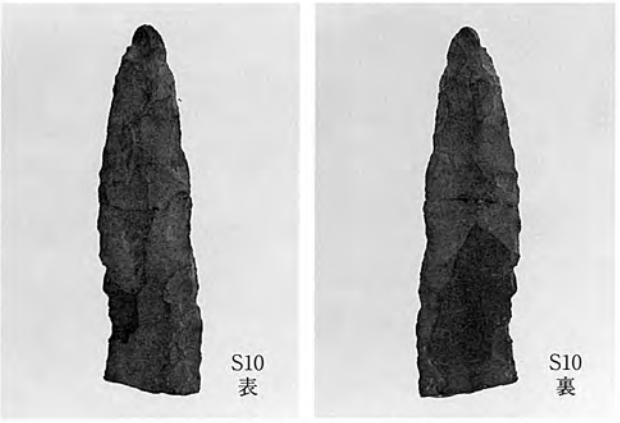


4　竪穴住居18・19　出土土器

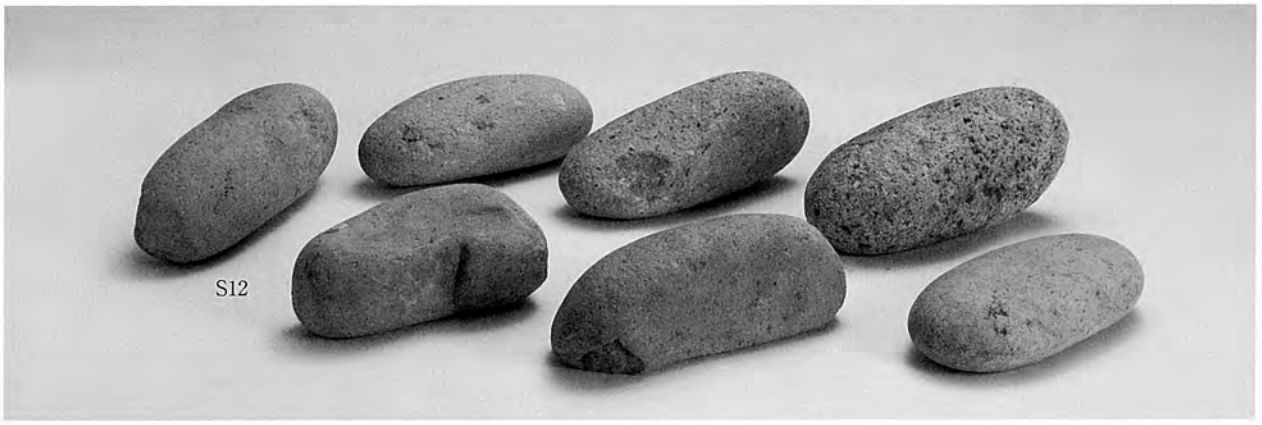
1　竪穴住居19　出土土器



2　竪穴住居19　出土石製品



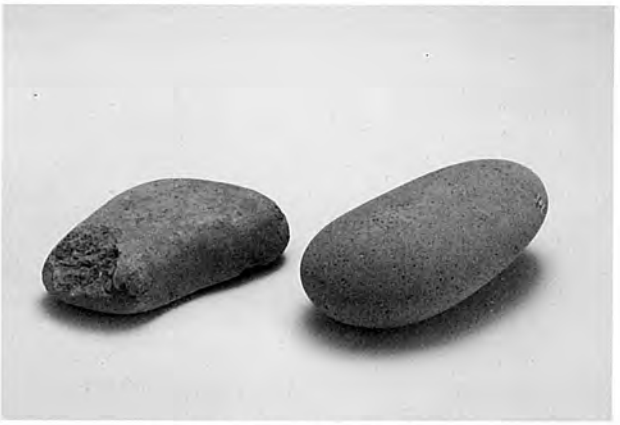
3　竪穴住居19　出土石剣



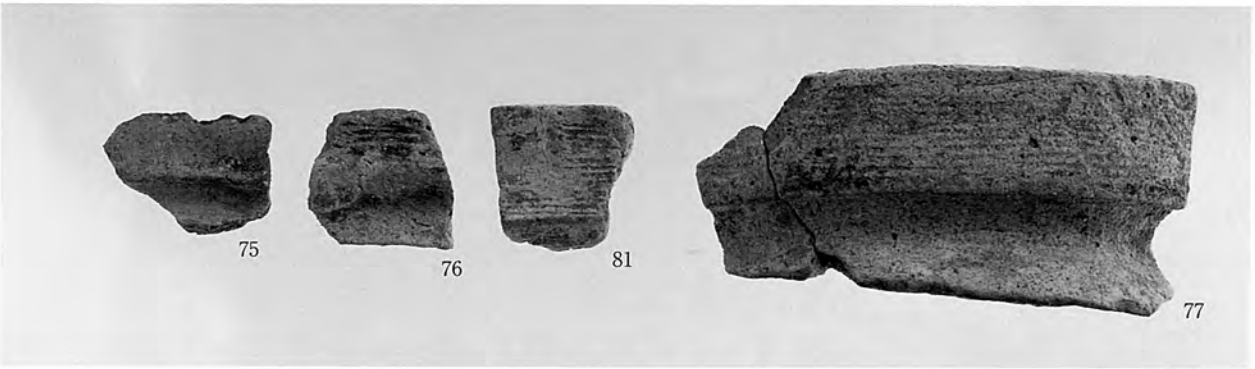
4　竪穴住居19　集石

図版50　押平尾無遺跡

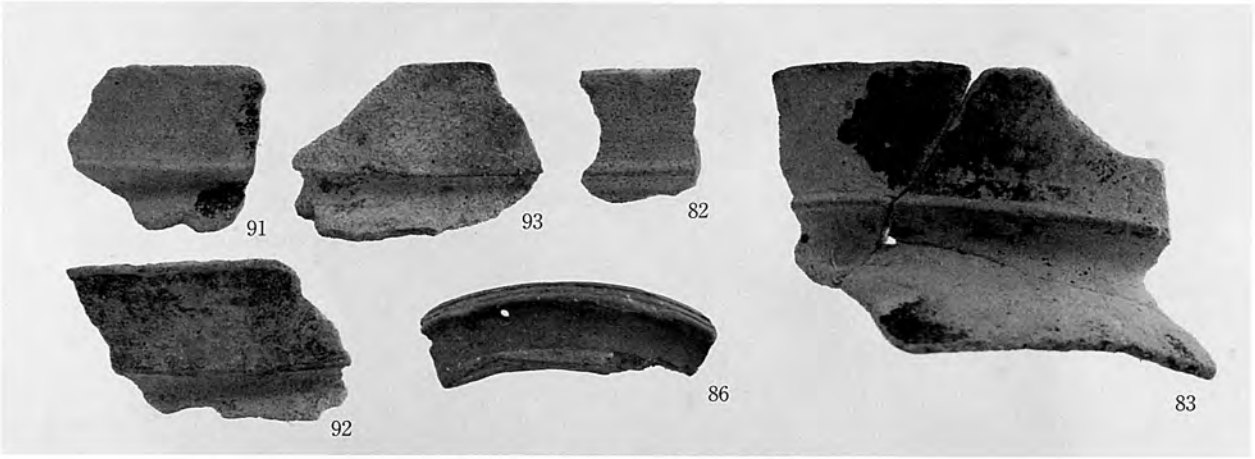
1　掘立柱建物８　出土遺物



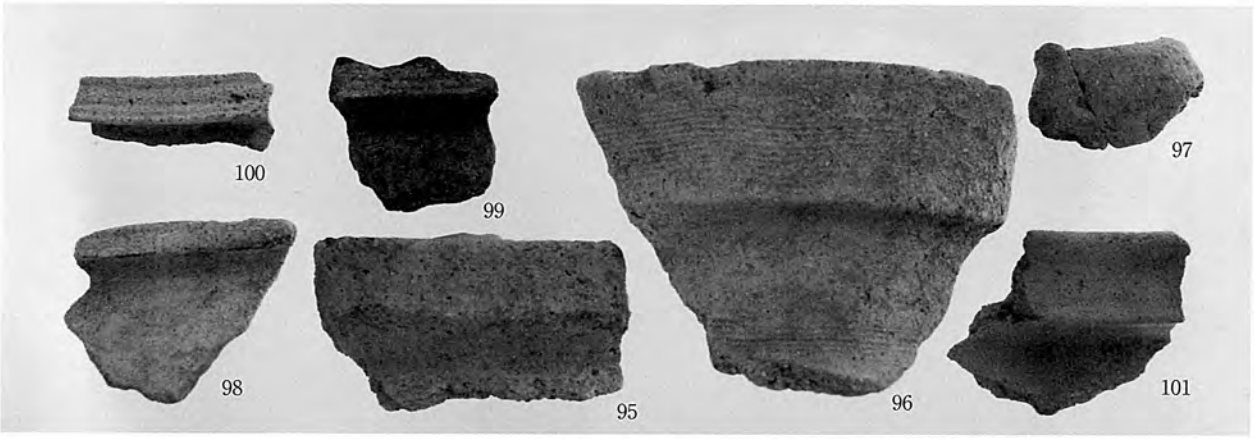
2　掘立柱建物２　出土石製品



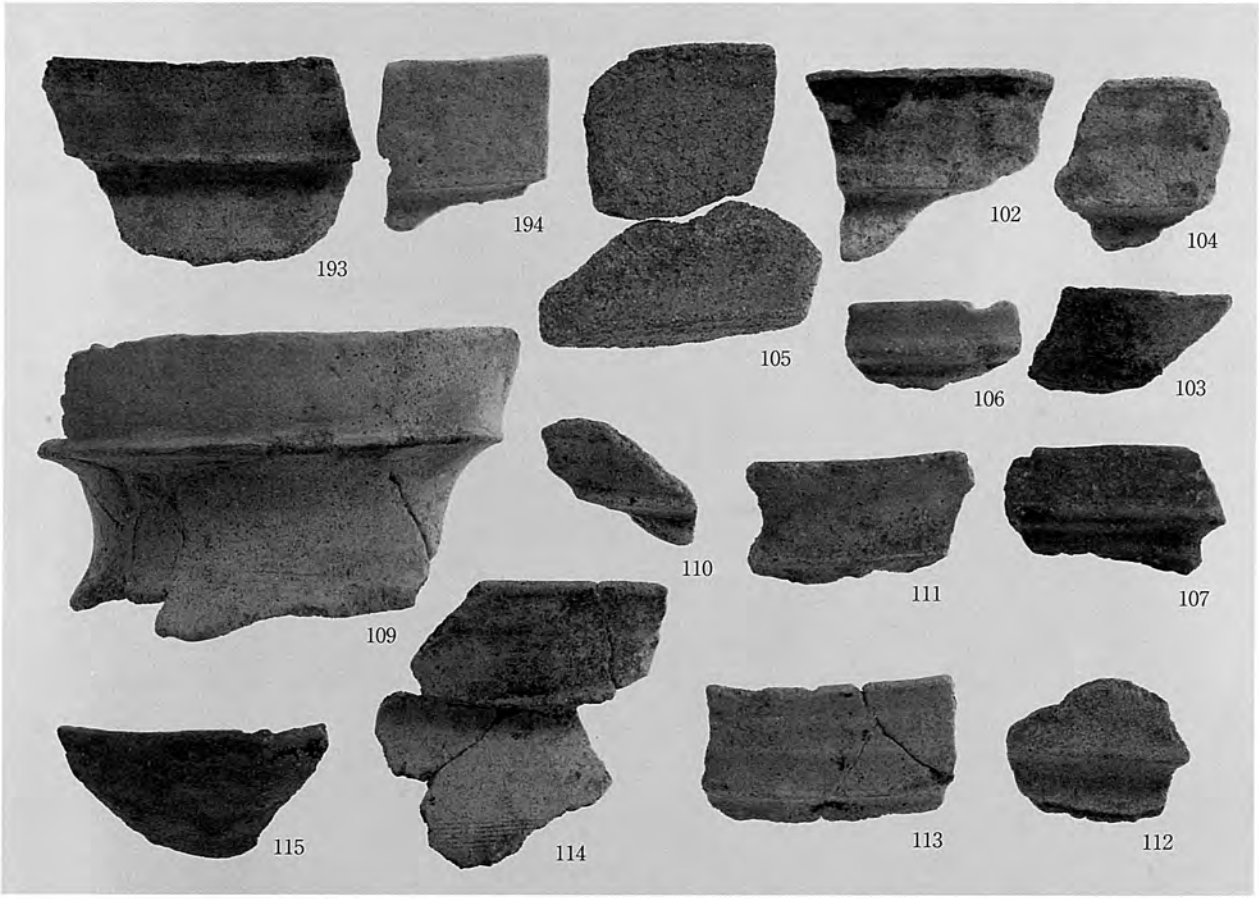
3　テラス２～４　出土土器



4　テラス５・６・10　出土土器



5　土坑７・８　出土土器



1　テラス14および土坑９～11・13・14・19　出土土器

2　土坑20　底面出土土器（1）

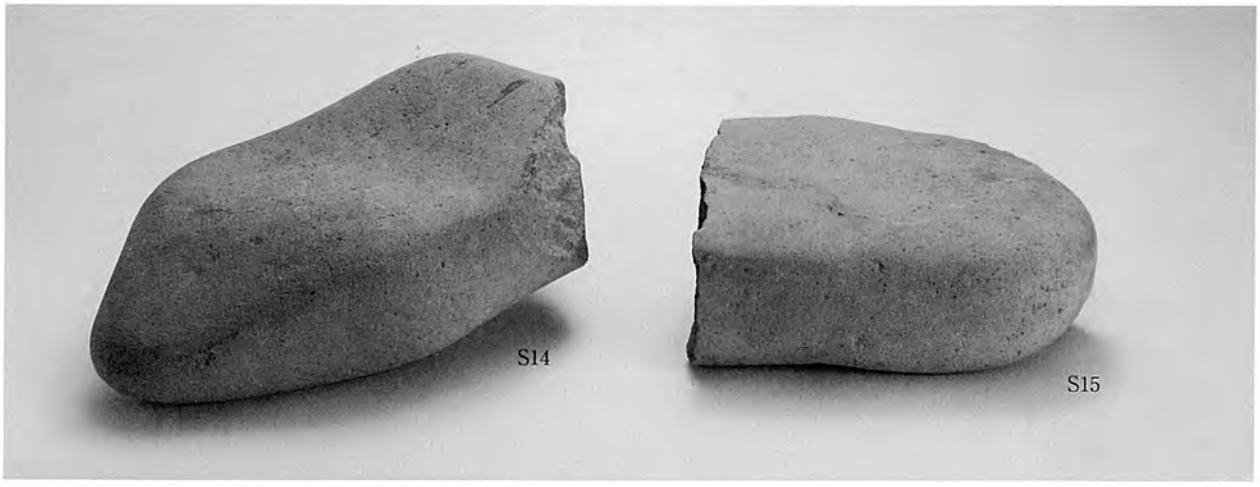
3　土坑20　底面出土土器（2）

4　土坑20　底面出土土器（2）

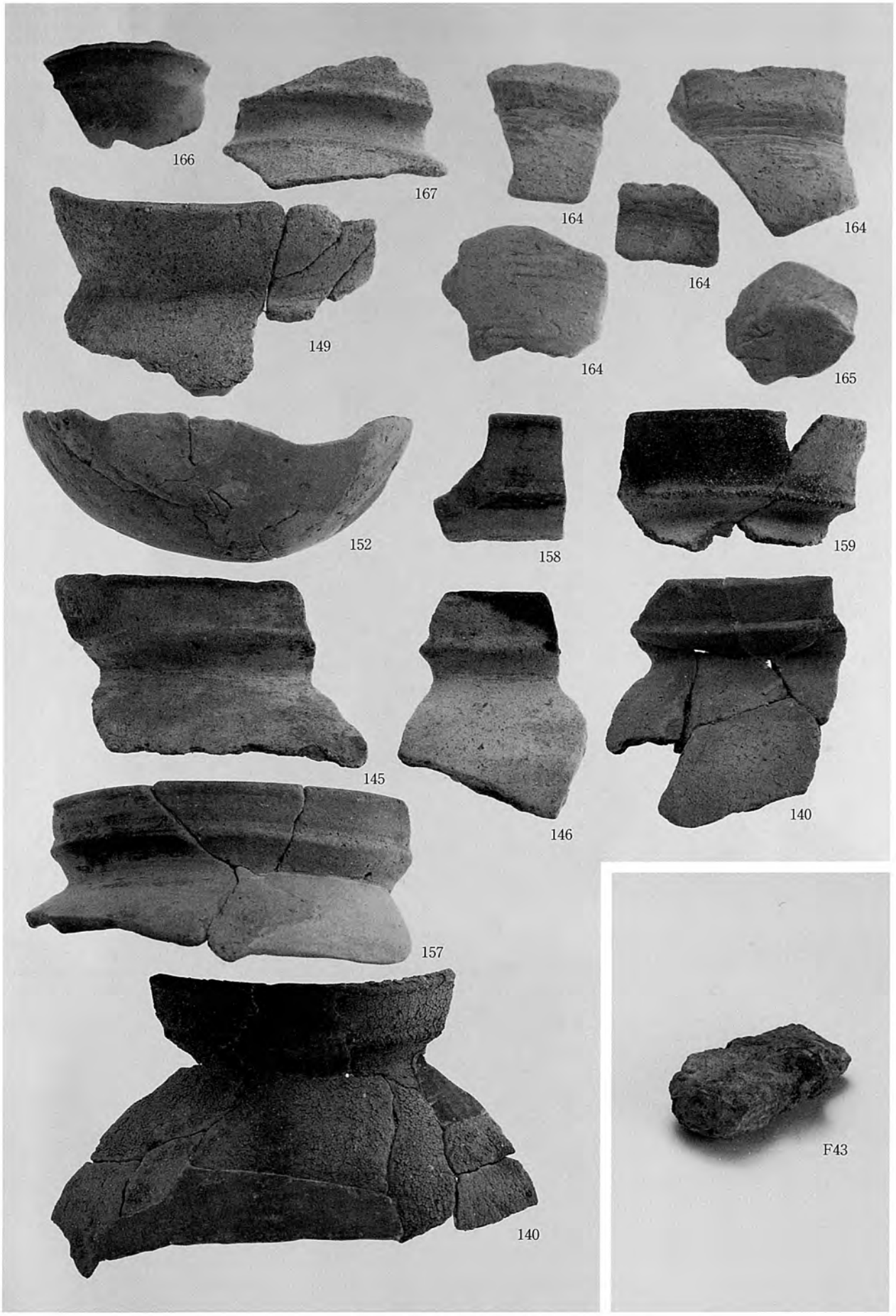
5　ピット127　出土土器

竪穴住居20　および竪穴４　出土遺物

1　竪穴住居20　出土土器（262は西斜面Ａ層出土）



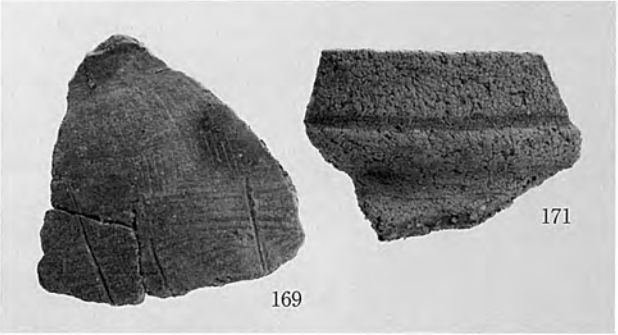
2　竪穴住居20　出土石製品


166
167
164
164
164
149
164
165
152
158
159
145
146
140
157
140
F43

竪穴住居21　出土遺物

竪穴住居21　出土土器

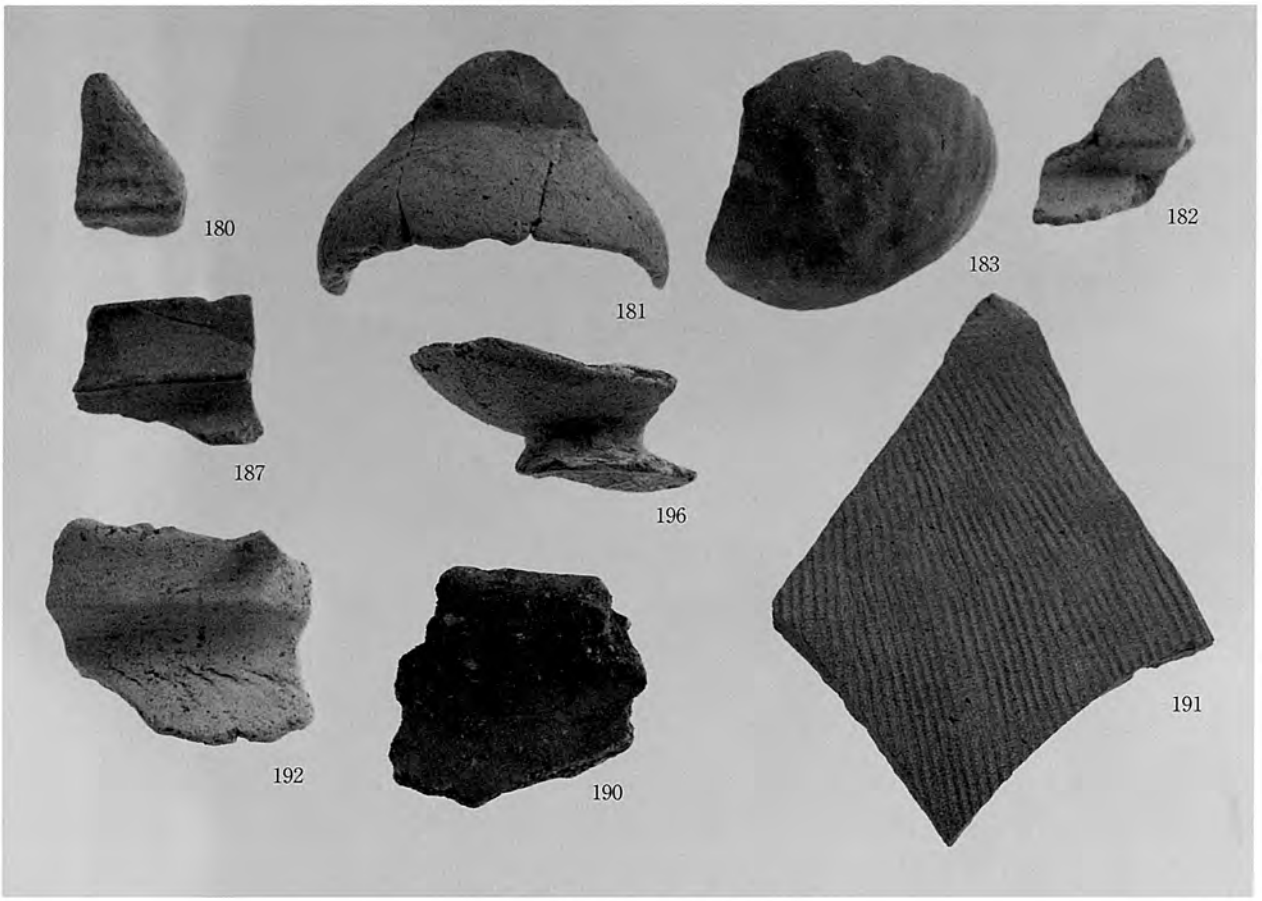
図版56　押平尾無遺跡



1　竪穴住居22　出土土器（1）

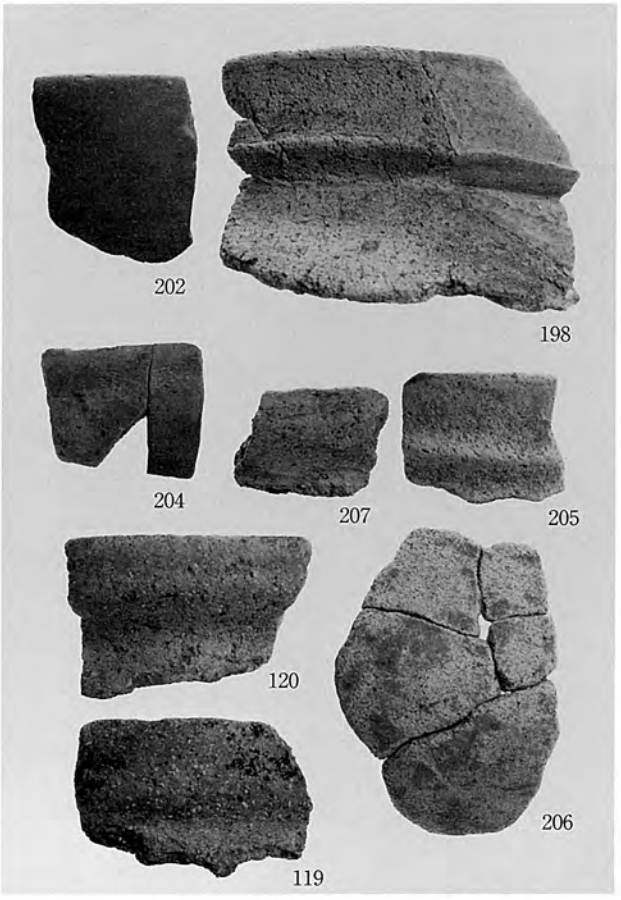
2　竪穴住居22　出土石製品

3　竪穴住居22　出土土器（2）



1　テラス11～14　出土土器

2　テラス13・14　出土土器

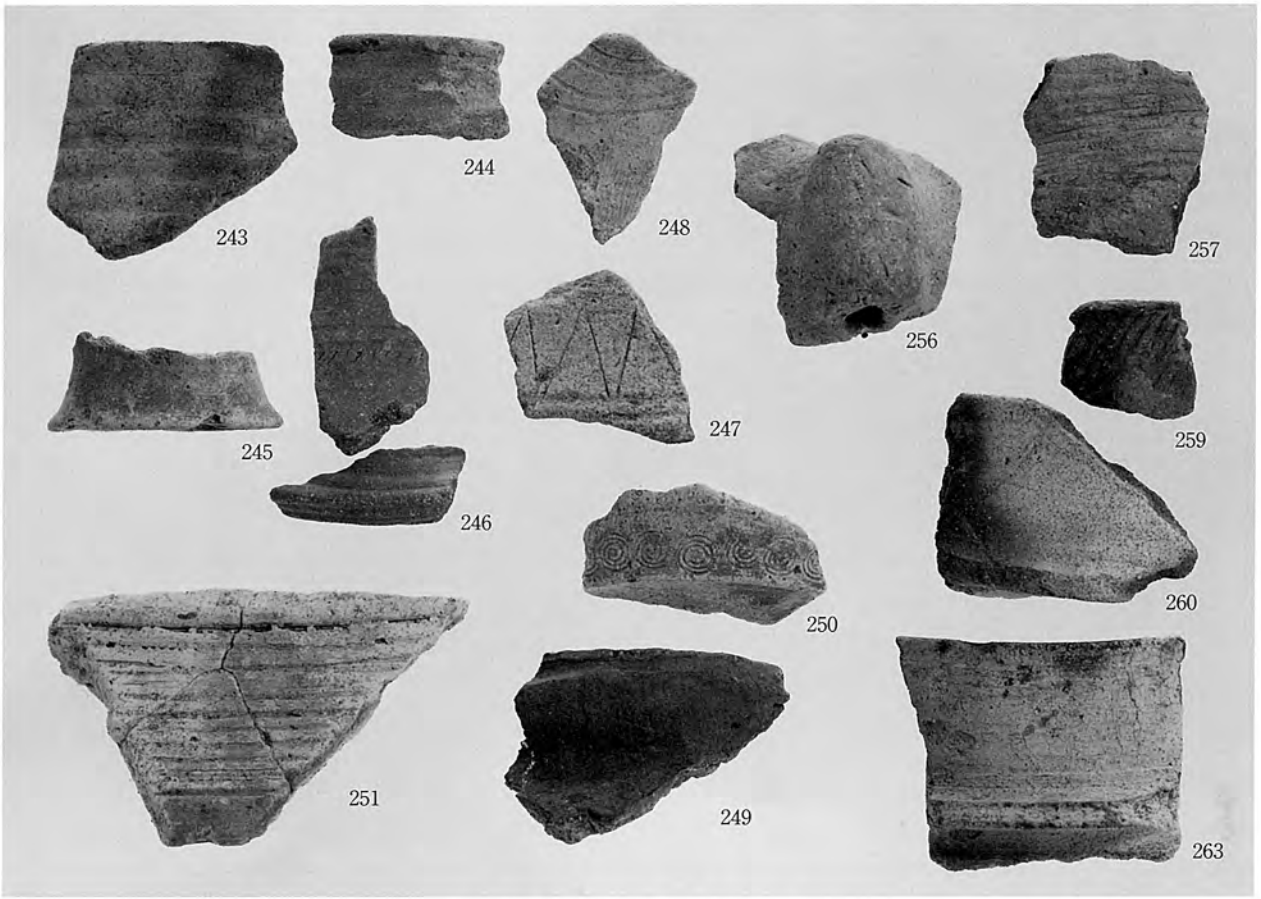


3　土坑22～25および溝１　出土土器

図版58　押平尾無遺跡

1　土坑22　出土土器

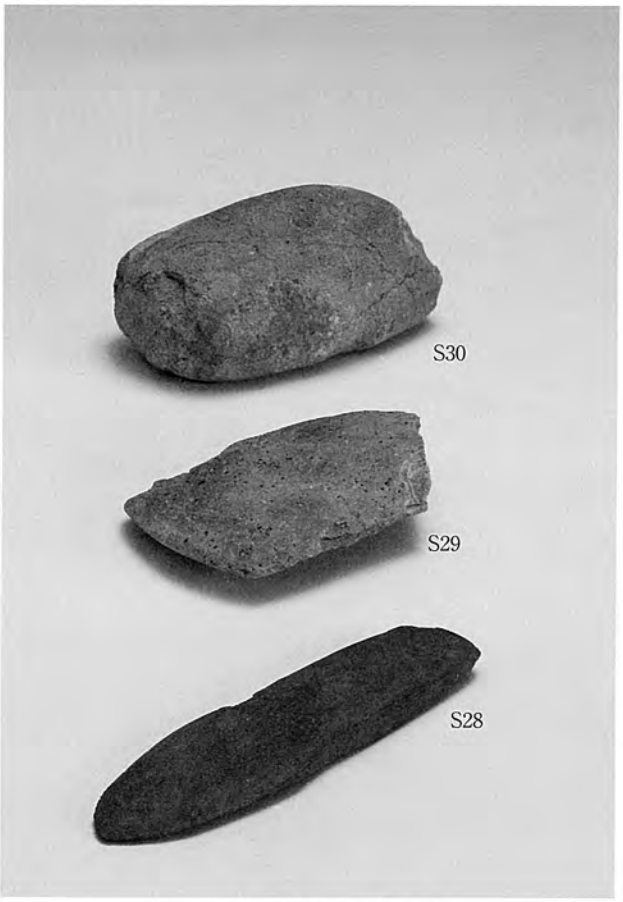
2　東斜面A層　出土土器



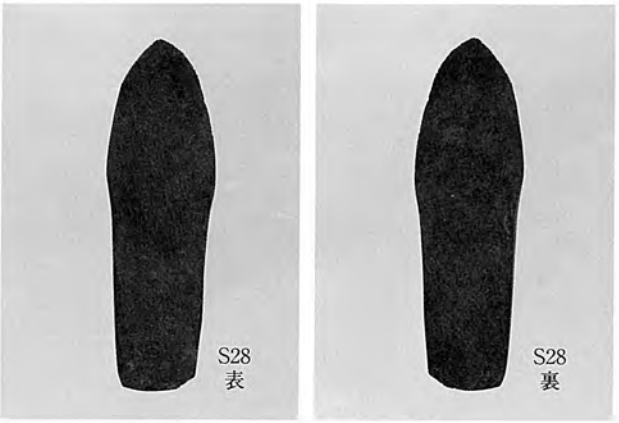
1　西斜面A層　出土土器（1）

2　西斜面A層　出土土器（2）

図版60　押平尾無遺跡



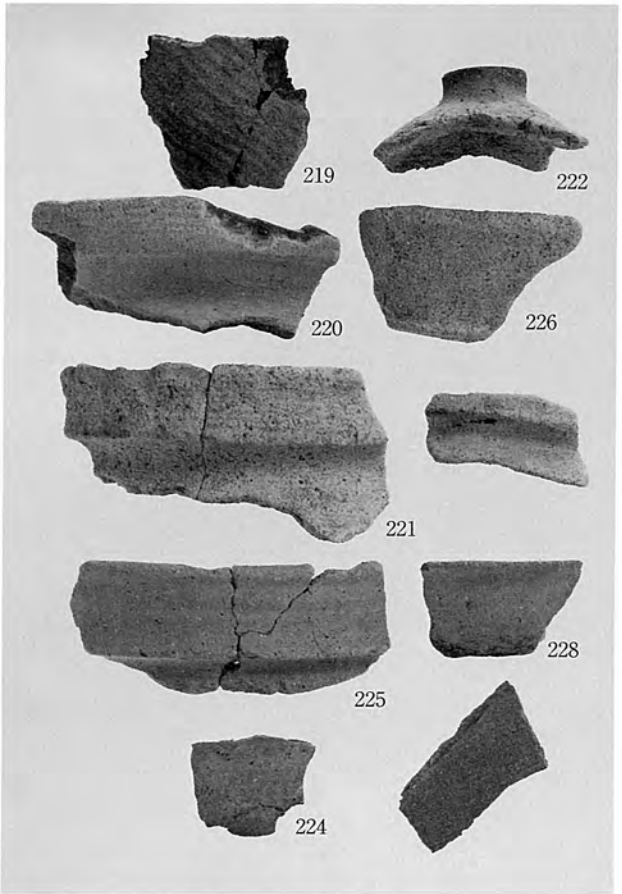
1　東斜面Ａ層　出土石製品



2　東斜面Ａ層　出土尖頭器

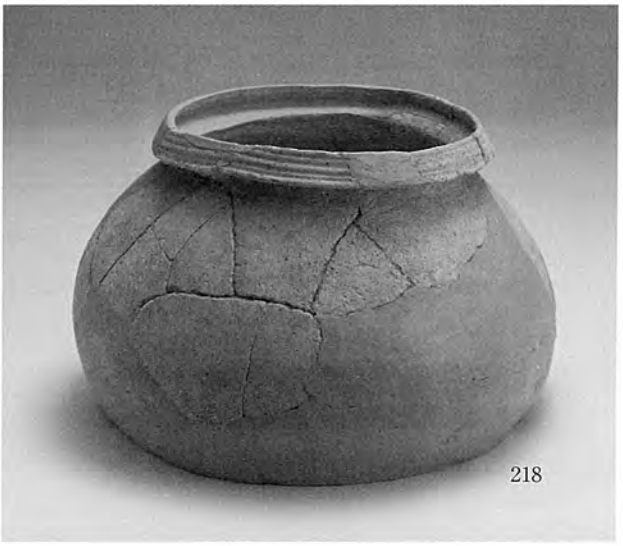
3　西斜面Ａ層　出土粘土塊

4　西斜面Ａ層　出土石製品



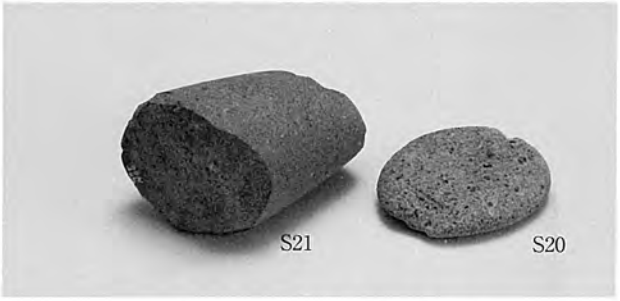
5　Ⅱ層　出土土器

1　Ⅱ層　出土器



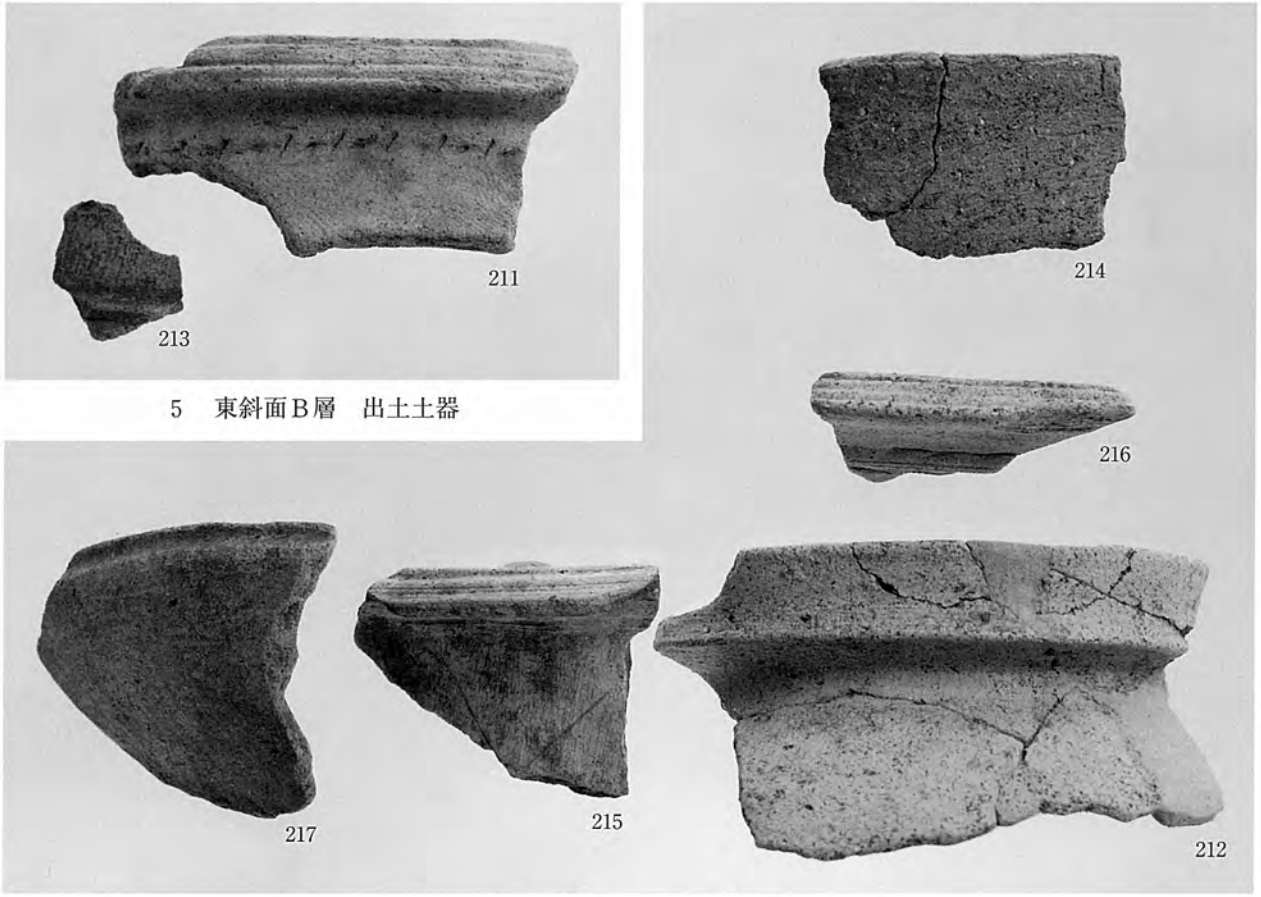
3　西斜面Ｂ層　出土土器

2　Ⅱ層　出土石製品



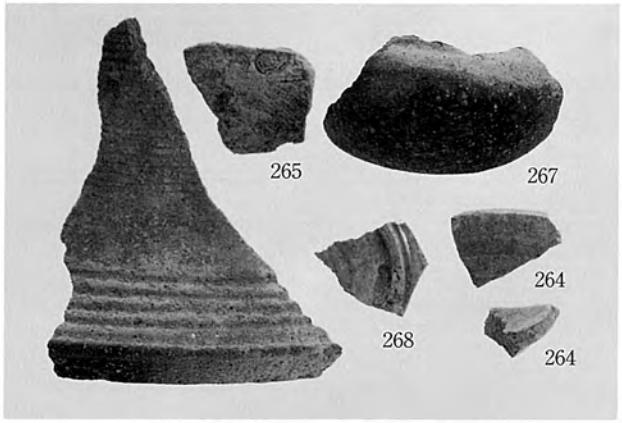
4　東・西斜面Ｂ層　出土石製品

5　東斜面Ｂ層　出土土器



6　西斜面Ｂ層　出土土器

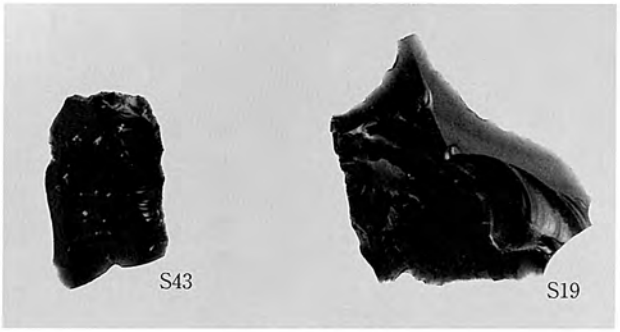
図版62　押平尾無遺跡



1　Ⅰ層および表土　出土遺物

3　石鏃

2　角錐状石器

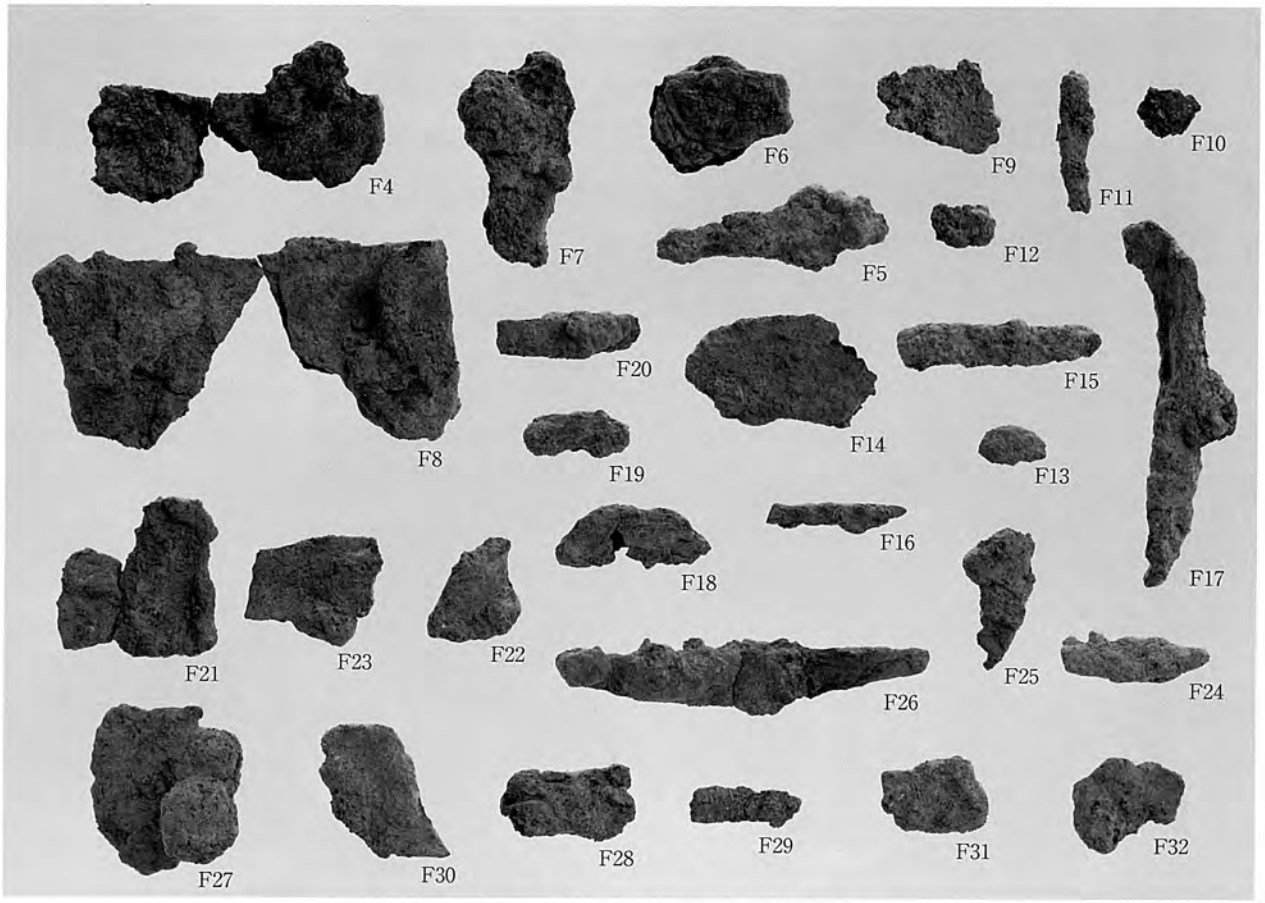


4　黒曜石製石器

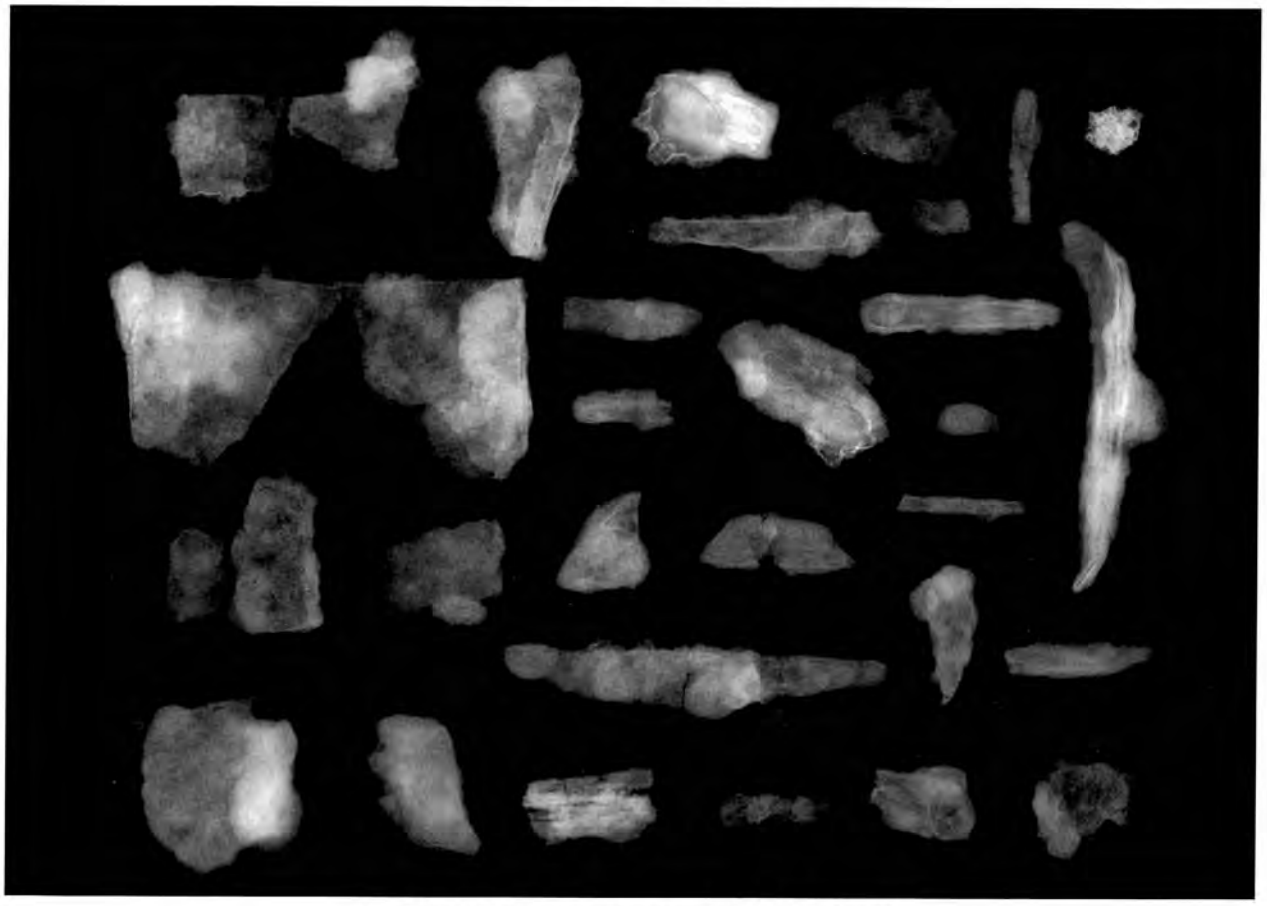
5　玉造関連遺物

6　炭化桃核

7　土玉・石錘

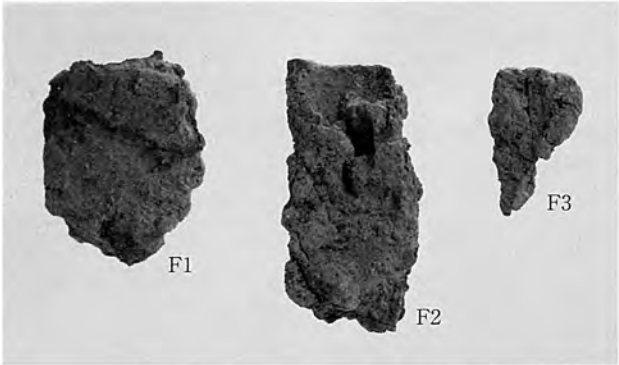


1　竪穴住居８～14・16・19　出土鉄製品

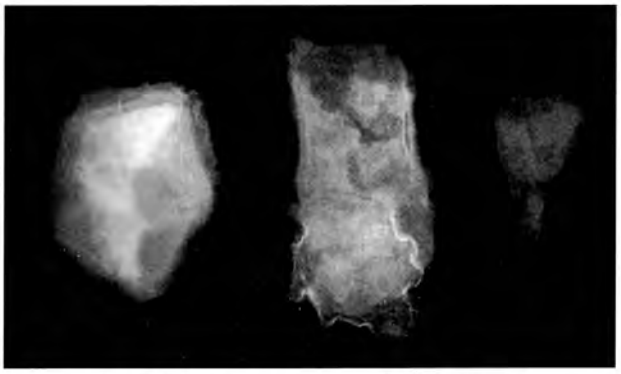


2　竪穴住居８～14・16・19　出土鉄製品（X線）

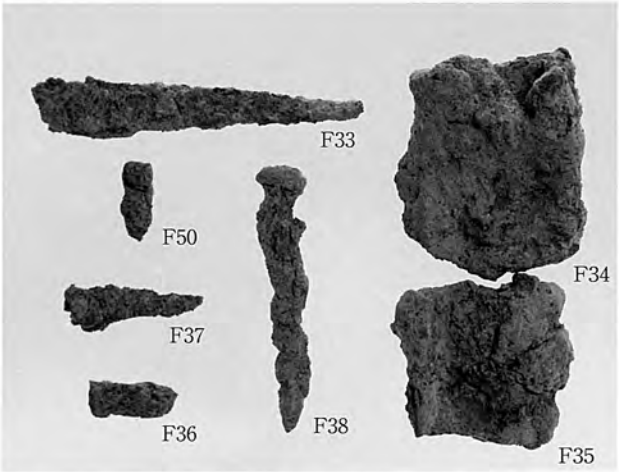
図版64　押平尾無遺跡



1　竪穴住居３・５　出土鉄製品

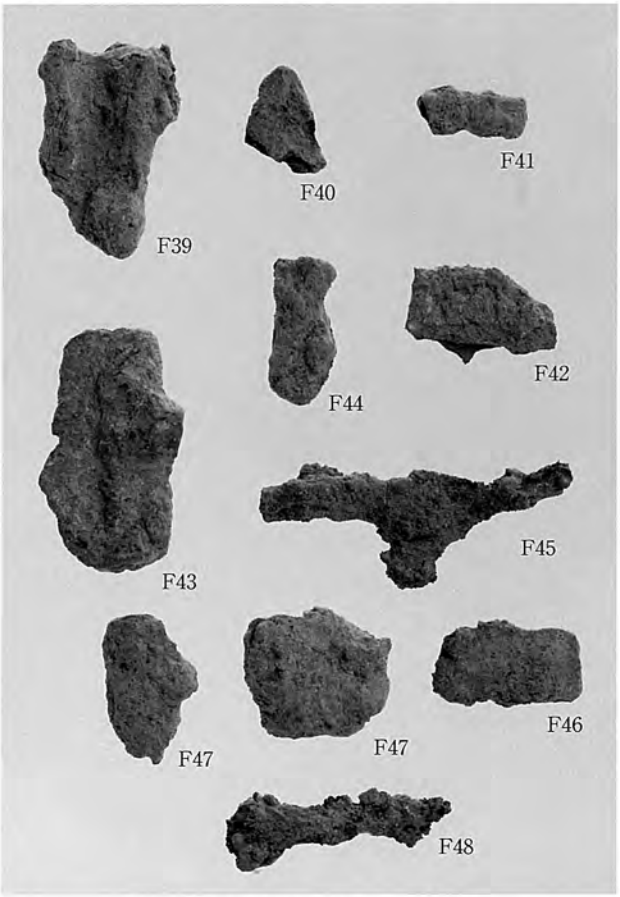


2　竪穴住居３・５　出土鉄製品（Ｘ線）



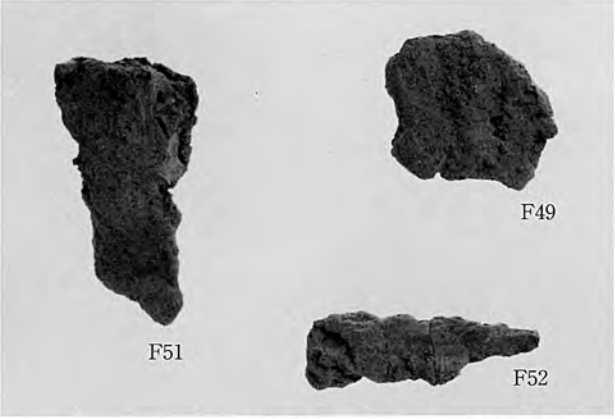
3　テラス６・11、土坑９　出土鉄製品

4　テラス６、土坑９　出土鉄製品（Ｘ線）



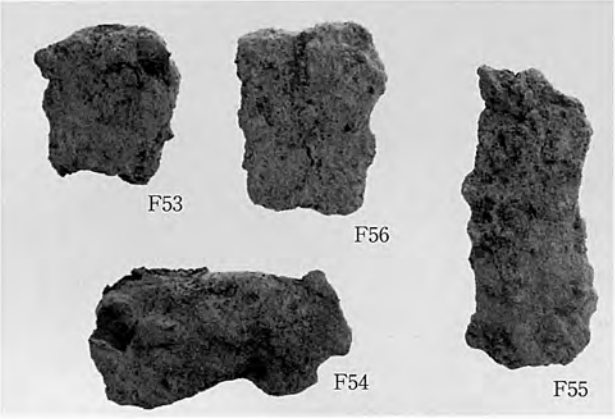
5　竪穴住居20～22　出土鉄製品

6　竪穴住居20～22　出土鉄製品（Ｘ線）

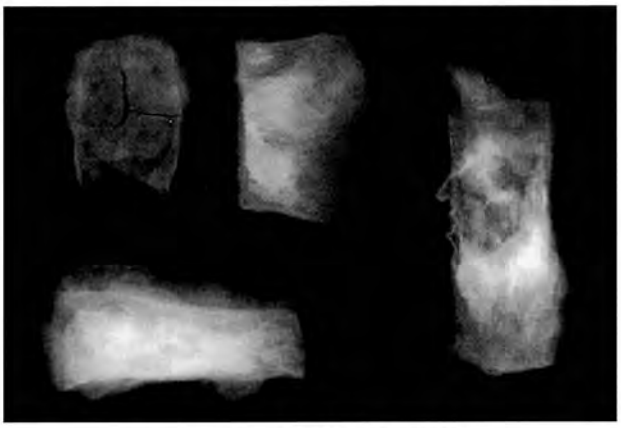


1　テラス11、ピット72・140　出土鉄製品

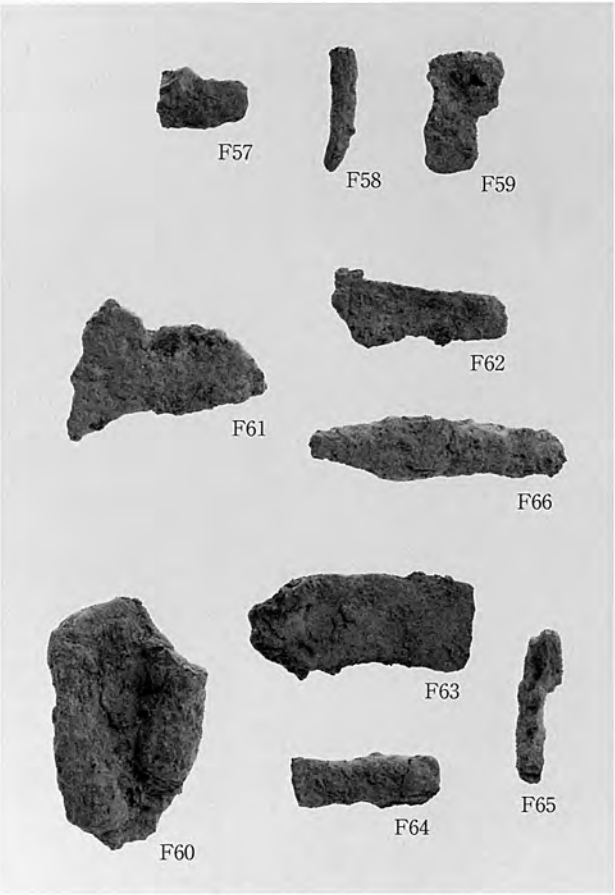
2　テラス11、ピット72・140　出土鉄製品（X線）



3　Ⅱ層　出土鉄製品



4　Ⅱ層　出土鉄製品（X線）



5　東･西斜面A層、Ⅰ層　出土鉄製品

6 東･西斜面A層、Ⅰ層　出土鉄製品（X線）

鳥取県教育文化財団調査報告書93

一般国道９号（名和淀江道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ（第２分冊）
鳥取県西伯郡名和町

茶畑遺跡群

押平尾無遺跡

発　行　2004年３月31日
編　集　財団法人　鳥取県教育文化財団
　　埋蔵文化財センター
　　〒680-0151　岩美郡国府町宮下1260
　　電話　（0857）27－6717
発行者　財団法人　鳥取県教育文化財団
印　刷　米子プリント社